

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

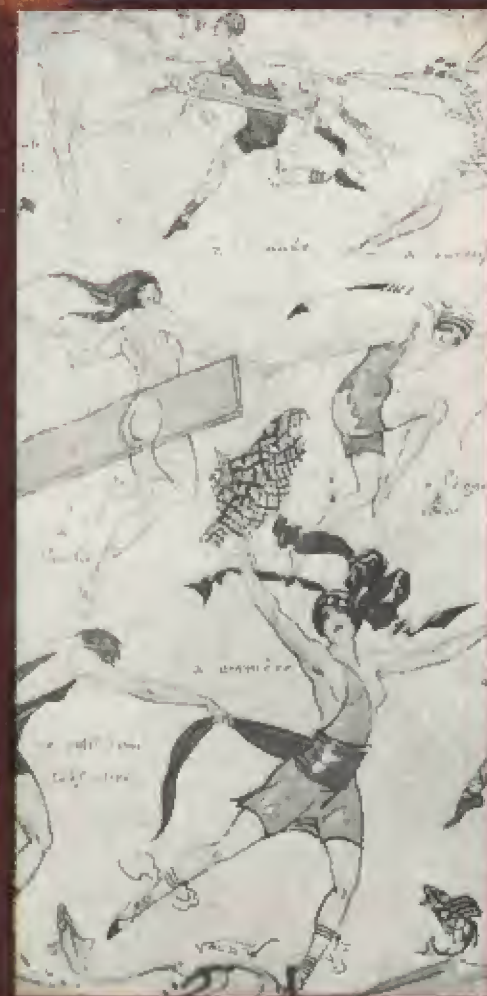
8・9月合併号



日本風俗文庫「バラキリ抄」 田川夢之り

奇譚クラス

CLUB



正徳二年 田

五百元



第一 グラビタ

[illegible]

第二グラフ

佳麗なあがき	羅川	交代
授けた羚羊の	熱茂	良子
いもむしの技藝	桐葉	容子
ロップとの斗い	前本	妙子
因妻衣	飯井	登子
哀しき愁悶	大井	小夜子
艶体反駁	根本	伊吹
艶しき呻吟	春住	のり子
舌(いばり)辯	秋	小恵子
白(いばり)辯	加賀	利江子
宜艶童	相川	交代
内海の日常	須川	令子
焼花(くろくろ)集	大塚	啓子
焼花一輪	山路	ミヨ子
部屋飾り	山路	ミヨ子
黒いロップ	山路	初子
第34号因	山路	初子
恨みのまなざし	花本	京子
忘れぬまなざし	花本	京子

第一口

- 1 大男と少女
- 2 鬼首の顔
- 3 耐舌のハシム
- 4 墓地に揺れる蚊鼠
- 5 迫り来る洗練音
- 6 木立ちの中の囚女
- 7 傾に咲いた罌粟
- 8 非情の檻
- 9 電灯に揺れる苦悶
- 10 回転木馬
- 11 刺青される女
- 12 苦悶の前吊り
- 13 アクロバチスト急走
- 14 恐怖のコンクリート部屋
- 15 空倉庫の怪事
- 16 暴走の部屋

第二口 綜

- 17 黒皮の字鼻
18 ゴム紐との結び
19 受難の重罰
20 宴舞舞踏・棒振り
21 消えぬ灯
22 狂の情
23 強まりゆく痛覚
24 迫り来る羞恥
25 妻という名の犬
26 望上のいけにえ
27 振われる美因
28 車の中のもの
29 夢みにもがれる女
30 ハンモック椅子
31 耐苦の座褥
32 煙燻と蛾肌

絢を競う艶姿115ポーズ



大坂市阿倍野郵便局
私書面第十四号
天 星 社
獨臂口座 大坂五〇〇四二番

緊縛写真
タラ集

特価五百円 略号「グラフ」
表紙三度刷、内容グラビヤ印刷

◎豪華な内容とモデル陣

限定版
特別号
3彈

巻頭飾身装束一頁大扉
 金がしめ……………絹川文代
 荒縄全線装束……………大塚啓子
 落ちた腰巻九巻(野芳) 田 い 乳 房……………愛川悦子
 浴室におびて九巻……………愛川悦子
 縄の陶酔……………絹川文代
 恍惚境 恍惚の末……………絹川文代
 いためられた乳房……………桜井葉子
 耐えられた……………桜井葉子
 月経帯の強制……………大塚啓子
 手吊りと逆手吊り五巻……………大塚啓子
 全線悦盛……………大塚啓子
 白癡美の誘惑……………大塚啓子
 はねかえす縄……………大塚啓子
 うろうう許して……………大塚啓子
 雪白の肌は縄にまみれて……………大塚啓子
 六巻……………大塚啓子
 優柔ハゲカ縛り……………絹川文代
 忘却の彼方……………絹川文代
 股間縛り背正面二巻……………絹川文代
 縛われの麗人二巻……………絹川文代
 逼責め一巻……………大塚啓子
 浴室にて責める四巻……………大塚啓子
 何にしようと言うの……………桜井葉子
 新人豊葉集八巻……………桜井葉子
 いじめぬく二巻……………絹川文代
 メンスパンドの後巻……………絹川文代
 観念横臥の四二巻……………絹川文代
 変形手足しらび四巻……………愛川悦子
 裸身をさらして六巻……………愛川悦子
 豊満くらべ……………桜井葉子
 車甲縛り正背面二巻……………愛川悦子
 想けしき縄目二巻……………大塚啓子
 後手首屈服……………大塚啓子
 新人緊縛本々集四巻……………桜井葉子
 縛から綱まで四巻……………愛川悦子
 鏡面万華鏡横(奥と表)……………愛川悦子
 四十項目……………百十五才トズ

斯道愛好家に贈る絶好のコレクション

悦舞全集

本誌モデル諸嬢総出演

フロマイド式フォト 百三十八海 //

略号(フ口)

定價 千円

本写真集は一切書店販売を致しません

占串込先

天 星 社
私書函第十四号
振替口座 大阪五〇〇四二番

さて本誌口絵に登場したことのあつた緊要時女三十数名の大団奔放して特写した百二十八版のロマイド。キヤビネットの隅から隅まで強烈なる性虐の警部男がびんじんとむせかえるような警服を濡れかと思わずマニヤをうんと呻めかせる緊要写真集の決定版。口絵には作品までふんだんに見事なオナパレード、絶対に一般市販しな限定の秘宝のペールが、皆さまの手によつて、ここに開かれるのですどうか、今すぐお申込み下さるようお持ちしています。





奇譚クラブ

八、九月合併号
(第十六卷第八号)

目次

目次裏 コルセットを締められる女

EXTATIQUEヨリ

一 ヤ 縛られの好ポーズ

麗艶……………絹川文代……………麗囚……………塚本鉄三・撮影
杉原紅児・構成

第グラビ 樹間の冷風、囚肌、囚女の祈願

さるぐつわをつけたポーズ……………桜井葉子……………梨花悠紀子
竹野ひろ子

枷と鎖シリーズ……………黒川不二男画

絵 白色奴隸の檻、哀願の声も囁かれて

口 地下牢獄の姫君、捕れた美畜第一号……………四馬孝画

頭 責画―酒場のペット―……………

巻 女体切腹 娘子隊の最期……………滝れい子画

生首シリーズ(その二)……………裸女血斗の果て

しばり・アップ・セレクション……………

ニヤ 鼻に対する責(顔面表情の変化)……………大塚啓子

第グラビ 枷の装着―絹肌―……………梨花悠紀子

コードの緊縛―豊胸―……………大塚啓子

マゾ・フオート……………絹川文代

美しい縛りフオート△優美と柔軟△……………梨花悠紀子

日本風俗漫評〃ハラキリ抄〃……………福川幸之介……………(34)

足の記録と文献……………木村清……………(50)

偏執漫筆 臍印礼讃……………須藤律夫……………(56)

(通信) 高木紀久枝様へ……………三隅千恵子……………(58)

まぞ川柳自註「横乗り」……………西田仁……………(61)

長篇SM小説「宇宙のどこかで」……………佐治麻造……………(62)

(告白) アブノマル・ファンタジー……………益田平三……………(76)

△一読者としての同好者感△……………

△通信△妊婦マニアへのアピール……………瀬沼四郎……………(84)

ニューフェイス登場……………辻村隆……………(86)

(梨花悠紀子の贈り物)……………

(絵と文) 女相撲の思い出話……………津谷正春……………(92)

過ぎし日の告白 赤ちゃんごっこ……………渡部かね……………(94)

愛好家の記録……………とやまかつひこ……………(100)

(かぎりなく甘美なるもの)……………

△体験告白手記△輝義兄弟……………江戸輝男……………(102)

告白と通信……………

わたしを料理して下さい……………羽村京子……………(104)

映画「恋や恋なすな恋」の濃厚シーン……………東山映史……………(108)

マゾビズム天国……………田沼醜男……………(110)

「吊責めへの誘い」への御返事……………豊島津利……………(115)

「奇譚三十九夜物語」……………辻村隆……………(116)

(通信) 東浦ひかる様と竹野ひろ子様へ……………水木清一……………(130)

【告白】 オムツに関する考察……………白川睦夫……………(132)

ガン作・マニヤのノート……………芳野眉美……………(134)

バスガールの運命(4)……………滝畑三郎……………(136)

由梨子への便り「洗腸への誘い」……………国府津恵子……………(144)

幻想物語 涙を捨てた女たち……………近藤一……………(146)

創作 花と蛇……………花巻京太郎……………(156)

(告白) 下着と女性化と……………古井真也……………(164)

人間馬の体験 桃の園……………津村鷹子……………(166)

映画短評「成春香」の拷問……………東山映史……………(168)



縛られの好ポーズ

塚本鉄三・撮影

杉原虹児・構成





モデル……絹川文代

麗 艶

(れいえん)





樹間の冷風



囚

肌

モデル 櫻井葉子



囚女の祈願







麗 囚

凝視するもの



さるぐつわをつけたポーズ

枷と鎖シリーズ……黒川不二男

哀願の声も嘎れて





地下牢獄の姫君

枷と鎖シリーズ……………黒川不二男

酒場のペット

(四馬孝画)



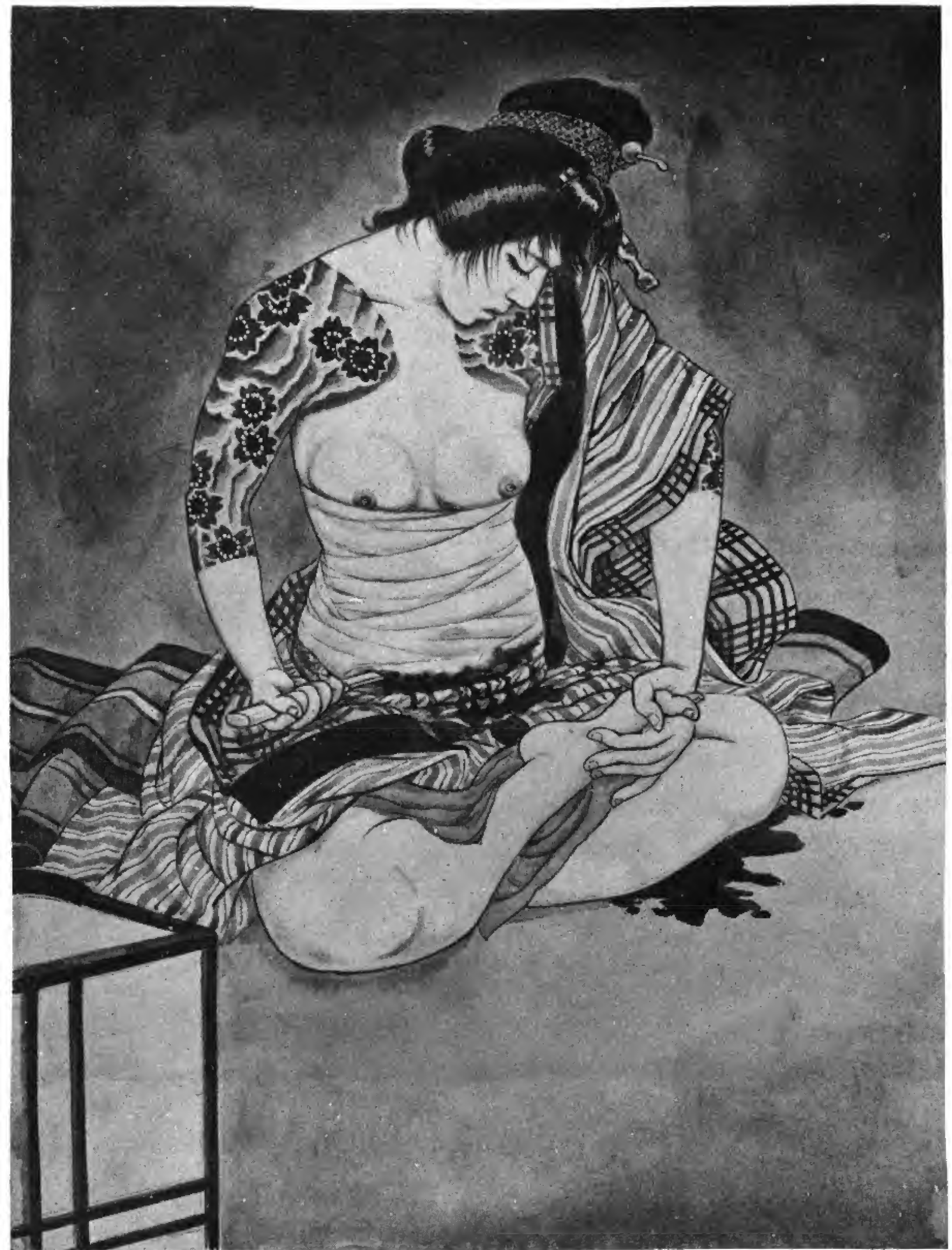


白色奴隷の檻

枷と鎖シリーズ……………黒川不二男

娘俠客覚悟の自刃

「女ながらも奴の小萬の顔をつぶされちや
おめおめと生きてはおれん。」





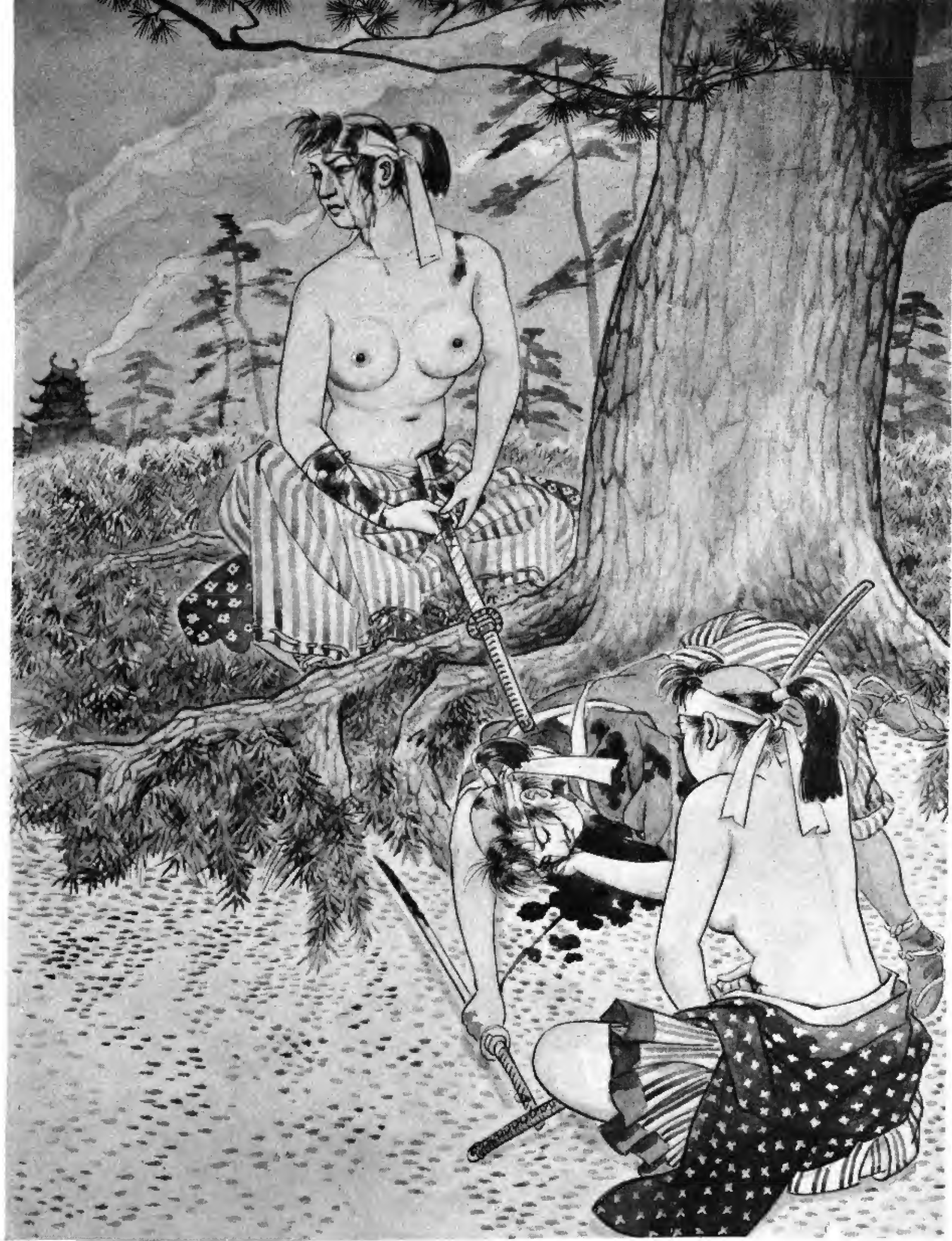
裸女血斗の果て
「首級をあげたり」

瀧れい子・画

枷と鎖シリーズ……黒川不二男

捕われた美畜一号





娘子隊の最期

(お城の火焰を眺めて潔く割腹)

鼻に對する責

顔面表情の変化



モデル……大塚啓子



枷の装着





モデル……梨花悠紀子



絹
肌



モデル……梨花悠紀子



豊
胸



モデル……大塚啓子



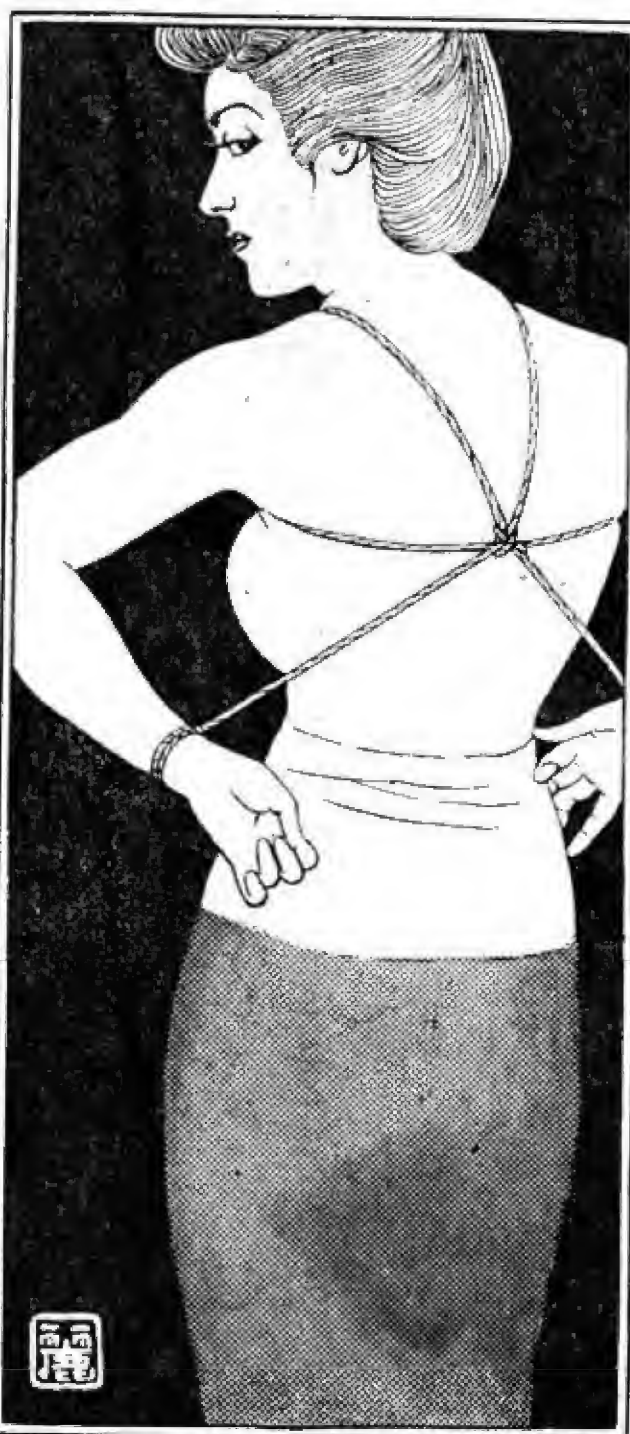
演 戲





優
美
と
柔
軟





ひそやかな願い

私たちはなに一つ集団といわれるようなグループを持っていない。宗教団体、労働組合官僚、或は今度の参院選挙で見られたような強力な集団や組織をバックに持っていない。

いわば、か弱い善意の小羊が荒地に残された僅かな瘦草を食べようとしてあがいている哀れな孤独者の集まりに過ぎない。しかし、現世は強い者が勝ち、弱い者がしいたげられる弱肉強食の世の中なのだ。

賃上斗争、選挙戦。とつきの昔に戦争は放棄された筈なのに、日々言葉の上では放棄されていない。戦争こそ、暴力の中でも

最も甚しい被害を与える罪悪であるのに、戦争映画や戦争物が、堂々と我もの顔に闊歩しているのは、どうしたわけであろう。

戦争だけが暴力の必要悪なのか。

私たちのひそやかな願いは、集団的な威力に屈せず、その庇護に頼らなくとも弱い者いじめされない、ということであるが、若し、そのひそやかな願いが果されないときは、多くの人は、或る特定の集団の庇護を進んで受けるようになるに違いない。

そして、孤独者はいつ世に於ても、常に孤独である。

(或る投書から)

新しい風俗文献研究誌

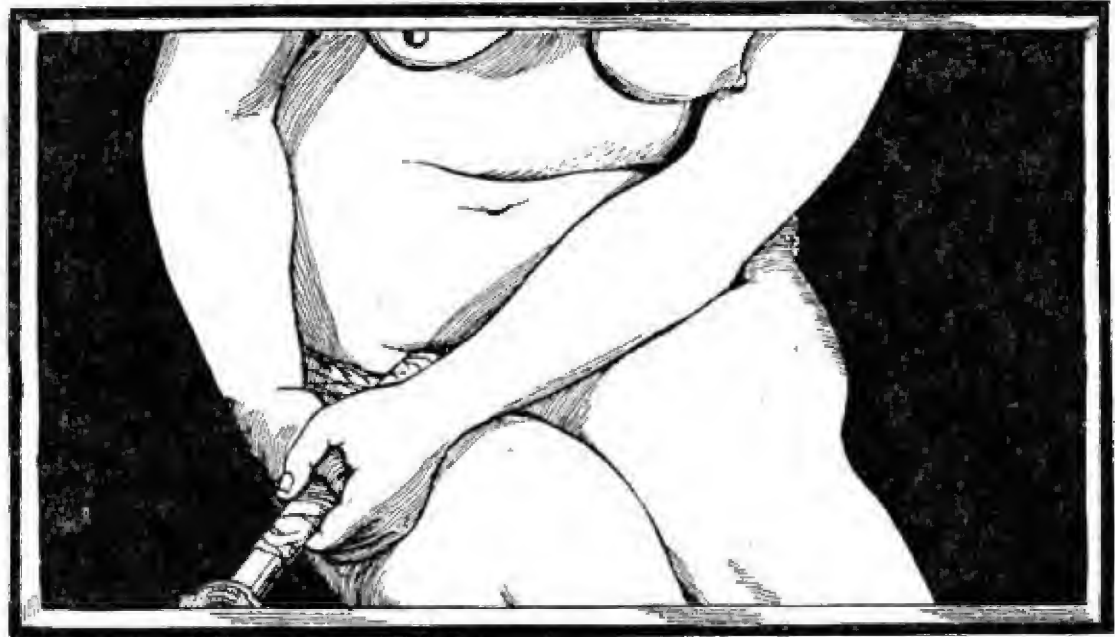
奇 譚 ク ラ ブ

1962年 8・9月 合併号

(第16巻 第8号 通刊 第168号)

要 旨

私は、かねて小説、歌舞伎、事実、劇作文
学、伝承、現実等のジャンルから、一度切腹



日本風俗漫評

ハ ラ キ リ 抄

<切腹の歴史と解剖>

福 川 宰 之 介

といったテーマを割り出して何か、随筆風の
作品を書いて見たいと思っていた。それが、
書き進むにつれて何となく評論めいてしまっ
たのである。

それでも私は出来るだけ暗くならないよう
に、そして、マゾヒズムの見解を避けるべく
努力した。その為に私の主感はずと多分に
ピントを狂わせて置いたが、切腹に関するか
ぎり豊富な資料のなから、必ず一動作の中
に一、二の例に限定して余は切り捨てたので
ハラキリ抄としたのである。

本文は、切腹の濫觴からその歴史、様式、
作法、そして介錯に始まり、立ち腹、殉死、諫
死、隠し腹、詰腹、心中、手段としての切腹
等を例を上げて説明し、更に……

効果を期待した切腹。

明治維新前後の切腹。

乃木將軍の自刃に対して鷗外、漱石の見解。

昭和の切腹。

女性、小供の切腹。

直木三十五の『南国大平記』の一節。

徳川時代の武士以外の切腹。

切腹に関連した話。

自殺と切腹に関する私の主感。

と、なっているが、マゾサゾ的解釈による

切腹。女体切腹、切腹による安楽死等はいず
れ続ハラキリ抄として発表したい。

尚、引証は原文の一部を以て当てた。

原文には著者名、題名等を明記した。

原文の手に入らなかったのは要旨だけにした。

出来るだけ純文学的な監修をした。
切腹は、ケ、セラセラの一語に尽きる。

切腹の歴史と解剖

春が来ると、桜の花はアメリカのワシントンでも咲く。それは、必ずしも、『これはこれはとばかり花の吉野山』とは決っていないが、『敷島の大和心を人となれば朝日に匂う山桜花』などと、勿体ぶらなくても時が来るとさっさと散ってしまうのである。

桜咲く国といわれた日本の国は、始め豊葦原水穂国といったそうだが、それが、何時の間にか、日出ずる国、日本の国といわれ出したその頃から、武力というものが重要政治機構として、覇を効かして来たのである。

最初、あめのはばやといわれた鉄製の矢尻による弓矢の威力は、日本武尊、坂上田村麿、平貞盛、源義家、藤原秀郷といった名高い鎮守府將軍を弓取りという名で世に送り出し、それに従う防人、供侍等も何時かそれぞれに武技を競うようになった。

それが、段々と私的に移行して行って、平安時代の末期になって侍族は源氏平家といっ

た大集団に発展して行くのであったが、『今日よりは返り見なくて大君のシコのみ盾と出で立つ我は』と、うたった防人の歌はゆがめられた当時の仏教精神にタイアップして、葉隠れの『武士道とは君の御馬前に討死する事と見つけたら』と、解釈する境地に到るのである。

それでも、頼朝が鎌倉に幕府を開いた頃には、まだまだ自己の勢力が強くなれば、主に替ろうといったエゴイズムのヒロイズムが余りなかったが、『味方殺して仁をなす』と、いった彼ら本来の犠牲的精神は益々要求されて行くのであった。

そんな訳で、大和心、日本精神、武士道精神といったわが国独特の帝国主義が発達して、土農工商の四階級に国内が大別されるのだが、遂に日本人は切腹という野蛮な自殺行為を發明するに到った。

昔、長崎平戸の異人館から、南蠻人という現在とは多分に毛なみの違ったヨーロッパ人が江戸にやって来て、『フジヤマ、芸者ガール、ハラキリ』の三ツを日本の三大特異風俗として象徴したが、フジヤマ、芸者ガールの方は別にして、日本武士族の切腹には流石のアチャラカさんも青い眼を紫色や金色に輝か

せて、『ニッポン、ナイト、ハラキリ、ハロ、ワンダフル、ハラショウ』といったとか。世界第二の自殺国という余り有り難くもないニックネームを頂戴していたわが国では、武士道といったヘンチキリンな封建思想が生んだ、史上最も由緒のある独特の自殺法が切腹であった。

服毒自殺、首つり、土左衛門より数等勇ましく、ダイナマイト、拳銃使用の場合と違い痛さを辛抱する時間が数等上廻って安直に死ねないという一大難点はあっても、切腹こそは、自虐的な英雄主義が生んだ瘦我慢によるケ、セラセラである。

元来、切腹は平安朝の末期に武家階級といった輩が、戦場で、急速に自殺する必要を痛感した場合に、刺し違えた事から発達した行為なのである。そして切腹は少くとも源氏の専売特許であって『祇園精舎の鐘の聲、諸行無情の響きあり』に始る。平家物語にも、有名な平家の有名な大将に切腹をして死んだ者はないのである。

切腹の第一号は、何を置いても源為朝の立ち腹を推さなくてはならぬ。伊豆の大島では彼は一矢で平家の軍船一そうを沈めて、その後、彼は家族を逃して小屋に火を放って猛火

の中で切腹をしたが、全く、溜飲の下がるような死にっぷりであった。伝承によると、琉球へ渡って王様になったともいい、義経のジ・ングスカン説と共に、全て、不世出の英雄は、世人がこれを殺したがない。

切腹の第二号も源氏の大將である。

源三位頼政は、平氏追討のいくさに敗れ、平等院の庭で『はとときす雲井に啼きし夢さめて扇の芝に秋風ぞ吹く』の、一首を残して心静かに腹を切っているが、時の武將の最期としては少しくエレガントである。俳風やなぎ樽は、『源三位窮屈そうな腹を切り』と皮肉っている。

第三号もやはり源氏の後裔であった。

村上彦四郎は吉野山に敗れた大塔宮の身替りになって死んだ。山岡莊八の『新太平記』に義輝はひたたれと袴ばかりになって、練絹の二ツ小袖の諸肌をぬいで見せ、それからゆっくり太刀を抜いた。

「いま身が自害するさまを見置きて汝等の武運たちまち尽き、腹切らんずる時の手本とせよや……」

自分の肌のひどく白いのにふと感傷の動きを覚えながら、太刀を腹に突き立て、ぐっと一文字に引いた。

そして、それを抜き取ってうわ向けた切っ先の上へわが首を投げつけると、ザザッと血のしぶく音を聞いたような気がして……そのまま意識が遠くなった。

一藩の運命を賭ける大仕事を命じる場合は一応上役は念を押す。「もしもやり損じたるその時には」すると、当人は必ず腹を切る仕事をして、「覚悟がござる」と、いった。

岡本綺堂の歌舞伎『新宿夜話に』……

甚五左 (思案して) その体では所詮屋敷まで歩いては戻られまい。駕籠にのせて帰るゝほどならば死骸にして連れて行く。大八、ここで腹を切れ。

大八 はあ。

甚五左 場所もあるうに、かような悪場所に於て、武士たるものが大小をうばわれ、足腰も立たぬようにちようちやくされ、よもや生きてはいられまい。せめてもの情に、屋敷へ連れ帰って、畳の上で切腹させて遣ろうと存じたが、この体ではとてもかなわぬ。兄が介錯してやるからここで死ね。

大八 はあ。

甚五左 これ、よく聞け。おれもひとりの弟を殺す以上、唯そのままには済まされぬ。その方の首を持参して、大目付松平図書殿

へとどけ出で、斎藤甚五左衛門の知行は上へ差し上げ候う間、その代り内藤新宿は永代取り潰しを願うと申し立てるぞ。

と、決め場になっているが、切腹は彼等のインスピレーションであつたらしい。

江戸時代には、寺小屋のお師匠様は侍の子に切腹の作法を教えたといい、若き日の荒井白石は、筆禍に問われて、腹に火繩を巻きつけて、そして火をつけて、武士として切腹の痛さを辛抱する事に努力して見た。渡辺華山の母は彼が自刃した後で、腹を改めて見てうれし泣きに泣いている。何が感激なもんか、何が面目だろう。やはり、ケ、セラセラだから切れたのだろう。

切腹に作法が喧しくいわれ出したのは、徳川三代將軍家光の頃からで、一文字腹、正十字腹、脇十字腹の三方式があつた。左に出て右に引くといった名文句は一文字腹で、刀を左の脇腹に突き立てて、一寸切り下げて、右脇へ一文字に引く。正十字腹はやはり左から一文字に引き廻して、一たん刀を抜いて、更にみぞおちの辺りへつつ込み、へその辺り迄垂直に切り下げたのである。脇十字腹は左から右へ真中辺ぐらい迄引き廻して来て、上

に大きくかき上げる。それでも、後年は苦痛を少くする為に段々と形式化されて、お目見得以下の輕輩の切腹には扇子腹といって、扇子で腹を切るまねをさせて首をはねた。

正式の切腹の座は、鯨幕を張り巡らし、畳を二枚裏返しに敷いて、毛氈を重ね、白布で覆い、後に屏風を逆さに立てて、四隅に櫛の一本花を竹筒に入れて置き、介錯人の為に手桶の水にひ杓を添えて置いた。検視役は切腹者の前に麻上下に白緒の草履。大小もいかめしく下(さげる)と書いた上司の命令書を読み上げてから床几に掛けて検分した。

死に装束は、白無垢かみしもの上下(亦は水色無紋の)に、白単衣、襦袢を重ねて左前に合せたのである。髪は水髪(油を用いないで櫛づける)にして死の座に直ると、腹切刀ののせてある白木の三方を取って両手で押し戴いて、肩衣を後へはねて諸肌を脱ぐと、腹切刀(九寸五分に限定された脇差の目釘を抜いて鐔、柄を外して薄い板で刀身をはさみ奉書で巻き水引を結び切りにした)を右手で取って、三方を左手で持ち尻の下へ敷き、(三方はそのままにして立てひざで切るのもある)左手で腹をなでさすり、腹切刀を取り直すと切ッ先を左の脇腹に少しつつ込んで首を前へ下げる

のを合図に介錯人が、事前に水を掛けた刀で首を前に斬り落したが、定法としては皮一枚を切り残すのを上手とした。

当時(元禄以後)はこれを形通りの切腹といい赤穂浪士の切腹にはこの形が用いられたが、間新六は座につくと肩衣もはねずに前をくつろげて腹切り刀をつつ込み右へ引き廻したので介錯人が急いで首をはねて屍体を調べると美事に一文字に引き切っていた。

大仏次郎の赤穂浪士には……しんとした中に上使の袴が畳に青く映った。それぞれの席に人は居並んだ。

「御上意」

と、厳かな声が掛った。

宣言である。十七人はひくく平伏した。上使は、赤穂開城の折にも来た御目付荒木十左衛門で、内蔵之助もよく記憶していた。

『浅野内匠儀、勅使御馳走の御用仰せ付けられ、その折時節柄殿中をはばかりず、不届きの仕形につきお仕置き仰せ付けられ、吉良上野儀お構いなく差し置かれ候ところ、主人の仇を報じ候と申し立て、内匠家来四十六人徒党致し上野宅へ押し込み、飛道具など持参上野討ち候始末。公儀を恐れず候段、重重不届きに候。依って切腹申し

付くるもの也。未。二月四日』水を打ったような静かな空気だった。内蔵之助が、心持ち面を上げた。

「有り難き仕合せに存じまする」

と、はっきりした返事が聞えた。

「殉死や単なる自殺としての切腹」は別にして、命令に依る切腹はそれでも切腹が済むと屏風が立て廻され検視が帰ると納棺されて遺族に引き渡され密葬を行い戒名を付け先祖累代の墓へ葬られた。刑死といっても磔や獄門と違って投げ込みの葬いは行われなかった。

累罪(連鎖罪)は切腹に限りあり得る。

磔や獄門になった者は極悪人として親兄弟が離籍処分にして人別をけずつたので累罪は行なわれなかった。只、切腹だけは名譽の死であるので甘んじて受けた場合が多かった。

女子はお構いなし、男子は十五歳以上の者に科せられた。僧籍にある者は最初から除外され、逃亡するか、僧籍に入る場合は深く追究されなかったようである。(社会人より)

当時、赤穂義士論に対して、佐藤一斎、荻生徂徠らの赤穂不義士論があった事を忘れてはならぬ。曰く、「彼等は後世に名を残す為に手段を選ばず騒動を起して、人心をまどわ

した。名を残す為なら何故城を枕に討死するか、亦は殉死をせぬのだらう。故に不義士である。というのである。(社会人より)

遺体は鄭重に扱われた。首は細き竹で縫がれ白布で巻かれて納棺され菩提寺に引き渡されるが、湯灌は行われないのが慣例であった。磔や打首は獄門といって首(亦は屍体)に罪状をつけて七日の間さらし物にされたが、切腹にはそれがなかった。

武士が切腹する時には、心静かに死ぬといった事が必須条件とされた。大声を上げたり、うめき声を出すのは恥辱とされた。それでも、徳川初期頃迄は相当に深く切ったらしく、当時の腹切刀は切ッ先五、六寸を残してカンゼンよりを巻き付けて奉書で包んだ物を用いた。あるだけの力を出して相当なうめき声を上げて、深く大きく派手に十文字腹を切っている。ある剣豪小説に背骨を断つとしてあったのは少しくオーバーである。

利久は腹に短刀を突き立てて、左から右に引いた。血はあふれ出たが、齡を取って腕に力がなく、息をつくばかりで、思うように引けない。そこで一旦、刀を置いて、下腹の切った口に手をさし込んで腸をつかみ出し、滴

る血のまま自在の蛭鉤ひるかぎに掛けた。憤怒のあまりである。

再び短刀を取ったが、もう腹に突き立てるだけの氣力がない。後に廻って待っていた藤田淡路守が刀をおろした。

と、松本清張は千利久の切腹を書いているが、当時利久は七十歳であった。清張は臍臑をつかみ出すのが好きであるらしい。

武士が自宅で切腹をする場合、真中の畳を二枚裏返えして死の座にした。利久は茶室で死んだ。為か、今に到るも茶室ばかりは半畳を真中にして四方に敷き流して家相上の一大凶相をあえて犯しているのは心得ぬ。死刑執行室の真中が二畳分だけ板敷きにして廻りに畳を敷いてあるのは切腹の座に起因するものか。

武士が腹を切りそこなう事は最大の恥辱とされた。直木の南国太平記に、百面木月丸、叡山の最後に、義親が、「可愛想に腹も切れずに死んだ」と、いう処がある。

だが、切腹を欲しない者の所へ上使として行った者こそ悲劇の主人公なのである。相手が聞き入れなかった時には上意打ちにしなれば成らぬ。相手が強かったら事だ。

お定めかき百ヶ条に「喧嘩両成敗」殿中

にて鐔先三寸くつるげなば、家は断絶身は切腹」とあって、その身分、理非、曲直は問われなかった。千代田の三刃傷でも、その手下人たる、若年寄稲正保。大名浅野長矩。旗本松平外記の場合もそれぞれ即日切腹を命じられ、お家は断絶している。下馬將軍といわれた大老酒井忠清も、元禄の覇者、老中柳沢吉保の切腹も政治的失脚に依る家名存続の為の手段といわれているが、表面はあく迄も病死に成っている。

単なる自殺は別にして切腹も公式準公式になつて来ると介錯人が選ばれた。大体作法に依る介錯の切っ掛けは三度あった。その一は刀を押し戴いた時。そしてその二は、刀を腹に突き立てた時。その三は充分に引き廻して首を前に差しのべた時とされている。

介錯をやり損じる時は恥辱とされていた。

——介錯をやり損じて美談とされているのは服部半蔵(甲賀組の祖、半蔵門で有名)ぐらの物で、彼が松平信康の介錯をようしなかったのも、渡部半蔵(槍半蔵)がした。彼は後日信康の為に一寺を建立したが、映画「逆児」では史実と反対になっている。

それが忿怒腹ふんぬばらになると、幾ら山田浅右衛門が首切りの名人でも、一度で介錯を済ます事

は出来ないだろう。それは、首は前に差し宣べない限りは絶対に斬れないからである。

切腹も江戸中期以後に成ると、先ず苦痛を味あうといった自虐的な本来の目的が段々と形式化されて行ったが、やはり名を惜しむ唯一の手段としてこのヒロイズム的な行為は跡を断たなかった。

切腹にはさまざまな場合がある。

立ち腹、殉死、諫死、詰腹、心中、手段腹、隠し腹と、切腹も数えて行くと相当な種類に成る。腹を切る者は先ず意志と気力の強さを示す必要があった。為か、武士と名の付く輩は、身分、貧富、善悪、強弱、賢愚を問わず、前途を悲観し、病弱を歎き、生活に窮すといった通常自殺に迄、切腹が応用されてジャンジャンと切られたのである。それでも当時の人は、この行為に拍手を惜しまなかったのである。

この辺りでさまざまな場合の切腹を一々例を上げて御説明したいと思うのであるが、その形の、その場合の切腹をしている者を、筆者浅学の為か、実際にあった場合を余り知らないの、そこはよろしく。小説、歌舞伎、講談、伝承、その他に出て来る主要人物の中からちよいちよいと間に合せて置く訳でもあ

る。只、純文学に案外切腹を扱った作品が多かったのは意外でもあった。普通の場合は大体御説明したから立ち腹から述べて行く。

武士と名の付く輩が、一刀を唯一の頼みとする差し迫ったラストシーンに直面して、体力の限界を察して人生のザ・エンドを敵の手に委ねる事を好まない場合を取る緊急自殺手段が立ち腹である。

立ち腹を切らんとする者は行動中に一刀を逆手に取って立ったまま切腹する為に普通大刀で以て行う場合が多いのである。全身にアンバランスな姿勢が取られているせいか一氣に大きくかき切るの、出血多量の為に急速に失血死を起す関係上、喉笛をはねたり、頸動脈を断つ等の助成行為なくして迅速に目的を達している。

これを歌舞伎本来の形に取ると、半月を後にして、散ばら髪を風になびかせ、大きなフンドシのたれで股間を覆い、全身を現わにして眼玉をむき、股を開いて、つま先で立つと一刀の刃を袖でつつみ、右手で逆手に握ると、下腹を下げて、左の脇腹に切ッ先をぐつつ込み、赤いライトを浴びて、七、三を睨む仕草は多分にセックスなものを連想させたので、団七九郎兵衛、弁天小僧等の最後場に取り入れられ、左手で持ち添えて大廻しに一氣に腹をかき切ると、片手拝み落ち入る幕切れは仲々優美な惨忍さがあり、百々ちゃんや阪妻の剣劇映画に迄も応用せられて、そのヒロイズムから来る悲壯感に大向うをうならせたのである。それに反して小刀の立ち腹は少しく地味でもあるが、講談などでは反って迫力があって勇ましいのである。

次は殉死である。

殉死といえば、垂仁天皇が殉死をする人々の泣き声でノイローゼになり給い、野見の宿根の乞を入れて、以来埴輪を用いて殉死を禁ぜられたが、往時貴人が死ぬと、生前可愛がられていた者は、人も馬も主人のお供をする意味から、主は長柄の人柱ではないが生きながらに穴の中へ埋められたのである。

日本で再び殉死が公然として流行し始めたのは徳川四代將軍家綱の時代であった。三代將軍家光の死に、時の下総国佐倉の領主堀田正盛が殉死を願ひ出て追腹を切った事から、急に殉死が流行病のようにはやり出し、世もようやく太平に成って、武士が戦場で功名手柄を立てて名を上げる事が出来なくなったので、忠義を示す追腹が第一等の手段として盛んに成り、幼君の病死に、お側役であった次

男の殉死を父が願ひ出してお許しがあると、嫌がるものを無理やりに、「やれお家の為だ」

「それ忠義の為だ」と、わずか十二や十三の小供を叱り付けて白装束を着せ、腹の切りようも知らず恐しさにふるふる震えているのを両親で押さえ付けて、腹切刀を可愛いわが子の腹へ突っ込み、痛さの為にわあわあと泣くのを、「今しばらくの辛抱じや」と、ばかり一文字に引き廻して、首打ち落し、「わが子は立派に追腹を致しました」と、届け出て、「よき御子息をお持ちに成り、おうらやましゅうござる」と、ほめられてはほくそえんでいたという狂気沙汰さえ平然として行われるようになってしまった。

そんな訳で、殉死の悪風は年を追うて繁しくなってきたので、家綱二十歳になった寛文三年、老中保代正之、その害あって益なき事を進言し、徳川光圀の賛成を得て將軍が式日に大名へ禁止を国法とせず申し渡したが、寛文八年二月、宇都宮城主奥平美作守忠昌卒去の爲家臣三名の殉死が聞えたので、お家断絶の処を格別のお覚召により二万石減封に成って、出羽山形九万石にお国替をさせられた事から天下に殉死がなくなったとの事である。そんな訳で侍族もさぞぼつとした事では

あろうか、殉死を扱った作品の中でも森鷗外の安部一族は特に有名である。

鷗外の歴史小説の端を発した『興津弥五右衛門の遺書』は、大正元年の作で、これは殉死小説で遺書体にしてあり、末尾に……

正徳四年十二月、興津弥五右衛門景吉は高桐院の墓に詣でて、畳の上に進んで、手に短刀取った。うしろに立っている乃美市郎右衛門の方を振り向いて、「頼む」と声を掛けた。白無垢の上から腹を三文字に切った。乃美はうなじを一刀切ったが、少し切り足らなかつた。弥五右衛門は「喉笛を刺され度い」といった。併し乃美が再び手を下さぬ間に、弥五右衛門は絶息した。(後略)

井原西鶴の武道伝来記の中に、「心底を弾く琵琶の海」とて、美童(男色の)の先腹があるので一部分を引証する。

只我々は先腹切つて死出の山路の案内せんと思ひ立ち日を定め、一方口の部屋に入り、内より戸差しを釘づけにして、采女、左京が最後、銘々に腹二文字に引き捨て、その後差し向いて剣を互いにつらぬき、只今と云う声に驚き己々板戸を破り入りて見れば魂ははや浮世を去つて是非もなき面影。白小袖の紋無し袴ゆたかになでおろしたる、びんもそそ

けず、身をかため、二人ながらに中眼に開き笑えるかんばせ常にかわらず。

と、西鶴は二文字に切らせ、鷗外は三文字に切かせた。西鶴のは信長のいた時代。鷗外は徳川時代の事件を描写する。当時は深く切つたので、血や脂肪の為にすべって一ぺんに一文字に引く事が出来ない。そこでぐっと刀をつっ込んだ。その時苦痛に力がにじる。亦引く、亦すべる。三度目につっ込んで引き切ると云つたような切り方をしたので、二の字、三の字の切腹が登場したのであるうと思われるのである。

この辺りで諫死に移る。

切腹も諫死辺りに成つて来ると大分切り甲斐が出来てくる。錦之助の映画『織田信長』の封切りから平手政秀(月形龍之助)の諫死がすっかり有名になつてしまった。幾ら切腹が、ケ、セラセラだと云つても諫死級になると切り手は少くとも大身である。この切腹は武士の面目を発揮した物として、色んなジャンルに取り上げられているが、歌舞伎には『八陣守護城』(難波戦記)があり、序幕北畠春雄館の場に森三左衛門義城の形が残されている。春雄 くどい。

義成 ムウ……このまま毒に死なんより、腹
 かつさばき相果てなば、君の悪名散ずる道
 理。真の忠節。

へ右手へがばと突き立てる。

ト、刀を抜き、腹へ突き立てる。

妻 わがつま。

義成 コレ。

ト、こなしあって、義成、キリキリと引き
 廻す。春雄、じっと見やり。

春雄 アア、忠臣ここに。

と、幕に成っているが、家康を春雄にして
 あるだけで、清正の毒饅頭がよく仕組れて居
 り江戸時代の中期に始めてこれが上演された
 のであるから思えば痛快である。義成の切腹
 の威力であるかも知れない。

隠し腹になって来ると大分ムードが変って
 来る。家来が主の、親が子の命乞いをする場
 合には最上の策とされていた。隠し腹とは事
 前に腹を切って、その上を布でしぼり普通の
 衣服を着用して御前に出るのである。

次第に変わる面色蒼白。

「その方、腹を切っているな」

「御賢察恐れ入ります」

で、双肌を脱ぎ、腹帯をとき、苦痛の仕草
 よろしくあって、歎願書を手渡し、

「心配するな、安らかに行け」

「御免」

で、自ら喉笛をかき破って落ち入ると云っ
 た仕組のずい分ややこしい切腹で、このよう
 な場合は武士の情として最後の願いは最小限
 度以上が必ず聞き入れられた事を付記してお
 きたいのであるが、隠し腹は筋がデリケート
 に出来ているので、決め場、逃げ場に用いら
 れ映画、演劇等によく応用されている。

順序として次は詰腹である。

沢山ある切腹の中でもこの位切る人の身に
 取って馬鹿馬鹿しい切腹は先ずないだろう。
 読んで字の如く現在でも責任を取らされて辞
 職させられるのを詰腹を切らされたといふ。
 詰腹とはあく迄もお為ごかしの勧告ではある
 けれども筋として余り残されていず、先ずは

「本朝二十四孝」の勝頼ぐらいのものであ
 る。赤穂浪士の下巻に、隼人、陣十郎の問答
 の中に出て来る岡林奎之助の自刃がある。彼
 は千石取りの番頭で、赤穂退転後は江戸の兄
 (旗本)の処に身を寄せていたが、義拳に世
 間体から兄一族は彼に詰腹を切らせた。だが、
 世人は兄の立場に賛意を表した。

陣十郎は笑った。

「私のは違ふんです。その兄弟が憎らしいと

は思いますがね。そこ迄馬鹿らしく成って来
 ると、愛嬌で、可愛らしい気にもなりますよ、
 処がそう云う茶気のあるおさむらいのいる間
 は天下はまことに安泰なんです。それ処か、
 ひょっとすると、仇討の人数にはもれてはい
 たが、義士に成ります。そうですって、義士
 に違いないんだ。そんな茶番はどうだってい
 いが、私の腹の立つのは、それを見て悦んで
 いる世の中ですよ」

「どうせ馬鹿の集りさ」

隼人は聞くのも、ものうげだった。

これでは全くの、ケ、セラセラである。

そして、切腹が心中に応用される場合があ
 る。心中は一方が女であるからハラキリ率か
 ら割り出すと、終り迄が一对ゼロの場合が多
 い。二人がそろって切腹をするとは決ってい
 ない。

樋口一葉の『にぎりえ』は明治二十八年の
 作品だけにラストの無理心中の結果が振って
 いる。この小説はお力と云う酌婦の半世を描
 いたもので、一葉の主観が面白い。

切られたるは後袈裟。頬先のかすり痕。首
 筋の突き疵など色々あれども、たしかに逃げ
 る処をやられたに相違ない。引きかえて男は
 美事な切腹。蒲団やの時代から左のみの男と

思わなんだがあれこそは死花^{しはな}。えらそうに見えた^なと云う（以下略）

……明治時代には、こんな事もありしかないと、思いながら次の手段腹に移りたい。が、先ず申し訳から始める。

幕命の木曾川治水工事に出費と工事遅延の責任を取ってその完成後に殿への申し訳に自刃した薩摩藩士の赤心に前非を悔いた俠盜日本左衛門は自首して処刑を受けている。

黙阿弥の「弁天娘女男白浪」に……

弁天 古主の御息女千寿姫をかどわかしたる云い訳に、下は早瀬はなめり川渦巻く水に行えさえ、誰白浪の身の終り、こずえ烈しき夜嵐に散り行く花の雪ならで、これまで積る悪事の年明け。今日ぞ一期に齊日^{ついで}の閻魔の庁へ名乗って出る。弁天小僧が最期のほどを捕手の奴等、間近く寄って見物なせ。と、思入れあって……弁天小僧、極楽寺山門屋根での立ち腹は古主への申し訳であった。それでも、胡蝶の香合は後に彼の実父の手に返る。——どうもハラキリ族はベストを尽さずして切るのであるが、彼等に腹一つすればと云った先入観念があった事是否めないのである。

そして彼等は、忿怒を表現する手段として、

いきなり全てを切腹に投げつけて来る事がある。そして彼等は出来るだけ痛いように腹を切り半狂乱の体で死んで行くのだから可愛らしい所もある。鷗外堺事件では……

たちまち雷のような声が響き渡った。

「フランス人ども聴け、己はうぬらの為には死なぬ。皇国の為に死ぬる。日本男子の切腹を好く見て置け」と云うのである。

箕浦は衣服をくつろげ、短刀をさか手に取って、左の脇腹に深く突き立て、三寸切り下げ、右へ引き廻して、又三寸切り上げた。刀が深く入ったので創口が広く開いた。箕浦は短刀を捨てて、右手を創口にさし込んで、大網をつかんで引き出しつつ、フランス人を睨み付けた。馬場が刀を抜いてうなじを一刀切ったが、浅かった。

「馬場君。どうした静かにやれ」と箕浦が叫んだ。馬場の二の太刀は頸椎を断った。かっ

と音がした。

「まだ死なんぞ、もっと切れ」と叫んだ。この声は今までより大きく、三丁ぐらい響いたのである。初から箕浦の挙動を見ていたフランス公使は、次第に驚駭^{きやうがい}と畏怖^{いふ}とに襲われた。そして座席に安んぜなくなっていたのだ。この意外に大きい声を、意外の時に聞いた公使

は、とうとう立ち上った。手足の置き所に迷った。馬場は三度目に、ようやく箕浦の首を墜した。

幾ら何でもこんな切腹の介錯をやらされたらやりそこなうのが当然である。介錯者にすれば、さぞかし寝覚めも悪かろう。切腹の中でも忿怒腹程嬌^{めづ}なものはない。

ああ、それなのに、それなのに、純文学に忿怒腹が多くて歌舞伎の切腹が尋常である。考えて見るとおかしい事だが、幾ら現代の文学が西洋哲学で割り切られていると云っても、切腹族の心情は決してそんなものではない。事が出来ない。為か、純文学の忿怒腹が、わが国古来の講釈（現代の講談）の表現法にそっくりであったのは意外でもあった。

手段腹はそんな処にして、元来、切腹は逃避なのである。逃避には必ずコンプレックスが伴うものである。が、面白い事には彼等は終始優越感を以て切っている。もしも、彼等が切腹にコンプレックスな物を感じていたとしたら痛い腹などは切らなかつただろう。

彼等が、「わしや侍の子じゃ。腹がへつても餓^うゆうない」と、千松を決め込んでいるのはよいが、彼等が真実に飢を感じて切腹を選んだ時には、必ず五合や一升の米はそのまま

米びつの中へ残して死んだ。我々であつたらせめておかゆにでもして食った後で死んだだらうに、そこが独特の瘦我慢でもあつた。彼等に、もしもこの瘦我慢が無かつたなら、斬り取り強盗武士の習いでたまつたものではな。少くとも往時の百姓町人は、先祖が彼等の切腹にコンプレックスな物を植え付けなかつた事に感謝しなければならぬ。

この辺りで切腹の効果を期待したものに付いて少しく述べて見る事にする。全く彼等が効果を期待して切腹したとしたら皆無に成つてしまふが、沢山のハラキリ族の中には効果を期待して切つてゐる者もあり、その場合は応々にしてナンセンスが飛び出して来た。そして、武士と云ふ輩は切腹を恐迫の手段に用いる場合があるが、失敗は借飯物である。

その一例として——後水尾帝が、宮中で毎日のように剣術のけいこをする。これも將軍への一つのレジスタンスではあつたが、つまり兼ねた所司代板倉重宗が、「幕府への聞えも如何と存ぜられます。お止めにならねば、臣は申し訳に切腹を致します」と、奥の手を使って諫言した。処が帝の方が一枚がた役者が上で、「將軍は臣下である。ほっとけ。そ

れより朕はさむらいの切腹を見た事がない。非常に勇ましいものと聞くが、一つ実演して見せて貰いたいものである」と、検死後を申し出られたので、流石の重宗も閉口して謝つて許して貰つたとか。

この反対の場合が山手樹一郎の「槍一筋」である。——ある小藩の武士が、主君の藩も下郎の不注意から、尾州藩の武士達に奪われてしまった。そして、槍の奪還策に主人公に成る若さむらいが彼等の本陣へ乗り込み、殿への申し訳にその玄關先で切腹しようとするが、出て来た一人の老武士に止められて槍を返して貰つたと云う筋で、講談の義士銘銘伝、千世三郎兵衛の槍供養にストーリーが余りにも似通つてゐるので出どころが伺われるのである。

歌舞伎「伊賀越道中双六」沼津の段。平作のねだり腹。そして、葛飾北斎の師狩野某が絵師としての一分を立てる為、駕籠の中で切腹して北斎は有名な駕籠幽霊の絵をかくてその仇を討つ。亦。大原幽嶽は農民の結束をうながして切腹したが、権威と無智と暴力に道徳を以て斗つた彼は悪劇の主人公であつた。

志賀直哉の赤晒蠟太に……

ある時蠟太に付いて妙な噂が立つた。それ

は蠟太が、切腹未遂をやつたと云う噂だつた。行つて見ると成程半死半生の蠟太が仰向けに成つてうつらうつらしてゐた。傍に親友の鱒次郎がついてゐたが、鱒次郎は蠟太が何故そんな事をしたかは知らなかつた。医者に聞くと実際に十幾針縫つたと云う（以下略）

と、直哉はこの小説では蠟太は腹膜炎にもならず腸捻転を直している。只、奇蹟は時々あるものである。

歌舞伎「細川の血達磨」の大川八右衛門は、家康の神文を火災から護る手段として切腹して、その腹中に包み、骸と化して迄も細川の家を滅亡から救つてその誠忠をうたわれたのである。……以上は大体切腹の効果を認める事の出来る場合が多い訳なのであるが、切腹は時にして飛んでもない効果がある事がある。それは……河上社会問題調査会民族公論社発行、第一五八号処載「古今の人物を語る」頭山満翁言語録(四)の中の一節、高山彦九郎の切腹(一八頁——一九頁)より……

「久留米の森嘉喜の家で切腹したのじゃが、前に一切の書類を水につけて破つてしまつてから腹を切つた。家の者が、「検視の来るまで待つてくれ」というものじゃから、臍腑もなにも出てしまつてゐるのに朝から夕方まで

十時間も待つとったそうじゃ。待ちくたびれて、死んだように成ってうつぶしとった。夕方検死の来たころは、首をたれて息も絶えた様子なので、役人が扇子の先か何かで臓腑をつついたところが、起きなおって大喝一声――「尾籠ッ」とどなりつけたので、びっくりかえったそうじゃ」

と、全く頭山翁らしい云い廻しであった。亦、奇人彦九郎をほうふつさせた死にっぷりで痛快でもある。だがこれでは痛さを通り越してナンセンスでもある。本人にすればさぞ馬鹿馬鹿しかった事であろう。

さて今度は武士の切腹に対する覚悟と云った物を例を上げて説明して見たい。

明智の家老齋藤内蔵之介は山崎の合戦の後秀吉の陣に捕えられたが、彼の乳母が最後の別れに来て熟柿をくれたのを「軀に毒じや」と断わりその場に切腹した。

琵琶湖を馬で乗り切った勇士明智左馬之介は坂本城に入り光秀の累を断ち己が妻子方殺して切腹したが、名馬は岸につないで敵将秀吉に伝えた。

柴田勝家は北の庄の城に自刃したが、信長から伝えられたかの有名な茶器は天主から釣

りおろして秀吉に伝え戦国武将の覚悟を示した。

浅野内匠守は、『風さそう花よりもなお我はまた春の名ごりを如何にとやせん』と辞世を残しており、坪内逍遙は豊臣秀頼千飯矢倉の切腹に『桐一葉落ちて天下の秋ぞ知る』と片桐且元を大阪城外に諫死させる。真田大助は年わずかに十五歳で父幸村に替り秀頼の自刃を見届けてから切腹した。生存説もある。

一たん武士がその主君から切腹を命じられて、心中如何に不満をみだしていてもあく迄平然と受けて座を直し黙って腹切るのを武士の誇りとした。深く切るのは無念腹と云って嫌われた。

彼等は、主君の御馬前に討死するのを唯一のイメージとして生き、武士と云う名の元に切腹するのをインスピレーションとして死んで行ったが、切腹こそは、彼等が武士であると言った威徳を衆人の前に明示する唯一のアクション・スペシヤル演出法なのである。

それでも相当ぴんぱんに、多量に、フルスピードで、切腹が行われたのは明治維新の後であろう。当時は侍族が二派に分れて、大和心だとか、武士道だとか、大義とか忠節

とか云った馬鹿馬鹿しいわが国独特の帝国主義とも云う可き封建思想が天下を風靡していた時代でもあったが、元治元年大和十津川郷の天誅組の義挙に始まり、新選組池田屋斬り込み。平野次郎たじま生野の乱。同八月長州藩士京都蛤御門の攻略。同、天王山十七烈士の自刃、第一次、第二次の長州征伐。そして、土州藩士武市半平太の切腹。明治戊辰の役が戸羽伏見口の合戦に始まり、江戸彰義隊の乱、会津攻略、函館攻略。同二月十五日の境事件では妙国寺で土州藩士が十一人も切腹した。以後に成ると熊本神風連の乱。江藤新平賀佐の乱。明治十年西南の役。同西郷南州城山の最期と、全く切腹セツプクの続発であった。それでも明治に入ってから最も後世に名を残したのは、白虎隊飯盛山の最期と乃木將軍の自刃であろう。

白虎隊は少年ばかりが十六人も一ぺんに腹を切ったのだから雄雄しさを通り越して悲壮である。筋がエレガントなだけに小学唱歌に歌われ、戦後は映画や歌謡曲に迄、成って流行し、未成年者ばかりの切腹だけに、オール女性の涙を独占したのである。

芥川の『將軍』では、乃木さんは全く儒教的な稚氣の応酬した好好爺として描いてあ

り、^{らくえん}楽燕の浪曲では水戸黄門シスエムが主眼に成っているのも面白い。

乃木さんの自刃が、漱石に取っては少なくとも相当なショックであつたらしい。彼は、小説「ころ」の主人共。先生なる人物を自殺に迄追いやったが、作中主人公の遺書の次に……「そう云う人に取って、生きていた三十五年が苦しいか、刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、どちらが苦しいだろう」「明治に殉ずるのだ」とある。漱石はこの作の項から「則天去私」の人生感にたどり着かんとして二度目の胃潰瘍で死んだ。

鷗外は小説「灰尽」を中断して、そして書いたのが「興津弥五右衛門の遺書」に始る一連の歴史小説だが、それが乃木將軍の自刃がその因を成しているように云われているが、作家として作品の行きづまりに依る心境の変化であると解釈されるのである。

流石に明治も過ぎて大正、昭和と成って来ると、切腹と云う野蛮きわまる自殺行為はぐっと減って来て、ハイカラさんや伊達紳士。モボやモガの出現で、自殺の激増して行く数字に反比例して、切腹する者がすっかり無くなってしまった。

この辺りに実在の切腹を書く。

昭和初年の三面記事に死のう団と云うのが掲載された。——たしか、法華宗にぞくした新興宗教だが、神社仏閣等の祭礼で、沢山人の集っている所に出現して、「死のう死のう」と、叫びながら、白衣に死のう団とした扮装で、白鞘の短刀を抜いて、いきなり腹を一文字にかっさばき失心して大騒ぎを越したが、たびたびこの死のう団は出没したらしく、この記事は二、三度も見たように思われるが、詳細と生死に付いては私は覚えていないのである。

これも昭和初年の事である。大阪で、近所の鰻屋の爺さんが、借金の申し訳に紋付を着て、鰻をさく切り出し庖丁で割腹をした。勿論、未遂に終って入院したが「鰻はさけても自分の腹は仲々には切れぬ。さぞ、痛かったであろうに……」と、母や近所の人達が気の毒がった。

大東亜戦争も終局が近づくと、転進、玉砕がある度に、沢山の自決が行なわれた。傷病兵のテントを手榴弾で爆破して退却した。女性には海岸から沖へ沖へと歩かされて遂には波にのまれて溺死した。それでも皆自決なのである。そして命令なのである。軍司令官や高

級参謀は割腹した。全くこの悲しむ可きテンヤワンヤの内に、二発のピカドンが落ちて、無条件降服に成った。軍首脳部の自決が盛んに行われた。それでも割腹したのは阿南陸相只一人であつた。戦後早川雪州がこの後を映画で熟演している。

相撲協会の故某理事長は協会のもつれから短刀が割腹自殺をしたが、腹部の脂肪層を勘定に入れなかった為に未遂に終った。

三十四年の夏の事だが、広島の新僧小林雲鉄師は、上京して時の岸首相の官邸で、原水爆絶対反対の建白書を残して美事に一文字の割腹をしたが、数分後警官と病院へ急ぐ車中で死んだ。一人ぐらゐの切腹で、この暴挙が阻止出来るものなら筆者とても決して一命を惜しむ者ではない。

最近郷里のある田舎町で、夫婦喧嘩の末。妻を手おので傷付け、自分は菜切庖丁で喉と腹を突いて仲よく入院したと云う記事を見たが、ナルチシストにふんどしマニヤが多いように、未だにマゾヒストには切腹マニヤがいるのである。

それでは日本に女性や小供の切腹はあったのであろうか、小供の場合は別にして、女性

の切腹も相当な数字に上るのではないかとは思われるが、少くとも切腹を好むような女性
は中性化したマゾヒズムの性格の持主で、封
建的ピート族であった事を指摘したいのであ
る。

村上元三の「大槻内蔵之允に、時の賀州公
の正夫人が、男のように腹を切って死んだと
あり、歌舞伎「寺町女腹切り」には叔母お長
が甥の一命助けたさに切腹する。

林芙美子の「放浪記」の中の詩に……

矢でも鉄砲でも飛んでこい。

胸くその悪い男や女に、

芙美子さんの腸^{はらわた}を見せてやりたい。

この詩だけは日本人でないと書けない。

曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」は、伏姫の
切腹で、八犬士の出現に成るのだが、その発
端の構想は世界の文学史上にも「イエス伝」
か、「西遊記」の吾空の延生以外には、その
類例を見ない洞察力でもある。

……これ見給えと、ひぢ近なる護身刀を、^{まもりみ}

引き抜きて、腹へぐさつと突き立て、真一文
字に搔切り給えば、搔しむ可し創口より一条
の白氣ひらめき出で襟に掛けさせ給いたる彼
の水晶の珠数は離れて虚空に上ると見えし
に、たちまちふつと断ち切れてその一百を数

えしままに八ツの珠はさん燦と光明をはなち
飛び廻り、入りまざりて赫赫たるありさまは
流れる星に外ならず、主従は今更に姫の自殺
をとどめ給えど、我にもあらず青空を仰ぎつ
つ、まなこ怪しく、あれよあれよと見る程に
跡は東の山の端に名月のみぞ差し昇る。亦是
数年の後。八犬士出現して遂に里見の家につ
どうきざしをここに聞くなるべし。かくても
姫は深手に屈せず神の結びし腹帯も疑いも加
処解きたれば、心に掛る雲もなし。浮世の月
を見遣して急ぐは西のそらにこそ、鮮血にま
みれる刃も柄も抜き捨て、そのままだと落
ち入りたまう。心やさしき女子^{おなご}には似げなき
迄もたくましき最後はことにあわれなり。

と、結んでいる。——が、小供の切腹はあ
ったのであろうか、それは、非常にめずらし
い場合ではあったけれどもやはりあったので
ある。

戦後。神戸で八歳の男の子の鉄道自殺があ
った。当時、心理学者は稀有の事で、この年
齢の小供が、自発的に死を決意したと云う事
は心理学上でも非常にめずらしい例であると
云った。それが、封建時代では少しく解釈が
変って来る。現代とでは成年に達する年齢が
違った。それは、往時は数え十五歳に達する

と元服をして大人の部類に入ったので十二、
三歳に成ると切腹もあったようである。

歌舞伎「近江源氏先陣館」盛綱陣家の段に
は小四郎の切腹がある。彼はまだ十歳ぐらい
の小供であった。それでも、彼の切腹は父高
綱の云い付けを守ったものではあるが……

ト、小四郎窺い出で、

小四 ヤア、とと様。さぞ口惜しゅうござり
ましよう。わしも後から追附きまする。

へ氷の刃。雪の肌。腹にぐさつと突き立て
る。

盛綱 ヤレ、母人。お止めなされ。コリヤ小
四郎。何故に切腹する。仔細は何と、ドド、
どうじゃ。

へ様子は如何にと人人慌て介抱に、小四郎
きつと目を見開き。

小四 何ゆえとは、伯父様とも覚えませぬ。
卑怯未練もとと様に逢いたさ。父を先立て
何おめおめと生恥を晒しましよう。親子一
緒に討死して、武士の自害の手本を見せま
する。

へキリ、キリ、キリと引き廻す（以下略）

……盛綱は小四郎の健気さに大将時政に高綱
の首と腹を掛けて証言する。その実高綱は生
きているのでこの作も難波戦記の作り変えて

はないだろうか。

この辺で、直木三十五の『南国太平記』に移って見よう。——お為添くずれに山口一郎右衛門の切腹が七枚程書かれている。

「余り、同志の者に遅れても成らぬ。それで御一同」と、云って山口一郎右衛門は立ち上った。白無垢の着物に白の麻の上下をつけ、左手に愛蔵の鎧通しを握っていた（中間略）力任せに右手へかき切ってしまった。と同時に左手を蒲団の上に突いてうつ向きながら、髪の毛をびりびり震わしていた。人人は固唾をのんだ。切り口は五分余りも口を開いて、血に染んだ白い脂肪が厚い層を現していた。そして、その下の部厚な脂肪の下から、灰色の大腸がちらっと、見えていたが、一郎右衛門が苦痛に、いきを大きくし身体中に力を入れると同時に、それが、ぐっと含み出して来た。そして、いきをする度に、少しづつ押し出されて来て、一管が切り口からはみ出すと同時に、すぐ、そのつづきが、だらだらとたれ下った。

一郎右衛門はうつ向いて手をついたまま、肩でいきをしているだけである（後略）
やはり直木の書いた切腹は痛そうである。

最後に、武士を除く他族の切腹の例を挙げて見る。元来、切腹はサムライ族の専売特許なのだが、特許侵害は時時ある。

武士族でこれを兼ねたり、元武家であった者は別にして、流石に、天皇、宮家、公卿、非人等には大体にして切腹はないのだが、神官にはある。神官は両刀を与えられ、武家並に扱われた。元治元年京師の乱で天王山に切腹した真木和泉守は神官であった。

坊主も人間であるから自殺をした。出家として刃物こそ嫌ったが、彼等独特の方法でやったようだ。只、切腹だけは入道と云う坊主だけに限ったのである。由井正雪に一味した豪僧寛全は乱斗中に立ち腹を切ったが、彼は破戒僧と云う部類に入るのだそう。

士、農、工、商の中で……

先ず、農族の切腹には忠臣蔵の弥作の鎌腹がある。弟千崎弥五郎の忠義を立てさす為に、大恩のある庄屋を鉄砲で殺して、その申し訳に鎌で腹を切り、弟の出立を見送るのであった。勿論歌舞伎の事であるからストーリー全部がフィクションであらう。

工族の切腹には、講談『左甚五郎伝』の日光大工初五郎の切腹がある。為に甚五郎は右手を失うのであるが、異説がある。

商族の切腹には、歌舞伎の魔劍籠釣瓶。吉原百人斬りの佐野屋次郎左衛門がある。

やくざ族では、切腹は相当重要視される第一、江戸の三ヶ月。浪華のたが袖といった親分衆に成ると、もう飛び込みや首つりと云った情無い自殺は考えられないのである。

『錦着てわれは河原の乞食かな』とは、二代目市川團十郎作の発句である。彼等は舞台でよく切腹のまねをする。だが、八代目の團十郎は、大阪興行のもつれから江戸のひいきと実父海老蔵（七代目團十郎）の間に、はさまって切腹をする『団十郎の死』と云う戯曲があるが、調べて見たら彼は大阪の宿で、江戸から持って来た短刀で喉を突いて死んでいた。

グレン隊（小悪党）はどうだろうか。

『神稲水滸伝』の女勘助であるとか、『三人吉三』のお嬢吉三であるとか、弁天小僧の菊之助と云った輩は立ち腹を切った。『四谷怪談』の直助権兵衛は、主殺しと畜生腹を恥じて出刃庖丁でドン腹をぶち切る。——それでも日本左衛門や稲葉小僧の新助や鼠小僧の次郎吉と云った大物に成ると、やはり『三尺高い木の上で』と、云った悪党の本分を忘れず処刑を受けている。

最後に切腹に關連した話を少し述べて見たのである。

筒井順慶は、戦に敗れて腹切らんと、とある農家に入り、藤四郎行光の鐵通しを腹に突き立てたが、何故か皮さえも破れなかった。

「腹も切れぬ鐵通しはいらぬ」と、投げ捨て郎党の鐵通しを借りて脇十字の腹を切つて死んだ。その郎党は彼が怒つて投げ捨てた鐵通しが、鉄瓶をつらぬいているのを見た。「あッ」と、叫んだ。その郎党は、まるで、物の怪にでもつかれたような声を上げて、戸外に飛び出して行った。しばらくの間でも主人の死をこぼんだ名刀の誉は「薬師藤四郎」の名も高く、秀吉に献じられたが、大阪落城の砌り焼失してしまった。

L・ハーン（小林八雲）の『怪談』に、
「十六ざくら」と、云うのがある。

「うそのような十六ざくら咲きにけり」

伊予の国の和氣郡に、「十六ざくら」と呼ばれる大麥有名な古木があった。その名の由来は毎年旧暦の一月十六日に——しかも、その日だけ花を開くからである。桜の花の咲くのは春である。だが、この木は大寒の候である。しかもこの「十六ざくら」は、もとは自分のものではない生命で花を開くのである。

この木の中にはある人間の魂が宿っているのであった。

その人間と云うのは伊予の侍だった。この侍の家の庭に生えていたこの木はやはり普通に花を開いた。樹齡百年にもなるこの木は彼はむしろ幼年の頃からその伴侶であった。否、命でさえあった。彼は、小供に先立たれてから、この木をのみ溺愛した。が、この木はある年の夏しおれて枯れてしまった。

老人は、ひどく悲しんだ、そして老人は大変この木を愛していたので、誰一人それを失った悲しみを慰めることは出来なかったのである（以上略記）

とうとう、よい考がうかんで来た。老人は、枯れている木が助かりそうな方法を、思いついたのである。（それは、一月十六日だった）老人は一人で庭へ出て、枯れた木の前にひざまづき、それに向つてこう話しかけた。

「お願いだ。どうかもう一度、花を咲かしておくれ、わしがお前の身代りに成つて死ぬからね」（なぜなら、人は、神様のお恵みで自分の命をほかの人や、動物や、または木にすらやってしまえると信じられているからである。そして、こうして命を譲りわたすことを、「身代りに立つ」と云う言葉で云いあらわさ

れている）それから、老人は、その木の下に白い布をひろげ、幾枚もの敷物をしいて、その上にすわり、武士の方式にしたがつて切腹した。それでも老人の靈魂は木に乗りうつつてたちどころに花を咲かせた。

こうして毎年、雪の季節の一月十六日に、今もなお、花が咲くのである。（田代三千穂訳）

武士は「切腹魚」と云つて、このしろと云う魚を嫌った。巷間、この魚を焼くと死人を茶毘に付すにおいがすると云い、小骨が多いので横に骨切りをする。為に、その形が一文字腹に似ていたので嫌つたらしいのである。そして、来客の酒の肴に出した所、己の膳に切腹魚を付けたと云つて相手が怒り出して刃傷沙汰に成つたとか、絶交したとか云う。

舟橋忠臣蔵に吉田忠左衛門に、「拙者は、人並外れの大兵故。亡骸もさぞ醜く候わん。されば、大きな風呂敷用の白布を買い求められたい」と云つて、しいて、肌付の金子を渡すシーンがある。——切腹をしたと云つても、死んでしまえば醜い一個の屍骸に過ぎないのである。

でき物一ツ切るにしたって、麻酔なしでやられると、我々は痛い痛いとい大騒ぎをする。

痛い腹を自分でよく切れたものだと思心もするが、それでも、痛い、痛くないかは、自分で腹でも切って死んで見なければ、その心をはっきり知る事は出来まい。と、云って今時はやりもしない切腹をして、幾ら人の有り余る時代ではあっても、そんな馬鹿野郎のいないのが当節ではある。

世界保健機構は、一九五一年から五九年までの「世界自殺統計」を発表した。赤い海の離れ小島西ベルリンが世界第一で、十万人につき三三・九人と云う圧倒的な記録を持ち、第二位は東独の二八・四。第三位は日本とハンガリーで二五・八。第四位はオーストリアの二四・八。かつては自殺者の多かった事で世界第一位であったデンマークが二一・〇で第五位と云う名誉の転落を見せている。(U P 通信より)

過去の日本には火災の為に天皇の御真影を焼失した責任で割腹自殺をした校長さんがあったとか、これも、過去の天皇制や武士道、日本精神等が作り上げた歪められた道徳観念の為であったのではあるが、このような事で自殺が第三位に成ったと云って文明国を自負しているのだから、おかしく成って来るの

である。

カトリック国エールは十万人に付き二・五人で、自殺者は世界の最低位である。——カトリック教では、自殺も罪せられると教えているのに、我国古来の仏教には返って自殺を礼讃して来た傾向にあり、昔から、名僧、国師と云った輩が定じように入ると称して自ら食を断ち、猛火に身を焼いて自殺し、極楽行とは有難や節ではないが、お釈迦様が舌を出しているかも知れない。

「君命を万金の重きにおき、一命を鴻毛の軽きに付す」と云った歴史はくり返される。右翼の挑発を見よ。左翼の団結を見よ。「イデオロギーの為には一命を惜まず。レディを愛する為には万死を弁せず」と、案外切腹ぐらいはやり兼ねない。

最近の刑事事件は被告の罪が決定してから裁判が長びく。それが、封建時代なら、一服盛るか、腹を切らせてチョン。この次には思い切って判事が切腹の勧告でもやって見たら、差し戻し審などと面倒な事を言わずに案外喜んで死んで行くかも知れない。只、その場合は判検事が自殺幫助罪に問われなければ成らない。

「自殺賛美論」に曰く。『全て本人の欲し

ない時に生れて来たんだから、せめて、死ぬ時ぐらいいは自由な時を選ぶ可きである』とか『苦痛を味あう処に死の真備がある』と云った、マゾヒズム的な解釈の元に自殺が行われたとしたら、切腹なんかも、案外オール・ワンドフルに終るかも知れないが、ガマの油売りの口上ではないが、「指先に付けてすり込めは、如何なる傷もびたりと止る」で、なければ困る訳ではあるけれども……

地球上に生息する動物は、人類、哺乳類、鳥類等の高等動物から、アメーバ・プラクトン等の単細胞動物に致る迄、自殺をするのは一部の哺乳類と人類だけである。然も、切腹は日本人が発明して、その伝統を誇って来た純日本式自殺法なのである。武士道はすたれた。日本精神ははやらない。と、云った処で地球上に日本人が生息している限りは、切腹も時々行われるに相違ない。

そんな訳で、少しぐらい痛くっても、勇ましく、張り切って、はがらかに、適切に、これが人生の終着駅である事を忘れないでやって貰い度い。

△後記▽マゾ・サドの性格で割り出された女性並に男性の切腹死と項を改めて続篇として出したいと思っている。



足の記録と文献

〔小説と新聞記事から〕

木村 清

<カット> 美しい足指の表情

小説

「瘋癲老人日記」 (谷崎潤一郎)

足についての文献を記録に留めて置くとするならば、最近の中央公論に連載されて此の四月に完結した谷崎氏の力作を逸する事は出来まい。これは私が彼れ此れ言うよりも、新聞紙上に現われた代表的の批評を引用させて戴く事によって、此の名作の面影をお伝えする事としよう。

「名作」『瘋癲老人日記』(東京、大波小波)

この中編は谷崎最近の傑作であり、今年の小説の一収穫であろう。卯木督助という八十年代の老人の息子の嫁、蠅子にたいする思慕が主題だが、うわ気で、わがままで薄情な美女にうつつをぬかす老人のみじめなこっけいと、そこにおのずから感じられる救いが、谷崎のどの小説より鮮やかにずっしりした手応えで描かれている。蠅子の足型をとって、仏足石のようにそれを自分の墓石にきざませようとする妄想を真面目に実行にうつすあたりは、往年の名作「富美子の足」を連想させる。かつては富美子に顔をふまれながら死んで行く老人を冷然と描いた作者は：読者はこ

こに老境の狂気のある美に昇華した稀有の力技を見、老人とは成程みな瘋癲なのだ悟って、あたりを薄気味悪い気持で見回すだろう。―若い作家たちも、いま少しシャッキリした小説を書いたらどうか。

「力作に敬意」『瘋癲老人日記』(朝日、江藤淳) 昨秋以来、七回にわたって連載された谷崎氏の「瘋癲老人日記」(中央公論)が完結した。これは、数年前の話題作「鍵」と同じく、片仮名まじりの日記体で書かれ、卯木督助という七十七才になる老資産家の、息子の嫁に対する奇妙な思慕を題材にした小説である。：小説は、卯木老人が、蠅子から

あたえられる意地悪に次第に陶醉しはじめ、病苦を忘れてほとんど死の一手前まで行ってしまう展開を示す。すなわち、卯木は、蠅子の語る残酷なボクシング試合の話をきいて、手の痛みのなかに「溜ラナイ快感」がうずくのを感じ、自分の寢室の隣にある浴室でシャワーをあびている女から背中をふくように命じられ、肩先にせつぶんしようとしてしたたか平手打ちを食ったりする。だが、彼が蠅子と春久との情事を察知した素振りを示すと、彼女は一転してせつぶんを許し、女の足に対するフェティシズム（すうはい）を持つ卯木が陶醉して血圧の異常を来するような戯れかたをさせてしゃあしゃあとしている。：しばらく病苦にさいなまれていた彼が、小康を得て、京都に自分の墓石の注文に行ったとき、この老人の快楽は絶頂に達する。それは、彼が、蠅子の足をかたどった仏足石をつくり、骨になったのちまでも永ごうにこの悪女に踏みしかれていたという計画に没頭するからだ。彼は蠅子のあしうらに朱墨を塗って拓本にとろうとホテルの一室で終日大奮闘するが、そのために決定的に健康を損ね、この日記は同じ年の十一月十八日付で中断される。明らかかなことは、蠅子によって陶醉を得よう

とする卯木の行為が、そのまま文字通りの「死」を追い求めようとする行為だということである。「コノ瞬間に死ヌンデヤナイカ、今死ヌカ、今死ヌカ、ト言ウ氣ガシタコトハ事実デアル。：サウ思ヒナガラ、彼女の足ヲシヤブルコトハ一向に止メナカッタ。止メラレナカッタ。止メヨウト思ヘバ思フホド、マヒスマス氣狂ノヤウニナツテシヤブッタ。死ヌ、死ヌ、ト思ヒナガラシヤブッタ。恐怖ト、興奮ト、快感トガ、代ル代ル胸ニ突キ上ゲタ。」この一節に全編の眼目があることはいうをまたない。：読者は、「瘋癲老人」卯木督助に、老いたる「痴人の愛」の主人公河合譲治を見るかも知れない。しかし、さらにそのむこうには「富美子の足」の主人公がおり、もっとむこうには「悪魔」の佐伯がいる。

「老人芸術」の面白さ『瘋癲老人日記』

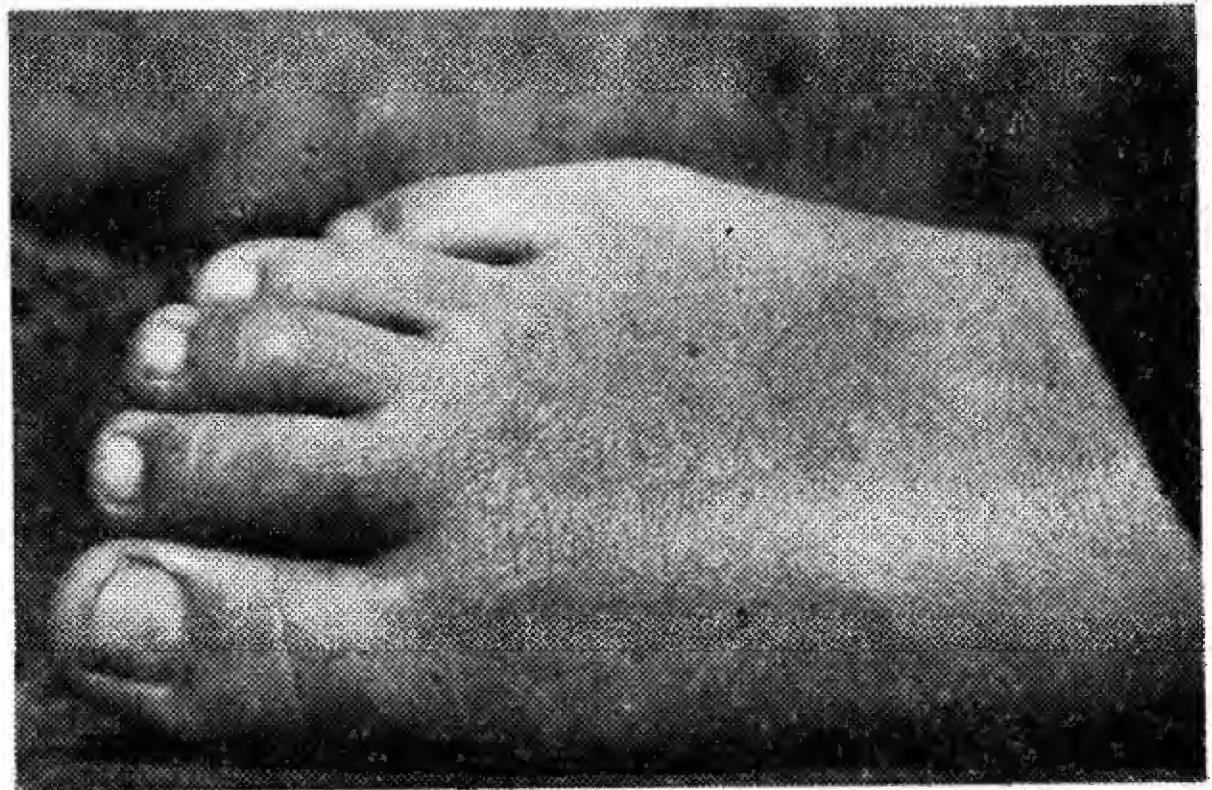
（毎日、平野謙） 一種の秘境もののおもしろさがある。秘境ものという評語のなかには、自分はまだ辺境にはいないという安心感と、しかし、すべての虚飾をとりはらえば、彼我の差いずくにかある、という予感なり不安感なりがそこにこめられているかと思う。単に珍奇なものをそのものとして傍観的に賞する気持も人間にはあるが、その珍奇なもの

が本質的には自己と相似形だと悟ったとき、それはすでに単純な珍奇さをこえている。：日記は、丹念な構成と描写がつかさねられていて、まさに秘境ものの名にそむかない。平俗な老人という既成概念を破るにたるその的確な活写ぶりは、たとえば「彼女ニ顔ヲ刺ツテ貫ツタラ、彼女ノアノ鼻ノ孔ノ奥マデヨク見エルダラウナ、薄イ鼻ノ肉ガ紅ク透キ徹ッテ見エタリスルノハ悪クナイナト、ソナコトモ考ヘタ」というなにげない一節にも明らかだろう。この作者のあくことを知らぬ芸熱心には脱帽せざるを得ない。現代作家のうちだれがこれだけ克明に自分の芸をみがきつけてきた人がいるだろう。しかし、最後に、主人公が女主人公の足を拓本にとり、それを墓がわりに石屋に仏足石のように刻ませたいというしめくりのフェティシズムの描写にいたって、私はついてゆきかねた。「彼女？ 自分の足をモデルニシタ仏足石の存在ヲ考ヘタダケデ、ソノ石ノ下の骨ガ泣クノヲ聞ク。泣キナガラ予ハ、痛イ、痛イ、ト叫ビ、痛イケレドモ楽シイ、コノ上ナク楽シイ、生キテイタ時ヨリ遙カニ楽シイ」ト叫ビ、モット踏ンデクレ、モット踏ンデクレ」と叫ブ」というような二人の死後の妄想など

は、私には人間性の本質をえぐるものというよりは、むしろ偏奇な傾情としか思えぬのである。これが「富美子の足」以来のこの作者独特のフェティシズムの発現であり、今日もなおそれを持続しうる情熱には敬意を払いながら、これでは単に珍奇な辺境ものに墮するおそれが……。

「的確無比」な言葉、段ちがいの芸術作品
『瘋癲老人日記』(東京、本多秋五)

私はこの種の好色専門の小説が苦手だから、できることなら敬遠したいのだが、それは今月はゆるされない。今月第一等の作品といたくらいではなく、他の小説と比べると、大人と子ども、玄人と素人、横綱と取的ほどにもちがう、段ちがいの芸術作品だからである。…文明発達の結果、人間は一日平均二時間とはたらけがいい社会が実現したとした場合、人々は哲学的冥想にふけったり、美的洗練に心を傾けたり、静かに宇宙プランを練ったりばかりはしていまい。現在以上に雷族が横行し、離婚、乱婚、墮胎、父なし子の始末に手を焼くことにもなる。そういう人間性情の、厄介ではあるが楽しみもまた深い、どうしようもない一面を、これは抽出拡大してみせたものといえる。物質的・心理的束縛を



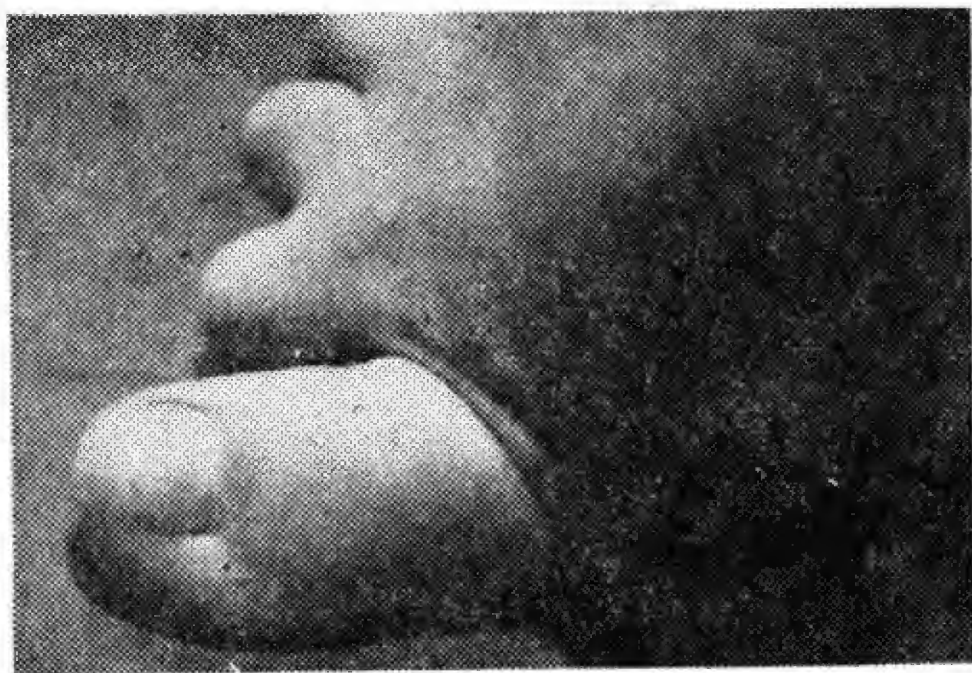
投げ出された日本の上流婦人の足 (生活苦のあとがない)

には所詮別座敷の出来事だ、と感じる人の根拠がある。…それにしても、材料をすみずみまで完全に、わが掌中のものとし、的確無比の言葉をおいて、いささかも哀えのあとをみせていないのは驚嘆の外はない。大波小波子のいい草ではないが、若者どもも何をしているのか、と他人事ならずかえりみられる。

「海の百万石」 (舟橋聖一)

丑助が、なぜおきねを括った捕縄を解いたかという、やがておきねが水死体となって、どこかの浜辺へうち上げられたとき、捕縄があつては、証拠が残るのを恐れたからである。打ちどころが悪かったと見え、おきねは依然、失神したまま。沖は、静かで、僅かなうねりがあればあるというだけである。殆んど船は動かない。片割れ月が、キラキラ、銀波に溶けている。丑助は、このまま、おきねを海中へ投ずるのが惜しくなった。然し、生け戻して、くどいて見ても銭五の愛を受けたほどの女だから、とても下っ引風情の云うことをきく筈もない。やっぱり、殺す外はないと思った。丑助は、舷に立って、まわりの

一切とり払って、死ななきや治らぬ人間性情の一面を純粹培養してみせた作品といえる。しかし、性愛の本能が人間のすべてではなく、人間性情にはまた別の面もある。そこに、このような作品はいくら傑作であっても、おれ



美しい足指の表情 (その二)

様子をうかがった。夜深かだが、若し、夜釣の船でも出ていて、気取られたら、すべての苦心は水の泡である。が、海上には、小舟の影もないし、一望千里の海岸にも、灯影一つ見えなかった。丑助は、船底にぐったり横になっっている女に近寄り、その懐ろへ手を入れた。柔くあたたかい乳房の感触が、瞬間、丑助を恍惚とさせた。「畜生！」彼は女の裾のほうへ目を遣った。女は白い素足である。足

の爪が、貝殻のように美しい。「畜生！畜生！」と、丑助はくりかえした。然しいつまでグズグズはしていられないので、とうとう、思いきって、女の胴体を引き上げると、舷からズルズルと、水の中へ突っこんだ。あまり水音を立てないように気遣いながら、頭のほうから、逆さまに、押した。それでも、ザブンザブンと水がゆれ、船が、左舷のほうへ傾いた。美しい爪のある素足が、最後に消えた。(挿絵、岩田専太郎)

新聞記事

次に御紹介するのは新聞記事からで、一々紙名と日付を挙げる程のこともないと思うので省略するが、何れも都下の代表紙から。

「テレビ界・なくて七癖、ぜったいハダシ」なくて七クセ、人にはさまざまなクセがある。ハダシでないと調子が出ない、というクセは歌手に多い。歌を歌うとき素足でスタジオに立つわけ。安定感があって、ノドが使いやすい状態になるというのだ。一番極端なのは江利チエミ。ラジオの場合は絶対素足。テレビでも、たいていは歌をあらかじめ録音(音とり)し本番では口をパクパクさせるだけだから、音とりのときはやっぱり素足だ。

水原弘以下井上ひろし、佐川ミツオ、新人の松島アキラといったところも、靴をはいていて調子が悪いとサツと素足になる。もうすぐママさんになる雪村いづみもかつてはそうだったが、アメリカのNBCのスタジオでは靴をはいたまま歌って自信をつけてからは素足にならない。「帰ってみたら、愛ちゃん(朝比奈愛子)が素足になってるのよ」と笑っていた。

「はだしの王女アレクサンドラ姫」 昨年来朝されたアレクサンドラ姫はヨーロッパでもっとも魅力あるプリンセスのひとりといわれている。「オフ・ザ・ベック・プリンセス」(既製の王女)という愛称もあるベスト・ドレッシングぶり、先般の御旅行では七十五着の衣裳を準備された由。その姫についての話し。―先頃訪日して、気品のある美しさでブームを呼んだ英国のアレクサンドラ王女は、日本からの帰途ビルマを訪問されたが、「郷に入れば郷に従え」とばかり、寺院を訪れた時、少しのためらいもなく、素足になって見物され、ビルマの人々を大いに喜ばせた。(写真入り、AP共同)此の報道に少し説明を加えると、ビルマではパコダ(寺院)にお参りする時は、どんな高貴な人でも

ハダシ（素足）で上らなければならないことになって居る。処が嘗て某国の外交官夫人がハダシになることを拒んだため、ビルマ人を怒らせて、大問題になったことがあった。

「艶な引回し姿を歌われて、増上寺に眠る毒婦白木屋お駒」 たまりかねたお駒はとうとう又四郎を殺す気になり、或晩ポンチが鼻の下を長くして寝込んでいるところを短刀で斬りつける。手もと狂って飛上ったポンチに――○番に連絡され、お駒はとうとうお縄頂戴、夫殺し未遂で市中引回しの上、鈴ヶ森でチョキンとやられた。この日お駒は、黄八丈の大格子縞袷で栗毛の裸馬に横座りに乗せられたが、赤い蹴出しから白いムッチリした素足をのぞかせたその姿はあまりにも艶で、見た者の中には三日三晩ふるえの止らぬ者も続出。惜しい、モックタイないの声は沿道にあふれ、永く毒婦白木屋お駒の名は伝わった。

「季節のおしゃれ、素足」 素足にサンダル姿もふえて、暑さも本格的。足もとの美しい人こそ本当の美人といいますが、その魅力について、日本画の伊東深水氏と風俗評論家の丸尾長顕氏に、また美しい足で売り出したテレビ・タレントの松任谷国子と美容家の名和好子さんに手入れや心得を聞いてみました。

伊東深水氏の
話 谷崎潤一郎

さんの小説に、
深川あたりの黒
べいの料亭の前
にカゴが止ま
り、中から黒塗
りのコマゲタを
はいた女が現わ
れる。その素足
の指をちらりと
見た彫刻師が、
こんなきれいな
足の指を持った
女なら、全身のハダも必ず美しいにちがいない、と思うところがあります。また、私の「指」という絵は、下町の夏の夕方、明石の着物を着たまるまげの女が縁台に腰かけて行水をすませたあとの自分の足の指の美しさにみとれている図です。浮世絵の歌麿や清長、春信など、みんなかわいくてきれいな女の素足を描いています。昔の日本の女は、足というより指がきれいでした。最近では女の人も体の発達がよく、全身がすうりと伸びやかで、ももやすねの形は大変よくなっていますが、指先



（ビーチサンダルをはいた外人婦人の足）

はハイヒールでいためられているのではないですか？ 女の素足の美しさをほめたたたえものは、絵画にも文学にもたくさんありますが、なんといってもいちばん美しく表現したものは仏像の足でしょうね。

丸尾長顕氏の話 女の素足は男にとって大変魅力のあるもの。それは海岸などで見る場合は健康的な美しさですが、部屋の中などでちらりと見える素足は非常に情感のあるものです。つまり、常日ごろかくされている場合の素足にことさら魅力を感じます。近ごろの



(日本のぞうりをはいたフランス婦人の足指)

女性はその美しさは足の形や歩き方ばかりでなく、かわいがられるタイプから一緒に人生を歩くにふさわしいタイプがよいとされるようになっていきます。でも、どんなにたくましいのがよいといっても、汚れた足やツメガ

変化してはげんめつ。何より、せっかくの素足でも毛深いとがっかりですね。

松任谷国子の話 一年中素足で通していま

すが、クツずれもできないし、冬でもハダ荒れなどになりません。クツずれはクツが足に合っていないからです。快適に歩くポーズが大切ですから、クシを選ぶときは色やデザインよりも足に合っているかいいかできめます。つまり、それが足を美しく見せるコツです。それから乗り物に乗らないで歩くように心掛けています。一日に銀座を八回ぐらゐも歩くでしょうか。

名和好子さんの話 素足の手入れについては、タコ・マメのとり方、マッサージ、むだ毛の処理、ペディキュアのほか、外出の際汗やホコリで汚れやすいものです。それで、ビニール袋にぬれタオルを用意しておき、ときどきふくようにしましょう。またハダ色のタルカムパウダーを大きめのパフにたっぷりふくませたものを持ち歩きときたま足にはたととさりとっています。

「素足の季節、あなたの『足の表情』診断」 暑い季節、素足にサンダル、ショ

ートスカートの軽快スタイルは婦人の特権だが、足もとをないがしろにはおしゃれの落第生。昔から「手美人」という言葉があって、手の表情や清潔に気を配ることはよくされているが、それが足にまで行届く向きは少ない。素足の魅力的な季節に向って、足のおしゃれと衛生について美容研究家、医者のお伝えしよう。足の保護を考えるときに忘れてならないのははきもの。女の人ではパンプス型のハイヒールなど、きっちり足先を包むくつをはくと足先の運動ができないし、しめつけられるのでとかく、うっ血し、足を太くしやすい。この外極端に高いハイヒールやヒールの先のごく細いものなどは足の舟状骨(アーチ)が不自然な形になったり、また、歩くときに低いくつをはいたときと違ったところに力がいり、竹馬式の歩行になるなど、とかく問題がある。そこで、せめて、夏は足指やカカトを開放したサンダルをはくことをすすめたい。「サンダルでは町を歩けない」などという人もいるが、昔はサンダルのように開放性のはきものの方が正式の姿だったという説もある位で、また、歴史を持ち出すまでもなく、特に蒸暑い日本で一日中、くつをはきっ放しの人はむれないし、しめつけない

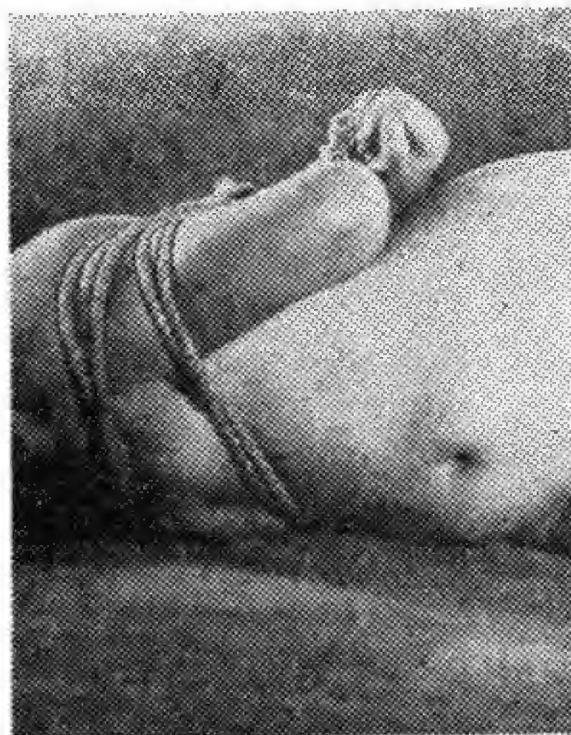
サンダルをはいたら、それこそ、パンプスなど閉塞性のくつははけなくなる。もう一つ、せっかく、素足のさわやかさが楽しめる季節なのだから、つま先のあいたサンダルをはいて、足指の表情を見せた方が、魅力的ともいえよう。

「いつも足もとを意識しましょう」 だんだん薄着になって、からだの線もくっきりと浮び出して見える季節になりました。…そして何より大切なのが足のあり方です。足だけは、どんなに意識しすぎても、よろしいようです。足こそは、あなたの女性美を倍加してくれるでしょう、という前書きで始めて、立ったポーズ、腰かけたポーズ、横座りのポーズについて、写真六葉入りで説明。

「広告写真」 これは新聞一頁大の広告写真で、砂浜に並んで投げ出した男女の足だけを大きく写したものだ。手前の女性の足は、爪先から踵迄十五センチ程ある。その足の傍には森永のチュインガム少々とビクターのトランジスターラジオがある。そして、「青春がいっぱい、夏は足もとまでやって来た。海辺は若さと音楽とおいしさでみたされる…」とある。簡潔で力強い広告といえよう。

「映画、好色一代男の広告」 これは新聞の

下半分七段抜きの大広告で各紙に出たもの。女は抱くもの、口説くもの！ 女体遍歴に命をかけた男の一生！ 男を喜ばすあらゆる技巧を身につけた夕霧の巧みな愛の口説きに、遂に世之助は全財産を投げ出して云々とし



て、写真では市川雷蔵の目の前にすらりと投げ出された若尾文子の素足に、雷蔵が必死になって取りすがっている姿。尚、新聞によると此の広告と並んで、映画「続こつまなんきん」の広告があり、此の方は椅子に腰かけて

偏執漫筆

臍印礼讃

須藤 律夫

「手形」の前身とも言う可きであろう。

最近、或る印童学の本を読み涉っていたら、往時、武田信玄や、織田信長の用いていた印鑑が紹介されていた。両者共印風と言うか、豊かな風雅と風格とを漂わし、昔の英雄智将が偲ばれて興味深いものがあった。

印鑑の出来る以前は手形と言って、掌に墨を塗り、文書に捺して後日の証とした。之は謂わば今日金融市場に流通している

ところで、この手形を更に縮小した「指紋印」を、犯罪防止の見地から予ねて提唱している人がある。考案者のH氏（東京都新宿、柏木二丁目）は、本来日本伝統の木版画家で、何しろ十四歳の時から四十八年間、この道一筋に生きて来たと言うベテランである。

氏の謂う指紋印とは丸形、黄揚^{つけ}の印材で、

投げ出した嵯峨三智子の素足を藤山寛美が舐めている写真である。「二代男」は大映、「こつまなんきん」は松竹だから、偶然だろうが期せずして若尾と嵯峨の「素足コンクール」になったのは面白い。

「足の裏に入れずみ、イギリスの十代に流行」 ティーンエージャーの始まる流行はいつもおとなの意表をつく。イギリスの中部地方ではこのごろティーンエージャーの間で、足の裏に入れずみをするのが大流行している。(RP)

「女事務員靴下を脱がさる」 これは、或る日の夜、会社勤めの二十二才のBGが帰宅の途中路上で怪漢に襲われて、靴下を脱がされた、と言う記事であるが、奇妙な記事である。靴下を脱がされたからには先ず靴を脱がされ、それから靴下を脱がされたのだろうが、怪漢は何んのつもりでこんな事をしたのか。極く普通に考えれば、脱がされたのは靴下ではなく別のものだが、新聞の体面と被害者への心遣いから象徴的に靴下としたのだろう、と誰でも思うだろう。それにしても、其のBG嬢の勤務先や住所や姓名までちゃんと載っていた。而も此の記事を載せた新聞は二三流紙でも桃色紙でもないれっきとした大新聞。

印面には指紋その儘を彫り込み、上下適當の位置に苗字を彫るもの、印材は黄楊と限った事はないし、又若し実印にする時は上下左右ほどくの所に氏名を彫り込むものである。

之は絶対に印鑑の偽造は防げなし、日常使っていれば登録したと同じ事で、この点犯罪防止に役立つと言うのが氏の意見である。(特許出願中とか)

○

扱、筆者は「百尺の竿頭、更に一步を進め」いっそ之を臍紋(略して臍印と言う)にしてはどうかと思う。理由は簡単、指紋と異り臍は単一である。未だ曾ってお臍の二つある人にお目にかかった事がない。又お臍が玉の緒を剪断した跡である限り、捺印に際しては誰しもたらちねの母を偲ぶ事であろう、そして捺印も慎重にならざるを得ない。これは諸事手違いを防ぐ基でもあるのだ。

第三の理由は個人識別に役立つ事である。これを登録して置けば、万一どんな事故に遭遇しても「身許不明」は先ず免れる事であろう。

○

数年前の五月、東京ゆうも倶楽部の肝入りで「臍の緒神社」が建立された時、芸能人、知名人の臍紋を採取して奉納する案が出たのだが、実現を見なかった事は愛惜の極みである。

我々が今日、武田信玄や織田信長の印影を見て当時を偲び、津々たる興味を抱くのと同じように、現在知名人の臍紋も、後世にはユーモアを撒き散らす事であろう。

○

先日、或るバーでこの話をしたら、同席していたホステスの四、五人は少くとも賛成して呉れた。

「でも、臍紋って何うやって採るの?」

「それはゴマを採るより簡単だよ。お臍の中に口紅を塗ってさ、紙を強く押しつければいいんだ。考えても見給え、山本富士子の臍紋なんて、キス、マークを見るより愉快じゃないか」

「でもユーモラスにしてもよ、少しHじゃないかしら」

「H? Hは当然だよ、大体がへそ印だもの」私は平然として洒落のめし、この実用珍案に就いての蘊蓄を説明していた。

<通信>

高木紀久枝様へ

プレゼント

三隅千恵子

高木紀久枝様、貴女の六月号の手記「女子寮の争い」を拝見して、飛び立つ程嬉しくなりました。昨年の私の「女学生を組み敷く」をお読みになって、お友達まで御一緒に、あられもない私の直似をして頂けるとは、思いがけない光栄ですわ。是非一度お目にかかって、貴女の御経験談もくわしくお聞きしたいし、私もお話したいことが沢山ありますのよ。

それにしても、貴女のいらっしゃる女子寮はほんとに恵まれていますのね。だって貴女お一人でなく、女同志取組み合って投げ転がしたり、馬乗りのにのしかかって組み敷いたり、随分派手なことをなさる友人が何人もいらっしゃるそうですもの、うらやましい気がしますわ。私もそんな女子寮に居るのでしたら、殆ど毎晩のように誰かを押え込んで、首の上

に跨ってやれるのにと、残念に思いますのよ。

でもとにかく、女が女を捻じ伏せて、馬乗り組み敷いた時の気持ちで、全く素敵でしょう？ 普段のもやもやした気分も、忽ち吹き飛んでしまつて、スーッと爽快になれますもの。一二度経験すれば、とても止せるものではありませんわ。私は貴女の「女子寮の争い」を拝見してあまり嬉しかったものですから、そのお礼に貴女にお見せしようと思って、絵を描いてみました。勿論つたない絵で恐縮ですけれど、御覧になって下さいませね。全部で五枚ありますが、第一図から第五図まで続きものになっています。如何でしょう？ お気に召しましたでしょうか？ 此れは何れも、貴女が同じ女子寮の絹子さんを組み敷いていらっしゃる光景を、想像し乍ら描いた絵ばかりですのよ。順に簡単に御説明して置きましょう。

うね。

第一図は、貴女が絹子さんを物の見事に捻じり倒して、上からのしかかっているところですよ。勿論チェックのブラウスを着て、押しかぶさっているのが貴女で、仰向けに転がされ、組み伏せられているのが絹子さんなのです。絹子さんはスカートがめくれ、すっきりと均整の取れた美しい素脚を、太もものあたりまでしどけなくあらわにし乍ら、しなやかな両手でやっきになって、貴女を押しのけようとしていますわね。でも貴女は容赦なく絹子さんの腕と襟とをつかんで、ぐいっと力一ぱい押え付け、うむを云わせず組み敷こうとしていらっしゃるのです。

貴女もふっくりした美しい両脚がむき出しになっていますが、此んな時にはそんなことは、とても気にしてはいられませんわ。でも

此のままでは、貴女の上半身はあまり安定してるとは云えません。やっぱり女が女を組み伏せたら、素早く馬乗りに跨るに越したことはありませんのよ。

第二図では、いよいよ貴女が絹子さんのウエストのあたりへ、どっしりと馬乗りに跨っ



ていらっしゃいます。ハイヒールのまま右脚をお立てになって、豊かなヒップをずしっと絹子さんの上に落付かせた貴女のお姿は、本当に勇ましくて魅力的です。もう此うなれば貴女もひと安心ですわね。何故って女の腕力は高が知れていますし、絹子さんだって一度馬乗りに組み敷かれたら、すり抜けたり跳ね返したりは、とても出来ることではありませんわ。でも貴女はいいお氣持でしょう？ だって女は自転車に乗ってさえ一種の快感を覚えるそうですもの、まして生きてピチピチしている同性の上に跨って、いい氣持がしなかったら、余程どうかしていますわね。

第三図は、絹子さんのウエストの上に馬乗りにお跨りになった貴女が、少しヒップをずらせて前の方ににじり上り、絹子さんの柔い二の腕のあたりを、丸い膝頭でぐいっと踏み敷いていらっしやる場面ですわ。貴女の大きいヒップは、ふっくりと隆起した絹子さんのバストのあたりへ乗り上げています。絹子さんはきつと苦しいでしょう、顔をのけぞらせて眉をしかめ唇を少し開いて、悲痛な表情をしていますわ。



女は馬乗りに跨られると、きまってくやしがるので、それも乗る個所によって可成りの相違があるのでしょう。つまり身体の上の部分に乘られる程、ひどい屈辱を感じてくやしいらしいのです。ですから一たん馬乗りに跨ったら、ヒップをずり上らせるのは、とっても効果があつていい方法ですよ。だっ

に乗っている方は、相手がくやしければくやしがる程、云い様のない優越を感じていい気持ちがありますが、貴女だってきっとそうなのでしよう。

第四図で遂に貴女の完全な押え込みがきまりました。貴女は絹子さんの細くくびれた喉首の真上に、どしっとまともにお跨りになって、真赤に上氣した顔をあらわな太ももの間



に、ギュッととはさみ込んでいらっしやいます。絹子さんは、貴女のむっちりした内股の間から、やっと顔だけをのぞかせたあわれな格好で、

『あっ！ いやよ！ 苦しいわッ！ かんにんして！』

と叫んでいるみたいですわ。でも貴女はそんなことには耳をおかしにならず、全身の重味でじりじりっと絹子さんの喉をお絞めになるのですから、絹子さんは上半身まるではりつけにでもされた様に、ぴったり押え込まれて身じろぎ一つ出来ませんわね。ただすんなりした両脚だけが、真白い太ももの付け根までむき出しになって、ぴちぴちと中に躍るばかりですわ。

それにしても、押え込まれた絹子さんがじたばたすると、貴女は素敵なお気持ちでしょう？

私の経験では此の場合、パンティーはなるべく薄手のものを用いた方が、感触の点でいい様ですわ。ですから、私は普段から夏冬を通じて、態とすけて見える様な薄手の、ナイロン製を何時でも着用しています。勿論スタートは前以てじゃまにならないように、うんとたくし上げるか、パツとひろげるかし

て置かなくてははいけませんわね。貴女も一度おためしになって下さいませ。

第五図は如何でしょう？ あまりひど過ぎますか知ら？ 此れは貴女に押え込まれて、じたばた暴れていた絹子さんが、遂に力尽きてぐったりなった所を、もう一步にじり上った貴女が、絹子さんの可愛らしい顔の上に、ぺったりヒップをお乗せになって、馬乗りに



お跨りになった場面ですわ。絹子さんは、眼も鼻も唇も殆ど顔全体が、パンティー一枚の貴女のヒップにぴったり隙間もなく敷きつぶされて、額から上だけがやっと貴女の股の間からのぞいています。こうなれば絹子さんは、息は出来ず、声は出せず、グーの音も出ませんわね。

貴女は此の通りになさったことは、未だ一度もありませんの？ あまり残酷すぎて悪い様な気がなさるのでしょうか、高い所から眼をつぶって飛び降りる様なお気持ちで、一度お試みになっては如何でしょう。貴女だっ

まさ川柳自註

横 乗 り

西 田 仁

横乗りのステップを売る抜け目なさ

オートバイの相乗りが大流行だが、この場合の女性のタブーにつけ込んで、巾広の後部座席用ステップを売り出すとは、まさに小憎らしいばかりの商法だ。

ふん縛れなどと才女が書きたまい

る程じゃないかしら？ でも此んなことをなさったら、貴女が絹子さんに怨まれるかも知れませんわね。きっと絹子さんは

『うう……うう』

とかすかな呻き声を上げて、息も絶えだえに降参の合図をするでしょう。此れで貴女は完全に絹子さんを屈服させたことになりますわ。断然素敵ですわね。

本当にはしたくない絵ばかりで御免なさい。でも貴女が絹子さんを組み敷いていらっしゃる光景を色々想像していますと、何んなに美しいかしらと思えて、とうとう此んな絵が出来てしまいました。

所で極く最近、私は私の部屋を少し手を入

文壇一とか二とかいう美しい閨秀作家。

証拠歴然たる交通違反を摘発して、こういうのは今からでもふん縛れる法律を作るべきだと、某新聞紙上で赤い気エン。

女医者仁(にん)を見ずしてMを説き

付き添いのため一晩泊った病院で。宿直の女医さんの机上にK・K六月号。相手は小生と知ってか知らずか、拙作「鉄の指」についての科学的な解釈を長々と聞かれた。

れて、改造しましたのよ。つまり洋間の一方の壁を鏡ばりにしました。と云っても、そんなに大きい鏡はありませんし、或る程度の鏡を何故か隙間なくつぎ合せて、巾三メートル高さ二メートル近い鏡の壁を作りましたわ。丁度室内が二倍の広さになった様で、一寸妙な感じですよ。そして鏡の左右から、赤と青の色電球の照明をつけました。何うするのか、お分かりでしょうか？

色電球の照明をした鏡の壁の前に、誰か友人を誘って来て、捻じり倒して馬乗りに組み敷き、いやと云う程押え込んでみたいのです。そうすれば、大きい鏡に、組み敷かれてじたばたする友人も、押え込んでいる私自身の姿も、全身そっくりそのままに大きくうつりますから、さぞ素晴らしいものだと思えますわ。何んなショーよりも素敵でしょう。でも未だ実行したことは一度もありません。ただ私一人で、水着一枚になったり、短いパンティーにブラジャーだけになったりして、鏡の前で誰かを組み敷いたポーズや、馬乗りに跨った型などを自演して、ひそかに楽しんでます。その内に、私の自作自演のショーが成功しましたら、お知らせ致しますよう。

お元気でさようなら。三隅千恵子より

長篇 S M 小説

「宇宙のどこかで」

佐 治 麻 造

——或る無期懲役囚の告白から——

S 八〇二号の述懐

感化所に連れ戻された彼は、そのまま地下の懲戒室の天井に吊るされた。肉に喰い込み、骨を締めつける捕縄の苦しさに、やがて口から泡を吹いて、失神の一步手前で呻き苦しむ彼は、下半身に浴びせられた鞭の雨に正氣づいて悲鳴を洩した。床に降ろされて暫く休まされた後、ハイポンを射たれて再び吊上げられた。足先が床から離れて捕縄がグッと身を締めつけ、再び肩が抜けそうに痛んだ。

「明日の朝迄そうしてるのよ。ひ弱い囚人なら死んでしまうこともあるけど、お前は先ず大丈夫ね。」

朝も大分おそくなって漸く降ろされた彼は、最早眼も見えず、体はビクリとも動かすことが出来なかったが、ハイポンのために意識

ははっきりとして居た。ホースで冷水を注ぎかけられ、無理矢理に所長室に引摺って行かれた。捕縄は未だ解いて貰えず、所長室に入る前に鉄の足枷を両足に掛けられた。

「正座おし。」

縄尻を短く持たれて、ふらつくと上体を必死に起こし、両眼に哀願を湛えて仰ぐ彼に、婦人の所長は眼鏡を光らせて冷く言渡した。

「二十四号。お前は、今日から級外囚だよ。理由は身に覚えがあるだろ。なお社会の方、それも未成年の女性に不埒な行為をした上に、逃走しようとした罪に対する刑罰は、いずれ決定があるからそのつもりで。もう半年程でお前も成年に達するわね。その時、言い渡すことになるだろうよ。成年に達したら直ちに監獄に送るからね。お前みたいな者は感化所じや駄目だからね。」

「お、お、お慈悲でございます。これから死んだ気でやらせて頂きますから、少しでも刑を軽くして下さいまし……」

「お黙り。口を利いていいと誰が云ったの？」

荒々しく嵌り口具が嵌められ、ビシビシ鞭が鳴って彼は引き摺り出された廊下で喚き泣いた。

——それからと云うものは、全くひどいもんさ。と云っても、考えて見りゃまあ監獄並みだった訳だが。兩足を重い鎖で繋がれ放しはいいとして、飯を食う時以外は嵌り口具を外して呉れないし、手錠のままで労役させられて、監房にブチ込まれる時にや捕縄でギリギリ縛り上げた上、四角な木の首枷をガタンと嵌めてしまいやがるんだ。そして、毎朝鞭を二十宛当てることに決められて居たし、二、三回尻に焼爔も当てられたしなあ。本当に辛かったぜ。——

大きな四角い首枷のため、碌々横になることも出来ず、独房の床の上で後手の身を呻吟する彼は、やがて言い渡される刑の重さを感じて涙を流した。約半年の後、言い渡された刑は、限度一杯に確定した十年と、そして更に五年の懲役であった。

「だから、お前はね、これから三十一才迄は未だ牢に繋がれて過す訳よ。二、三日したら、ここはお払い箱にして監獄に送ってやるからね。早く鼻環をつけて貰って、股にも錠を嵌めて貰って、本式の刑を受けた方がお前の為だわ。」

これから更に十年の月日を、今度は監獄で過さねばならないかと思うと、其夜は彼は独房の床をしとど涙で濡した。

其の翌日、彼が喘ぎ乍ら苦役に服して居ると、三吉少年とお美代が、お松さんに連れて貰ってやって来た。多勢の少年囚の中で、唯一人、特別にきびしく施錠された我が身の浅間しさを考えて、彼は

恥かしさとみじめさに堪え兼ねた。

「眼をこすったりしていいと誰が云ったの？ シャンと体を起してキリキリ働かなきゃ駄目よ。そらッ」

脇腹に鳴った鞭の痛さに彼は嵌り口具の中で呻いた。

「ホラ、美代ちゃん、ごらんよ。そこに居るでしょ。彼奴よ。今鞭で打たれた囚人よ。嵌り口具で締められて顔がゆがんじゃってるけど……。番号が打ってあるでしょ。」

「あ、あれね。手も足も括られたまま働かされてるのねえ。鞭の痕が凄くついて……」

「美代ちゃん、いい気味でしょ。彼奴、監獄へ入れられるのよ。これから十年間程。」

「まあ」

少女は黒い眼を大きく見開いて、不自由な手足で切々と苦役の脂汗を流す彼の哀れな姿を眺めて溜息をついた。

「私、こんなとこ、可哀想で嫌よ。帰りましようよ。ねえ……」

立ち去る少女の後姿を横眼で見入った彼の両眼からは、恨み等は微塵も混らぬ涙がポロポロとこぼれた。

拘置所送り

——それから二日程して、拘置所に送られたよ。汽車に乗ったけど、床に坐らされて、少しでも身動きすると煙草の火を肌当てやがったなあ。——

鼻環がつけられ、革の首環も革褌も取り上げられて、鋼鉄の首環と下腹部の錠がガッシリと嵌め込まれ、やがて彼は監獄へ送られた。

——十年は長かったなあ。とうとう三級囚にはして呉れなかった

よ。幼馴染の女の子が看守になって来やがってさ、ほんとに情けなかったぜ。全く無慈悲なものさね、まるで虫ケラ同然に扱いやがるんだ。お前も捨てた女に使役されたり、奴隷としてこき使われたりしてさ、さぞ口惜しかったろうなあ。どんなひどい扱いをされても、嫌な眼付きも出来ないんだからな、哀れなものさね。赤の他人なら諦めもつくけど、一緒に遊んだりした女の子に番号で呼ばれて鼻繩を引張られて、そして鞭打たれちゃあ、お礼を云わなきゃならねえなんて、全く歯ごしらしたぜ。――

漸く刑期が満了した彼は、年下の婦人職員の足許に正座して長いこと脂を絞られて説教を食った末、忌わしい施錠を解き外されて放り出された。誰も迎えに来て呉れる者としてなく、逮捕された時、身につけて居た物は返しては呉れたが、着る術もなく、途方に暮れた彼は、幼馴染の婦人看守が恵んで呉れたよれよれの古着を身にまとい、教えられた免囚輔導協会を訪れた。官費で受刑の痕を整形して貰い、若干の金を恵んで貰った彼は、紹介された工場の雑役工になった。

――よく考えりや、そうでもないんだが、ひがんでたんだなあ、皆が白い眼で見る様な気がするし、賃金は安いしさ。毎日々々面白くなくて酒の味も覚ええし、女も知ったよ。そして勤め先を転々する中にととう悪い奴等と知り合って、泥沼に落ち込んだ訳さ――彼が身を投じた一味は、密造ハススの販売組織であった。ハスス飲料は国家の専売で高価であり、安く造れる密造ハススの商売は莫大な利益を生ずるもので、此の禁制の闇事業に携わる組織は、世界各国に根強くはびこって居た。ただ、ハススの精製技術には秘密があった。密造ハススは健康に悪影響を及ぼし、耽溺すると廃人同様

になるので、各国の政府は、国家財政と国民厚生の見地から、きびしい取締りの網を密造ハススに対して張って居る訳である。

元来頑健な彼の肉体は、受刑生活で痛められた傷もすっかり恢復し、彼は其の体力と腕力と前歴、そして生来の度性骨とでメキメキ頭角を現わし、兄貴々と奉られる様になるのに二年とかからなかった。お美代によく似たキャバレーの女給を情婦にして彼は楽しかった。

――しかし、とうとう、えらいヘマをやってしまったんだ。――

情婦の友人と称する若く美しい婦人と知り合い、巧みな誘導に引掛った彼は、せがまれるまま、持ち合せて居た密造ハススの少量を渡してしまったのであった。情婦と一緒に三人で、何回か映画を見たり飯を食ったり後の或日、或る喫茶店での事である。包みを受け取った婦人は眼をキラリと光らせた様だったが、婉然と笑って和服の裾を翻えして洗面所に立った。

「あんた、大丈夫？」

傍らに寄った彼の情婦は、ルージュを塗り乍ら心配そうだった。

「大丈夫だよ。お前の友達だろう？」

少し不安になって軽率な行為を悔んだ彼は、婦人が洗面所から出て来たのを見て腰を浮かせた。婦人はハッとした様子で外を覗いた様だったが、決然とした表情で唇を結んで足早に彼に近寄った。電着がタンゴの柔い調べを低く流して居た。いっどこから取出したか、婦人の手に持ったものがキラリとしたかと思つた途端、彼の両手首には同時にバシッと音を立てて手錠の環が喰い込んで居た。

「密造ハスス所持の廉で逮捕します。」

婦人は美しい頬を綻ばせて口早に云った。

「あつ、あんたもよッ。重要参考人として署迄来てよ。」

しかし彼の情婦は素早く逃れて、戸外へ走り去った。

「ま、いいわ。外にも張り込んで思うんだけど……」

婦人は低く呟いて、彼の右腕を抱えた。

「さ、おいで……」

店内の人々が集まって来て好奇の眼を光らされた。長い年月を鉄鎖に繋がれて過した彼は、今、両手首に嵌められた手錠の硬く冷い感触に、あの恐ろしい受刑生活をひしひしと思い浮べて、心も打ちひしがれてしまい、抵抗する気等は少しも起らなかった。腕を取られてよろよろと店を出た彼は、ハッと気を取り直し、こんな婦人刑事の一人位なら、手錠を嵌められて居ても突き飛ばして逃げれると考えて、隙を覗いて眼を光らせた。しかし其の途端、更に手錠を押えて背広の上から腰縄を打たれ、両膝もズボンの上からゆるく括られてしまった彼は、絶望してガックリとうなだれて観念してしまった。

「矢張り、誰も張込んで居ないのね。全く仕方ない連中だこと。お前、車で行くの？ それとも歩いて行くかい？」

「車に乗せて下さいよ。金は払いますよ。」

「ホホホホ」

美しい婦人刑事は笑ってタクシーを呼び止めた。シートの上で、素早く彼の身体検査をした彼女は、長いホルダーで煙草を吸いつけて、おいしそうにくゆらせ初めた。

「びっくりしただろ。ホホホホ。とうとう網に掛ったわね。」

「お願いですから、一服吸わせて下さいよ。」

「フフフ、我慢おしよ。その恰好じや吸い難いわよ。」

彼は眼を落して、両手首の手錠を見て悲しく思った。

「しよげてるのね。悲しくなったの？」

「え、ええ。ここで又……」

「仕方ないじゃないの。洗いざらい泥を吐いて、少し辛い目に会っておいでよ。甘い汁をさんざん吸ってたんだから……」

車はビル街の間の広い道を滑って居た。もう五分もしたら警視庁に着いて、そして首に鎖を札をつけられるんだな、と彼が悲しく考えて居ると、ビルの横合から突然大型トラックが突込んで来た。急ブレーキも間に合わず、タクシーはトラックの横腹に衝突し、婦人刑事と彼は、前部シートの背に体を打ちつけてクラクラとした。トラックから飛び降りる仲間の男達を見た彼は矢庭に婦人刑事に頭突きを食わせておいて、不自由な両手で辛うじて扉を開いて転がり出た。帯の上に盛上った胸元がはだけかけ、半ば氣を失った婦人刑事は、手から滑り脱ける縄尻を弱々しく追ったが、そのまま車の床に崩折れた。転げ落ちたハンドバッグから試薬の小さな瓶がこぼれ出た。彼を拾い上げたトラックは狂った様にエンジンを唸らせて衝突現場の騒ぎを尻目に雲を霞と走り去ったのであった。

密売所の組織へ

逃走した彼に対する当局の追及はきびしかった。整形手術で容貌を変えた彼は、ボスの計いで西の方の遠い都会に高飛びした。そして、貿易港を以て聞えた其の大会の暗黒街に潜入して、新しいボスの下の組織に入った。囹りの婦人刑事を紹介してしまった彼の情婦は、組織の庇護を受ける事が出来ず暫くして逮捕された。その事を知った彼の胸は痛み、次々と暗黒街の女達と接しはしたが定った情婦を持つとはしなかった。度々の縄張り争い等で男を上げた彼

は、ぐんぐん昇格し、二年の後には中枢部の末席に加えられる様になり、ボスが大姐御である事も知る様になった。豊富な癖に、見た眼はスラリとした姐御は勿論鉄火肌の女で、黒いイブニングがよく似合った。ボリューム豊かな美貌に物云わせた姐御は、次から次へと部下の男達を異性としても操った。彼も命じられるままにお相手を勤めて居たが、若く逞ましい男振りの上に定った女とて居ない彼に、姐御の方が参ってしまい、情夫になる様に云い寄ったのであった。

「ウンと云いなさいよ。なんなら今すぐと云う訳にも行かないけど、縄張りを譲ってもいいと迄考えてるのよ。それとも好きな女でも居るの？」

「そ、そう云う訳じゃありませんがね。ま、考えさせて下さいよ。」

「考えるのはいいけどね。私はせっかちな方だから、早く決心しておくれ。所で返事を待つ間、毎晩お前さんを指名するからね。フフ」

「そ、そんな殺生な。いくら私が丈夫だからって、参ってしまいまさあ。」

彼がお美代に会ったのは、それから三、四日後のことであった。肩で風を切って入った地下の酒場で、美しく成熟したお美代のイブニング姿を見た時の驚きと喜びに彼の胸は高鳴った。最早、彼女は手を延ばせば届く所に居るのだ。自分の容貌が変わって居る事を危うく思い出した彼は、逸る心を押えて数日の間、毎夜入り浸っているのを探った。彼女の話に依れば、都会の男と結婚したが数年にして別れ、其後は方々の酒場や、キャバレーを転々としたと云う事であった。指折り数えて見れば彼女も既に三十に近い筈である。出

会って一週間程の後、彼女を映画に誘った彼は、静かな喫茶店で想いを打ち明け、そして昔の出来事をも話した。

「そうだったの。声に聞覚えがあるし、前に会った事がある様な気がぼんやりとはして居たのよ。嬉しいわ。こんなになっちゃった私でもよかったら……」

彼は天にも昇る心地で、

「そ、そうですか。私だってこんな仕事してるんですものね。」

「アラ、どんなお仕事？」

彼女の黒い大きな眼がキラと光った様だったが、彼は気付かなかった。

「……う、……まあ、その中に話しますよ。余り大きな声じゃ云えないからね。」

「私、薄々は感付いてるのよ。私だってこんな商売してから長いもの。どうせ碌な事じゃないでしょうけど、いいのよ。けど、もう少し考えさせてね。」

それから五、六日経って、彼女は遂に彼を自分のアパートの室に泊めた。彼女の体は意外にも硬かったが、夢中になってしまっている彼は、不思議に思うよりむしろ感激した。鉄火肌の姐御はあっさり二人を許して呉れた。彼女が時々、何かを思い詰める様子をるのが気に掛ったが、ともかく日夜彼女と暮せる彼は楽しかった。仕事のこと、自分の知って居る事は皆彼女に話したが、余り聞きたくない素振りをするので、却って男としての見栄もあって組織の秘密事項までも喋ってしまったのは、後でしまったと考えることが度々あった。

「そんなに心配して口止めしなくてもいいわよ。誰にも喋りやしな

いから。それよりもねえ、実は私の兄なだけど……知ってるでしょ。三吉兄さんよ。十日程したら監獄から出て来るのよ。面倒見てやって呉れないこと？ え、何をしたのかって？ 傷害罪なの。喧嘩の上のことだったから、八年だったわ。ね、お願い。あんたも恨みがあるだろうけどさ、私に免じて何とかしてやってよ。」

姐御に頼んで調べ上げた彼の経歴には怪しい点はなかった。出獄後、直ちに巧妙に連れ帰って調べた体にも、鎖錠や鞭の痕が歴然と残って居たし、鼻環の孔もあった。

「全くひでえ扱いをしやがるもんだ。あんたにも昔はいろいろと辛く当たったけど、勘弁して呉れよ。恩返しするぜ。」

「昔のことは、もういいから、しっかりやんな。それからな、云々とけど、ここじゃ俺は頭株なんだ。口の利き方に気をつけろよ。いいな。」

「ヘイ。分りやした。」

彼は苦味走った頗る付きの男前で、日ならずして姐御の眼に止まり、寵愛は夜毎に激しくなっていく、のぼせ上った姐御は参謀株達の忠言も聞き流して、大切な密談の席にも彼を待たせたままの事が多くなった。三吉も中々腕節が強く、頭も切れたので、実力の世界に於いては忽ち頭角を現わして、兄貴々と奉られる様になり、姐御の秘書兼情夫の様な恰好で、どんな所へも公然と出る様になるには三カ月とかからなかった。彼が初めてお美代を知った春の一夜から、夏も過ぎ秋となった或る日の午後、地下の酒場で大きな取引が行われることになった。断然他を圧倒して居る姐御の組織に於いても、初まって以来と云われる位の大量で、此の買付けには彼も日夜奔走した大取引であった。密造王と称される大物が大陸から客とし

て、傘下の派遣員の元締や頭株の部下達と共に、やって来る予定であった。船から巧みに陸揚げした現場はトランク二個に詰められて彼等が持ってきて来るし、こちらの方は準備した現金を酒場のカウンターの下に積み上げた。彼の情婦お美代も接待掛りを引受けて、朝から忙しく立働いて居た。

「お美代ちゃん支度できたかい？ もう来る頃よ。私もドレスに着替えるから手伝って頂戴。あんたもお化粧して着替えなくちゃ……」唇を真赤に塗った姐御を囲んで、三吉と彼を入れて五人の男達は拳銃を忍ばせて客を待った。

「あら、お美代ちゃんて、ずい分綺麗なのねえ。どう見ても二十四五にしか見えないわ。やけるわねえ。」

キラキラ光るイブニングの胸許を大きく開いて現われた彼女を見て、姐御は彼の膝を抓った。高級車が音もなく止って数名の男達が階段をゆっくりと降りて来た。精悍な浅黒い顔の年齢が見当つかない男を先頭に五名の客が入って来て、鋭い眼で店内を見渡してから再び歩き出して近寄った。通訳を介しての挨拶、そして極く短い談笑の後、二個のトランクがテーブルの上にドシリと置かれた。

「飲物はあとにして、取引を早く済ませましょう。現物はこれです。現ナマ？」

姐御の眼配せで、彼はカウンターの中に入って札束の包みを持ち出した。飲物の支度をして居るお美代の足許にしやがんで、ドレスの裾の陰から包みを引き出し乍ら、ふと見上げた彼の視線は、見下ろして居た彼女の眼とかち合った。彼女の両眼が心なしか濡れて居る様に思った彼は、

「二、三日元気がなかったが、体工合でも悪いのじゃないかな。」

と考へ乍ら、立ち上がりざまに彼女の腰の辺りを素早く撫でた。その瞬間、彼女の体がビクリと震えた様であった。彼がテーブルの上においた包みは姐御の手で解かれ、トランクは客の手で開かれた。全員の注意が札束と品物に集中し、シンと静まり返った店内の空気を破って突然鋭い声が響き渡った。

「皆手を上げる!!」

いつの間に動いたのか、扉を背にして仁王立ちに立った三吉が拳銃を両手に構えて叫んだのであった。

息を呑んだ連中の二、三人の手が素早く動いたと見えた途端、轟然たる射撃音が店内に響いて、客の二人が崩折れのけぞった。買付側の男達のうち、彼ともう一人が素早く抜いた拳銃は空しく撃針音のみを立てた。

「あんた達の拳銃は皆弾を抜いてあるわ。皆、拳銃を床に捨てるのよ。」

はっと横を振向いて見ると、肘をカンターについたお美代が、拳銃を擬して眼を輝かせて居た。

「銃口をつまんで取出すんだぞ。通訳しろ。」

残った三名の客は、油断のない三吉の身構えを見据え乍ら、拳銃をつまみ出して床に投げた。

「三吉も……お美代ちゃんまで、そうだったの。」

観念した姐御はゆっくりと両手を上げ、皆もならった。

「よし。立って壁際で壁を向いて並べ。一人ずつ行くんだ」

両手を上げたまま壁を向いて次々と並んだ連中は、カウンターの上的お美代の拳銃を背に感じた。一番端の姐御に並んで立った彼は、余りの情けなさに断腸の思いがした。

「姐御。済みません。」

「仕方ないわ。もう私は生きて出られないかも知れないねえ。」
途端に鋭い声が飛んだ。

「お黙り。口を利くと射つわよ。」

「ねえ、お美代ちゃんてば。あんた自分の亭主を縛るつもりなの？あんまりじゃなくって？」

お美代は黙って姐御の頭上を狙って引金を引き、壁の破片があたりに四散して、姐御は舌打ちして口を歪めて黙った。捕縛されるのを待ってじっと立ちすくんで居るのはみじめな心持であった。射たれた二人の客の男の中、一人は即死したらしくビクリともしなかったが、もう一人は呻き苦しんで居た。

「腹に当たってるぜ。お美代。俺達二人共、余り上手じゃないなあ。手を狙ったんだが……」

「私もよ。けど、どうせなら即死させた方がいいじゃないの。死んでる方は私が射った分よ。」

「フッフ、しかし首領じゃなくてよかったよ。」

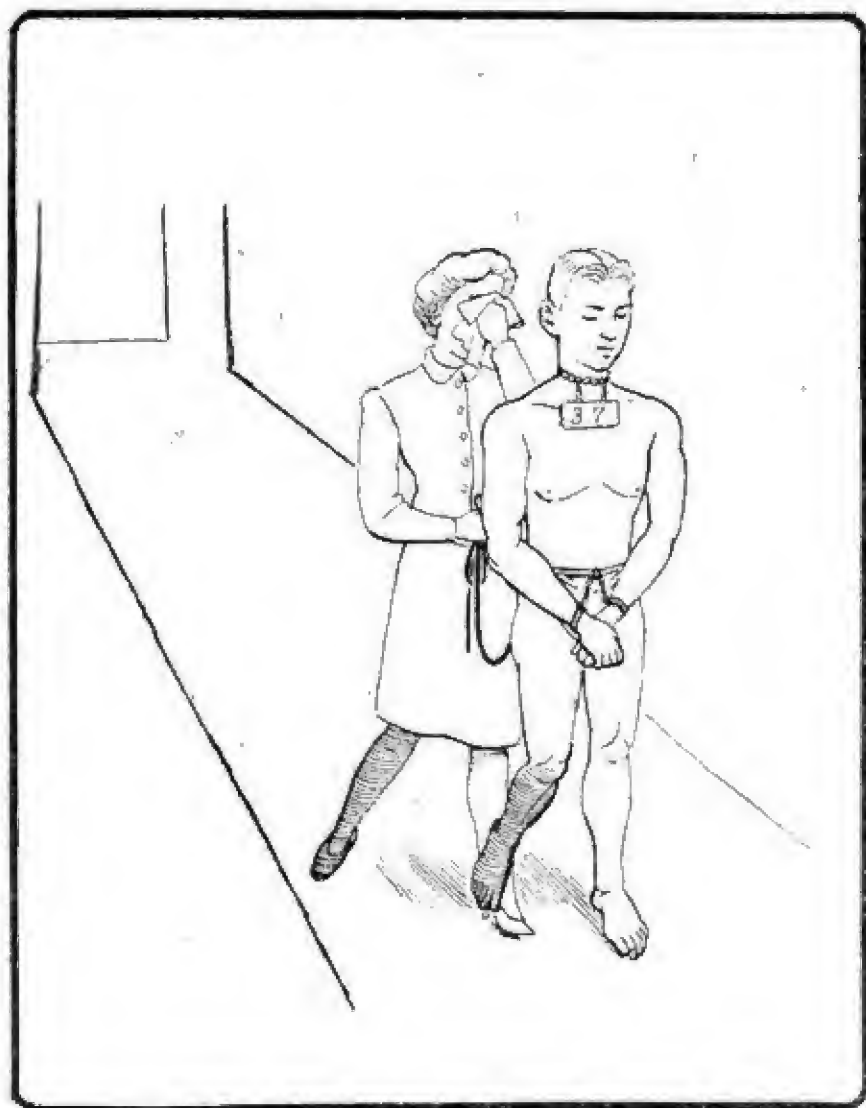
「連中おそいわねえ。うまく行ったからよかったけど、何グズグズしてるんだろ。」

サイレンの音が停って、ドヤドヤと私服、制服の警官が入って来た。手荒い身体検査と手錠の音が続き、次々と腰縄を打たれて珠数繋ぎにされて行った。死体の上に鑑識担当者がうずくまった。

「あ、その男は待ってよ。私が……」

全身を小突き回された後、警官に手を握られた彼を見てお美代が叫んだ。

「その端の女も私が連れて行く。」



三吉も低い声で云った。

「いやお二人共、お手柄ですぞ。これでルートの大口が一つ潰れたんですからな。」

背広を着た指揮者が、三吉兄妹をねぎらった。死体も負傷者も運び出され、ガランとした店内に三吉兄妹と姐御と、そして彼の四人が残った。

「兄妹で欺して悪かったなあ。けど大勢の人の為なんだから諦めて下さらない？」

「ウン。大丈夫だな？ え？」

「大丈夫よ。安心して……」

「そうか。じゃ、姐御行こう。」

「ちょっと待って。せめて一服吸わせてからにしてよ。」

姐御は三吉に貰った煙草に火をつけて天井に吹き上げた。彼もグツタリと椅子に坐り込んで三吉が投げて呉れた煙草を啣えた。すべてが夢の様であった。傍に寄ったお美代が露わな肩と腕を見せて火をつけて呉れ、放心状態で微かに喘ぐ彼を黙って見下ろして居た。

「さ、行くわよ。どうせ着替えさせちゃお呉れでないだろ。」

半分以上残った煙草をポイと捨てた姐御はゆっくりと立ち上って、三吉に笑い掛けようとしたが、三吉刑事の手に光る手錠を見た途端、

「あッ、矢っ張り……やっぱり縛るのね。」

悲しそうに男の顔を見やった姐御は、諦めて両手を差出した。右手首に、そして左手首に、音を殺して嵌められる手錠から眼をそむけて横を向いた姐御は、声を殺して泣いた。

「腰繩は勘弁してやるよ。じゃ、お美代、すぐ来いよ。」

抱かれて寝て居い男に背を押され、白い肩をガックリと落した姐御の黒いイ腹ニングドレスの裾が揺れて、扉の外に消えた。

「ああ、ほんとに夢の様だ。お美代、いやお美代さん、あんたは、婦人刑事だったんですね。」

「そうよ。お芝居上手だったでしょ？ ね、あんた。私ほんとにあなたが好きになったの。最初は職務の為だと死んだ気で居ただけど、その中にだんだんと……。それからと云うものは、ほんとに苦しかったわ。けど、やっぱり罪の償いをさせる方が結局あんたの為だと思ったの。ね、罪を清算して、更生してくれない？ 私、待ってるから。いつまでも……」

「分ったよ。ありがとう。しかし又、あの辛い監獄に繋がれると思うと……」

「辛いだろうけど、辛抱してね。さ、いつ迄こうしてたって仕方ないわ。行きましょう。」

「最後にキスだけでもさせておくれ。」

彼は彼女を抱き寄せようとした。彼女は素早く身を引いて、

「そのままじゃ駄目。可哀想だけど、これ嵌めてからよ。」

イブニングドレスの胸元から布に包んだ手錠を取出した彼女は、おずおずと両手を差出す彼を泣き出しそうな顔で眺めやった。

「それ嵌めたらキスさせて呉れるね。」

「ええ、あの後向いて。手を後へ回すのよ。私、捕縄を持って居ないから……」

おとなしく命じられるままにする彼の左手首から腕時計を外し乍ら、彼女は切なそうに、

「ああ、好きな人を縛らなくちゃならないなんて……。此の時計、肌身離さずもってるわね。ああ、ほんとに悲しいわ。」

バシッバシッと冷い錠の音が二つ聞え、彼の掌の上に生温い涙が落ちた。

「あなた。御免ね。赦してね。」

声と共に彼女は矢庭に彼を自分の方に向けるや否や首に両手を回して唇を押当てて来た。彼が買与えた高価な香水がほのかに匂った。うっとりとして彼女の口を吸い乍ら彼の両眼から溢れた涙が、彼女の閉じた瞼の上にハラハラと落ちた。思いきり抱き締めてやりたかったが、最早それは出来なかった。

「ね、信じてお呉れ。決して逃げないよ。又すぐに縛られて上げる

から……」

彼女は苦しげに迷って居たが、

「やっぱり……やっぱり、此のままで行きましょう。分ってくれるわね？ ああ切ない……」

涙を拭いた彼女は彼をそこに残して奥に消えた。ドッカーりと坐り込んだ彼は、衣ずれの音を微かに聞き乍ら、身をもんで男泣きに泣いた。逃げ出そう等と云う気は全く起らなかった。着替えを済ませて化粧を落した彼女がやがて現われて、ハンケチで彼の涙を拭いて呉れた。

「さあ、行きましょう。真人間に生れ変って頂戴ね。願するわ。」
彼女は彼の右腕をやさしく抱え上げ、彼はよろよると立上った。身を寄せ合って昇る狭い階段が、どこまでも続いて呉れたらと彼は思ったのであった。

再度の逮捕

「あなたを欺して居た結果になったけど、ほんとに悪く思わないでね。」

隣接市の警視庁に在る取締本部へ向って、国道を走るタクシーの中で、彼女は繰返し繰返し泣声で訴えた。

「あなたがこっちへ高飛びする前に、向うの警察から手配書が回っているのよ。それでね、ここでの取調べが済んだら、あっちへ送られると思うわ。ともかく洗いざらい自供して下さないこと？ したら罪も少しは軽くなるし。私も蔭で尽力するわ。あら、どうしたの？ ああ顔が痒いのね。」

彼女は彼の鼻の辺りをやさしく搔いてやった。車の動揺の度に体

が触れ合い彼は胸をきむしられる切ない思いがして黙って噤り上げるだけであった。

「もう着いてしまったわ。降りましょう。云々とくけど車を降りたら、人目があるし甘えちゃ駄目よ。」

彼の手錠を外して身柄を係官に引き渡した彼女は黙って消え去った。衣服を剥がれ、鎖で首に番号札をつけられる彼の浅間しい有様を見るに忍びなかったのであらう。赤い禪一本の姿で独房に入れられ、鉄扉を施錠する音を聞いた彼は身心共に打ちひしがれて、崩折れる様に正座してうなだれ、絶望感をひしひしと味わった。反則した囚人を房の外へ曳き出して鞭打つ音が聞え、女の悲鳴が響き渡った。悲鳴は紛れもなく姐御の声であった。

「姐御も此の監房区画に居るんだな。それにしても、あの女の身にとっては独房はこたえるだろう。」

と彼は考えた。

翌日から、一味に対する峻烈な取調べが始まった。ひる近く曳き出された彼は、監房区画の出入口で帰房する姐御の変り果てた姿と出会った。留置されて居る婦人には、大抵下着位は着る事を許してあるのだが、姐御は赤い禪一本だけの姿、手錠を嵌められ、素直に腰縄を打たれて追われて来た。乱れた髪をつくろう術もなくきびしい取調べにさしもの姐御も打ちひしがれたのであらう、うつろな両眼で前方を見詰め、よろめきよろめき引き立てられて来る姿は哀れであった。一昨晚のキスマークが白い体のあちこちに薄赤く残って居た。

「あ、お前……」

彼の姿を見て思わず声を立てた姐御の背に縄尻を握った婦人警官

の鞭が鳴った。

「お黙り!! 馬鹿。」

「ヒーツ、ウウツ……」

すれ違い乍ら彼が振り向いて見た姐御の背中には、既に七八条の鞭痕が交叉して走って居た。

「横見しちゃいけないじゃないか。」

彼の右の腿にもピシッと鞭が当てられ、彼は歯を噛みしめて悲鳴を堪えた。心を決めて居た彼は、青白い顔の神経質らしい若い取調官に対して自ら進んで知って居る事は全部自白した。

「お前の事は彼女からも聞いて居るよ。しかし素直によく白状したなあ。助かるよ、正直な話が。あとで姐御をもう一回引き出して絞ってやろう。」

喜んだ取調官は煙草を一本恵んで呉れた。

「罪は罪だから、刑は免れる訳には行かんが、充分に斟酌してやるよ。」

彼に対する取調べはそれ切りなかったが、姐御や他の連中に対しては毎日苛酷な調べが加えられて居るらしく、聞き覚えのある男の呻き声や姐御の呻き声が、鞭や鎖錠の音と共に時々聞えて来た。

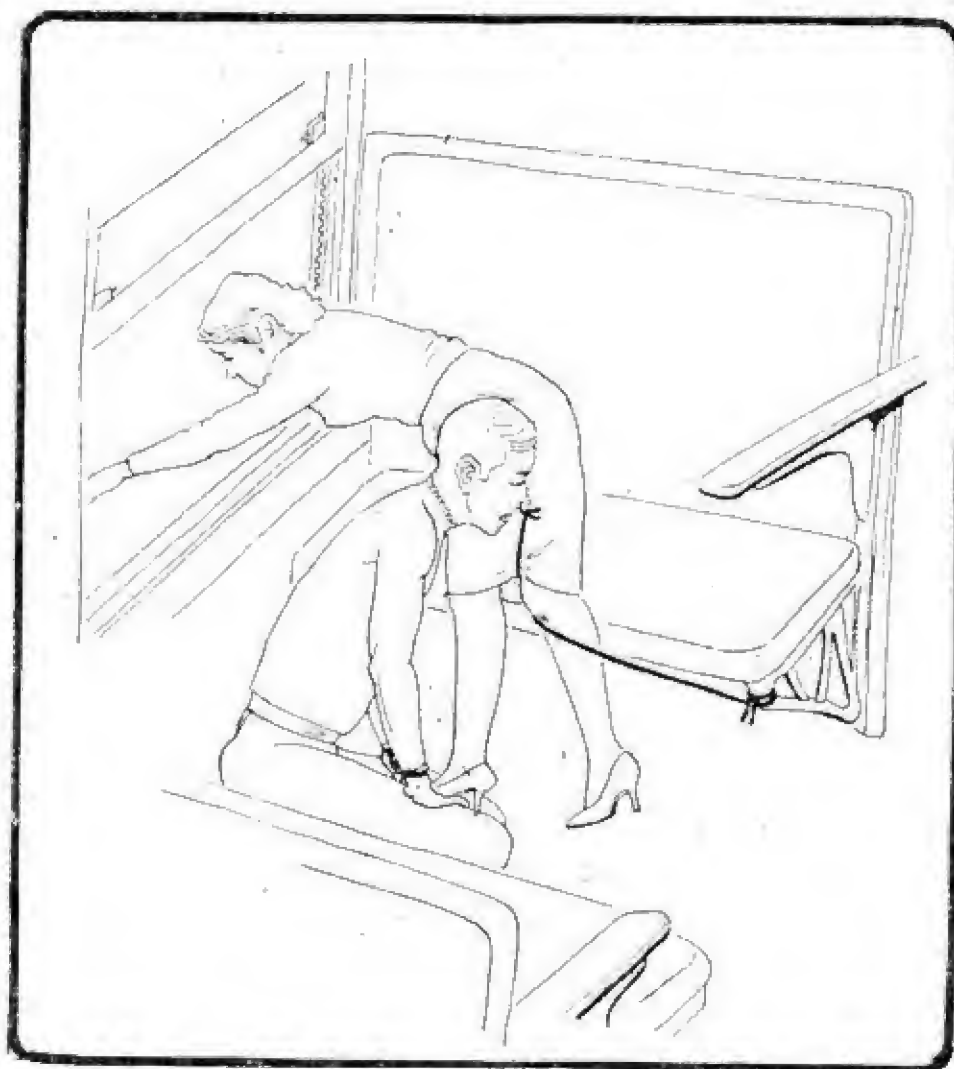
「いいのよ。私が引き出して行くから。房の錠かしてよ。」

五六日目の朝のこと、殆んどの留置人達が曳き出されて一きわ静かな監房区画の出入口の辺りで、婦人の声が聞えて彼はビクリとした。

彼にとっては恋しくも又恨めしいお美代の声であった。

「三十七号。出るんだよ。」

彼女は大きな声でそう云ってから、房の扉をガチャガチャと開き



乍ら小さい声で囁いた。

「今日、これから向うへ送られるのよ。一目だけでも会い度くなつて……。あなたが出獄する日迄、会わないつもりだったんだけど……。」

涙ぐんで差出す彼の両手に嵌められた手錠は、わざと高く振り上げられて激しい音を立てて喰込んだが、ついで打たれた腰繩は嘗てない程にゆるかった。

「ああ、やっぱり止めときやよかったわ。もう泣けてしまいそう……。」

彼女はわざと邪慳に彼を引き立てて区画を出たが人目のない廊下に来ると、繩尻を握った手で顔を掩って嗚咽した。

「ね、体に気をつけてね。余り痛めつけられない様におとなしくしてよ。」

彼女は彼の体をいとおしげに撫で乍ら涙声で云った。

「向うの警察からあんたを連れに来てるのはね、あんたを捕え損ったひとなのよ。憎んでるに違いないから、そのつもりでね。足錠迄準備してるらしいの。私が赦してやれって頼む計にも行かないし……。」

事務室の一角で、いましめを解かれ首の錠も外された彼は見覚えのある婦人刑事に引き渡された。

「いくら整形して顔を変えてもやはりどこかに線が残って居るものね。お前、私を覚えてるか？ いつぞやはよくも恥をかかせてお呉れだったね。私の手で捕えたかったけど、まあ仕方ないわ。」

禪一本の姿で直立して居る彼を冷たく見据え乍ら彼女はさも小気味よげに云った。

「お詫び申上げなきや駄目じゃないの。」

お美代に小声で注意された彼は、床にひれ伏して懸命に許しを乞うた。

「フン、いくら謝って呉れたって仕方ないわ。お前の逃走は不可抗力的なものだと言ふことにはなったけど、口惜しかったわよ。さ、禪もこれに替えて。」

婦人刑事はハイヒールの先で彼の頭を蹴り飛ばし新しい赤禪を投げ与えた。

「禪締めたかい？ じゃ手をお出し。」

彼の両手首に鈍い音と共に念入りに嵌められた手錠は物凄く頑丈なものであった。

「あら、その手錠は兇悪犯用のものなんですね。」

「そうですわ。持ってくるの重くてねえ。」

手錠を前で押えてギリギリと腰縄を打たれ、褲の上から股縄が締められた。スカートの裾を押えてしゃがんだ婦人刑事は更に彼の両足に第一種足錠がカチリカチリと嵌め、股縄の中心から垂れた捕縄で鎖の真中を吊った。

「ずい分きびしく縛るのねえ。」

お美代が傍らで嘆息した。

「今度逃げられちゃ大変ですもの。」

「あら、ずい分おとなしいのよ。逃げはしないと思いますわ。足錠だけにしてやったら？ 一緒に歩く時、おそくて困りませんか？」

お美代が精一杯に頼んで呉れたが、婦人刑事は笑って取合わなかった。首に再び鎖が巻き付き何か刻印した赤い鉄札が前後に付けられた。

「さ、済んだわ。」

「あ、ありがとうございます。」

「フッフ、ほんとに神妙ね。私、ちょっとお茶をよばれて来るから、そこで立っておいで。」

彼は三十分程、じっと立ちすくんだままうなだれて待たされた。兇悪犯護送用の特別手錠は少しでも手を動かすと骨身に痛かった。

「さあ、連れて行ってやろうかね。おいで。急がないと汽車におくれるわよ。」

首鎖につけられた捕縄をグイと曳かれた彼はお美代の視線を背に

感じ乍ら、ヨチヨチと歩き出した。久振りに浅間しい鎖錠姿を世間の人々の眼に晒した彼は恥かしくて堪らなかった。歩くのがおそいとて縄尻で打たれ、足鎖に躓いて転んでは足蹴を受け、傍見をしたと云っては激しくビンタを喰って泣き呻き乍ら漸く駅に辿り着いた彼は、列車の座席の間に正座して大きく喘いだ。

「じっとして小さくなってなきゃ駄目よ。」

正座した彼の膝の上に靴を乗せた婦人刑事は彼が身動きする度に叱りつけて、ハイヒールの先や細い踵で方々を小突いた。

「あ、すっかり忘れてたわ。鼻の金具を持って来たんだっけ。」

彼女が取出した小さな金具が彼の鼻の先にあてがわれてネジが回され、金具は彼の鼻の壁をしっかりと締めつけてしまった。彼女の指先が離されると其の金具は鼻環の数倍も重かった。座席の脚に結ばれて居た首の縄が鼻の金具につけ替えられ、婦人刑事は鼻縄を短く握ってゆさぶって彼を苦しめた。

「ヒーツ。そ、そんなに……引張らないで下さいまし。」

「ホホホ、抜けはしないかと試して見てるだけなのよ。いい男がポロポロ涙流したりして見っともないじゃないの。」

頭を刈られて居ない人間が鼻縄をつけられて居るのは余り見掛けないことなので、人々にジロジロと眺められた。

「それ、何ですの？ 懲役囚でもないし……。」

斜の席から中年の婦人が眉をひそめ乍ら訊ねた。

「これ？ 容疑者を護送してるんですのよ。前に脱走した事があるんですの。だから……。」

「まあ、脱走ですって？ 何と云う不心得な。足も括ってあるんでしょうねえ。刑事さんも大変ですこと。」

列車の動揺の度に足錠がグリグリと痛く、特別手錠に締めつけられた両手首から先の方は半ば痺れてしまった。重い金具がペラ下がった鼻の壁が千切れる様に痛んだが、やがてそれも鈍い痛みに変わった。婦人刑事は彼の膝を踏みつけて立ち上がり、窓から身を乗り出して弁当とお茶を買った。窓に背を向けて正座して居た彼の肩や頬に彼女の腰の辺りが押付けられ上体を後に倒して彼女の体を支えた彼は、ピンと張った鼻繩と体重の掛ったハイヒールの痛さにスカートで半ば掩われた口から悲鳴を洩らして呻いた。

婦人刑事はやがて窓外を眺め乍ら弁当を使い出したが、彼には勿論一滴の水すら与えられる訳はなかった。彼が横眼でそっと見上げると、箸を動かす彼女の赤い唇から真白い歯がこぼれ、乳色の顎の辺りはふっくらと二重になって居た。暫くして痛さに耐え兼ねた彼は、

「お、お願いします。少しゆるめて下さいまし。此の手錠はもうほんとにきつくて……」

「フフフ、そうかい。じゃ鍵を上げるから自分で好きな様におやりよ。ほら。」

婦人刑事はハンドバッグから取出した鍵を彼の痺れた指先に握らせた。けれども指先でどうにか鍵は持って見たものの、如何にしても鍵穴に挿込むことは彼には出来なかった。

「ホホホ、どうしたのさ。え？　口で啣えてやってもいいわよ。」
たとえ腰繩で押えられて居なく共、所詮それも出来ない事だと彼には分った。

「ゆるめるの済んだの？　じゃお返しよ。」
鍵を取り上げられ乍ら彼は口惜しさに涙ぐんだ。

「分ったかい。普通のとは違って其の手錠はね、鍵があたって自分ではどうも出来ない様になってるの。少し位痛くたって我慢おしよ。ホホホ。」

からかわれた無念さに彼は二度と哀願すまいと千切れんばかりの手首の痛みを歯を喰い縛って堪えて居たが、とうとう哀願の言葉を口にしてしまった。

「うるさいわねえ。」

煙草の火を腕に当てられて彼は身をよじって呻いた。

「大分こたえたらしいわね。この位で勘忍して上げるよ。フフフ、実はねスプリングを締め放題にしてあったのよ。お前は辛抱強い方だわ。大抵二三時間で泣き出すもんだけど……」

婦人刑事は身をかためて、スプリングを通常的位置に戻して呉れた。手首の骨の急所を残酷に締めつけて居た鉄環が、ほんの少し緩んだだけで痛みはスーッと薄らぎ、彼はホッと吐息をついた。彼女の横顔を鼻の先に見る彼の顔をおくれ毛が風に吹かれて撫でた。お美代が使つて居たのと同じ髪油の香りが微かにして彼は切なく喘いで、彼女の恰好の良い首筋を思わず喰い入る様に見詰めた。

「これで楽になっただろ？」

「ハ、ハイ。ありがとうございます。」

車窓はトップリと暮れて列車はやがて目的の駅に滑り込んだ。

「さ、お立ち」

鼻繩を曳かれた彼は、空腹と渴きと疲労とにフラフラし乍ら、痺れた両脚を踏張って立ち上った。容赦もなく引張られる鼻繩に呻き、何度となく膝をついてすり剥いて、ヒィヒィ云い乍らホームやコンコースを曳かれて行く彼の哀れな姿を、人々は嘲笑と共に見送った。

警察署に八時頃着いた彼の処置は簡単であった。

「御苦労様。身体検査はざっとでいいわね？」

「大丈夫よ。私、食事して来るから頼むわ」

鼻の金具と腰縄の捕縄を解かれ、当直の婦人警官に引渡された彼は、首の札をつけ替えられただけで、そのまま留置場へ追い立てられた。

「おや、今頃連れて来たのかい？」

「ええ、遠方から鼻縄をつけて引張って来たところよ。これ申告しないの？」

彼の申告を聞いた看守は、

「ああ、彼奴か。えーと十七号の房だよ。」

独房に突き入れられた彼は、とうとう外しては貰えない手錠足錠を悲しく感じ乍らガクリと正座してうなだれた。

「今夜はもう時間が過ぎてるから食事はやらないよ。明日の朝迄辛抱おし。」

護送して呉れた婦人刑事が、やがて食事を済ませて現われた。

「さあ、お腹ごなしに丁度いいから、これから何時ぞやの恩返しをさせて貰うわよ。出ておいで。」

曳き出されて、彼女と向い合って直立させられた彼は、顔がゆがんで上る程、革のスリッパでビンタされた。そして次には、全く抵抗力を奪われた彼に思うままの姿勢を命じた彼女は、心ゆく迄鞭を当て続けた。雨と降る革鞭を歯を喰いしばって低い呻きで耐えて居た彼も、遂に絶叫して許しを乞うた。

「ヒ、ヒーッ。お、お許し下さいまし。お慈悲でございます。お、お慈悲を……」

「フッフ、とうとうネを上げたのね。じゃ今晚は此の位にしろって上げる。明日からみっちり絞り上げてやるから、そのつもりでおいでよ。」ハイヒールの先で独房に蹴込まれて這いずり込んだ彼は、床にしがみついて手錠をコンクリートに鳴らし乍ら全身の激痛に声を絞って呻いた。

翌日取調室に曳かれた彼は、勝誇った様に見下ろして、鋭く叱りつける婦人刑事の机の前にひれ伏したまま、身もだえし乍ら全部白状して慈悲を哀願したのであった。

「ずい分と又、あっさり自供したわえ。何だか張り合いがないみたい。」婦人刑事は拍子抜けのていであつたが、なおも追究の手をゆるめないで、其の頃の彼が知って居た筈もない事柄について意地悪く責め続けた。

「そ、そんな事は存じませんです。ほ、ほんとでございます。其の頃は何しろ未だほんの小頭程度だったんですから。存じて居る事は全部申し上げました。お、お許し下さいまし。」

しかし美しい割に冷酷な婦人刑事は、三日程の間いろいろ拷問を加え、胸のうっぶんを晴らした。

「本当に知らないらしいわね。フッフ、大分こたえた様ねえ。いろいろな事をしてやったからね。」

脂汗を流して苦しみ抜きげつそりと頬のこけた彼の眺め乍ら彼女は愉快そうに笑って、革の窄衣をゆっくりと脱って呉れた。

——鉄砲、海老、吊るし、窄衣は序の口で、息も出来ねえ程に擦ぐりやがるし、尻に焼爇迄当てやがったよ。

彼に与えられた罪名は驚く程沢山あつた。曰く、専売法違反、傷害、公務執行妨害、密輸、銃器不法所持、窃盗、売春幫助……。

告白

アブノーマル・ファンタジー



—読者としての同好者感

益 田 平 三

ワンガロー

七月二十一日付の朝日新聞を御覧になった方は、ワンガローなる物の記事があった事を御記憶でしょう。

タバコのスズを入れた木箱の払い下げを受けて、超小型バンガローに改造し、その一

人用をワンガローとして出すそうですが、どう見ても犬小屋を少し大きくして、人間一人が寝るだけの大きさしかありません。それにONEと云う英語の単語が、日本では犬のなき声の一つとして使用される事がありますから、名称からして犬小屋です。マゾヒストを飼育するのに、これ程ピッタリした物は近頃

めずらしい事でしょう。しかし慾を言えば、このワンガローは、全長が長すぎて（寝るためには適当でしょうが）お行儀が悪くなる欠点があります。新聞には「二つをつなげると」と、ありますから、前半部分のみにし、その変り高さをもう少し高くすれば立派なワンガロー（？）になる事うけあいです。

首に鎖のついた皮帯をしたワン君は、キチンと座って、御主人様の見えるのをまっています。いつもなら、もう来る頃なのに今日は少しおそい様です。御主人様がお見えになりました。小さい可愛いワン君は、鎖をジャラジャラさせながらお出迎えです、御主人様の足の甲に、そっとキッスをして御挨拶します。「さあさ、今日も散歩の前に身を軽くしようね。こら、お前はいつも逃げたがる様だね、もうそろそろ馴れてもいい頃だぞ。」

「ネエ、お願い。自分でするからいいでしょう。それだけはやめて」

「駄目だッ、尻を上げて、もっと高く。どうしても、いやなのか。お前は尻を赤くはらしてもらいたいのだな。よーしっ、これだッ、どうだ。」

「ああっ、ああ、あなた、いつもの通り、皮ベルトでやって。ああああっ。そんな角棒で

は、ああっ、やめて。ああ、あっああっ、御主人様、お許し下さい。私が悪う御座いました。ああっあーっ。有難く戴かせてもらいます。」

「そうか、これからは最初から、そうに言うんだな。もし、今の様にしぶったりすると、角棒だからな。」

「さあーっ、すんだ。この前の様にトイレまで行かない中に粗相をすれば、自分の口でそれの始末をする事は知っているね。もうしばらくの辛抱だ。」

「早く行かせて、首の鎖をゆるめて下さい。あっ早く、もう我慢がなりません。ああっ、もっと早く。」

「あわてるな、身体の中のを全部出す様に、もう少し薬をきかせるんだ。これから、あんまり引っ張るんじゃない。よしっ、さあっ、お前が全部すませるまで、僕はここで見てるから、ゆっくりやっていいよ。」

「お前は、まだ恥しい気持が抜けない様だね。僕達の間でこのプレイが始ってからもう半年になると思うんだが、人間臭さがまだ相当残っているね。最初に約束したね。このプレイ以外ではお前は僕の妻だけれど、プレイが始ればお前は僕の愛大になる事だったと思う

んだが。これだけの期間をおいても、その成果が大して上らないとすると、僕の飼育法が間違っていたという事になるんだがな。今日は、散歩の予定を取り止めて、僕が新しく造らせた道具を使ってみよう。すんだら、立って、膝を曲げるなッ。大が膝を曲げて歩くかッ。尻を高く。今日は、その訓練をミッチリするからな。」

「御主人様、これでは胸が苦しいんです。あっ、首は引かないで下さい。ああっ、御主人様、お許し下さい。私が悪う御座いました。どうか、お止めになって下さい。」

「この台だ、わかるだろう。ヒザとヒジを延ばして、首と尻が上っている様に固定できる様になっている訳さ。乗った、乗った。足を少し開いて、そう。少しじっとして。棒の高さを調節して固定するから。」

「あっ、それ以上棒を上げないで下さい。手足が台から離れてしまいます。フーッ、御主人様、少々ゆるめて戴けませんか、手と足が付根の所で抜けちゃいます。ああっ、首は上げないで下さい。この恰好で首を正面に向けられては、息が詰りそうです。あああっ。」
「ふ、ふふふ。いい恰好だ。これこそ僕が望んでいた、犬の姿だ。動かせるの腰だけだろ

う。今、その腰にダンスをしてもうからね。お前の好きな皮バンド君が、パートナーだ。それとも、さっきの角棒の方が良いかな、どちらにしても、楽しめるよ。」

「あ、あなた。やめて、私をこんな浅ましい姿にして、その上、お尻をおつなんて、やめて。他の事なら、何でもします。本当の犬でも、こんなにされたら、いやがります。お願い、後生だからやめて下さい。」

「馬鹿野郎ッ。人が少し甘い所を見せればいい気になりやがって。お前は俺の犬なんだッ。今日こそ、その本当の大にしてやる。絶対に容赦はしないぞ。バンドだーッ。」

「あーッ。ああーっ。」

「死ぬほど愛して」

「アモーレ、アモーレ、アモレミオー。」

ポピラーソングの中で、最も、人気のある歌だそうです。私は残念ながら、これが主題歌として使われている、映画「刑事」を見ておりません。或いは、全然見ない方が私にとっては良いのかも知れません。映画を見る事によって、私のイメージを壊したくないのです。一月程前にラジオで聞いてから、「死ぬほど愛して」という、この歌の題名や感じ

から来たイメージが、今では私の心の中に大きく広がっているのです。

お聴しい話ですが、このレコードを聞いている中に涙がポロポロ溢れて、グスングスンしゃくり上げてしまい、人に聞えなければ大声で泣き出してしまいかも知れないのです。

自分でも、何故泣けて来るのか良く判りません。唯、無性にさびしく孤独感が私を包んでしまうのです。泣きながら、身体をかきむしったり、たたいたり、ゆすったりしてベッドから落ちそうになってやっと気が付くのです。こんな事を云っても、誰にも解ってもらえないでしょう。しかし、こんな情景を思い出して見て下さい。

先刻の、ワン君の人間らしさに怒った御主人が力一杯皮バンドを振っていましたが、十五分もすると、パイと部屋を出て行ってしまいました。後に残された白い美肌のワン君(?)は四肢を下に向けしっかりと固定された四つんばいで、顔だけを正面に向けて、身体中で呼吸をしています。彼女のフックラとしたお尻は、真っ赤にはれ上り、幾条ものミズばれは今にも皮を破って血をふき出さんばかりです。火の様に感じるお尻の痛みに彼女の頭はボンヤリとなりかかっている事でし

よう。その頭の中に去来する事は、この浅ましい姿、死ぬほどの苦しみと恥しさ、カッコッとはてる尻の痛み、自分のこんなになっていく身体への愛おしさ。しかし、それにも増して、自分をこんなにまでして愛し、又、自分の気持をこうまで変化させていった夫への愛の気持。今、その夫を怒らせて、その夫はいない。彼女のホホには汗に混って涙が光るでしょう。尻の熱さは、彼女の気持のたかぶりに一層の拍車をかけ、涙はこみ上げ、しゃくり上げて、そのつきる所を知りません。

「アモーレ、アモーレ、アモレミオー。」

静かに、そして高く響き渡る曲。非情の中に女心の哀しさを唱っていく事でしょう。

私には、イタリア語は、全然判りません。

(判らない方が幸かも知れませんが)ですから、歌詩の意味は全然知らないのです。多分普通の恋歌だと思えますが、私には私なりの夢の中で唱わせたいのです。「死ぬほど愛して」という題名のとおり、実際には「死ぬほど愛する」事は、言葉の上の事しか考えられません。しかし、世の中には、その言葉通りに「死ぬほど愛して」おられる方がいる事ですよ。そんな愛しかたは悲しい事かも知れませんが、でも、愛という大きな力によって、それ

はむくわれる事でしょう。

「愛」私は、何でもこの言葉を使ってきました。しかし、実際にはその事について何も知らないと言った方がよい程なのです。「愛」というものが「自由」という事と、非常に緊密な関係にあるというのが、私の考えですが、前にも申した通り、「自由」という事についても書いてみる積りです。その折に、私の考えを述べるまで御容赦下さい。

自縛欲と露出欲

ある日曜日、夕方の散歩でもと思い、近所の公園に出かけて見ました。ベンチに腰を掛けてラジオを聞いていましたが、どうも退屈なので、いつもの赤い紐を取り出し、手首をあれこれと縛り、いたずらをしました。ところが、側のベンチに四、五人の男女のグループがいるのに気が付くと、ひどくエキサイトしてしまい。自縛の紐を力一杯しめてしまったり、後頭部に血が昇っていつもの頭痛が始まり、とても気持の悪い思いをしました。

露出慾とまでいかなくとも、露出願望に似た感じの気持が強いらしいのです。その日は始めて戸外で自縛をやったのに、側に人がいると、人に見せつけたい様な気持がむらむら

と起きてしまったのです。自分でも感じない軽いシット心がそれに同調して、かりたてているとも考えられます。

その反対に、見られたくない時もあるので。自縛のまま、ラジオを持ってゆっくりと歩いて、公園の奥にある、大きな円卓の側までやって来ました。その間一人の人間にも会わず来られたので、その円卓にラジオを載せ、ディキシーに聞きほれ、身体で拍手をとりながら聞いていましたが、とても楽しく過せました。ほんの二、三十分の事でしたが、私には嬉しかったのです。そろそろ日が傾きかけましたので、帰りがけ公園の中程で、横から二人連れの女性がやって来るのに気がついたのです。左手で押えていた、紐の一端を、あわてて離し、紐を解こうと思いますが、苦心して縛っただけに、仲々解けてくれません。少しゆるんだ所で、両手を左右に大きく動かして、ゆるみ具合を大きくして、手首を抜こうとした時は、話し声の聞える所で、二人共来ていました。その間に私もゆっくりですが歩いていましたから、私の後に二人がおりました。私が最後に指を使って紐をふり解き左手の中にまるめ込んで急いで歩き出したのを二人共見ていた様です。後を振り向く勇

気が出ず、力を入れたのと恥かしいので顔色を赤くしながら、ずんずん歩いて来てしまいましたから、どんな女性達であつたか判りません。確かその時ラジオから聞えていたのは「クロエ」というディキシーだったと思いました。

ここに知己あり

私が本をいつも買う書店にくる人の中で、ド・サド侯の作品を読む方がおられます。と言っても、その人が誰だか知りませんが、先日、寄った折に、色々の話から、全集の事になり、「Aさん（私の事です）」フランス文学全集にサドが載っておりますが、お買いになりました。」と、その店の女主人の人に言われ、私が「ああ、あれね。見ました、でも、誰だったか他の作家と一緒に見たね、だから止めました。もし「ジュエスチヌ」だけでしたら買ったかも知れません。」答えます。いつも見かける男の店員が「ジュエスチヌだけを読むんだって買って行った人がありますよ」と言ってくれたのです。

今から考えるともう少し詳しく聞いておけば良かったのですが、その時は「ほう、そうですか。」と言っただけで帰って来てしまった

のが大変残念でくやまれてなりません。今さら、その店員に聞いてみる気にもなれませんから、その本を買った人が男性であるか、女性であるかも判らずじまいです。

地獄草紙

嘗て松井籟子さんの小説の中「地獄絵」のことについて書いておられたが、そんなことから、学生時代に聞いた日本美術史の講義の事を思い出しました。「曼荼羅」（まんだら）と「地獄絵」の両者についてです。

「君達も映画か何かで見た事もあると思うんだが、狭い密室の様な部屋に棚をつくり、その前で火をもして、異様な風体の坊主や修験者が祈禱している風景を知っているね。あの時、部屋の壁に変な絵の様なものがあるだろう。あれが曼荼羅の一種なんだ。」と言いなから、「子島曼荼羅」（こじままだら）のスライドを見せられた事を覚えています。

地獄絵についての説明がどんなものであつたか忘れましたが、地獄草紙と餓鬼草紙の一部を見せ、特に「火炎地獄」の左右の動きともう一つ忘れましたが、街路の一部で人々が脱糞している後で餓鬼が糞をなめている情景の絵についての説明を聞いたと思います。

これだけの記憶ですが、私には仏教絵画の持つ不思議なムードが忘れられません。特に浄土宗と密教の持つ神秘性、中でも祈禱をする時に見られるあの情景の奇ッ怪さは、責め場として考えても一応面白いのではないのでしょうか。

先ず、お寺の在所が深山幽谷（当時としては）あり、人里から遠く離れたり、うっそうとしげる木立の中、寂寞とし人騒ぐ感じさせ寺院の各坊。こんな風に考えるだけでも舞台効果万点ではないでしょうか。

院の奥まった一室、赤い炎がゆらめき、二人の人物がいる事がわかります。赤い炎を照り返し、白い肌を桃色に染めてうごめくのは手足に縄目だけを見せた裸女、長い黒髪で顔の半分は見えません。齒をくいしばっています、時折、かすかなうめきが静けさを破って聞えます。

側には、炎に向かって一心不乱に祈り続ける僧、額のしわの深さから、修業の長かった事を感じさせます。右手には何やら太い棒がにぎられています。静かな時が流れると、僧は両眼を大きく見開き、白い裸身を見つめていました。右腕がさっと延びて、太い棒が裸女の右肩を、胸を、腰をと次々に、力をこめ

て突きます。呼吸一つ乱さず、急所を脱して、裸女を責めまくりまします。

「ムウッ。」太い棒が身体に激突する度に、齒の間からもれるうめきは、一段と早く高くなってゆきます。

「アアッアッ」右の乳房に突き当たった棒はそのまま、じりじりと押されて乳房を強く押し続けます。裸女の身体が大きく左にゆれます。続いて太モモに、ぐりぐりと押し迫ってくる棒。裸女は又一転します。しかし僧の棒から逃げる事は出来ません。

裸女の荒い息づかいが部屋の空気をかき廻しています。逃げ疲れたのか、あきらめたのか、大きく呼吸の度にゆれる以外に、もう動こうともしません。長い黒髪は汗にぬれた裸身にまとわり付き、白い肌と赤い斑点と黒髪のもつれ合った一個の肉塊となって動きません。僧の両眼がゆっくりと閉じられると、また静寂の時が流れます。炎は一段と燃えさかり何ものもおも焼き尽さんばかりの勢です。僧が半眼から静かに眼を開き、一点を見つめています。そこには、炎に焼かれ真赤になった鉄片が見えます。僧の両手がゆっくりとそれに延び、その鉄片を両手にしっかりと握り、裸女の一点に向かって赤熱した部分を下してゆ

きます。静かな、息のつまりそうな一瞬が流れました。

「アアッ」静かな空気の流れが二つにさけたかと思いましたが、直に元に戻り、鉄片を返した僧の両眼もとじられて、あたりは又、深閑とした空気に満たされました。

想像はどんな型で、でも出来ませんが、この様な雰囲気は暗い感じの好きな人でなければあまり喜ばれないでしょう。私自身、どうも暗い情景が嫌いで、なるべく明るい事を、楽しめるものの方が好きなので、暗い感じのものにはあまり興味がありません。

仏教画の中でいつでも対照的に説明されるものに、明王と菩薩があります。仏が救済の方便として菩薩の姿となり、書に、救済の困難な衆生（しゅじょう）に対しては恐ろしい忿怒の姿であらわすとされ、その時の姿が明王なのです。

中国の「西遊記」を読みますと、よくこの菩薩が現れて、助けてくれます。しかし、その反面、西欧のおとぎ話に出てくるやさしい女王様といったタイプではなく、悪魔と女王を加えて、二で割った様な時が多いのに気づきます。そう考えて来ますと、菩薩を女性のサディスト（サディستنと言うそうですが）

と、思っても悪くないと思います。若くて美しい（と思います）菩薩様にソングクウは全然頭が上らず、いつも何か事があるとその助力を借りて悪い怪物を退治してもらいます。人間の中にもこれに類似した女性は多く見受けられます。

明王は云わずと知れた、男性サドの典型です。渾身の力こぶの隆々としたその姿には、まさに動かんとして動かぬ力感に満ちあふれており、肉体を焼けこがさんばかりの火炎はそのたぎりたつ血の流動感を伝えていきます。私の好きな絵では、京都醍醐寺にある、藤原信海の不動明王の白描です。今の言葉ではデッサンと云えるもので、彩色してありません。から色感というものは全然感じられません。しかし、顔表情、全身からの感じで、サディストとしての様子は万点です。

最もアブノーマルと思われる絵画に地獄絵と呼ばれるものがあります。平安末期から鎌倉時代にその多くは描かれたものです。欣求浄土の心をはげますのがその目的とされていますが、ここではそんな説明はよいと思えます。現在では「地獄草紙」四巻、「餓鬼草紙」二巻、「病草紙」二巻、それに模本が三巻しか知られていないそうです。

画集が高価なため、現在の私の手元には、それ程参考になるものがないのは残念です。私が最も興味を持っているのは「餓鬼草紙」の中によく表現されている、コプロフラジー（糞便嗜好）やネクロフィリー（屍体嗜好）もしくはアントロポフラジー（人肉嗜好）についてです。

実際には、私はこれらの行為についてあまり興味を持っていないのです。しかし、何故この様な異様な風景が描写されていたのでしょうか。これらの絵は、多くの経典の中から取材されたと聞いています。とすると、経典の出所及びその経路の中間にあたる中国大陸での影響と考えてもよいでしょう。そういった地方ではそれらを見かける事が出来たのでしょうか、単なる想像とは考えられません。現代においても原始社会の観察報告の中にも極く少数ですが異常な性についての報告もあります。（学者の一部には、異常性については、それが認められても報告されているのは極く少数の部分だとする者もいます）では二千年前、インダス文明を生んだインドにその様な異常性が見られたと云ってもよいのでしょうか。こういった事は学者の研究に譲るとして、私の知っている範囲の地獄絵について

のついた事を二、三書いてみます。

最初に申し上げました。餓鬼草紙の中のコプロ風な絵に見られる部分に、若い女性が尻をまくり上げしゃがみ込んで脱糞している後にまわった餓鬼がその尻の下に積まれた糞塊を舐めている所があります。マゾフィストのコプロマニアには、よだれの流れそうな絵ではないでしょうか。（餓鬼そのものは、はき気を催しそうな程、醜怪なものです）出来れば、外気にふれずに直接でも戴きたい所ではないでしょうか。

今、急に思い出した事ですが、インドのカースト（身分制度）の第四段階（最終階）にシュートドラ（奴隸）というのがあります。これは別名「一生族」と呼ばれるもので、この人間は、この次には人間として生れて来る事が出来ず、次には他の動物に生れ変わる運命をもった者というのがあります。これ等がさげすまれ、人間としてあまり認められず次の様な事も想像出来るとしています。

「人間便器」家畜人やブーではありませんが、御主人の奥様やお嬢様のそれを処理する役目の奴隷があっても面白いではありませんか。紀元前八世紀には、カーストが確立されたと云われています。

コプロには、フンワカとした夢が感じられるのは私ばかりではないと思います。「餓鬼草紙」の事を思い出すと、コプロと頭が続いて思い浮んで来るのです。

「地獄草紙」では、あの画面一杯の火炎が気に入ったのか、「火炎地獄」が一番印象的です。右下では全裸の女を火炎の方向に追いたる鬼、左下では逃げ出した人間を捕えてもう一度火炎の中にほうり込もうとしている鬼、炎の中に蠢めく数人の男女の苦しみ、のたうつ様子は、サド画としても圧巻だと思います。その上、面白い事には、右の鬼は白い左のは赤いフンドシを六尺風にしめている事なのです。筋肉隆々としていると云いたいのですが残念ながら、近代絵画の様に写実中心ではありませんから、こういった絵に興味を持っておられる方には少々御不満でしょう。無駄な事かも知れませんが、これら地獄絵に関する資料を集めて、後日、一文にまとめて見たいと思っております。

仏画、仏像を見ますと、耳たぼの異常に長く穴の開いたのを見かけますが、あれなども考え様によっては興味の対象になると思います。子供の頃から重いイヤリングをつけさせて成長した時には、あの様になったものでは

ないでしょうか（現在でもインド奥地には首に金輪をはめて首を長くする事が、美人の要素の一つだと思っている種族があるそうです。又、アフリカには唇と鼻の間を切つて、ここを延ばす種族もあります）美人をいじめるのに、鼻いじめなるものがありますが、これを称して耳いじめなどと考えてはどうでしょうか。日本では耳たぼの大きいのを、「福耳」と云っていますが、これに目を付けるのです。（福耳と云いますが、どうも福はつかない様です。私の両耳とも、人より大きな耳たぼで、耳殻の下端一纏四方位はふっくらとした耳たぼですが、耳切れがする位で、大した福はもって来てくれません）美人にとっては大へんな福を授かる元になるわけです。

イヤリングに細い針金が鎖をつけ、それを短かめにして手首やヒジを縛るのも一興かと思えます。又、顔を固定したいと思う時に、イヤリングからとった針金なり鎖で左右に固定する事も出来ると思います。

キリスト教がそうである様に、仏教に於ても、アブノーマルについて探せば、いくらかでも出て来ると思います。人類の長い歴史と結び付いて来たという事もその一つでしょう。又、人間と生、生命とを結びつけるものであ

ったためかも知れません。西欧の性科学の研究には、キリスト教的見地を深く研究し、それからの影響についても、しばしば論ぜられているのを見る事が出来ます。日本においても、その様に広い意味からの性科学の研究が行われる事と思っています。日本は東洋思想の宝庫です。相当、立派な研究結果が得られる事でしょう。

臀部フェティッシュ

私が書いていくものに、尻や、腰部についての事が多いのに気付かれておられる方もおありかと思えます。ムチ打ちを書くこととすると、多くの場合、そのゆく先は、尻や臀部になってしまふのです。

性病理学においては、フェティッシュ（崇拜物）が固定し、正常な性対象の代りに唯一の性対象として現われたときに、これを病的な混乱（倒錯）といっております。そしてそれは幼い時の性的印象によってフェティッシュに発達するともしています。

とすると、私のフェティッシュが臀部であり、その原因が「私の告白」の中で述べた事によると考えられるのでしょうか。私の女性の体に対する、興味の多くが臀部に集中する

事が、私をフェティシストにしているのでしょうか。私にはまだ、フェティシズムなるものを良く理解する事が出来ませんから、それらの問題について、解答する事も不可能です。

夏になると嬉しいですね、女性の多くがタイトスカートになり、その上、冬の様にたくさんの下着で武装しておらず、生身に近いヒップに接する事が出来るからです。丸々と張りのきいたお尻がスカートのピッタリと包まれ歩く時の女性を後から見ているのは、とても楽しいものです。

全裸の際のそれに興味ある人は当然多いと思いますが、私には、胴から下がずっと包まれている姿の方が好きです。それは肛門部のくぼみや、脚の付根とのつながりに不満があるからなのです。

臀部から脚の線をきれいに出す細いストラップスやタイトスカートに包まれた女性の方が私の気持を満足させるのはそんなわけです。細いストラップスですと裸の時の様な脚と臀の不自然さが隠れ、その効果を充分に上げて私を楽しませてくれるのです。視線が臀の方にばかり向けられているために、お顔を拝見するのが、おろそかになってしまうのが欠点の様です。私には、それに見とれている時は、

顔などはあってもなくてもよいのです。一步、歩を進める度に右、左と軽くゆれる円い丘、あの臀をもっとふくらまして見たらというのが私の夢です。

先日、夕涼みに表に出た所、私の前に行く浴衣がけの中年の婦人の臀の魅力に引きつけられて十数分、その婦人の後を追ってとんでもない所まで歩かせられてしまいました。浴衣であれだけに見せる臀はそうざらにはありません。お年に似合ず(?)スマートな歩き方で、臀のスウィングがきれいで、とても印象に残っています。

臀の事を書く、直に夏に多い痴漢的なものを、感じられる人もいます事と思いますが、そこまで病的では御座いません(ですからフェティシストなのかと疑いたくなるのです)ラッシュの電車とか、人混みの中に出かける必要もありませんから、その様な機会がないからかも知れませんが、そういった事をやって見ようなどという気持が起った事はありません。手を使わなくとも、私は自分の目で充分に楽しませて戴いていますから、そうしなくともよいのです(そこまで、自分がなってしまうては、自分自身に失望してしまいます。そうまで墮落したくないのです)その代り、

私の視線は、そういう素晴らしいヒップにむしゃぶりつき、なで廻し、思う存分に楽しんでいきますから。

二人の「私」

今までに、私は種々の事を書いて来ましたが、「要するになにか」と聞かれても、「これです」と答えるものを持ち合せておりせん。自分ではこうなのだろうと思っても、結論づけるのが恐いのです。この「恐い」と言うのが私の口ぐせの様ですが、本当にこの頃の私は恐いのです。もう一人の私がいて、普段の私をそちらの方にどんどん押し行ってしまうようなのです。ですから、私はこれからも結論めいた事は止めておきます。これを読まれた方、各々の受け取り方があると思います。それで良いのです。どんな風に受けとられたか、お聞きしたい気持もあります。でもこれも止めておきます。矢張り「恐い」んです。いろんな事を書いて見る事を約束してしまいましたから、愚論とは思いますが、後日お目にかかりましょう。しかし、私には考えをまとめ文章に書き上げるのに時間がかかりますから、何時とは申せません。でも、書きたい事、書かねばならぬ事が起った時はど

んどん書いて見ます。どうか皆さん、その時まで。

これから書きます事は編集部への注文ですから、カットされてしまうかも知れません。もしも、頁に載ったとしたら、一読者の意見として、皆様もお考えになって下さい。愛する奇譚クラブのためなのですから。

苦言のための苦言

近頃の奇譚クラブにはマンネリ化の傾向があるのではないだろうか。ある種類のものばかりが多く、読者の一部から多くの不満が寄せられるのを見かけるからです。これらの方々の御意見全てに私が賛成だというわけではありません。と、いうよりは、全然反対なの

です。しかし、そうだからと言って、それらの意見を無視する事は出来ません。趣好は違っても奇譚クラブという雑誌を通じての友達なのです。私が悩む様に、その人たちも悩んでおられると思います。そういう人たちのために多少なりとも頁をさく事が本誌のためにも良いのではないかと思います。

以前に「週刊スリラー」とかいいう週刊誌が本誌の寄稿者の方々についての記事を書いたそうですが（私は週刊誌を全然読みませんから、どんな雑誌か知りませんが）事の真疑は別として、（週刊誌のネタ不足だなどという事も別にして）その様な事の取材の材料と本誌が使われたという事を反省する必要があると思います。こういった特殊な雑誌である以

上、特定の寄稿者ができてしまうのも、やむを得ない事とは思いますが。しかし、その雑誌のタイプなりバックボーンをなすものを造り上げるのは編集者の腕にかかっている事だと思います。新しい方向を開くのは容易な事ではないと思います。唯一のという言葉がピッタリする様な雑誌にするには、なお一層の努力が必要でしょう。そのためには、編集の方々がかりでなく、読者全般の協力も必要なのです。

何か失礼な事を言ったり、変な事になってしまいました。奇譚クラブを愛する故にと思ってお許し下さい。せめて、本誌上だけでも、私達の憩の場所としたいと思ひまして、敢て苦言を申し上げた積りです。

妊婦マニアへのアピール

瀬 沼 四 郎

五月号の読者通信に拙文を載せて頂いてありがとうございます。四月号以来自粛の方針ということで、グラビアも半分に削減され

てしまい、七月号からは「奇クサロン」の色刷りページさえなくなった上に、表紙も変わりました。誠に残念ですが、しかしこれもま

たやむを得ないことなのでしょう。この上はせめて、マニア誌としての内容の充実を願うばかりです。ページ数削減の結果として、七月号のグラビアのように狭いスペースに小さな写真を数多く詰め込むのでなしに、数は少なくても立派な写真を大きく載せてほしいと思います。そして新しい方向の一つとして、羽村京子さんや小生が以前から提唱している妊婦のヌード写真などはいかがでしょう？

羽村さんの発言に刺戟されて、近来妊婦マニアの同好の士が続々名乗りをあげているのは嬉しい限りです。昨年十月号読者通信の秋田の「羽村京子の大ファン」氏、本年二月号奇クサロン「切腹のSM性」の沖田寿氏、同じく奇クサロンでそれぞれ五月号「美女縛りの希望」の河野新太郎氏と、六月号「何でも書こう」の北村健二氏、それにかく申す小生。これらの人たちが一致して奇ク誌上に妊婦マニアのムードを盛り上げて行ったら、どんなに素晴らしいことでしょう。北村氏の「裏の人妻が妊娠しているの……裏の物置小屋に入り込んで、窓から裏をのぞいてやる……ぶつくりと突き出た蛙腹……八カ月乃至九カ月と見た……撫ぜる毎にお腹がゆれて全く素敵だ……蛙腹バンザイだ！」などという体験は全くうらやましい。小生もそんな目にあって見たいと思いました。

その外、四月号「鏡のある生活」の水口晴子さんは、お腹がばんばんに膨らむ異常な状態にまで、妊娠して見たいと思われるという。同じ号では羽村さんと辻村氏の手紙のやりとりで、伊藤晴雨の臨月の妊婦の逆さ吊りの写真が素晴らしい。惜しむらくはグラビアでなかったのが残念ですが、恐らく奇クに妊

婦の写真が載った最初でしょう。

羽村さんの「ラブレター」も書いている昨年九月号菊丸氏の「妊婦の切腹を実見した話」とか、昨年六月号須藤氏の「臍窩清掃論」、さらに切腹物では二月号黒木節夫氏の挿し絵入りの妊婦の切腹「絢爛たる復讐」、臍マニアでは六月号南方佳男氏の「臍とサディズム」があります。「臍の位置の上三分くらいのところから、少し縦長の円型に盛り上った白い妻の腹」を見て、愛らしい奥様に改めて一層の愛着を覚えられたことでしょう。

羽村さん、辻村氏、沖田氏、河野氏、北村氏、水口さん、菊丸氏、須藤氏、黒木氏、南方氏、「羽村京子の大ファン」氏、そして小生、この外にも近藤一氏（二月号「絆」）、松井頼子さん（昨年一月号の「妖花」）の小説、滝れい子さんの絵にも時々妊婦が出て来るところを見ると、これらの方々には多かれ少なかれ妊婦マニアの傾向があるのではないのでしょうか。

ついですが、カメラ毎日五月号の大竹省二氏のカラー作品「ヌード」のうちの一枚、右側のページ、このモデルは多分外人の女性ようですが、彼女はどうかお腹が大きいらしいのです。小生の見当ではおそらく妊娠

六カ月か七カ月位と見ました。或いはもっと月が進んでいるのかも知れません。この種の雑誌には一寸珍しいことですから、一言報告して置きます。

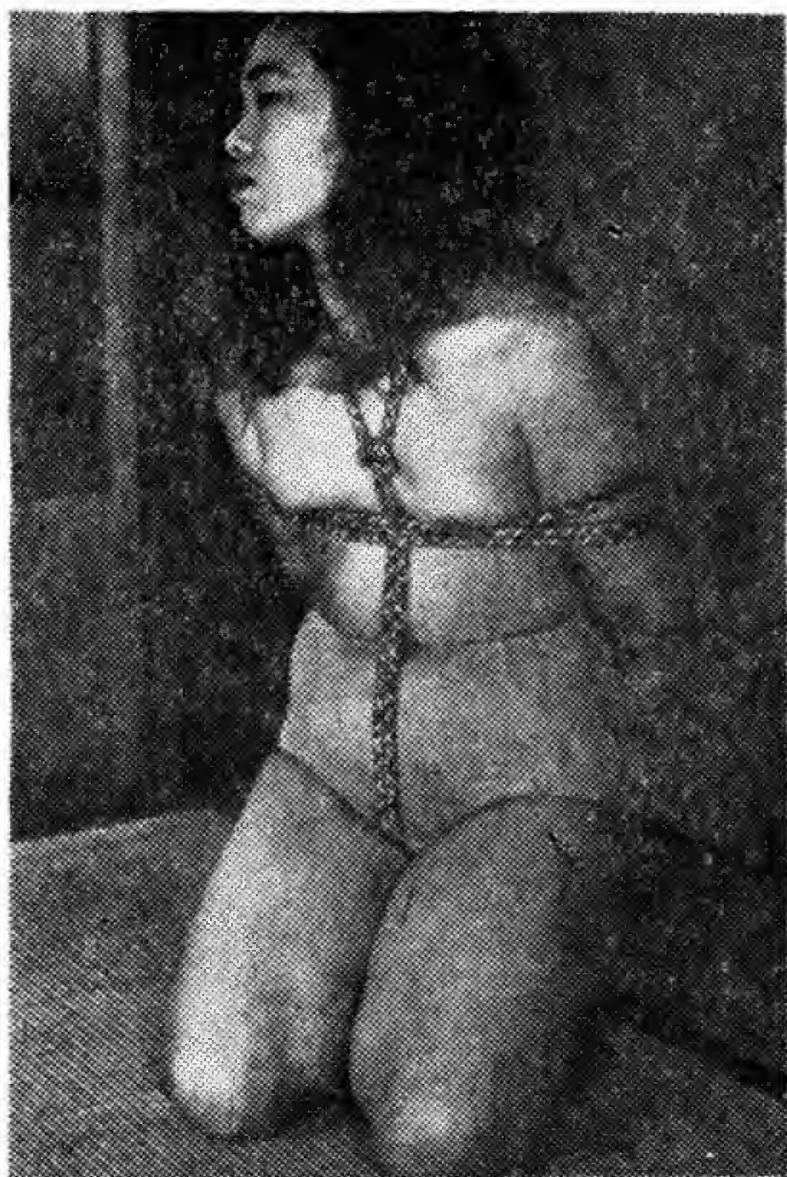
最後に、奇ク七月号読者通信で、東京都豊島区の津利氏が、妊娠九・五カ月（？）の妊婦のものだという蛙腹についての秘蔵写真を同封して編集部あてに送られいとありますが、もしご本人の承諾が得られれば、是非それをグラビアに発表して頂きたいものです。それこそ小生だけでなく、多くの妊婦マニアの切なる願いだと思います。もしそれが皮切りになって、二三月に一度でもよいから、妊婦のヌードやその縛りや切腹擬態の写真がグラビアに現われるようになったら、こんな嬉しいことはありません。現に浣腸こそ技術的に無理だとはいえ、一部の人の嗜好であるマゾ・フォドや切腹擬態写真などは毎月のように載っているのですから。せめてそれらと隔月交替にでもよいから、妊婦のヌードを載せて下さい。妊婦マニアの切なる願いが聞き届けられるよう、重ねて念願して、小生のこの拙い文を終わります。

（おわり）

『ニューフェイス登場』

△梨花悠紀子の贈りもの▽

辻村 隆



水本茂美の初めての縛られポーズ

テーブルを隔てて向いあった梨花悠紀子は、一年有余会わぬうち、随分変貌していた。「凄ごく綺麗じゃないか——」「そうかしら……」

彼女はそれが癖の、下唇をちよいと突き出し気味に、口を軽く開いて声なく笑った。「すっかり、雑誌の人気者だよ。是非会いたって人が多くて、箕田氏も弱っているよ。奇ク見てる?」「ええまあね——。送って貰えれば助かるけど、それじゃ家に分るでしょう? だからソツと内緒で、本屋で買っただけど、店員の人

がジロジロ見ている様で、思わず真赤になっちゃう。一冊一冊違ったところで買うの大変よ——」

「最近ほ撮らないそうだね——」「ずい分撮り溜めなさった筈よ。塚本さんのスタミナには、いつもタジタジだわ。」「ところで、今日、急に呼出したわけは……?」「あのネ……」

彼女はフト真剣な顔になった。云わうか云うまいかと、暫し迷っている様であった。

彼女から、突然電話がかかって来たのが、昨日の夜の事であった。電話口では何も云えないのか、唯、会ってお話したい事があると云うだけで切れた。私は彼女のプライバシーに関して、一切我れ関せずにしてある。

箕田編集長を口説き落して、画家の四馬孝氏が彼女と逢った事も、読者通信のR氏が彼女にラブレターを送った事にも、私は何ら干渉しなかった。人、みなそれぞれの好みがあって、彼女が、それに応じようと、こぼもと、それは本人の自由だからである。

私も折に触れ、知友、同好の友から、彼女の消息を聞かれたが、一旦箕田氏に紹介し、塚本君と彼女が、読者の眼を愉しませるフォートに専念していると知れば、何か、私の役目は一応果した様な気になっていた。だから、彼女の消息は、箕田氏を通じて知っていても、私自身、今更、彼女に逢ってどうしよう云う気は更になかったのである。ひとつには親友の妹を、斯うした立場においた、私のRに対する良心の苛責から多少の後めたさと、淡い悔恨が尾を曳いていたからでもある。

Rは何かの機会で妹の一件を知ったが、私には何も云わなかった。しかし、何処か咎め

るような素振りや、彼の全身から感じとった。

梨花悠紀子は思い切った様に口を切った。

「私、今の会社やめたの——。勿論、辻村さんの責任じゃないわ。でも、厭なことがあって……」

「奇クの件が分ったの——」

「そうよー、それも可笑しな事からなの……」

彼女の、憂いに充ちた顔が、急に大きく崩れ、白い歯を惜しみなく輝やかせて、あでやかに笑った。

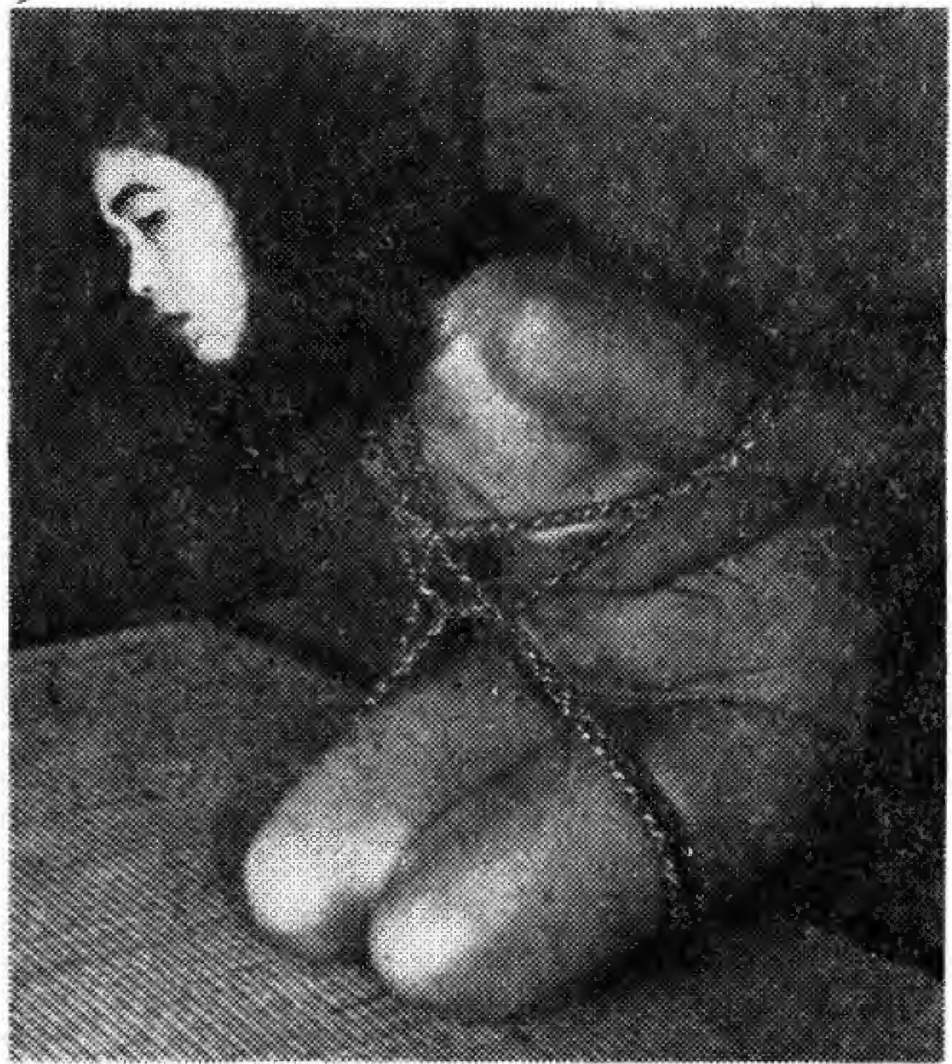
「ホホ、本当に可笑しな事なの——。まるで泣き笑いネ。と云うのはね、此の間、会社で補充の募集をしたのよ。男三人と、女の子三人が見習入社したわ。

挨拶廻りで、その人達が私の課に来た時、女の子の一人が、私の顔を穴のあく程見つめているじゃないの。変な娘？って私もグッと見返してやったら、吃驚した顔付で、私の側へ近寄ると、小声で囁いたの。△梨花悠紀子さん……梨花さんでしょう？……



……って……。私、その刹那、眼前が暗くなる思いで、体中の毛穴が総毛だったの。私の苗字は、頭文字はRでも、梨花って名は、塚本さんがつけてくれた名前よ。謂わば、奇クだけで通る名前の筈よ。

私は、その娘にはものも云わず、逃げるように立上ると、ビルの外へ飛出していったわ。混乱した私の頭を処理する為に……。



『梨花さんでしょ。ネエ、悠紀子さんでしょう。そうですわネ——』

その娘は立った儘、くどい程念を押すの。破れかぶれの気持で、私は黙ってうなづいたわ。

「矢っ張り——凄く奇遇だわ。私、貴女のファンよ——。まさか、お目にかかれるなんて夢にも思わなかったわ——」

感激した口調で、その娘は、私のテーブルの前に座ると、

「私、水本茂美と云います。私の兄が、奇クを買って、読んでいるのを、内緒で見ているうち、すっかりとりこになっちゃって——。私も一度、梨花さんのように、虐められたいと、そんなこと許っかり考えていたわ——」

私は黙ってコーヒを啜っていたわ。こんな虫も殺さぬような女の子が、縛られたいなんて本当かしら、と半信半疑だったの。

「この話信じる——?」

彼女は一気呵成に喋べった。

「信じるとも——、虫も殺さぬのは、貴女だってそうじゃないか——」

「フフ、違いないわネ——。も一つ驚かせたげましょうか——。三時になるとその娘こへ来るのよ。今お話した水本さんが……」

「えッ、本当かい——」

「カメラ持って来たっ——」

「持って来ないよ。何も云わないもの——」

「駄目ネ。ちゃんと準備すべきよ。辻村さんらしくもない……」

「それならそうと、電話で云っておくべきだよ。」

「私からの電話なら、それくらい気がつくと思っただのよ——」

私は急にソカソワした。

「で、その娘どうなの——、例えばさ、フェイスの方は、貴女ぐらい——? 体はどうなの……」

「年は二十二才、私よりひとつ上。背は私より少し低いかな。体はまあまあといったところね。お顔は百聞は一見にしかずよ。私より悪いと云えば、自惚れて聞えるでしょ」

「私の事知ってるのかい?」

「知らないわ。唯、一度ゆっくり逢いましょう」

忽ちにして、会社中に知れ亘るかも知れない。私の隠された半面が、明日にでも曝け出されそうな恐怖を感じたの。

呆んやりとコーヒをのんでいる私のテーブルの前に、ひそと気配を感じて、私は眼を上げると、先刻の女の子が、懂れるような眼付で私を凝視していたわ。

私と同年令ぐらいかしら……

うて電話したげたら、凄く感激してたわー」

「いいのかい、撮して？」

「縛りたいのですってー。あの娘、眼をキラキラ光らせて、うわ言のように、私にそう云ってたわー」

「どうして又、紹介する気になったのー」

「きっと喜ぶと思ったからよー。その代り何かおねだりしなくちゃー」

彼女は悪戯っぽく笑って、私の小指をぐつと握りしめた。

兎角、斯うした処が、彼女の愛される所以だろう。

「会社やめて、大変だろうー」

「平ちゃらよ。そろそろ飽きの来た頃だものー。少なくとも、

私の半面を知っている者の所なんか、危なくておれやしないわ。何時どんな事で分るか知れない。なんて考えてると、オチオチ仕事も出来ないもの。退職のお手当て、山へでも登って、二三泊の旅行して、帰ったら、新らしい口を探すことにするわー」

「相変らず呑気なことを云って

るー」

私は苦笑して、矢継早やに、ニューフェイスに打つ術をあれこれと思索した。

× × ×

三時きっかり、水本茂美は私達のまつ喫茶に現われた。探る眼付と、悠紀子のあげる手がダブって、足早にテーブルに近づいた。

梨花悠紀子に始めて会った時、彼女が素顔の儘で、白粉気一つなかったように、この水本茂美も純真そのものののように、唇の紅すら

ない、素顔の儘の、稍、生毛のめだった顔を赤く染めて、私に会釈した。

その彼女と対比的に、梨花の顔は、流行のシャベットトーンの色彩に、その天性の美を鮮やかに描き出していた。

眩しげに水本茂美は、梨花を見て何か云わうとしたが、再びうつむいてしまった。

「水本さん、御紹介するわね。この人、辻村隆ー辻村さんよ。既に本で御存知でしょ」

呀つ！ と云った顔で、水本茂美は、はね上るように私を見て、慌てて、意味もなく、手にしたハンカチで、夢中で頬をこすった。

眼のやり場に困った様に、わけもなく彼女はハンカチで、しきりで顔をぬぐい、口を蔽った。

「噂を、梨花さんに聞きましたよ。いいお名前ですネ。水本なんて。私が日頃よく聴く、大阪放送の水曜日の深夜放送の水本アナと同じ名前ですな。私は水本アナの大のファンなんですよ。だから、水本さんも好きになれそうだ」

「私も、同じ名前だから、水本アナの深夜放送よくきくのです。とっても魅力的な声ですものー」





「いや、貴女のその声も、魅力的ですよー」
「まあー」
水本茂美は、やっと口がほぐれて、ニコリと笑った。意味のない会話から、時偶話ははぐれるものだ。梨花悠紀子は私達のやりとりを、面白そうに、ニヤニヤして聞いていた。

雑談に交えて私は何気なく切出した。
「ところで、私は今日は何の準備もしていないのです。カメラや、いろいろの小道具もいるしね」
「あら、そんなこと、私、何も……」
「明日にしたら……」

梨花が横から口を挟んだー。

「いや、明日では遅すぎるー」
軽い笑いが渦巻いた。

「じゃあ、どうするのよー」

「三人で車で、我が家まで飛ばそう。

すぐ準備するよ。いいだろう」

女二人は顔を見合せた。私は横を見て半ば強制調に、

「さあ行こうー」と立上ってメモを握んだ。

車を家の数十米先にとめて、私は慌ただしく支度をととのえろと、再び車にのった。

梨花が私の耳許でささやいた。

「私が居ると恥かしいのですって……消えてなくなることにするわ。いいのとっていらっしやいよー」

「痛いー」彼女の抓った腕先を私は思わずなでて叫んだ。

「私ここで降して。いいわネ。じゃあーサヨバイ……」

さよならとバイバイをくっつけて、梨花は足どりも軽く、ステップを降りた。

私は片眼をつぶって合図する。不安げな水本茂美の顔が、固く硬ばる。時間もないので辺りの小さな旅館に車をとめた。石だたみを歩く頃、それでも、彼女は不安と危惧と好奇とアバンチュールの織り交った面持で、いそいそとついて来た。

× × ×

「本にのせるんでしょうー」

もじもじして彼女は小さく尋ねた。

「多分ねー」

「だったら、私、顔を変えたいと思います」

「東浦ひかるも最初はそう云ったよ。気の済む様に変えたらいいよー」

「お化粧なんて余りしないから、私下手なんですー」

「だったら、私がしてやろうかー」

「お願いしますわー」

彼女は素直に、私の膝と膝とをつき合せて、おっとりした顔を差出して眼をつむった。

かくもあらんかと、準備して来た数種の化粧品で、私は彼女の顔を殊更にどぎつくし、

稍細い下り眉毛を強く太くつくった。アップにした髪を解くと、意外に毛は長かった。分け方を変えて、バサリと自然の儘にした。

鏡に写った自分の顔に水本茂美は、驚いた様子だった。

「きつい感じですよネ。でも、これなら全然私ってこと分らないわ。自分でも眼を疑うくらいだもの——」

「梨花さん、どうして一緒だと厭なの——」

「あの方、余り美しいから……、私が何だか惨じめになりそうに思えたの——。でも私の本心は、あの方の縛られるところ見たい気持ちで一杯なんです……」

「いつか、一緒に縛る機会もあるさ——、じゃあ始めるよ……」

彼女は心細げにうなづいたが、心なしか肩が細かく震えていた。

汚れを知らぬ乙女の、しかも始めての緊縛となれば、彼女の心臓は、訳もなく躍っていたに違いなかった。

誰にでもそうである様に、私は先ず、彼女の脱衣から徐々にヌードへと移行に、フィルム一本を無駄にした。

型通りの緊縛ポーズを始めたが、彼女は素直に淡々として従った。飛び込んで旅館が開

放的な為、私は辺りに気をかねた。そんなせいか、暇と根のかかる強い縛りを避けて、塚本好みの初歩のポーズが続いた。読者の方にはこの辺りを、写真で見て戴く方が手っ取り早い様だ。

何時も乍らの緊縛の過程を、長々と書いた処で、これ総て、『緊縛鑑賞用女性』の蒸し返しであるし、『私責めて下さい』の悪流に過ぎない。

約一時間半——、彼女に疲労の色が見え始めた。最初は深追いせず、この辺りでやめるべきが、次の段階への賢明な方法である。

最後を数枚パチパチと、乱暴にとり終えると、私はホッとした。

「どう痛くなかった——」

優しくかけたいたわりの言葉に、彼女は二の腕をもみ乍ら、微かに首を振った。痛かったとも、痛くなかったとも受けとれる、女性の潜在的なレジスタンスかも知れない。

ともあれ、彼女が緊縛の経験が始めてであった事は、彼女の動作のフシブシに判っきりと読みとれた。

「どう、又、この次写してもいい——？」

「ええ、今日ぐらいでしたら……」

「いや、段々ときつくなるよ。今日は初歩の

第一段階なんだ——」

「こわい見たいですわ——」

と云うものの、敢えて否定せぬところを見ると許容したらしい。

「モデル料だよ——」

私は塚本氏がいつもモデル嬢に支払うと同額を、彼女に握らした。或いは素人だから拒否するかとも思ったが——。

「すみません——」と彼女は当然の様にそれを納めた。

肉体を酷使された報酬として、当然だと云う素振りが、現代娘の割り切った半面を覗かせていた。

受取ってもらった方が気が楽だ。でないと只ほど高いものはない。私は梨花が最初、金を受取らなかった代り、結局、高い腕時計を買ってやってモデル料に数倍する金を使い、その後二三の服や、生地を買ってやった事を思い出し、反ってよかったと思った。

梨花にとって変わるだけのマゾ性のあるやなしやは疑問であるが、兎も角、最近マンネリのグラビヤに、又新しい一人の新人を送りこんで、バラエティに富むことになるかも知れないと、私は、箕田氏の嬉しそうな破顔一笑をフト臉に描いて見た。

あちこちからの児童審議会辺りの肅正要望の声に、この儘奇クを続けて行くか否かに頭を悩ます箕田氏始め、編集部に、この一文とフォトを送って、果して、之が陽のめを見るか否かは分らないが、折あらば、奇クの誌面を賑わすだろうと、私は一抹の希望を托して書いて見た。

奇クの如き本が一種類ぐらいあっても、同好家の潤いともなるし、衆人の眼に曝される本ならば、心なき軽非浮薄の輩に毒するものにならぬとも云いきれない。

タメになる雑誌ではないと、辻村隆自身も分っていても、所謂タメになる本許りだと、

如何に世の中が味気ないか——、これは私をも含めて、中年男性の生活の谷間の、憩いの清涼剤である事を、審議会諸氏のエラ方は分って戴きたいと思う。

あれこれと、奇クの将来を考えるうち、水本茂美は、もとの素顔の、おっとりとした、誰が見ても、それと分るB・G姿に逆戻りした。

「何れ、梨花と一緒に撮ろうよ。貴女のその容姿なら、ちっとも彼女に劣りやしない。誇りと自信をもつんだネ」

彼女はその言葉が嬉しかったらしく、こくりくりと二度許りうなづいた。

既に外は夕闇も落ちて、八時に近かった。

ミナミのネオン塔がくっきりと夜空に映えて、南海電鉄のナンバ辺りの空の明るいのはナイターか。テールエンド南海ホークスの快進撃にどよめく、喚声が聞えるようだ。

無言で凭れるように水本茂美は私に寄り添った。今日一日の己が身の変身と、激しい刺激に、はてる体を持て余すかのように、緊縛にしばれたかいたなを、そっと私の腕に巻きつけて来た。

近い将来——、彼女がどう変貌して行くか——、或いはこれっきりか——。それは私にも、水本茂美にも分らない、明日への課題であるう。

女相撲思い出話

津 谷 正 春 文と画

昭和九年秋名古屋の郊外で私は女相撲のピラを見付けた。

田舎道の駄菓子屋の店先に四ツに取組んだ

女相撲の写真入りで「大日本勇婦団」としてあった。

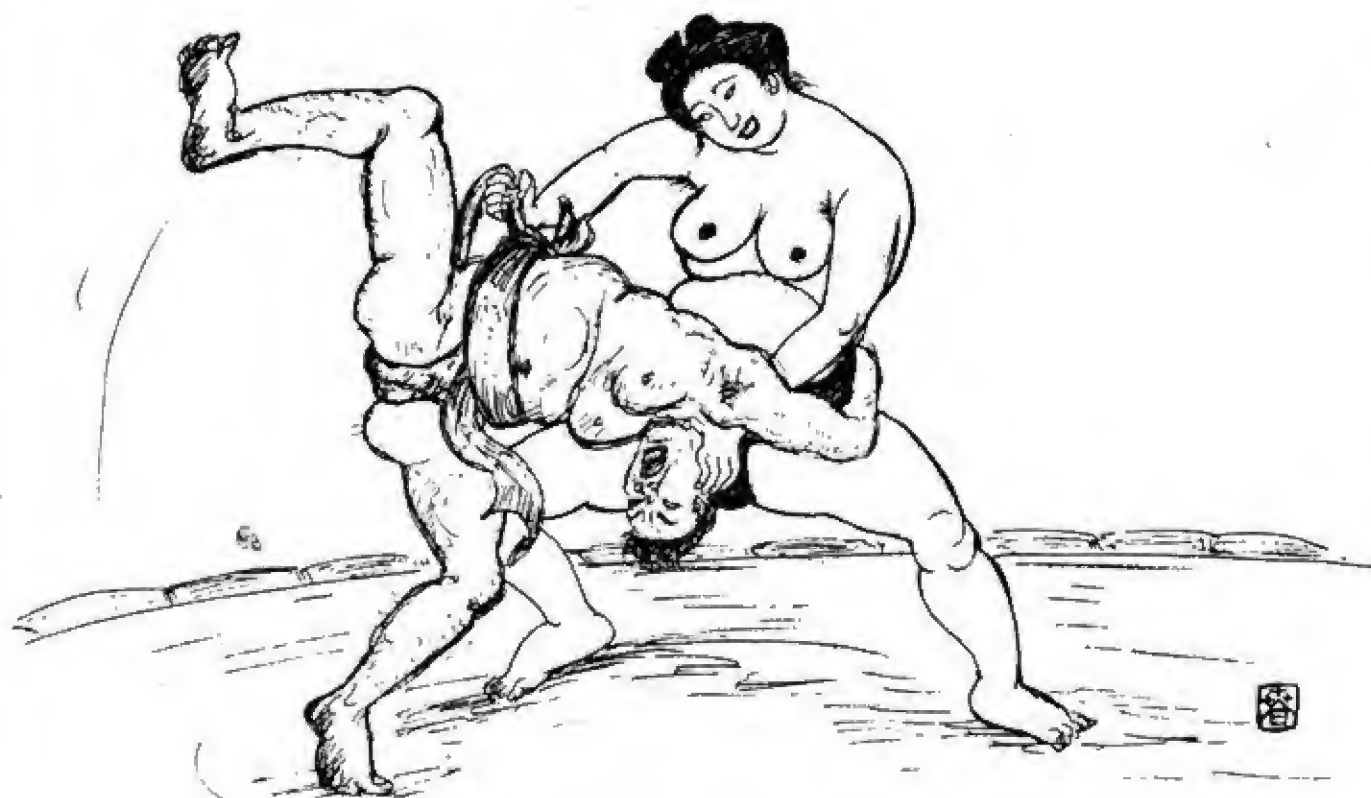
探し探し行くと、畑の中に小屋が見付かつ

た。木戸銭は幾らであつたか忘れたが中へ入ると中央に土俵が築いてあつて、その三方が見物席——と云つても筈が敷いてある丈のもの、脱いだ下駄を手に持って前から二三列後ろに坐つて見物することにした。

見物人は大体この辺りの村のお百姓らしく中年の男が殆んであつた。五六十人位しか矢張り居なかつた。

土俵の正面に一寸した横敷があつて太鼓が置いてあつた。白い鉢巻きをして櫓がけの年増女が出て来て、この太鼓を叩いて八木節を

唱った。四人の若手の女が土俵へ出てきて、



今度は盆踊りのような踊りを太鼓に合わせて踊った。土俵の上では化粧姿で角力甚句でもやってほしかった。

どういふ男か四十がらみの、大きな男が稽古禪を締め込んで女力士達と角力をとった。女力士は例によって白シャツ猿股の上に色あせた黒い禪を締めこんでいた。

その男は女達の相撲の先生かも知れない。女を吊り出したり時にはズデンドウと土俵の真中へ投げ出されたり如何にも汗を流し流し楽しそうであった。

相撲の番数も相進みと云いたい総勢七、八人の女力士では取組みも少く五人抜きや腹の上のモチ搦き、又大井川の蓮台渡しと言うのがあった。これはこの団の横綱の二十五六貫はあろうという太った女力士が五人の女力士を前後左右に抱え肩へと乗せて土俵を廻るのである。十四五貫平均にしても七十貫位の重量を持ちこたえるので河馬のように太ったその女力士は、汗をタラタラ流し首や肩に喰いこむ紐に眼は赤く充血し歯を喰いしばって土俵を一周するのが勢一杯であった。

た。

若いやせた男が禪を借りて飛入りをした。三人の女力士が代るがわる相手になったが、この男どうしても勝てない。女達は面白がつて、「これでも男をヨーこのヘッピリ腰!!」と言いつつ後山の立禪をヒツ攪むと女の腰にしがみついている男の尻を吊り上げて振り廻しヒツくり反してしまった。「アッハッハア……」女達は声を揃えて笑うた。

所が、その男は立ち上ると又も女に組み付いて行つた。「この野郎!! まだ来るか!!」どないしてやろうかい」女は双差し男の腕を内にして締め上げた。

男は痛さをギイと口から唾をとばしてこらえたが、女はグイグイ吊り気味に押して行つて土俵際で、「こん畜生」と叫ぶと振り廻しながら突きとばした。男は土俵から転がり落ちたが、そのままうづくまって顔をしばらくは上げなかった。

女達は笑いながら引き上げて行つた。私もここで引き上げることにして小屋を出た。



「過ぎし日の告白」

赤ちゃんごっこ

渡部かね

プロローグ

米国の精神分析学協会では一九六一年の暮「女性の同性愛に関する談話会」を開き、その席上、女性であるキーステンバーク博士は、「アメリカにおける女性の同性愛の具体的表現の大半は『赤ちゃんごっこ』である。彼女達は生きた人形で遊んでいる」

と述べたという。

私はこれを知って驚いた。私達が、私達だけの秘かなプレイとして行っていた事、それは恐らく誰も知らない、私達だけの事だと思っていたのに、同性愛の具体的表現の大半だとは――

とすれば大方の読者の中には、私達と同じ経験をなさっている方も少くないのではなか

ろうか、そうした方達と共にある奇クに私は思いきって、私達のプレイの一端を綴ってみたいと思う。

「今日は貴女が赤ちゃんになる番よ」

アパートの戸を開けるや否や彼女はそう言いました。

私達、即ちかく言う渡部かねと、彼女、即ち松井啓子は、丸ノ内のM商事に机を並べる平凡なオフィスガール、今の言葉でいえばB・Gなのです。共に年は二十二、高校こそ違え、同年に入社し、そのままずっと経理課に机を並べた私達は、期せずして単なる友情以上のものを感じてきたのでした。

自宅から通勤する私はともかくとして、彼女は継母との折合もあまりよくなく、たまたま若い継母に実子の出来たのを機会に、中小企業ですが、鉄工所の重役をしている父親にねだって、二間つづきの、バストイレ付きの可成り高級なアパートに入ることとなりました。ここが即ち私達だけの城となっているわけです。

前置きが長くなりました。ソファに深々と腰を下した彼女は、私の訪れるのを待ちかねていたように、

「さ、何時もの規約を読んで頂戴。今日はあたしがお母様で貴女が赤ちゃんなんだから。」
「ええ、いいわよ、じゃ読むわよ」

規 約

松井啓子と、渡部かねは、交互に母親及びそのベビーとなり、赤ちゃんごっここのプレイをする。その際、相互に左記の通り約束する。

一、ベビーはママに絶対服従すること、
一、ベビーはママの行動に抵抗する場合はママの加える力以上の力を決して出してはならない。

一、ベビーは、歩くこと、逆うことは出来ない。寝返りはママの手をかりた場合のみうつことが出来る。

一、ベビーは、アイウエオの母音以外発言してはならない。

一、ママは、細心の注意をもってベビーを養育し、いささかもベビーの身体を傷つけてはならない。

一、赤ちゃんごっこの方法は、母親たるべきものの、創意工夫に完全に委ねられ、ベビーは母親の指示に絶対に異議をさしはさんではならない。

右の通り約束する。

昭和三十六年十月十三日

松井 啓子 ㊞

渡部 かね ㊞

「どう、これでいいでしょう。」

「いいわ、では、はじめ。いいこと、もう貴女は、何もしゃべっちゃいけないことよ。さ、私の赤ちゃん、ベッドにねんねして。」

私は彼女のベッドに横たわりました。さあ何がはじまるのでしょうか、されるままに、私はじっと目をつぶって体から力をぬくのです。ピッタリと閉された窓からは日の光がガラス越しにさんさんと降りそそぎ、部屋は汗ばむような暖かさです。

「えーと、寒暖計はと、二十五度、これなら風邪をひくことはないわ、さ、ベビーちゃんポンポンになって、ベビー体操をしましょうね、いいこと、さ、ぬぎましょうね。」

そう言いながら彼女は手ぎわよく、私のブラウス、スカート、シュミーズ、ブラジャーとぬがせてゆきます。とうとうパンティだけになってしまいました。すると彼女は、
「さ、パンティもとりましたよね、赤ちゃんはスッポンポンが一番いいのよ」

思わず私は恥辱に両手でパンティを押さえました。彼女の手がグット力が入って私の手

は、頭の所にバンザイをしたかっこうにもちあげられてしまいました。抵抗しない約束、私はどうすることもできず、彼女の手でパンティははぎとられてしまったのです。でも赤ちゃんなんですもの仕方のないことですわ。

「お天気がいいからベビー体操をしましょうね。はじめは、手の運動、いいこと、ハイ、一二、一二、一二、一二」

枕元にまわった彼女は、私の手をもって、左右に、上下に、かけ声と共に開いたり閉じたり。

「次は足の運動、ホラホラ、そんなに足に力を入れてはだめでしょう、ね、お約束よ、お約束なんていったって、赤ちゃんには分らないわね、でもお約束なのよ、いいこと、ハイ力をぬいて、そら、一二、一二、一二」

足首をつかんだ彼女は、私の足を曲げたり開いたり、私は思わずも、両股をびったりつけてしまうのです。

「ア、ア、ア、ア」

「これこれ、ベビー、何を言ってるの、そんなに力を入れては体操できませんよ、力をぬいて、もっと、力をぬいて、ハイ、一二、一二、そらそら、ママのするように、もっと股を開くのよ、そら、一二、一二、そうそう、

もっと、足をあげて、まげましょう、一二、一二、一二」

私はこうしてママのするとおり、ベビー体操をされるのでした。

「ああ、くたびれた、ママ、暑くなっちゃった。どれ、ママもぬごーっと」

シュミーズ一枚になった彼女は、キッチンに行つてごごとやっていました。やがてお盆に山盛りのサンドイッチと、ミルクをもつて入ってきました。

「お食事にしましょうね、ママはサンドイッチ、ベビーちゃんはミルクにしましょう。」

ロースハム、サラダ、卵のはさんだサンドイッチのいいしそうなこと。それにインスタントコーヒーのなんともいえない香りまでして、私のお腹はグーッとなるばかりです。

「ベビーちゃん、ハイ、ミルク」

哺乳壺を口にあてがわれた私は、否応なしにミルクを流しこまれます。彼女は口にサンドイッチをこれ見よがしに頬張りながら、哺乳壺を私の口の中に押しこむのです。

「さ、ベビーちゃん、たんとお上りね、このベビーは体重が可成りあるから、ミルク一リットル用意したの、哺乳瓶で五本、全部のまなくては駄目よ、さ、もっと、もっと、

強くお吸いなさい」

四本目まではどうにか私はのみました。もうお腹がゴボゴボいうようで、あまりミルクのすきでない私は、

「イ、イ、イー」といいながら首を左右にふります。

「いやなの、いけません、栄養が足りなくなります。全部のんでおしまいなさい。いいこと、ホラ、お口をあけて、のまないの、のまないと、お尻をつねりますよ、さ、いい子だから、全部のみましょうね。」

とうとう、無理に私は一リットルのミルクをのまされてしまいました、何だか、胸のあたりまで、ミルクがつかえているような感じがします。

「さ、ネグリジュをきて、お食事がすんだらねんねしましょうね」

彼女は手ぎわよく、私に彼女のネグリジュを着せると、蒲団をかけ、子守唄を歌いはじめました。

「ベビーは、いいこだ、ねんねしーな」

私は目をつぶりました。だけどとても眠るどころではありません。何故かって、朝、家を出る時用を足したっきりの私は、さっきのまされた一リットルのミルクのため、猛然と

尿意が襲ってきたのですもの。どうしたらいいのでしょうか。歩くこと、はうことを禁ぜられしゃべることも許されない赤ちゃんである私は、どう意志を伝えたらいいのでしょうか。

私は身もだえして、

「イー、イー、イー」と訴えるのでした。

「何よ、ベビーちゃん、どうしたの、どっか痛い、眠いんでしょう、さ、ねんねしましょうね。」

「イー、イー」私は仕方なく、恥づかしいのを我慢して、お尻をゆすってみせました。

「オー、オー、分った、分った、おしっこがしたいのね、そうお、おむつあてがうの忘れちゃったわね、ごめんなさいね、でも、いい子なこと、ちゃんと、おしっこ教えられるのね、そうお、いい子なこと、じゃおしっこさせてあげるわね、一寸まっててよ」、

彼女が取ってきたのをみれば、おお、それは病人用の差込便器ではありませんか。

「だっこして、シーシーさせてあげたいんだけど、この大きな赤ちゃんでは、だけないわね、じゃ、だっこした積りになりましょう」

そういいながら、彼女は私のお尻の下に差込便器を挿入します。ああ、何と恥づかしい姿でしょう、でも約束です、反抗することは

出来ないのです。私の後にまわった彼女は、両手を私の腋の下に入れると、グイとばかり私を後から抱き起し、両手を、私の膝の下に当てがって、グッと抱えあげたのです。私のお尻は、差込便器の先の方に乗ってはいませんが、丁度恰好は赤ちゃんのシーシーと同じになりました。

「ハイ、おしっこしましょうね、シー、シー、シー、そら、シー、シー、シー」

さっきまであんなに尿意を催していたのに、どうしても出ない私です。辱恥心とはこんなに激しいものなのでしょうか。

「シー、シー、まだ出ないの、シー、シー、出なければ出るまでこうしてしましょ、少し重いけど、ママも我慢するわ、そら、シー、シー、シー。出ないのねー、じゃ、お腹さすってあげましょうね。」

彼女は後からだいたまま、左手はそのまま私の膝の下にかけ、右手を離すと、私の下腹を強く押すようにさすりはじめました。

「ア、ア」

お腹を押された私は、とうとうこらえ切れなくなって、私は排尿を余儀なくされたのでした。カッカッとはててくる頬、荒い息づかい、思わず私は、

「ママ」

といって、彼女にしなだれかかりました。

「おお、いい子、いい子、よくシーシーできましたね、さ、ふいてあげましょう、そしておねんねしましょうね。」

手早く後始末をした彼女は、上手にネグリジェを私に着せると、一緒にベッドにもぐり込んできました。添寝という訳でしょう。

グツタリ疲れた私は、ついうとうとしかけた時です。私の額に手をあてている彼女の気配に気がついた時、

「おや、もうお目々さましたの、一寸へんね熱があるみたい。お熱はかってみましょうね。お病氣だと大変だから。」

筆筒の引出しから検温器を取り出した彼女は、水銀をふり下げると、何と、又私のネグリジェを開き、パンティに手をかけるではありませんか。

「ベビーちゃんは腋の下では計れないわね、よく腋を押さえていられないから。フランス式に肛門検温しましょうね。ハイ、手を借してあげるから横になって、そうそう、それから、膝を曲げて、よくお尻を見せて頂戴、痛くないわよ、ワセリンをぬってあるから、そら、ね、痛くないでしょう、このままで、

五分じつとしているのよ。」

お尻に検温器が差し込まれたまま、じつとさせられている、何とあられもなく、被虐に満ちた光景でしょう。

「さ、もういいでしょう、赤ちゃんは肛門で計るのが一番安全で正確だってことは家庭医学書にはみんな書いてあるし、欧米殊にフランスでは大人も肛門検温するっていう事よ、でも、肛門検温は腋の下より、三分から五分高いそうよ、こんなこと赤ちゃんに言ったら分んないわね、おや、七度二分、五分引けば六度七分だから何でもないんだけど、腋下体温で七度二分、あったことにしましょう。いいこと、ベビーちゃん、少しお熱があるのよ、分った？」

彼女は丁寧に検温器をアルコールでふいてしまいました。

「はて？ どうしたんでしょう、この熱は？ 風邪らしくもないし、アーンとお口あけてごらんない、アーン、アーン」

「アーン」

「おお、いい子、いい子、何ともないわね、喉も赤くなってないし、おお、そうだわ、ベビーちゃん、ここ二三日、うんこが出なかったわね、そう、そう、便秘してるんだわ、だ

からだわ、便秘の熱よ、浣腸しましょう。浣腸すればすぐ直るわ。用意しますから、おとなにねんねしてるのよ、すぐ気持ちよくしてあげるからね。」

あつ、ママ役はうらやましい。あのおぞましい浣腸を、彼女の手で施されるのだけ。今日はまだトイレにいていないけど、昨日だってちゃんとお通じあったのに。私、便秘なんかしていない。でも言葉は出せない約束、どうすることも出来ず、私は彼女のなすがままに浣腸されるのを、今か今かと待っているままなのでした。

「さ、用意出来ましたよ。まず浣腸をしましょうね。ベビーだけど、このベビーは発育がとってもいいから、五〇%グリセリンを一〇〇グラムしましょう。うちの浣腸器は五〇グラム入りしかないから、そうね、二度すればいいわね。はい、足を揃えて上にあげましょう。駄目、駄目、そんなに力を入れちゃ、もっと力をぬいて、そんなに力を入れちゃ、ママの力で足を持ちあげられないじゃないの、そうそう、よいしょと。駄目よ、そんなに力を入れちゃ、力をぬいて、駄目ね、痛いわよ。赤ちゃんは何も知らないんだから力を入れちゃ駄目。」

そう言われても、恥かしさに身が自然固くなるのをどうすることもできないのです。

冷い液が腸管を刺戟するその気味の悪さ。

「このままで、一、二分してから、二本目をしましょう、その方が効果があるわ。」

浣腸好きな彼女の言葉通り、最初のうちは何でもなかったが、一二分すると、成程グーッと便意が襲ってきました。じっと見ていた彼女は、

「フフ、きいてきたらしいわね、うちのベビーちゃんは、おりこうだから、ママが言わなくてもちゃんと我慢できるわ、いい子ね、じゃそろそろ二本目をしましょう、いいこと、そら」

ああ、二本目、合計一〇〇CCのグリセリン溶液を注入された私は、最初の五〇CCで可成りきいてきた上に、重ねての五〇CCに思わず、

「アア、辛抱できないわ」と叫んでしまいました。

「これ、黙って」ピシャンとお尻をたたかれ、ハッとした私、一瞬、便意は遠のいたと思う瞬間、更に激しく迫ってくる、グーッと下腹が鳴って、又一しきり強く、

「ア、ア、ア」洩らすまいと私は赤児である

ことも忘れ、力一杯膝を合わせ、こぶしを握りしめ、

「許して、もう我慢できないわ、早く」

と叫びざま、トイレへ走り出そうとしました。

「約束よ、」強く言い放った彼女は、荒々しく私をベッドに押し倒すと、何時の間に用意したのか、真白な晒のおむつを手早くさしはさみ、何処でどうして買ったのでしょうか、大人用と思われる大きなゴムのおむつカバーで、手際よくつつんでしまったのです。

「さ、これでいいわ、ベビーちゃん、もう我慢しなくてもいいのよ。出ないの、出なければ、もう一度浣腸しましょうか。どれ、お腹さすってあげまちょうね、時計の針と反対の方向に、ホラ、ぐるぐるするとね。もう一度、そら、グルグルグル、ね、気持ちいいでしょう」

おむつの中に排便、何とも恥ずかしいことながら、一〇〇CCの浣腸をされた上に、お腹をもまれては、遂に我慢の限界に達した私は、もう恥も外聞も忘れてドッとはかり一気に排泄するのです。おお、その何と気持ちのよさ、そしてその次の瞬間、排泄物のまっわりつく気味悪さ、鼻をつく異様な臭気、どうすることも出来ないもどかしさ、

「あ、あ、あ」

「といって私は赤ちゃん言葉で訴えるのでした。」

「どうお、いい気持ちになったでしょう。さ、おむつ取り替えましょうね、おお、おお、沢山出たこと、きれいにふいてあげますよ、さ、これでさっぱりしたでしょう、もうお熱も下ったでしょう。今日はいいい子だったわね。ベビーちゃん。若しね、ベビーが言うことをきかなかったら、ほら、この紐で縛って、真黒な押入れに入れておいたり、ね、この可愛らしい小さな轡で、お尻をピシピシたいて折檻してあげようと思ったんだけど、あんまり

今日は大人しいんで、折檻する時がなかったわ。今度、あたしがママになる時は、ベビーがどうしてもいやするようにさせて、うんと折檻してやるんだわ、いいこと、じゃ今日はこれでお終いにしましょう、どうもお疲れさま。」

「ああ、やっと解放されたわ、何時もながら貴女のママのアイデア、堂に入った素晴らしさね、恐れ入ったわ、でも折檻までされちゃかなわない。」

「うそおっしゃい、うんと折檻されてみたいくせに。」

「ウフフ、それにしてもお腹すいたわ、貴女

はサンドイッチお皿一杯、私はミルクだけでしかも流腸で、お腹空っぽにされちゃうんだもの。」

「ごめん、ごめん、今日はあたしが、いえ、ママがうな井おどるわ、行きましょうよ」
「ええ、いましょう」

かくて一日の赤ちゃんごっこは終わったのです。来週は私が母親で、彼女がベビー、この一週間、私はどんなアイデアで彼女のベビーを思う存分折檻してやろうかと、今からわくわくする思いなのです。

(おわり)

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円

復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	二百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦特第一集)	定価二百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦特第三集)	定価二百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円

復刊第56号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第57号	(サド特集第四集)	三百五十円
復刊第58号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第59号	(悦特第四集)	定価二百円
復刊第60号	(昭和35年5月号)	定価二百円
復刊第61号	(昭和35年6月号)	定価二百円
復刊第62号	(悦特第五集)	定価二百円
復刊第63号	(昭和35年7月号)	定価二百円
復刊第64号	(昭和35年8月号)	定価二百円
復刊第65号	(昭和35年9月号)	定価二百円
別冊1号	(告白、手記、体験)	定価三百円

特に定価の半額に奉仕いたします。
(第一号より第六十五号迄の内、本欄に欠号の分は全部売切れました。)



愛^マ好^ニ家^アの記^ノ録^ト

——かぎりなく甘美なるもの——

とやま・かずひこ

ヤミ汁

いつもは、昼をあざむく明るい空だが、こ
んやは、あかりを全然つけないので、とても
くらい。六人の親しいグループが、月に一回
集って、各自持よりの材料を手あたりしだい
に投げ込み、これを煮て、ナベを囲み、強い
洋酒で、ヤバンな夕食会を催す。むかし流に
云えば、ヤミ汁の会だが、そのときにでる話
題がとてまたのしい。

今夜は、出版社を経営するS氏邸が会場で
美しいS夫人が、会のリーダー。
できるだけ、ふだんは口にしない材料を、

というオフレが回っているので、かずひこは
臭みのつよい羊肉を、しこたま抱えこんで出
席したわけだ。

ふだんは、美食になれた、有力者たちなの
で、こうして、おかしな、馬の肉とか、ショ
ーチュー、くさりかかったチーズ、ウジのわ
きそうな、サケのクンセイなども、かえって、
風変りな味が喜ばれる。

あかりといえは、せいぜい、ナベの下火
くらいのもの、仲間の顔と手が、わずかに、
ポーツとみえるていどなのだ。

かずひこのとなりには、S夫人が座ってい
る。体臭と、息づかいで、かなり酔いのまわ

ってるのかわかるのだ。

『ハイ、どうぞ』

と、美しい声で、小皿に『ゴチソウ』を盛
りわけてくれた。

そうしておいて、云ったコトバが、うれし
いのである。

『まったく、ヤミ汁って、おもしろいわね。
これじゃ、タンを入れてもわからないじゃな
い……』

その通り。いいえ、お美しいあなたのモノ
なら、タンでも、なんでもおいれくださって
もかまいませんし、ませれば、ませるほど、
料理の味がよくなり、食塩などいれる必要が

なくりますから。と心の中でつぶやく。

むかし、ある東洋の国の料理に、複雑な味をだすために、本モノの処女の聖なる血や、その体から流れでる、体液まで利用したというのをきいたことがあるが、ヤミ汁に事よせて、S夫人の、タンはおろか、すまし汁用に、塩っぱい水を吞ませていただけたら、それこそ最上のごちそうだろうと、ひとりおもったことだった。

水 キ キ ン

東京は、いま深刻な水キキンにおそわれている。ビルのトイレも、水がなくては、完全に機能がマヒ。だから、週刊誌(週刊現代・5月27日号)に、こんな小話までがニュースとして扱われるワケだ。

東京地方では水不足とやら、一日の大半を断水では、渴く方をくみおきの薬罐にいやしても、ところきらわぬデモノは始末に困る。花はずかしき乙女が、洗面器の水を捧げて水洗トイレへ通う姿など、とても正視できるものではない。といって、ソノマンマじゃ塵もつもって山……。

新宿に、新しく構えたかずひこのオフィスは、高台で見晴しはよい代りに、断水の程度

はひどい。オフィスワ이프のR子さんも、用をたしたあとは、恥づかしそうに、バケツで流しているが、ときには、その水にも不自由をしてみよう。

『ボクもはいるから、流さなくてもいい』と、ワザと、かの女の使用直後、水の不足のときをねらって、あとを使用する口実をつくる。いくら恥づかしくても、水のないのはどうしようもなく、二十才の麗人のお使いあとへはいるたのしさを、ときどき味わっている。こうなると、水キキンさまさきだ。

足 を 洗 う

若いひと十人ばかりと、奥多摩へハイキングにいった。五月六日の日曜日。

御獄駅で電車をおりて、河原へ下る。川のむこうの故河合玉堂邸を、転用した『玉堂美術館』を見学して、そのまま川まで岩を伝っておりてみた。

まだ解禁ではないが、若アユが、チラチラと流れのなかに泳ぐのがみえる。

美しい水に見惚れて、手を洗い、ついでに顔をあらうことを思いたつ。そのときだ。

『待ってて……いま足洗ってるから』
上手から、きれいな声。

同行のE子さんだ。

かの女も、流れの美しさに、つられて、クツをぬぎ、白い素足を水にさらしていたのだ。『いいよ。かまわない』

このチャンスのをがすことはできない。

一メートルほど上流で足を洗う、かの女の汚れた不用の水は、まともに、下流のこちらまで流れてくるリクツになる……。

不浄の水だって、喜んで呑みたいかずひこだ。流れる、つめたく澄んだ水に、かの女の足の味を、たのしむ心地して、しばし、流れに手を、顔をひたす。

奇妙なことに、かの女、口では『待ってて……』と、こちらを止めておきながら、しかし、かまわず、そのまま、流れに、ヒザまでひたして、指のまたまで洗う。こちらが、顔を洗うのを横眼でみながら……。

敷かれましょー

観光新聞の5月21日号に、すばらしい『あちらの話題』が、シャシン入りででている。

男のダンサーを馬にして、美しい踊り子たちがまたがり『草競馬』の音楽に合わせて、広いステージではしらせる……これは男をシリの下に敷きたいと願う女の欲求と、こんな美

女に……と願う男の欲望を、芸術的に描きだした野心作云々と、解説され、実際に、半裸の美女（うしろ姿が残念）を背にのせて、這いずり廻る幸福な男性の姿が馬をおもわせて印象的だ。

白馬と美女

おなじ日の『内外タイムス』夕刊には、スクリーンでおなじみの、ドロレス・ハートがさっそうと、裸馬に馬のり。『だって、乗ってみたなら、馬の首が、私の足間で、バカに長くニ्यूツとのびて』と、かの女のオシヤベ

をいれ、馬上で笑声のフォトを紹介している。馬の首が、足間に……とすばらしい表現である。

音

関係会社のBG、礼子さんが、いちど、ナイトクラブをみたいという。ちようど、招待されていたので、小雨をおかして、でかけることにする。

クルマをおいて、しばらくすると、かの女、フト立どまり

『イヤだわ、わたし、おなかが空くと、鳴る

の……』

と、恥づかしそうに云う。

なるほど、かすかではあるが、ときどき妙音が、おなかのへんできこえる。

『お茶ばかりのんで、ごはんたべなかったでしよ、これ水の音よ』

からだを振りながら

『なんだか、ボチャ／＼云うみたい』

という。からだのなかの水。その音まできかされては、呑みたくなってしまう。その水の出てくるありさまを想像したら、たまらなくなってしまう。

〈体験、告白手記〉

禪 義 兄 弟

江 戸 禪 男

ボクが兄貴に逢ったのは、去年の秋だった。

房総の郷里で親父の手伝いをした二カ月の夏休みが終り、再び学生生活にもどるために帰った東京は、まだ残暑がきびしかった。

た。レポートや課題の整理が思うようにはかどらないので、気分転換にボクは久しぶりに銀座に出た。

西部劇をみて映画館を出たが、西日がまだ高く、たちまちにYシャツがぬれるよう

な暑さはたまらなかった。冷房のきいた映画館で、いったんはひっこんだ汗が、再びふき出したようだ。うんざりする暑さのラッシュ時の人ごみに混ってあてもなく歩きながら、ボクは目の前にそびえたったトル

コ風呂の看板をみてふと気まぐれにとびこんだ。

入口でチケットとひきかえにタオルと小さな石けんが渡され脱衣場に上がった。夜にはまだ時間があるせいか思ったより、閑散として人影はまばらだった。ボクはのびをして鉄平石をはめこんだ大風呂に身体をしずませた。ことのついでに階下にある岩風呂と蒸し風呂に入り、汗を流し、冷水のシャワーを頭から浴びた。

滝のような激しいしずくをはねとばす弾力のある体をすぐ後からみつめていた男がいたのをその時は知らなかった。さっぱりと汗を流した気分は爽快で僕はタオルで身体をこすると脱衣所の中央の扇風機の前に立った。目の前にはめこんである大鏡をかこんで左右にならんだロッカーのまわりに数人の浴客が涼んでいたが、鏡に映った男たちのなかで、ボクはずばぬけて遅しかった。

中学時代から水泳部できたえ、現在も水泳部で練習している身体は無駄な筋肉がひとつもなく、流れるような四肢はボクの自慢だった。元来が浅黒い肌は、合宿練習で灼けたうえに、合宿が終ると近海漁業の父

を手伝って二カ月近く、六尺禪一本の生活を過したために、赤銅色に黒光りしていてまるで彫刻のようだった。

禪の跡がひときわ白くY字型にきざみこまれ、人の目をみはらせるほどくっきりしていた。充分に涼んでからロッカーから衣類をとり出し、ボクはいつものように禪をしめた。今朝締めかえたばかりだったが、あせっかきのボクの禪は一寸しめっていて気持ちが悪かったが仕方がない。前袋を思いきりさげ、尻にまわした禪を力いっぱいひねって腰にからげながら、ボクはその時、フト後に強い視線を感じた。しかしボクは慣れていた。東京に出てからの三年間の毎日、ボクはプールでも銭湯でも、かならずみつめられていたのだ。

原因は、たくましい体と六尺禪だった。老人でも少ないのに若いボクが六尺禪を愛用しているのが東京の人には珍らしいのだ。しかし房総の網元の子と生れ、ものごころついた時から禪一本で海で育ったボクには、今さらパンツなどは気持わるくって、はく気にはなれず、合宿でも下宿でも堂々と晒の六尺禪を愛用していた。理しは自分でもわからないが、とにかく理屈ぬきに禪

が好きだから、他人から珍らしがられても、ひやかし半分に眺められても平気で、銭湯の鏡の前では、わざと大いばりにみせびらかしながら誇示することになっているのだ。だからその時もまたもの珍しげにみる奴がいるぐらいに思ったのだ。ぐいと力をこめて締め終り、何気なく鏡を眺めた時、ボクは一瞬間ハッとした。すぐ後にボクとならんで、浅黒い体に六尺禪一本の男が写っていたからだ。

一瞬、錯覚かと思ったが、現実だった。ボクは自分の目をうたがった。上京してからの三年間に、水泳部の仲間をのぞいて、はじめて禪一本のたくましい男と逢ったからだ。しかも東京の下真んなか、銀座の浴場で逢うなどとは思ってもいなかったからだ。隆々とたくましい体にもましてボクの目をみはらせたのは、胸から続いて体中くまなく密生している毛むくじゃらの筋肉質に、きりたての六尺禪はまぶしいぐらいに白く光り、誇らしげに立った男の素朴な姿だった。

いささか呆然として立ちすくんだボクの目に、鏡の中の男の視線がからみ、一瞬笑ったように思った。頭の先からつまさきまで、激しいショックがボクの体中を駆けめぐった。その男が兄貴だった。

△告白と通信△

わたしを料理して下さい

羽 村 京 子

わたしを料理して下さい

親愛なる辻村隆さま。

まず何よりも、四月号にわたしの「ラブレター」と一緒にのせられた、あなたのお心のこともお返事と、その後さし上げました恥ずかしい私信について、七月号の「奇譚三十九夜」にとり上げていただいたことにたいして、厚くお礼を申し上げたいと存じます。プライベートなお手紙のやりとりは、それとして、ここにまた公開の誌面でおたよりをさし上げることは、あなたから予期しておりまして以上の色よいお返事をいただいたわたしにとって、とくべつにまたうれしいことでございます。出来ればまた、お返事をいただきとうございます。

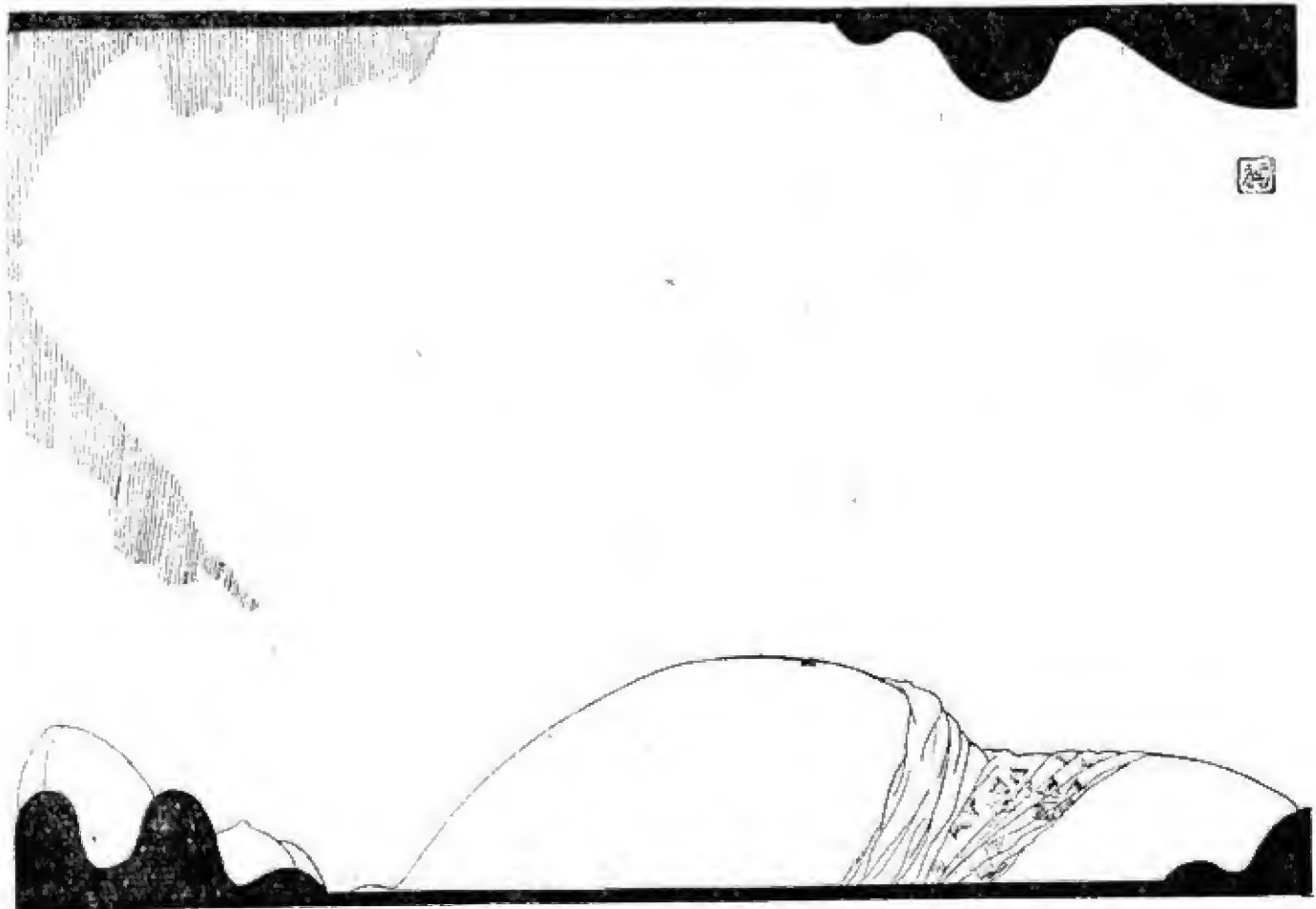
東浦さんの「わたしを責めて下さい」にならって、「わたしを料理して下さい」などという不遜な題をつけました気持は、お分りいただけますかしら？ 私信で申し上げたパーベキューの料理にされてみたいと思うわたしの気狂いじみた願望を、辻村さまはお笑いにありますかしら？ 今日はそのことをもう少し詳しくわしく申し上げてみたいと思って、筆をとりました。

辻村さまが東浦さんに、一五〇〇CCの温湯を注腸して蛙腹の実験をなさったこと——東浦さんのお腹は妊娠七カ月ほどに膨脹したそうですが——また空気浣腸によって東浦さんのお腹を蛙腹にふくれ上らせ、ラッパを装

填なさったこと、わたしがひそかに想像していたように、やっぱり辻村さまは東浦さんに実行してみたいという誘惑をおさえ切れなかったのですね。そして京子には、石油かガソリンを腹一杯に詰めこんでやろうとおっしゃるのですね。近ごろあちこちの街角に出来たガソリン・スタンドの横を通して、あの特有な臭いが鼻をつくたびに、京子はよからぬ空想をしてしまいそうですわ。

ところで、二月号「奇クサロン」の沖田寿さんの「切腹のSM性」、「女性の豊満な腹部をたち割り内臓の露出するといった凄惨な場面」が描かれた「美姫城主の最期」と題した女体切腹画の、文字通り克明に描かれてい

る露出した肝臓や腸が、細引で縛りあらわされたひざの上に垂れ流れている絵ですが、おそらく十文字腹なのでしょう。うか、腹がたてにみぞおちまで切り裂かれています。また同じ二月号の黒木節夫さんのファンタジック・フィクション「妊婦の切腹——絢爛たる復讐」でも、妊娠九カ月のはち切れんばかりに張り切った大きな腹部を切り裂くのですが、まず臍に突き立ててから、ふくれ上った豊満な下腹をたて一文字に切り開いて、胎児と腹部内臓をすっかり取り出してしまい、腹腔内部を完全に空洞にしまった後、よこに腹壁を切って十文字腹をとげるのです。黒木さんのは昨年十一月号の「女学生の切腹——野に散る花」でも、腸をすっかり掴み出してしまうのですが、沖田さんも黒木さんも、かならずたてに切り裂く十文字腹で、京子の感じでは、切腹というよりも一種の生体解剖——生胎解剖という気がします。自分の手で自分の腹を切り裂く、一種の自己解剖ではないでしょうか？ 他人に腹を切り裂かれてみたいという願望が、やむをえず自分



の手に行なう形に変形されて、切腹という手段をとるのではないのでしょうか？ 昨年十月

号の読者通信で「羽村京子の大ファン」さんが「貴女のパンパンに膨らんだ下腹を鋭いメスでタテ一文字に切り裂いたら……」とおっしゃって下さっています。が、他人に豊満な——ときには妊娠した——腹をたち割られてみたいという願望は、マゾヒズムの極致とも言えるでしょう。それは、「わたしを料理して下さい」ということと紙一重で通じます。辻村さまはわたしをどのように料理して下さいますか？

わたしはあなたに料理していただく前に、すっかり清められたきれいな体ではないたの上にあがりたいと思います。三月号にのったわたしの「K子の手記」は、編集部の手で無残にも約半分にまで削除されてしまいました。あれがのってから、自分で追加実験してみたことを申し上げて、辻村さまのクリスティールのデータともなれば、こんなうれしいことはありません。それは水道浣腸のことです。わたしの家族は主人と子ども二人、わたしを入れて四人です。長女は二年生、長男は二年保育の幼稚園、ですからふつうの日は、午前中はわたし一人のことが多いので

す。この四月からそうだったのですが、四月の中旬、主人が社用で二三日旅行しました。どこのご家庭でも同じだと思いますが、出張のあとはとくにはげしくおたがい求め合うものです。わたしたちの場合でも例外ではありませんでした。さてその翌日、主人は午後から出勤すればよいとのことで、珍しくわたしと二人切りの午前中の時間をすごしたのです。

前の日は主人も疲れていたので浣腸プレイを行なわなかったためでしょうか、わたしは彼にねだらないではいられなかったのです。「ねえ、わたし、すっかり便秘してるの。浣腸してみようかしら。手っだって下さるでしょ。今日はちょっとかわった方法でやってみたいの」

わたしは本当に便秘していました。それもこのことを期待して、わざとしていたといえないこともないのです。

誰はばかりでもない二人だけの家の中で。わたしは主人の前に腹部をむき出しにして立ち、膨れ具合がすぐ見えるようにしながら、水道からホースで注腸したのです。はじめはゆっくり、水道の栓をにぎって自分で水勢を加減しながら、お腹が少しきつくなると

ころまで注水してとめ、ホースをはずしました。できたら十分間ぐらい我まんしてみようと思ったのです。

水温がかなり低いので（十四—五度C）、とてもうけつけまいかとも思ったのですが、大量になるとかえって楽でした。腸全体が麻痺してしまうのでしょうか。お腹の前面がジンと冷えて行くのが分り、二三分すると体全体が温度が下って来ました。といっても体温計ではなかったわけではないのですが、おこりのように体がガクガクとふるえて来て、とまらないのです。しかし高温に発熱したときとちがってかならずしも不快ではなく、寝ているとふるえもある程度とまって、知覚が遠のいて行くような恍惚感さえあるのです。手術のときなどに人工冬眠といって、体温を下げるような状態なのではないでしょうか。ふるえがおさまると、体がズーンと落ちこんで行くような気持ちなのです。便意は少しづつもよほして来ますが、大したことはありません。でも、十分間で実験をうち切ることにし、立ち上って次の行動に移りました。

主人のしている前で排泄することは、わたしも主人もなれっこになっていきますから、か

まいません。たくさん汚物と、汚った水がすっかり——といっても吸収された分もあるわけですが——出てしまいうまで三十分ぐらいかかりました。量をはかってみると二リットル足らずでした。その後一時間ぐらいに相当多量のお小水が出ました。やはりかなり腸から吸収されていたわけです。

五月になってあたたかくなると、もう一度今度はうんと多量注入して実験してみたくなりました。わたしも今年の三月で満三十一歳になって、中年ぶとりの傾向が出て来たのか、ふだんでも下腹が出た蛙腹です。以前は三リットルぐらい温湯を注腸しても案外平気だったのですが、このごろは二リットルですでに相当きつく感じます。ですから水道浣腸のような方法で強制的に入れてみたら、自分の腸の許容量（キャパシティ）を知るのにもってこいだと思ったのです。しかし水道浣腸でははじめから量をきめて入れるわけには行きません。それが欠点ですが、あとで出た量をはかることはできます。

今度は夜、子どもたちが寝しずまってから、夕食抜き——お腹をこわしたからと子どもたちには言って——で、一たん浣腸して直腸をからにしておいてから、蛙みたいにお腹

が大きく膨らんで、胸が突き上げられ、苦しくて我まんできなくなるギリギリのところまでやりました。水温も気温もずっと高くなっている。四月のときのような現象はおこりませんでした。入浴しながら風呂場でやったからかも知れません。結果は見るべきものがあり、約三・五リットルでした。

実験の報告に少し時間を取りすぎたようです。胃もからっぽですが、必要なさらに胃洗浄もして、体の内外から汚物をすっかり洗い流してきれいになったわたしの体は、とくに臓もつを抜き取らないままでバーベキューにされるのですから、奇譚三十九夜の同人の方々には、この上ないごちそうになるでしょう。胃と腸の壁の一方所ずつを突き破って、口から肛門まで見事に串刺しにされたわたしは、不自由な苦しい体ながら、意識もはっきりしています。これからわたしを料理して食べようという人たちの顔をはっきり見ることもできます。ジリジリと身をこがす火の熱さを感じることもできます。やがて煙にむせて、窒息して気を失ってしまうでしょうけれど。

× × ×

四月号の「クリスティーラ讃歌」で、辻村さまは、「妊娠した女性の、それも緊縛に興

味を感じます」とおっしゃっています。また、「機会があれば、どんな無理をしても一度是非撮って見たい」とおっしゃっています。そしてわたしに、「貴女が今一人お子様をおうみになる覚悟なれば、これは貴女自身、ご主人にお願ひ出来る事ではないでしょうか」と暗にわたしの妊娠した姿を縛り上げて、写真にとりたいというご希望をもらっていていらっしゃいます。しかしわたしのようなおばあちゃんでもなくても、若くてピチピチした美しい妊婦のモデルがきつとあなたの前にあらわれますわ。わたしについては、どうかごかんべん下さい。

同じ四月号の「鏡のある生活」をお書きになった水口晴子さん。この方などは、ほんとうにすばらしい方です。これを読んで思わずギョッとしたほど、いろんな点で、わたしによく似ていらっしゃる方だと思いました。

「お水を飲んだり、空気を腸内に注入してまで、お腹を膨らましてみたいなどとは思いません」ということですが、「あのお腹がぱんぱんに膨らむ異常さに、自分がそうになってみたいという欲望」をもたれ、「妊娠してみたいと思うのです」と言われる晴子さん、その晴子さん、その晴子さんが、わたしと同じよ

アイデア募集

本誌のグラビヤ写真並に口絵、代理部の分譲品等に出来る限り広い範囲の趣向を取り入れたいと思いますので、御希望のアイデアは、御遠慮なく、どしどしと御申出下さい。採用の分は写真又は原画を贈呈いたします。詳細な説明又は略画を添布して下さい。一層結構です。

(編集部)

うに解剖されてみたいという願望のもち主であり、「胸から腹まで真一文字にたち割られて、大腸、肺、子宮なんかが、ぞろぞろと出され、名札がつけられる」と自分を空想されるところなんか、わたしにそっくりです。二十三歳、身長一五三センチ、体重四八キロで、観光バスのバスガイドをしていらっしゃるという晴子さんのかわいい姿を想像して、まるでわたしの妹のように思ってしまうのです。そこでこの晴子さんを材料にして、辻村さまに、人間料理ではない「産科学用解剖標本」のファンタジーを一つ進呈しようと思うのです。晴子さん、どうか京子をお許し下さいま

せね。

晴子さん、処女であるあなたに、こんな空想をするなんて、ずい分失礼だと思うのですが、あなたを、あなたのお望みのように妊娠させるところから話をはじめます。七月号の「奇譚三十九夜」の第四十話にあるように、あなたにホルモンを注射して一度に十個以上もの卵子を排卵させ、人工受精によって処女のまま懐胎させるのです。そうすれば一度に数個の受精卵が子宮壁に着床して、自然には

めったに起りえない、数胎もの多胎妊娠が簡単に実現するでしょう。ちなみに、人間の双胎（ふた子）が起りうる比率は八〇の妊娠に一回、以下一胎ふえるごとに八〇を掛けて行きますから、次のようになります。

双胎	八〇に一回
三胎	六四〇〇に一回
四胎	約五一万に一回
五胎	約四一〇〇万に一回
六胎	約三三億に一回

七胎 約二六〇〇億に一回
八胎 約二一兆に一回

ですから自然ではとても起りえない八胎の妊娠が晴子さんの体に、しかも処女懐胎でつくり出されます。八個の胎児はそのまま大きくなれば、当然何カ月か後には晴子さんの子宮は一たまりもなく破裂してしまうにちがいありません。そこで、もうこれ以上はとうていもたないというところまでお腹を大きくして、晴子さんを解剖し、「産科学用解剖標本」にしてしまうのです。巨大な大きさにまで膨れ上った子宮が開かれ、平均一一・五キログラム——妊娠七—八カ月の胎児の体重です——の八個の胎児がやまたのおろちのように臍帯でつながってあらわれるでしょう。子宮の形はほとんど完全な球で、その直径は三五センチ以上になります。おそらく、完全な標本をつくるために、晴子さんは生きたまま解剖されなければなりません。全身麻酔をかけられ、機械による自動呼吸に切りかえられて、「胸から腹まで真一文字にたち割られて」、胃や腸や膀胱は切り開かれて内部を洗ってきれいにした上で脱脂綿を詰めてふたたび縫い合わせられます。縫い目は正面から見えないようにうまくかくされることはいま



映画通信

「恋や・なすな恋」

の濃厚シーン

東山映史

東映の大川橋蔵、瑛峨三智子という美男美女の「恋や恋、なすな恋」の折カンシーンが、ベテラン内田吐夢監督のムードをもった重厚な演出で、大島渚監督のリアルな残酷映画「天草四郎時貞」と違った残酷さを出している。

天文学者加藤保憲の弟子保名（橋蔵）は保憲の養女榊の前（瑛峨）の相思相愛の仲。兄弟弟子の芦屋通満（天野新三）は保憲の後室（日高澄子）と通じ、ついに保憲を暗殺させ、中国の秘伝書金鳥玉兎集を盗みその罪を榊の前にきせ、そして

「金鳥玉兎集をどこへ隠した。白状せよ」

とゴウ問する。このゴウ問の方法が変っている。瑳峨三智子扮する榊の前をうつぶせに押さえつけ、西部劇のリンチ場面を見えるように、両袖にクイをうちつけ、地面にハリツケで動けないようにする。

そして、悪右衛門が弓のツルを瑳峨の首にはめ、強力にツルをはり、ビーンと引きそのツルが瑳峨のかぼせい首をピンと打つ、そのたびに「ウム、ウム」という人の心をえぐる悲鳴を発する。一寸変ったゴウ問方法で、さすが王朝風だが迫力がある。

一方、橋蔵はそれを眼前にしながら、神社のホコラのような中に閉じ込められ、これも兩人の下人に弓のツルで両側から首をはさまれて引かれる。

そうして、「保名さま」という榊の前の悲鳴に動てんするが、身動きはできない。

そして後室と道満はにくにくしげに、

「明日は兩人を縄付きにしてケビイシ庁に引ったてて白状させる」

といって引き上げる。見かねた侍女が走り寄り、保名を助け出し、榊の前に連れていくが、榊の前は残虐なゴウ問のためにす

でに息は絶えている。保名は「榊の前」と号泣する。

そして、気が狂うのである。このゴウ問シーンがたっぷりある。緊縛はないが、緊縛以上のムードをたっぷり味あわせてくれる。そして、もう一つの見のがせぬシーンは、人里離れた和泉の森の中で、保名が悪右衛門一味に取り囲まれて攻められる。そして傷つく。それを保名に助けられた白狐の孫娘の葛の葉狐に介抱されるが、瑳峨三智子扮する葛の葉に化けた葛の葉狐が、赤い舌を出して、保名の傷口をペチャペチャとなめる。

このシー스가なかなかエロチックで濃厚である。十分になめたためか、保名の痛みはやみ、フト気がつく。そこに榊の前と同じ顔をした双生児の葛の葉姫（実は葛の葉狐の化けた）がいるので、思わず恋しさにグッとだきつき、口をあわす。これも王朝代のペッティングというところ。

さすが、ベテラン内田吐夢監督だけに、歌舞伎の様式美を生かした濃厚なフニキを盛りあげている。

でもありません。こうして、すっかり解剖されて洗い清められ、血液も洗い流された晴子さんの体は、世にも珍しい八胎妊娠の貴重な標本として、大きなガラスビンの中にアルコール漬けにして保存されるのです。蛙のように四肢を折り曲げ、裂かれた腹からは八個の胎児を臍帯でつながったまま両側に並べられて。妊婦の全身を、胸と腹を開いてすべての内臓を示した「産科学用解剖標本」として。

「わたしを料理して下さい」がとんでもない「彼女を解剖して下さい」になりました。でも、辻村さまはこんなことも好きではないかと、ふと思っただけです。この次にお返事下さるときは、京子をどう料理して下さいか、また、妊婦のヌード、それも緊縛写真をとられるチャンスがうまうありましたかどうか、最後に、八胎妊娠した晴子さんの生体Ⅱ生胎解剖とその産科学用解剖標本のアイディアがお気に召しましたかどうか、などお知らせ下されば、京子はうれしいと思います。

いつまでもあなたの

京子より

辻村隆さま みもとに



マゾヒズム

天国

オ男 シニ醜 スマ沼 タ田

☆ 日本娘は白人がお好き

国電の中での出来事だ。二十才前後の娘たちが本をひろげて何か口々に暗誦していた。試験でも受けに行く途中だったのだろう。中の一人、大柄な娘さんに私の眼は灼きつけられていた。ルージュの濃い、どちらかといえは野性的な娘さんだった。短いスカートから覗いた膝小僧がまぶしい。

次の駅で、外人の青年が二人乗りこんで来た。吊皮にぶらさがっていたが娘たちの読んでいるものに興味を感じたらしく、件の娘さんの前にかぶさるようにして、「ムツカシイデスカ？」と尋ねた。娘さんはハツとして見あげたが、みるみる真ッ赤になり、そのうちクスクス笑いだし最後には書物で顔を蔽って笑い続けた。まわりの娘たちも小声で囁きあいながらチラチラ外人を見ていたが、その眼には隠しきれない好意が現れて

いたと思う。

たったこれだけの光景だが、私にはひどくマゾヒスティックに思われた。日本の男の誰か、たとえば私が本を覗きこんで「難しいですか？」と聞いたとしても娘さんは白い眼で睨みつけるか、突慥貪な返事しかないにきまっている。それが外人の場合、娘さんは恥かしさでいっぱいになり内心の嬉しさが抑えきれず笑いとなって爆発するという激しい感情の動揺をみせた。美しい娘さんにしてからがこうなのだ。

日本女性には外人の男には、いちじるしく弱い。ポール・アンカが来日して新橋のホテルに泊ったとき、その廊下をおびたらしいティン・エイジャーの女の子（良家のお嬢さんからズベ公まで）が占領しホテル側の注意も聴かばこそ、明けがた近くまで出沒し係員を悩ませたという。慶賀すべき現象である。大袈沙に言えば日本人は男も女も白人に夢中という時代なのだ。

さて国電の外人は娘さんの感情を激しく揺り動かしたが、同じ日本人である私は彼女の膝小僧や脛を盗み見るしか能がない。外人青年の一言で動揺した彼女に私は軽蔑を感じるどころか、ますます崇敬の念を深くした。

マゾヒストの女王は必ずしもサディストである必要はない。むしろ似合いの男性には愛を囁き、優越した男性には憧れる健康な女性であって欲しいと思う。私は想像する、ポール・アンカに憧れて集まった女の子たちの若々しい脚で蹴りつけられ踏みにじられたらどんなにいいだろうと。

☆ 三人娘残酷記

加茂かずえが赤坂の料亭で大臣に足を舐めさせていると花浦留美が息せききってとびこんで来た。

「留美、どうしたのよ」

かずえは昂奮した留美の顔を見あげて。

「プレスリイがね、プレスリイがね」

留美は慌てているので舌がまわらない。彼女の奴隷たちは、そんなところがたまらなく可愛らしいと云うのだが……。

「プレスリイがね、狩猟しに来るんだって、日本の男を五、六匹止めたいって」

かずえは自分の足の下の大臣のことなんか忘れてしまって叫んだ。

「プレスリイ、あたしにキッスしてくれるかしら」

留美がみかねて注意したのだった。

「かずえ、大臣窒息しちゃうわよ」

加茂かずえはプレスリイのことで頭がいっぱいだったのでうわの空で足をずらした。大臣はべったりと顔にへばりついた足の裏から口をだしてパクパク空気を吸っていたが、今度は遅ましい脛にかぶりついて来た。かずえは邪険にはらいのけ大臣の蛙のような腹に足をかけて力いっぱい踏んずけた。

「ど助平！ 静かにしやがれ」

大臣はゲツと泡を噴いて動かなくなった。

留美な爪先でその頭を小突きながら去った。

「幸福よね、七十にもなってあたしたちズベ

公に責められるなんてさ」

「チェ、ナマ云ってらァ」

留美が柄に似合わず大人びたことを云ったので、かずえはふざけて留美のオッパイを押した。二人がキャアキャア笑いながら跳ねまわっているとK・みかみが老作家の首輪をひっぱってはいって来た。

「プレスリイがねえ」

Kは云いかけた。

「いま聞いたとこよ。五、六匹射ちたいって、誰がいいだろ」

「この野郎、殺したっていいよ」

Kは老作家の頸筋にまたがり、はりきった太股で絞めつけながら云った。老作家はズイゼイ息をしながら横眼でKの腿を見ていた。「どうせ長いことないし、あたしもいじめ飽きちゃった。プレスリイに殺して貰えばちようどいいよ」

「こんなじいじじゃ、仕様がないう」

花浦留美は可愛らしい拳固で老作家の頭をボカボカ振りながら云った。

「獵犬に追っかけられたら、五分ともたないよ」

「それもそうね。それでも昔は売れっ子の小説家だったっていうんだけど」

K・みかみは腿にはさんだまま老作家の身体をかるがると持ちあげハンマー打ちの調子でドシンと畳に叩きつけた。老作家がギャツと叫んで動かなくなると、その顔にドツカと臀を据えた。

「こいつは老ボレで、何するにも頼りないけど、すわるには便利よ。安定がいいからね」

花浦留美はさっきから困っていたが思いきってかずえに頼むと気前よく貸してくれた。そこで大臣の髪の毛を掴み縁側までズルズルひきずって行ってポイント蹴とばすと、うまく

庭前にころがった。

「最近の奴隷は忠義ってことを知ってやしない」

留美は拭かせながら大人ぶって深刻そうにつぶやいた。

☆わが中年のマリアンヌ

赤線が廃止された後、当局の眼をくぐって娼婦をおいていた旅館があり明子という若い大柄な女がいた。一言でいえば精悍という感じがピッタリであった。

「中学じゃ大きい方から三番目だったわ」

彼女はさして得意そうでもなく云った。

「凄いいえ、三番めだなんて……俺は小さい方だったから、君に軽蔑されても当りまえだな」

脚の長さをくらべてみようと思つた彼女の横にすわって脚をのばした。実際問題として男と女の場合、簡単に比較出来るものではない。

「こっちでくらべるのよ」と彼女は臀の方を指さした。なるほど踵は揃えていたが、彼女の臀は私よりたしか一〇センチはうしろにあったと思う。

願いに応じていつも私の頬をはりとばして

くれた。大きな手ですこしも加減しないで打つのだ。男を打つことは嫌いではなかったと思う。しかし肌にさわられるのを極端に嫌った。にじり寄って行くと座布団で膝を隠してしまふ。うしろにまわると臀にも座布団をあてる。それでもかじりついて行くと柳眉をさかだてて怒った。

彼女が立った隙を狙って這い寄り両足の間に首を突っこんだことがある。このときは本気になって怒り私が平謝まりに謝まるのも聞かず部屋をとびだした。赤線と違って女を怒らせてしまったが最後、客の方は文句の持って行き場がないのだ。

うまい方法は彼女が眠りこむのを待って蒲団の中へもぐりこむことだった。その魅力的な足の裏、ふくらはぎ、膝小僧、腿、そして……。悩ましい女性特有のあの強烈な体臭が漂う。

「あんたがいましたこと、みんな知ってるわよ」

いつの間に眼をさましたのか先生が生徒を叱るような口調できめつけるのであった。

あるとき仰向けに寝ていた私の顔の上にデーンと太い脚をのせてきた。のしかかって来る太腿の重圧に耳を押しつぶされて喘いだ。

「重いなア、重いよ」

「何云ってんのさ、重くしてくれって自分で頼んだ癖に」

私はたしかにそう頼んだのだが、彼女の脚は想像以上に重かったのである。

私が何をされても怒る勇気のない男だと判ると、勝手なときに部屋を出て行ってそれっきり帰らないことが屢々あった。私は悶々と待ちくたびれ朝のしらじらしい空気の中を引揚げる。

そんなある朝、彼女が床の中に残して行ったパンティを発見して楽しんでいると突然ネグリジェ姿の女がはいって来た。

「フフ……何してるのよ」

その女はいきなりパンティをひったくり背中に馬乗りになって来た。明子から私の性癖を聞き朝飯前の一稼ぎと襲って来たに違いなかった。今朝に限ってパンティが忘れてあったのも予定の行動だったかも知れない……私はドンヨリした頭でそんなことを思いながら見も知らぬ女の足の指に舌をあてていた。

☆タイム・マシン

どうやらタイム・マシンらしきものが出来

あがったので、早速実験にとりかかることにした。しがし安全性の点で海のものとも山のものとも判らぬ以上、私自身がこころみることは科学界に重大な損失を招くかも知れないから赤の他人を使ってやることにした。芸術家を選んだのは彼等が空想癖という馬鹿げた特性を持っているからである。

まず郊外の住宅地にSF作家のAをたずねた。

「あら、おめずらしい」

Aの細君はおそろしく大きな女で、スカートの上から太腿の逞まじさが十分窺われる。私はAのやつ一体どんな態位で細君を欲ばすのかと思った。

「君が興味を持ちそうな機械を發明したよ」
細君が紅茶と果物を置いて出て行くと私はニヤニヤしながら口を切った。「一言でいえば理想を夢にみる機械だな。男性の理想は大抵エロチックだからエロチックな夢になる公算が大きい」

「危険はないのかな」Aは案の定眼をほそくして乗りだして来た。「俺をひとつ、その機械にかけてくれないか？　ただし女房には内緒だぜ」

Aがタイム・トラベルから戻ったとき、私

は早速経験談を聴こうとしたのだがトロンとした眼をした彼はただ首を振るだけだった。

「俺は自分の理想に気がつかなかった……」

Aはそう云うと逃げるように家へ帰ってしまった。私は仕方なしに今度は前衛音楽家のBを都心のアパートにたずねた。

「まア、しばらくねえ」

Bの恋人はスラブ系の混血で驚いたことにハーフ・スリッパにパンティだけのあられもない姿である。私は彼女の傍若無人にでっぱった臀を眺めながら、Bのやつどんな態位でこの恋人を満足させるのかと思った。

Bがタイム・トラベルから帰ったときはAよりもっとひどかった。口の端からよだれをたれ流し何を訊いても同じことを口走った。

「俺の理想……俺の理想……」

映画監督のCは花街のはずれにある旅館に泊っていた。

「いらっしやい、おじさま」

Cの情婦はまだ高校生で真ッ昼間だというのに、すけてみえるネグリジェを着ていた。

私はピョコンとそりかえった乳首を眺めながら、Cのやつどんな態位でこの情婦を楽しますのかと思った。

Cがタイム・トラベルから戻ったときもB

よりましというわけではなかった。

ベロンと舌をだして荒い息をし馬鹿みたいに繰返した。

「あれがねえ、俺の理想かねえ……」

私は計画が失敗したと認めざるをえなかった。大体夢みる機械なんて説明したのが間違いのもつたのだ。夢なら他人に話して聞かせる義務はない。実験は完全に行き詰まった。

それから数日たったある晴れた午后、私は三人の若い女性の訪問を受けた。研究に集中している関係上私は女性の訪問客などついぞ縁がなかったが、その三人というのはなんとAの細君、Bの恋人、それにCの情婦なのであった。私は些かうしろめいた思いがしたが努めてさりげないふうを装い三人を部屋に通した。

「これが夢みる機械ってやつね」

Aの細君が憎々しげに云ったときタイト・スカートの布地がピンと張って長い腿がクツキリと浮かびあがった。

「夢みる機械だなんて嘘なのよ」

Bの恋人が混血娘特有の舌ったらずの口調で云った。そして机に腰かけたのではありません。た臀が私の目の前に来た。

「三人とも同じ夢みるなんて変だよ」

Cの情婦が興奮して云ったときすけてみえるブラウスの下で乳首が一層上向きにそりかえった。私はおそるおそる三人の顔を見くらべながらつぶやいた。

「おっしゃることが、よく判りませんな、じやこの機械は何だつて云うんです」

三人は小鳥の雛みたいに一斉に口をあけて怒鳴った。

「タイム・マシンよ！」

私が度胆を抜かれている間に訪問客は私をタイム・マシンに押しこみキャアキャア笑いながらスイッチを入れた。あっと思う間もなく凄い速度で落下するエレベーターに乗ったような快い意識喪失感をおぼえ同時に視界が暗くなった……。

気がついたとき私は暖い光の降りそそぐ温室の中に倒れていた。周りを囲む人々の姿がはじめはぼんやりと、次第にはっきりした輪郭をもって浮かんで来た。私は彼等が揃いも揃って若く美しい女性であることに氣附いたがパンティとブラジャしかつけていないのに驚いて立ちあがった。

「あら」女たちの一人が大声をあげた。「立っちゃったわよ、女みたいに二本脚で」

私は巨人国のガリバーみたいな氣持でポカ

ンとしていた。いくら背伸びしても私の頭が女たちの膝小僧より上には届かなかったからである。つまり私は巨大な下半身に囲まれて突ッ立っていたことになる。脚の隙間から眺めると温室らしいものは無数に点在しその中を見慣れぬ四足動物が動きまわっていた。

「これで四匹めよ」はるかな高みで一人が云った。「どうせすぐ消えてなくなっちゃうんだから飼っても仕様がないわね」

「でも男としたら、いい体格してるじゃない？」別の一人がそう云って私の口をこじあげ乱暴にも舌をつまみだした。「あら、舌は使えないものにならないわ、短か過ぎるもの」その言葉がおかしかったのか、女たちはどツと笑った。

「でもあたし、こういうタイプ好きよ」まだ口もとにあとけなさの残っている女が私の頭を撫でた。「一発ブチかまして子供産ましてやろうかしら」

私が驚いていると例の四足動物が一匹、温室からとびだしよろよろと走って行くのが眼にはいった。

「あら、男が逃げるわ！」

女の一人が叫んだ。私を囲んでいた下半身

がどツと崩れ四足動物の時を追って走りだした。例のあとけない女も走りだしたが氣を変えたのかすぐに戻って来た。

四足動物は女たちに追われて私のいる温室の方へ走って来た。驚いたことにその動物は人間の男そっくりの形をしていた。女たちの体軀にひきかえ、その動物は私よりも貧弱だったが、ダラリとたらしただけは地面につきそうに長かった。おまけに赤い舌をつけているので一層みじめったらしくみえる。女たちは、この追跡を楽しんでいるように思われた。

私が度胆を抜かれて見ていると例のあとけない女がしゃがみこんで私の顔を覗いた。腿の筋肉が盛りあがって怖いほどだった。私の視線に氣がついて女は笑った。

「あたしの腿、いいでしょ？」

私は仕方なくうなずいてみせた。女はゆっくりとパンティを脱いだ。ハツとした途端不思議な芳香が鼻を刺した。

「あたしの子供、産みたい？」

私がドギマギしているといきなり私を突き倒し胸に片足かけて来た。いくらもがいてもビクともしない重みだった。

「こわがらなくてもいいの。あたしは優しい

△短 信△

『吊責めへの誘い』への御返事

豊 島 津 利

(東京)

中田様、七月号短信『吊責めへの誘い』に御返事致します。貴方が文中で云っていただける様に本年度奇々誌上の吊責めはみんな素晴らしくできてます。梨花さんの出現に依り私の様な吊責マニヤには昨年从今年にかけて喜びの連続でした。昨年八月号の「滑車吊り」十一月号の「美しき干物」十二月号の「女囚吊り」「揺れる女体」変わったところで「宙に耐える」等々、特に昨年六月号の梨花さんの「猪吊」十一月号の「人身御供」八月号の近藤一さんの「川端多奈子を想う」二二二頁の梯子を使った吊責めは私の心の奥に深く焼きついております。何日か代理部に御無理を云って譲って戴きたいと思っています。又本年四月号辻村隆さんの「羽村京子さんに贈る」の「クリスティール讃歌」一五四頁の伊藤画伯の逆吊り等、実に良いものばかりでした。身体には一糸もなく手足の拘束だけで宙に浮いた姿は羞恥を逃避不能の為、姿態全体で表わして、私の空想の泉を湧出します。貴方の云ってる新年号五枚組の「逆吊りの変化」のポーズは手は高手小手になっており

胸と足で吊られています、この手を足と一緒に重ねて逆猪吊りにしたら、どんなに素敵でしょう。三月号の大塚啓予さんの「二等辺三角形」昨年十一月号の「足と手」との前本妙子さんの姿態をそのまま吊り上げたなら実際には如何なものでしょうか。又貴方の短信と同じ七月号に私の浣腸通信も出ておりますが、これを読まれた貴方は私の態度をジギルとハイド的と思われるかも知れませんが、これも吊責めの自己演出の為には吊責め以外の刺激に、たとえば貴方の云ってるようなブラシや絵筆の責めは、はずかしがりやの私にはとても耐えられませんが、独演できる内攻的な浣腸責めを併用しているのです。吊責めに対する渴望は捨てられません。深夜自分のアイデアのプレーを楽しんだ後の快い床の中で同好の方と御一緒のプレーならと考えると、今までの事が何かはかなく、もの足りなく感じたのですが、「吊責めへの誘い」を読んだ今は不安の様なものも残っておりますが、一切をおまかせするには貴方の御人柄も拝見致したいと思っております。

娘よ、まだ七匹しか殺したことがないんだもの。安心して産ましたげるわ」

そう云ったかと、思うとあどけない女の脚が私の顔に蔽いかぶさった……。

気がつくときタイム・マシンの中にいた。悪夢から逃れる思いで這いだした私の前に三人の訪問客が薄笑いを浮かべて立ちはだかっていた。

「楽しかった？」Aの細君が云った。

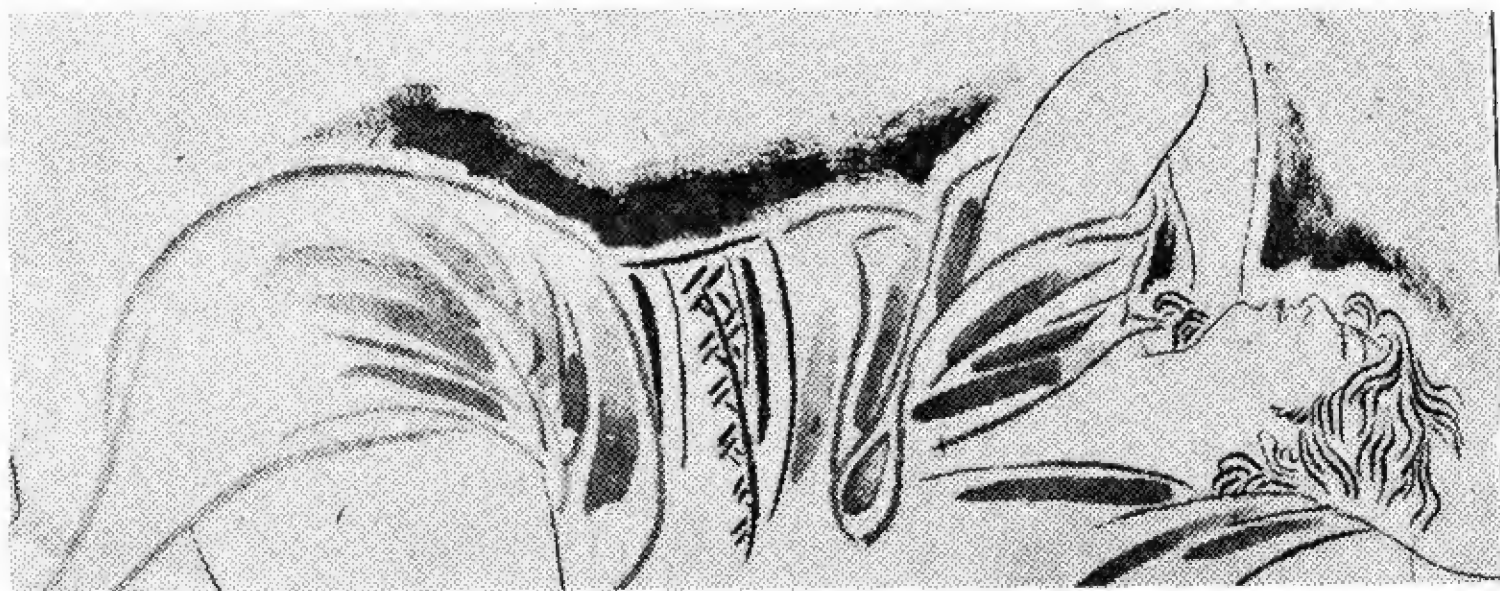
「理想を夢にみたんだものね」

Bの恋人が笑った。

「だから、あたしたちも、サービスしたげるのよ！」

Cの情婦が叫んだと同時に三人は私にとびかかって抑えつけた。そして順番にパンティを脱いで私の顔を覆った……。

いまでは私もなかば廃人になって三人の女性への奉仕に余生を送っている。タイム・マシンも取りあげられてしまった。彼女たちはタイム・トラベルが楽しくて仕方ないらしい。そして帰って来ることにより残酷に、より美しくなっていくようだ。しかし私には一刻も忘れられない恐怖がある。いつか本当にあのあどけない女の赤ん坊を産むのではあるまいか、予定日はいつなのだろうか……。



「奇譚三十九夜物語」

＜第十七夜＞

辻 村 隆

梅雨の前触れを告げるように、柔かい雨足が、しとどにペーブメントを濡らしていました。メンバーは変わりもなく八人——。

参議院選挙の近づいた都会の空気は、獷奇を探求するこのグループにも、影響を与えているのか、暫らく政治談が続いたあと、その場の雰囲気を変える様に、ワイン氏が、やおら一同を制したのです。「有閑マダムが、開放的な夏の訪れと共に、身内のむずむずを何らかの形で発散するようです。若い燕が、之等夫人の好色の対象となるのも、今の様な季節が多いそうですが、近頃の青年が、打算的な気持で、寧ろわれから進んでオバサマ族に近づいて、接触を持つのもこの季節です。私の話も、この打算的なアプレ青年のお話を推理めいて、皆様に発表したいと思うのです。」

こう前置きして、ワイン氏は注がれてあったハイボールをぐっと一息に呑み乾しました。

第四十一話 マダムハント

全身泡だらけになった彰は、されるが儘になり乍ら、つくづく嫌になって来た。

△なんて執拗い牝豚なんだろう。ぶよぶよした脂肪の塊が、毎夜飽きもせず俺の体の隅々まで石鹼をぬたくりつけて、気のすむ迄いじり廻していやがる——。月々たった一万円ぼっちの端した金で、俺を自由にしようたって、そうはいかねえぞ。マキと結婚したさに、資金稼ぎのつもりで云われる儘に、俺は奴隷の様に、この女の云いなりになっているが、もうこんな生活にほとほと嫌気がさして来た。足を舐める——、馬になれ——、便器になれ——、腰掛けにな

れ——その挙句、散々俺をフラフラにさせておいて、それでどうだ、こんな革のベルトを股にはめて、後手の手錠をベルトに連結させた儘、風呂でこししごやりやがる——。糞ッ、この気狂い婆あ奴——」

内心の憤懣とは裏腹に、彰は、さも陶然とした面持で、恭子の指の動きに体を任せきっていた。一見革褌のように見えるベルトは、恭子が、ヘルニヤの脱腸帯からヒントを得た特殊なベルトで、腹をしめる革ベルトの前部に、二本の細いバンドをはめ、股を通して、後部で一本になって自由にしめつけるように出来ている。要約すれば太いバンドにサポーターをとりつけて股から腰へ通したものと思えばよい。腰の締金に環がとりつけてあって、彰の両手は、手錠でこの環に細鎖で繋がれている。

恭子は堪能したあと、風呂で彰の体の汚れを洗ってやると、ベッドの脚の長い鎖に、彰の手錠をつないで、彼にビスケットを投げ与えたり、足の親指と二指で、体のあちこちを力を入れてつねったり、どきりと、彼の背中に両足を投げ出したり、足踏台にして、快よい疲れのあとの時間を費やしていた。

「どう、今夜も気に入ったかい？」

「ハイ、奥様——」

「お前は奴隷が性に合っているんだよ。そうだったネ——」

「ハイ、奥様——」

「お前は幸せなんだね。こうした生活が——」

「ハイ、奥様——」

「よしよし紫直でいいよ。それじゃいいよ明日の夜は、約束通り、お前の体の一部に、一生消えない奴隷のしるしを彫りつけてやるからね。嬉しいだろう……」

「ハイ、奥様——」

「ホホ、嬉しいんだね。それじゃもう一つお前を飲ばせてやるよ。奴隷に金是要らない事が分ったから、お前を釣るつもりで見せた、五百万円の定期預金証書はお前にやらない事にしたよ。どう——、要らないだろう……」

「……」

恭子の眉がピクリと動いた。彼女はガラスイターをとり上げてカチリと点じると、そうそう彰の腋の下へ持っていた。

はみ出た腋毛がチリチリと焦げて、いやな臭いがすつと鼻をかすめた。

「あッ——」

「ホホ、返事をおし、要らないだろう……」

「ハ、ハイ奥様」

満足げに、恭子はパタンとライターの蓋をとじた。

△チキショウ——、瞞しやがった。たった一万円で、俺は云われる儘になっていたのも、此奴の五百万円に釣られていたからだ。何を云われても、ハイ奥様——ハイ奥様と云わせる様にしたのも、魂胆あつての事だったんだな——。五百万円の目当があればこそ、俺は自分の肌への刺青にも、ハイ奥様と云ってやったのだ。此奴のこの数日はそれにどうだ。生理日が近づくと、此奴は極度に俺を非道く扱かいやがる。煙草を押しつける——、首をしめる——、針をさす——、フォークを突き立てる——。俺の体は生傷だらけだ。風呂へ入る度毎、熱い湯が、骨まで刺す程、俺の体にしみるのにも俺は笑顔をつくって、さも嬉しそうにしていなければならぬ。畜生ノ殺してやる▽

彰はこの時、はっきり殺意を持った。

恭子は彰をすっかり征服した気で、昂進する嗜虐感に陶醉していた。名実共に奴隷にしてやらなくては、その意義がないと感じた。

「よろしい。あとで判っきり誓約書をとっておくからね。ついでに月々、お前の為に積み

たてておいた一万円が、今の処四カ月分で四万円になっているが、これも要らないだろうね——」

「ハイ、奥様——」

「昨夜まではお前にベッドを与えていたが、今夜からは奴隷として、このベッドの脚元で、鎖につながれて寝るんだよ。分ったね——」

「ハイ、奥様——」

「食事は私の残りものを、手を使わず口でじかにたべるんだよ。いいね……」

「ハイ、奥様——」

我が生涯の最良の日と云わん許りに、恭子は大きく口を開けて晴々と笑った。口中一杯にはまった金冠が、キラキラと妖しく輝やっていた。一気に嵩にかかって云ってのけたあと、恭子は遂に最初の計画が完遂出来たと思った。

▲畜生！ 殺してやる……殺してやる……▼

彰の脳中には、必殺の構図が渦を巻いていた。

× × ×

恭子の豊満な体がベッドで横たわっていた。軽い軀が規則的に、のどの奥から洩れている。

寒くはなかったが、彰は怒りと憎悪に震え

る素肌の体を、大のように、ベッドの下の床に這わせていた。

恭子に、こんな深い謀らみがあるとは知らず、彼女に近づいたのは彰の方からであった。彼はグランドサロンQのボーイだった。同僚の誰かがそうであるように、彼も亦ホステスのマキの紐のような存在であった。二人の関係の動機は、ほんのチョットとしたきっかけで温泉マークで結ばれたあっけない程簡単なものであったが、結ばれてからは、意外にマキは真剣に彼を愛した。彰も、マキがホステスに似合わず、純情で体の穢れていない事を知った。表面はヒモのように見えても、彰も真面目にマキと結婚したいと思っていた。派手な商売の常で二人共金の貯わえはない。兄の家に寄宿するマキと、同僚と二人安アパートを借りている彰とは、時偶ホテルで情熱を燃やすのが関の山である。

そんな時、恭子がこのサロンに商客を伴なうて現われた。彼女が六年前夫に先立たれ、女の力で楽器店を経営している事を、彰はそのうち知る様になった。四十四才の最近頓に脂ののった体を持て余している事も、可成りの私財を貯わえている事も。

彼女は彰を目当てに一人で来るようになって

た。ホステスがついても相手にせず、何かと雑用を設けては彰を仲々に手離さなかった。

マキの悲しげな、嫉妬の交錯した視線が、二人に投げられているのを、彰は気付いている。恭子から誘うとも、彰から誘うともなく、二人がホテルに消えた夜、彰は恭子の妖しい奇妙な性質を仄かに知った。

「私を慰さめてよ——。私の思いの儘になつて戴けたら五百万円の定期を差上げるわ——。けれど、それは坊やの気持をすっかり知ってからの事。それまではお小遣いに一万円宛あげるけど、坊やの気持次第ではすぐにでも進呈するわ——どう？」

二十二才の彰は、五百万円と云う価値に有頂天になってしまった。まるで親子程年は違ふけれど、氣に入られれば五百万円をすぐ呉れると云う。妙に粘っこい、絡みつくような豊満な肢態に彰は酔いしれていたし、マキにない激しさに、彰は棚からボタ餅の様な気持で、何度も何度もうなづいた。

▲マキにすっかり話して許しを乞おう。何、僅かの間の辛抱だ。その間に俺はこのオバサマをすっかり手なづけてやる。小遣までくれ、その上五百万円授かるとはまるで夢のようだ▼

彼は不安と危惧に哀願するマキを、やっと納得させた上で、公然と恭子の私邸にのりこんだ――。

恭子の乱行に、眉をひそめ、忠告する店の支配人や、親戚の者にも、彼女は一切背をむけて反撥した。楽器店は支配人任せで、近所の噂も何処吹く風と、彼女は気の合う有閑マダムを呼びよせては、麻雀を始めたり、パーティで彰との熱いところを、誰憚らず見せつけた。

彰が、それとなく五百万円をきり出すと、彼女は厚化粧の顔を悲しげに伏せて、金を渡す時が縁の切れ目ではないかと切々と訴えるのであった。

情痴にただれた一カ月程が過ぎると、夫婦気取りの二人の位置が、徐々に転倒していった。

恭子はマッサージをさせるようになり、爪を切らせたり、少しの用事も彰に命じるようになった。生理が近づくと恭子は目に見えて気難づかしくなりイライラした。そんな時、彰は気嫌とりに汲々とする。努めて気嫌をそこなわぬ様、ハイハイと何事も従順に従う。そして、彰の奴隷の位置がそんな時きまった。位置がきまると、恭子は次々と、彰の体を

束縛する道具をつくり出した。革褌、強いナイロンの小便袋、搾衣、嵌口具、足枷、手錠――。

彰の飼育に熱中する恭子は、生々としていた。マキとデートする時偶の時間が制限され、彰は今迄一週間に二日家に戻っていたのを、遂に檻禁同様に、一步も恭子の邸から出られなくなった。

邸中では裸が原則となり、革褌に手錠の姿が彼の日常の姿となった。

彰が嫌な顔をしたり、返事を濁すと、窄衣や嵌口具がはめられ、しなやかな鞭の御馳走をうけるようになった。

恭子は彰を完全奴隷化する為、刺青を思いついた。彫物師の手を煩わさず、恭子自身によつて彫る素人彫りだと聞かされ、彰は慄然としたが、その頃には既に、「ハイ、奥様」の奴隷口調が数週間の間にすっかり板についていた。

先ず、腕から始めて、ついで股に背に、腹に、恭子はつれづれの儘に彫る気でいた。

従順で美青年の彰に、すっかり虜になっていたのは恭子の方であったのだ――。

数年間忘れていたギャップを埋めようと、女の盛りを過ぎた恭子は、様々の手を変え、

品を変えて、彼を酷使した。気分のむく儘に彰を一晚中寝かさない日もよくあった。

△結局、俺は此奴から得たものは零に過ぎない。甘言にだまされて、牝豚の道具になって、うかうと躍らされていたのだ▽

彰の肉体が知っている、数知れぬ屈辱が、床に這う彼の体に、爆発しそうに堆積し始めた。

恭子の排泄物を口にうけた堪えがたい屈辱――。

全身に妖しい絵を、油絵具でベタベタ書かれたいやらしさ――。

正座した股の間に蠟燭を挟まされて、太股を火傷した痛み――。

次々と彰の脳裡に責苦のシーンがオーバーアップのひとこまひとこまとなって浮かび上ってくる。

ドタリと恭子は寝返りを打った。素肌に巻いた薄い夏布団が床に滑り落ちて、脂ぎった肌と曝して、相も変らず軋はとまらない。

ベッドの傍らの丸卓に、受話器や水呑みや灰皿、タバコ、果物ナイフと共に、彰の手錠の錠がライターの鎖に通されて置きっ放しになっている。

彰はそーと膝を立てると、膝小僧で数歩歩いて丸卓に近づいた。彼の肩のところに丸卓の高さがある。

体をのり出して、彼は果物ナイフを口にくわえた。静かに体を屈めてポトリと床に落すと、手錠の後手の右手でそれを取り上げた。

腰のベルトと体の合間へナイフを挟むと、余りよく切れない果物ナイフで、根よくベルトをこすり始めた。

数十分――。ベルトは切れて、少し体が楽になる。彼は体をうんと跼めて両足から、ベルトにかけた革紐を抜くと、やっと後手錠の両手が上下に動くようになった。

ついで丸卓のライターについた鍵を口でとると、それを床に落して後手の右に持ち、何度も失敗し乍ら、やっと左手首の手錠の鍵穴にさし込んで廻す事が出来た。カチリと音がして、手錠はカタリと外れる。あとはわけもない。

こんな懸命の努力が、いよいよ恭子への憎悪を募らせた。首輪をわけなく外し終って、彰はすつくとベッドの傍らに立って恭子を凝視した。

△この牝豚奴、一思いには殺さないぞ。俺の虐められただけ、虐めて殺してやるんだ。▽

身慄いし乍ら、彰は神経質に両手の指をポキポキならした。辺りを見廻すと、彰の体を残酷にした道具はチャントあちこちに揃っている。

彼は手錠をとり上げて鍵を外し、ベルトをとりけると、静かに恭子の両手にカチリとはめた。疼くような報復の快感が湧き上ってくる。更に熟睡する恭子の片手を、そろそろ手錠をはめた手に近寄せる。ウーンと恭子は再び身をよじった。その刹那、両手は手錠によってつながれた。

彰は鞭を握った。豊かな盛り上った臀を目掛けて彼は力任せに、靴をふるった。

「ヒーツ……」

恭子は痛さに飛び上って、はねおきようと、両手錠に体をとられて、ドサリと床に転げ落ちた。

事態の急転が呑み込めない。やっと見開いた眼に、彰の蒼白く、殺気のこもった顔がクローズアップされた。

「あッ――」

立上ろうとする恭子に飛びかかって、彼は夢中で、タオルを彼女の口中に押し込み、その上からシュミーズでぐるぐる巻きに猿轡をはめた。両足を縛って、床に押し転がすと、

彼はそこで一息ホッと息をついた。

恐怖で一杯に見開かれた、女の眼が彰の視線と空間に激しくぶつかり合う。

彰の凄まじい顔にホクソ笑みが走った。

彼は部屋を出ると建築中のガレージに向った。戻った彼の手にガソリンの石油缶が提げられている。

石油缶の口蓋には注入用のビニールポンプがとりつけてある。彼は容赦なくその口を恭子へ近づけた。数度ポンプの弁を強く握ると、石油缶からガソリンが勢いよく恭子の体内に流れ込んでいった。恭子の腹が臑てポツカリと丸く膨らみを帯びてくる。のたうつ恭子を押さえつけて尚も彰は続ける、ビニールポンプの、ガソリンの流れが緩慢になる。既に彼女の腹はガソリンによって充滿しているに違いなかった。

彼は恭子を大きな浴槽の流しへ、髪を掴んで引曳っていった。ガクガク震える昂奮が彰の咽喉をカラカラにさせる。蛇口に口を当てて随分長い間、彼は水を鱈腹のんで心を落ちつけた。妊娠の満月に近い腹を見せて、恭子は白眼をむいて苦しんでいた。彼は台所へ引き返してガン点火棒と、泡沫式の消火器を持ち出して来た。

最後の断が近づいた。彰の手に握られたガス点火棒が恭子の体内に奥深く潜行する。把手を廻すと、電池によって尖端のニクロム線に豆火が点火する。一瞬、彼は恭子の下腹が皮肉を破って破裂し、放射炎と共に火達磨になるのを見た。ガソリンは流れて、流しに火炎がメラメラと這った。

白い豊満な体が黒くくすぶって紅蓮に包まれて燃えた。体内の毛と肉と、皮が異臭を一杯に撒き散らした。

ガラガラと眼を血走らせて、彰は成行きを見守った。火炎が激しく、タイル張りの浴槽に充満した。彼は泡沫式消火器を逆さに立て、力強く尖端を叩いた。ホースから白い泡が飛沫をあげて辺りに飛び散った、火は消えて、あとにブスブス焦げる恭子の醜い残骸が、苦悶の形相も物凄く、タイルをかきむしって転がっていた。

ガソリンと泡沫と、恭子の汚物が、蛇口のホースからの水勢に押し流されて、数十分後には、黒々と背を反らして全身焼け糜れた、一個の物体だけが横たわっていた。

△この牝豚を殺らねば、俺がいつか殺されるだけだ。併し問題はこれからだ、この始末を何とつけるべきだろう▽

殺人に夢中になっていた彰は、当然起る結末を思案に入れていなかった。

寒々とした悔恨と恐怖が、轟々と彰の心をしめつけた。

彼は突嗟に、現在建築中のガレージの、地固め工事のコンクリート流しが未完成であった事を思い出した。

ベッドのシーツをタイルの流しに敷くと、彰は恭子の凄惨な残骸と包み込んで、日頃色々世話になったロープで、荷物のように頑丈に縛り上げた。

△朝まで一仕事だ――▽

ともすればヘタヘタと崩れそうになる体に鞭打って、彰は気力で、残骸と引曳り出した。

人間の一心は恐ろしい。彰はたった一人で、まだ柔かいコンクリートをシャベルですくい上げ、小石をとりのけて土中に恭子の体を横たえると、再び石ころを体の上にかぶせ更に砂利を撒いて、ねったコンクリートを流し込んだ。昼間職人達がおいていったコテで、元の様になめらかにならして、始めのようには庭をその上に伸ばしておいた。

朝日がガレージに差し込む頃、彰の仕事は一段落した。

△多少様子が違っても、恐らく職人達は気にも止めないだろう。さて、恭子の失踪を何と説明するかだ。とりあえず病氣としておこう。そのうちに二人で旅行に出たとでも云うさ――▽

彼は部屋に戻ると、早速あちこち物色した。いつも恭子が貴重品を入れておく洋服ダンスの小抽出を鍵で開くと、現金はざっと十三万円許りあった。有価証券や、預金通帳の金額は占めて八百万円はある。彰は之を早急に換金すべきだと思った。金を占有する事は彼は不思議に罪悪感を抱かなかった。恭子の為に、なすべき事は総て仕了した様な気がしたからである。

宝石、貴金属の類は、どれ程の価格になるか、一寸見当がつかなかった。

△これをポツポツマキにやれば、彼女はどんなに喜ぶだろう。何れ早く世帯をもって、東京へでも高飛びすべきだ。そうだマキを此処へ呼んでやろう。俺にいちいち食事の支度が出来るものか――。うんと美味しいものをつくらせて二人で喰うのだ。いや、恭子は病気で寝室でねている筈だから、面倒でも、亡者の食事も一人前作らせねばならん▽

彼は、ひる前にマキの家へ、呼出し電話で

連絡した。

「おや、珍らしく、お顔を拝見しましたね。奥様は？……」

ガレージ建築を請負った、工務店の現場監督が、ニヤニヤし乍ら彰に声をかけた、飼われた若い燕である事は、近所の評判でとくに承知している。

「それが、急に心臓を悪くしてね、ベッドでお休みだよ。暫らく動いちゃいけないそうだ。お医者に来て貰ったらって云うんだけど、持病だから『救心』をのめば、そのうちよくなるって……」

彰はドギマギして、そう答えた。眼はキョロキョロと、監督を見ずに、絶えず、例の個所へ注がれている。庭は夜のうち、彰がかぶせた儘で、目印の小石が三つ、その儘、庭の上にのっている。仕事はその庭に続いて、三人の職人が、石を埋め、砂利とコンクリートを混ぜて、流し込む作業に懸命である。

「どうやら気がつかないらしい。もう大丈夫だろう——」

犯罪者の心理で、彼は、作業の始まると同時に現場へ来て、熱心に作業を見守っていたのだった。

「へへ、心臓が悪いってねえ……。まあまあ、余り御無理をなさらん事ですなあ。それに『救心』って奴は、心臓のクスリだけではなく、タイミングを合せる為、『救心』を一粒かみくだいて男性がつけるんだってさあ。センソと云って、何でも蟻蛙の頭部のいぼいぼの分泌物が『救心』にまざっているから、大変よく効くって話ですよ——」

監督は意味ありげに笑ってそう云ったが、それ以上、恭子の事を追求しなかった。

午後四時頃、恭子とうまの合う有閑マダムの麗子が訪れた。

彰が応待に出ると、彼女は吃驚したような顔で、ジロジロと彼の上から下までをなめるように見つめた。

「まあ、恭子さん、心臓が悪くて休んでいるんですって。それは大変ね——。お見舞しなくっちゃ。けれど急にどうしたんでしょう。今夜は、とび切り素晴らしいことがあるから、是非にと云ってたのに……」

彼女は彰の奴隷化された事も知っていたし、一度など、恭子と共に、彰の背に悪戯がきして、お負けに、面白半分に鞭をふるったことさえある。恐らく、今夜、彰に刺青することを、恭子は知らせていたに違いないが、

本人を前にしては流石に口には出せなかったのである。

委細かまわず、麗子は靴をぬぐと、スタスタと勝手しった恭子の悦楽の部屋へ通ろうとした。彰はあわてた。

「あッ、一寸待って下さい。今日は気分が悪いから、誰方が来ても入れてはいけないと云う堅い御命令です。若し違反すれば、ボクがどんな非道いお仕置を受けるか御存知でしょう。」

麗子はチラリと卑しむように彰を振り返った。彰の必死の顔を見ると、どう勘違いしたのか、案外あっさりと引返した。

彰に並ぶと、麗子は小声で耳許で囁やいた。「どう彰ちゃん。いい加減に恭子さんを見限って、私のペットにならない？。うんと可愛がってあげるわよ。いっそ、心臓がとまっちゃえば、彰ちゃんは私のものになるのにネ——」

妖やしい笑みを浮べて、麗子は彰の首筋に軽くくちづけをすると、片手を彼の首に巻いた。

「この女も俺をねらっている。危ない危ない、マダムハントはもう懲々だ。誰がこんな骨っぽいガリガリ女のペットになんかなるも

のか——」

その癖、彰はたまらなく女心を魅了する笑みを浮べて、首筋にかかった女の手を上から柔かく握っていた。

「ええ、いつか機会がありましたら……」

「きつとよ……。可愛い私の坊や。私は恭子さんのように乱暴しないわ。ええ、そうですとも、うんと可愛がってあげるわ。」

酔ったように麗子は口走った。

△始めは皆その術だ。そして、俺を奴隷にして、思いの儘に操る氣でいるんだ。この色後家奴——」

抱えるようにして、玄関にかかると、彰は満面に媚をたたえて、麗子を送り出した。

冷汗がじっとりと彰の体をぬらしていた。

まるで時間を計ったように、数分後に、マキが訪れた、おどおどと彼女は彰に寄り添って低い声で訊ねた。

「どうしたって云うの——。奥様がいるんでしょう？。私、入っても大丈夫？」

「大丈夫だ。心臓が悪くて寝ているんだ。ボクが一人じゃ困るからっていったら、誰かお手伝いさんを大至急頼めって話さ——」

「それで、わたしお手伝いさん？……」

「そうさ。寝たつきりなんでボク以外には誰

も入らしてはいけないうって云うもんだから、誰が来てるか判りっこないさ。君が食事を作って、ボクが寝室に運ぶ。それだけの事で、後は二人で自由なんだ——」

「あたし、彰ちゃんがこんな不自然なお金儲けるのつくづく嫌だわ。だって、あんな女に彰ちゃんがと考えるだけでも、ゾッとするんですもの——」

「ボクだってつくづく虫唾が走るんだ。それに意外にケチンボで、しっかり財布の紐を握っているから、仲々金を引出せそうもない。ボクの体を見給え。ホレ生傷だらけだろう。」

云う事をきかないと、ボクを縛って散々鞭で引っぱりたいたり、ローソクで焼いたり、君の前では云えない様な非道いことをするんだよ——」

「まあ——」マキは二の句がつけなかった。

「いっそ、死んじまえばいいんだわ……」

彼女は憎しみを一杯にこめてするどくつぶやいた。

彰はドキリとした。そしてさあめ態で、

「そうだ。本当に死んじまえばいいんだ。あんな奴——。そうすれば、あいつの宝石をゴツソリ戴いて、全部マキちゃんにくれてやるんだがなあ——」

二人は手をつなぎ、肩をよせ合って、キッチンに這入った。マキはいそいそと夕食の支度を始めた。

「ハイ、これ、病人の食事よ。うんと下で御馳走して待っているから、渡したらすぐおきてきてね——」

「いくとも……」

彰は口笛でも吹きたい気で、無人の部屋に入った。ごく簡単なパンとコーヒと卵一ヶ。

△フフ、二人の夕食はビフテキで、病人さんはたったこれっきりか——。マキも判っきりしていやがる。面倒くさいから片付けちまえ——」

彼は辺りの責具を感無量の面持で眺め乍ら、恭子のベッドに深々と腰を降し、パンを嚙り、卵を呑み、コーヒを啜った。簡単な夕食はすぐ終わった。マキを喜ばすべく、ダイアの指輪を一個、抽出しから抜き出すと、空になった盆を片手にキッチンに戻って来た。

「あら、もう喰べ終ったの——」

「簡単だからじきに済んだよ——」ついでに君の為、ダイヤの指輪を一つチョロマカして来たよ。机の上に投げ出してあったのでね——」

「判らなかった？……」

「判るもんか——」

「そうね、判る筈がないものね……」

「何と云ったの？」

「判らない筈よー。わたし、あの女が早く死ねばいいようにと思って、コーヒーに毒薬入れておいたんだものー。今頃苦しんでる頃だわ……。そうだわ、ヒョッとしたら、もう死んでるかも知れないー」

彰の顔色が変わると共に、激しい苦痛が、肉を吹き上げるように、全身に襲ってきた。

「バカな……バカな……」

マキの掻き抱く両手を肌にうつろに感じ乍ら、彰の意識はうすれていったー。

× × ×

ワイン氏のひねったスリラー談は終わりました。結末のあっけなさに、どうなることかと固唾をのんでいた連中は、チョットはぐらかされたようです。肩の凝りをほぐすように数度両手をぐるぐる廻転させたナイロン氏が、続いて話の騎手となります。

第四十二話

当世シンデレラ野郎

釜ヶ崎の朝は早い。朝霧の立ち籠めた阪堺線霞町駅の歩道に三々伍々、その日の糧を求めて、吹き溜りの男達が集まってくる。

あちこちでダンプカーが止まり、トラックに鈴なりの一団が、やがてほこりを巻いて何処ともなく走って行く。

大八は血眼のそんな連中を、ひとり離れてぼんやりと見つめていた。昨夜の焼酎の深酒が、やけに大八の頭を、体を重くした、働らく気力が、今日に限ってわいて来ない。

△ええい、一日休みだ。ドヤ銭ぐらいなら残っているし、十円飯でもくって寝てやれ▽

バサバサの蓬髪をかき上げて、彼は松田町に向ってトボトボ戻りかけた時、不意に後ろから声をかけられた。

「哥兄ちゃん、あぶれているのー」

振返ると、一見仲居風の色眼鏡の女が後ろに立っている。

「体が自棄にえらいんだー」

吐き捨てる様に呟やくと、その儘行きかけた大八へ女は並んだ。

「ラクな仕事があるのよ。うんと御馳走をたべて、面白い目をして、日当三千円ー。どう、悪くないでしょう？」

「フン、莫迦にすんないー」

「本当よ。何なら前金でもいいわ。私の云う儘についてくればいいのー」

大八はこの見知らぬ女にフト興味を抱い

た。どうせドヤへ帰っても、待つ身のない流れ者の独り暮らしー。二十六才の年齢には見えぬむき苦しい身なりの彼に、よくよくな物好きもあるものと、足を留めて、その気になった。

「面白そうだー体を張ろうじゃないかー」

「体をはるなんて、そんな大層なもんじゃないの。唯、ちょっと痛いめをするだけでいいの」

「痛い？……」

「心配しないでいいの、男ならほんの一寸の我慢程度のものよー」

「いいよ、日当がいいんだからなあー」

大八は、女に連れられて理髪店に入った。

一時間ののち、髪を七三に分けて、ポマードののったピカピカ光る頭髮に、無精髭をさっぱりとそり落した大八の浅黒い顔は、急に男振りが上った。服装がまるで似つかわしくな

い。女は朝風呂を大八にすすめ、その間、浴場の向いの喫茶で待っていた。

あかを落すと、大八はいよいよ磨きがかかって来た。女は眼を細めて、彼の豹変振りに、我が意を得たりと、惚れ惚れした面持で見つけた。

タクシーを拾うと、女はキタ（梅田方面）

へ車を走らせ、馴染らしい旅館に彼を連れ込んだ。

「これを着るのよー」

大八の前に出されたものは、真新しい上下の下着、それにレディメードとは云え、すべて新品の洋服に、ワイシャツにネクタイである。

「お洒落をするのよー」

女は更に香水をふりかけ、頭髮にヘアースプレーをサーッとちらし、腕時計をはめさせ、派手な靴下をはかせて呉れた。そして、約束通り三千円を服の内ポケットに二つに折って入れてくれた。

大八はまるで夢心地である。鏡に写った己の姿は、これが自分かと、眼を疑がいたくなる様な、一分のすきもない、リュツとした青年紳士である。

「いやだねえー、余りピッタリで気味が悪いよ。どうも私が惚れちまいそうだよー」
女はポンポンと軽く大八の肩を叩くと、外へ出ようとうながした。足許だけがふさわしくない、くたびれた地下足袋である、女はチツと舌打ちして、仕方がないと云った素振りで明るい街に出ると、靴屋の店先で、大八に

合った靴をえらんでくれた。

大八は自分がこんな美男子とは思ってもいなかった。気恥かしい気で女について歩いて行くと、すれ違うBGが振りむいたりなどした。

△まるで夢を見ている様だぜー。余り気を持たすと、ドヤへ帰るのが嫌になるぜ▽
二日酔いをいつしかすっかり忘れて、徐々に大八は気分爽快になりつつあった。

十本十円のモク以外吸った事のない彼が、煙草屋の前で立止ると、娘がピースですかと訊いた。苦笑して彼は千円札でピースを二つ買った。甘いヴァージニヤ葉の、快よい香りが、フーツと気の遠くなる様な煙草の酔いを彼に与えた。

このシンデレラ野郎の序説に、少し時間を使い過ぎた様である。話を進めよう。

× × ×

H海岸のこの辺りは別荘が多い。大八はその別荘の一つの、応接間で、出されたコーヒーのみ、ケーキは残すべきか、食べるべきかと迷っている時、ドアが開いた。

パツと花が咲いた様な、妙麗の美女が、にこやかに笑顔をなげかけて会釈した。はち切れそうなセーターのふくらみ、のびのびと伸

びたスラックスのピッタリと腿についたあでやかさ、シャーペットトーンの仄青い薄化粧。すべてが、大八とは凡そ縁遠い階級の娘だった。理智的な澄んだ瞳、桃色の唇――を、ぼーつとした顔で大八は振り仰いだ。

「私、景山耀子と申します。御友達はヨーちゃんと呼んでいますの。どうぞよろしくー」
彼女は鈴を振る様な声音で、愉しそうに自己紹介した。

「ハ、ハイ。ボ、ボクは、遠山大、えー大八郎と云うのですー」

「いいお名前なこと」

娘は楽しげに頷ぎいた。

△この娘が俺を縛って鞭をふるうなんて、まるで考えられない事だ。眼かくしされて車でこへくる途すがら、案内の女は、ブルジョア娘の我儘で、若い男を虐めて喜ぶ悪趣味がおありなどと云っていたが、こんな娘になら、幾ら虐められたって、責められたって悪くないてーどう云って切出すつもりかな？▽
「あおう、私のこと、鈴からおききになって？」

はじらい気味に娘は大八に問い掛けた。

「はあー大体……」

△あの女は鈴と云う、お手伝のような女なん

だな。これはまるで現代版の吉田御殿だ」

「貴方はU電器の取締役なんですからね。お若いのに偉いわ」

「ええ、まあね」

大八は鈴と云う女から、娘が何をきいても合意を打っておく様云われていたので、擦ぐったい思いでそう答えた。

△釜ヶ崎の日雇がU電器の取締役とは、思い違いも甚だしいね▽

「では、お部屋へ行きましょう。貴方を虐めて差上げますわ」

「……」

大八は妙な気持ちになって罎子に導かれて一室に這入った。部屋は仄暗い。

瞬間どきりとした。顔面が硬直する。

部屋の正面に全裸で姦々と縛られた女が天井から逆吊りにされて乳房にグサリと短剣が突きささっている。

丸い太い柱には、血みどろの男が両眼に針を刺されて苦悶の形相も物凄く、舌をダラリと垂れている。

台の上に体半身の皮膚を剥がれた女がのたうち廻っている。

大八は思わず二三歩ヨロヨロと後退した。余りにも凄惨な地獄図絵だったからである。

「ホホ、驚いたでしょう。けれどこれは全部マネキン人形よ。これから本ものが始まるのだわ」

鬼気迫る部屋で、娘はケラケラと笑った。

「さあ、お脱ぎになって……脱ぐのよ」

いつの間にか、娘の手には拳銃が光っていた。先刻来の甘い気持はけし飛んで、大八は深い後悔の念に、ほぞをかみ乍ら、云われる儘に、おしきせの服をぐずぐず脱ぎ始めた。

「向うをお向きになって」

裸に近い彼に娘は命じた。云われる儘に背を向けると、

「両手を後に廻すのよ」

鋭い声走った。大八は淡々、後ろで両手を合やす。堅いロープが、大八の両手首にぐるぐると喰い込んで来た。

「じっとしているのよ」

罎子はそう云って、丸柱の両眼に針をさされたマネキン人形を、ラクラクと抱えて、ポイと、皮をむかれている女の前に転がせた。

「お代りは本物ですわね」

縄尻を引いて、娘は丸柱に大八を括りつけると、改めて、柱ごと両足を身動き出来ぬよう縛った。

「アーンとお口を開いて……」

大八は云われる通り口を開く、開いた口にロープをギリギリとしめつけて、顔が歪むまでしめ上げると、更に、上から娘の移り香のあるマフラーで猿轡をはめた。

娘の瞳はキラキラと黒耀石のように、妖しくきらめいて、昂奮に豊かな乳房が大きく弾んでいる。娘は鞭を握った。細身のしなやかな革鞭だった。声もなく、娘はそれを振り下した。大八は皮膚につきさす激しい痛みを感じた。ツーンと鼻先が痺れるようなするどい激痛である。

「四ツ：五ツ：、六ツ：、七ツ：、八ツ：、九ツ：」

娘は数をかぞえ乍ら鞭を規則正しく大八にふり降した。

「二十七：二十八：二十九：三十一」

三十を数えて鞭はふり止んだ。

大八の全身にみみず脹れが縦横無尽に、鞭の爪跡をのこした。

△三千円は安い：三千円は安い：▽

氣息えんえんとして、大八は心で叫んでいた。

「元気をつけて差上げますわ」

息を弾ませ乍ら娘は、頬にかかる乱れ毛をはらい乍ら、平然と注射のケースを開いた。

ビタカンとザルプロが、ブスリと容赦なく大八の腕に針を立てた、尖端から体内に流れた。

「もう一本ねー」

械いて二ccの細いアンプが切られた。チクロパンだった。射たれて数秒——、大八はこんなと深い奈落の底へひき込まれていった。

× × ×

昏明から大八はさめた。ふわふわしたベッドに横たわっている。両手は五十センチ程の真鍮の鎖でつながれた。巾五センチ程の腕輪によって自由を奪われている。

右足にも足輪が嵌められ、ベッドの右隅の柵にしっかりとつながれている。

「お眼ざめらしいわねー」

娘は盆に、湯気の立ち上った、料理を運んで来た。

「さあ、これを召上れ。ぐんと精気がつくわよ」意味ありげな笑いが娘の頬に流れた。

彼女はサイダーをコップに注ぐと、それに卵の黄味を落して挽拌した。何よりの精力回復清涼水である。

云われる儘に大八はじっと一息にそれを呑み乾した。命まではとらないと云う安堵感

が、あれ程鞭を振った彼女に対して、仄かな親近感すら覚えさせる。

「これは『蛇床』^{ジャシヨウ}『遠志』^{オンジ}『続断』^{ゾクタン}『縦容』^{ジュウヨウ}を

等分に混ぜたものの。これをのまなければいけないわ。どんな効めがあるか貴方の体自身もつともよく知っていると思うの——」

娘は顔を赤らめて、赤茶けた散薬をすすめた。毒喰わば皿までの気持で彼はそれを水で嚥下した。

（筆者註、これを服用して、一夜に七十人の女子を御したと云う記録が残っています。少し眉唾ものですが——）

大八は体のけだるさを覚えていた。朝の太陽が眩しく黄色かった。気を失なった間、何をされたかは彼の知るところではない。唯、耀子の顔色から判断して、何かあった事だけは確かだった。

その日は手を代え、品を変え、彼は滑車で宙に体を吊られた儘、鞭の洗礼をうけた。みみず腫れに、更にみみず腫れが重なったが、始めての時程痛くは感じなかった。そして降されて食事——。再びチクロパンが射たれて昏睡する——。

意識をとり戻すと、彼は自分が防弾硝子でつくった、透明の大きな硝子ケースに入れら

れている事を知った。空気ぬけの穴の外、何一つない、大きな特殊な硝子箱だった。

時間がくると、娘が食事をその穴から差し入れた。娘以外、誰一人現われぬのも不思議だが、この部屋に、次々と運び込まれる、異様な責道具の類は、決して娘一人で持ち運び出来るシロモノではなかった。

△こんな日々が続くと、俺の頭はヘンになつてしまふそうだ。哀れな大八よ。体中生傷だらけではないか——▽

彼は己れの体を振返って自嘲した。甘言で誘い込まれた後悔の念と、娘への慕情が交錯して、早く解放されたい様な、そのくせいつまでも娘に責められていたい様な、一種独特の妙な感情が大八の肌に重くのしかかっていた。

排泄もやむなく、大八はこの硝子ケースの中ですました。シーンとした静寂そのものが、大八をじりじりさせた。ワーッと叫び出したいような気持だった。

× × ×

大八は、元の応接間に居た。四日の労苦がいつしか大八を無精髭の、ぼさばさ頭の元の彼に仕立てていた。裸の彼に、鈴と呼ばれる女が、どうして持って来たのか、古く汚れた

大八の衣服を、さも汚なげに抱えて現われて、彼の前にドサリと投げ出した。

黙って、前金を差いた残金三日分九千円をテーブルにおくと、

「約束通りです。霞町の元の場所までお送りしましょう。眼かくしして、私の手についてくるのです」

と冷めたい声で指図した。

四日間、まるで狐につままれた様な日を送った彼は、朝まだき、地下鉄動物園前で、放り出すように降されて、呆然と立っていた。

今日も日課の様に、あちこちのドヤから、黒い塊が吐き出されて、彼の周辺に群がってきつつあった。

何が何だか薩張り分らない大八の心境であった。分っている事は、ズキズキする筋々の痛みと、膚脱したような、体の張りのなさだけであった。

△チェッ、化物は釜ヶ崎だけかと思ったら、まだまだ世間は広いや。妙な怪物が、この大阪近辺にもウヨウヨしていやがる▽

大八は、記憶を振り捨てるように、大きくチンチンと手鼻をかむと、人の群に交じた。

× × ×

「鈴やー、娘にもお金をやりましたネ。」

「はい、大奥様ー。云われました通り、娘には日当一万円、男の方は日当八千円の割で渡しまして御座います」

「ほんに御苦労でした。これで又私の寿命も伸びたと申すもの。今回の二人は仲々の上出来でした。ああ、毎日穴から部屋のをさまを覗いていて、ほんに草臥れた事。鈴やチョイト肩をもんでおくれーそれにしても娘はどこで撮んだのかえ？」

「はい、大奥様。あの娘はKデパートの化粧品売場のマネキンで御座います」

「そうかい、そうかい。ほんに鈴に申しつけた通り、あの娘は、私の思う通りにやってくれたよ。ところで男はどうしたの？……」

「はい、あの青年は民間放送局の有名なタレントで御座いますよー」

「そうでしょう、そうでしょう。仲々立派な好青年でした。私は四日ぐらいでは手離なしとうなかった。けれど、あれ以上青年を手許におくと可哀想に腎虚になりますからな……」

「それで御座いますねえー。でも大奥様、この度、お預かりしました十万円は、その為すっかり費い果しまして御座います」

「そうでしょう。鈴の礼には二万円程差上げ

ますから、又たのみますよー」

肩をもみ乍ら、鈴江は胸算用していた。娘がN区の貧民窟の娘であることも、娘には一日二千円の日当しか渡さなかったことも、男がスラム街の住人である事も、この大奥様、当年六十九才の精力溢れる後家様は、何も御存知なかったのである。

× × ×

「青年がチクロパン作用中、老後家の対象になつていた事は云う迄ありません。

若い男女の嗜虐的なシーンを覗き見して、それによってこの老婆は満悦を感じていた様です。」

ナイロン氏の話は終わりました。物語中出て来た、精力剤について相当論じられました。が、ナイロン氏は、ニヤニヤ笑い乍ら、

「私の経験によりますと、サイダーへ卵の黄味を落す、飲料水が、これから夏向き、口当りもよくさっぱりして、確かに精力がつくと思うのです。ええ、勿論私が考えたので

はありません。先日『夫婦の医学』を読みまして、それを実行に移したに過ぎないんですかね」

と、その出生を明らかにしました。長い話のうちにいつしか雨は上っていました

た。誰云うとなく、二次会が提案されて、ス
テッキ氏の二号かも知れないと推察されてい
るマダムが経営する、北のバーへ繰り出す
事に衆議は一決したのでした。笠をかむった
雨上りの月が、かなり中天高く、退屈男達を

心細く照らし出しておりました。
やがて、紫煙と談笑の渦まき、バーの二階
の特別室に陣どった退屈男達はステッキ氏提
供のビールに咽喉をうるおしながら、とりと
めもない雑談に生命の洗濯をするのでした。

蒸し暑い梅雨の季節なのに、このスペシャ
ル・ルームは適度に冷房され空気も乾燥して
いるせいか、まるで秋の高原にいるようで、
爆笑のうちに夜の更けるのも忘れる有様でし
た。
(終)

〔新版〕女体悦虐フォト七十選

Z組七十集

大手札判印画紙(9×13㎝)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

Z 1	ゴム猿轡 (梨花悠紀子)
Z 2	囚女六三号 (柳初子)
Z 3	猪手足吊り (梨花悠紀子)
Z 4	逆エビ縛り (大塚啓子)
Z 5	ローソク責 (東浦ひかる)
Z 6	豊賢責め (絹川文代)
Z 7	淫らな縛り (愛川悦子)

Z 8	ザリガニ (梨花悠紀子)
Z 9	引き回し (東浦ひかる)
Z 10	全裸後手縛 (加茂良子)
Z 11	豊満被虐 (大井小夜子)
Z 12	黒髪いじめ (大塚啓子)
Z 13	足吊り嬌態 (絹川文代)
Z 14	黒縄高小手 (四方清美)
Z 15	強烈荒縄責 (梨花悠紀子)
Z 16	喰込む白縄 (東浦ひかる)
Z 17	くの字の足指 (桜井葉子)
Z 18	裸身の受縄 (前本妙子)
Z 19	無茶な猿轡 (竹野ひろ子)
Z 20	ハリツケ (梨花悠紀子)
Z 21	臍なぶり (大塚啓子)
Z 22	逆手足吊り (東浦ひかる)
Z 23	美肌いじめ (絹川文代)
Z 24	鼻ゼメ仰向 (加茂良子)
Z 25	恐怖の瞬間 (若原明子)

Z 26	火箸責め (梨花悠紀子)
Z 27	全裸海老責め (熱海容子)
Z 28	ベッドの痴態 (絹川文代)
Z 29	足の裏擦り (大塚啓子)
Z 30	閨の女体飾 (竹野ひろ子)
Z 31	首絞めゼメ (大塚啓子)
Z 32	鼻孔責め (若原明子)
Z 33	悦虐放心 (梨花悠紀子)
Z 34	手枷足くさり (四方清美)
Z 35	寝室のプレイ (花本京子)
Z 36	猿轡の妙味 (梨花悠紀子)
Z 37	首縄柱しばり (絹川文代)
Z 38	巻煙草責め (大塚啓子)
Z 39	尻立てポーズ (桜井葉子)
Z 40	エビ責 (東浦ひかる)
Z 41	彼女の好物 (竹野ひろ子)
Z 42	ワンピース (花本京子)
Z 43	荒縄竹棒責 (梨花悠紀子)
Z 44	浣腸責ポーズ (大塚啓子)
Z 45	鏡に映す裸 (山路ミヨ子)
Z 46	苦悶に喘ぐ (大塚啓子)
Z 47	酔後の緊縛 (絹川文代)
Z 48	逆十字エビ (大塚啓子)

Z 49	全裸猿轡 (東浦ひかる)
Z 50	欄間宙吊り (梨花悠紀子)
Z 51	全裸逆エビ縛 (絹川文代)
Z 52	荒縄仕置室 (梨花悠紀子)
Z 53	庭園の惨虐 (館典子)
Z 54	被虐の果て (大塚啓子)
Z 55	痛めた全裸像 (大塚啓子)
Z 56	鏡の中の全裸 (愛川悦子)
Z 57	セーラー服 (梨花悠紀子)
Z 58	檻の緊縛裸体 (愛川悦子)
Z 59	全裸股間縛り (絹川文代)
Z 60	オムツ逆エビ (田中芳代)
Z 61	胴縄の重量感 (桜井葉子)
Z 62	ゴム人形 (竹野ひろ子)
Z 63	縄トゲ責め (梨花悠紀子)
Z 64	女大生恥態 (田中芳代)
Z 65	白肌全裸縛り (絹川文代)
Z 66	強制的開股縛 (絹川文代)
Z 67	強烈的全裸晒 (愛川悦子)
Z 68	亀甲乳房責 (梨花悠紀子)
Z 69	ベッドの悶え (愛川悦子)
Z 70	恥しさに耐えて (館典子)

△通信△

「東浦ひかる様と竹野ひろ子様へ」

水 木 清 一

私が初めて、東浦ひかる様の「私を責めて下さい」のタイトルで華々しくグラビアにデビューなされた時、そして亦、少し遅れて「カバーガール」と銘打ってグラビアを飾って下さいました竹野ひろ子様共々、ご自身がもつ性のなせるワザと言うものの、刊行誌としてのグラビアに緊縛肢体を晒す事は、たとえ芸術味豊かな責フォトにしろ、私などには、まさに百倍も千倍も勇気を要する事で、只々感歎せざるを得ませんでした。勿論私は、ご想像にたがわずSの中康度をもつ男性ですが――。

東浦様、竹野様、前々から貴女様お二人に一度お便り致したいと考えて居りましたが、今日まで延び／＼の日を送って居りました。三月号読者通信、並びに四月号奇ク

サロンに東浦様の投稿文が掲載されて居りましたが、やはり私と致しましても、又多数の奇ク愛読者にとりましても、貴女様方の本当の告白文を拝見させて頂けますれば、勿論フォトも希望致す処ですが、貴女様方の心の底からの叫び声、真実の体験告白手記は、まさに、東浦様、竹野様、お二人の大ファンにとっては切に希って期待致すものです。

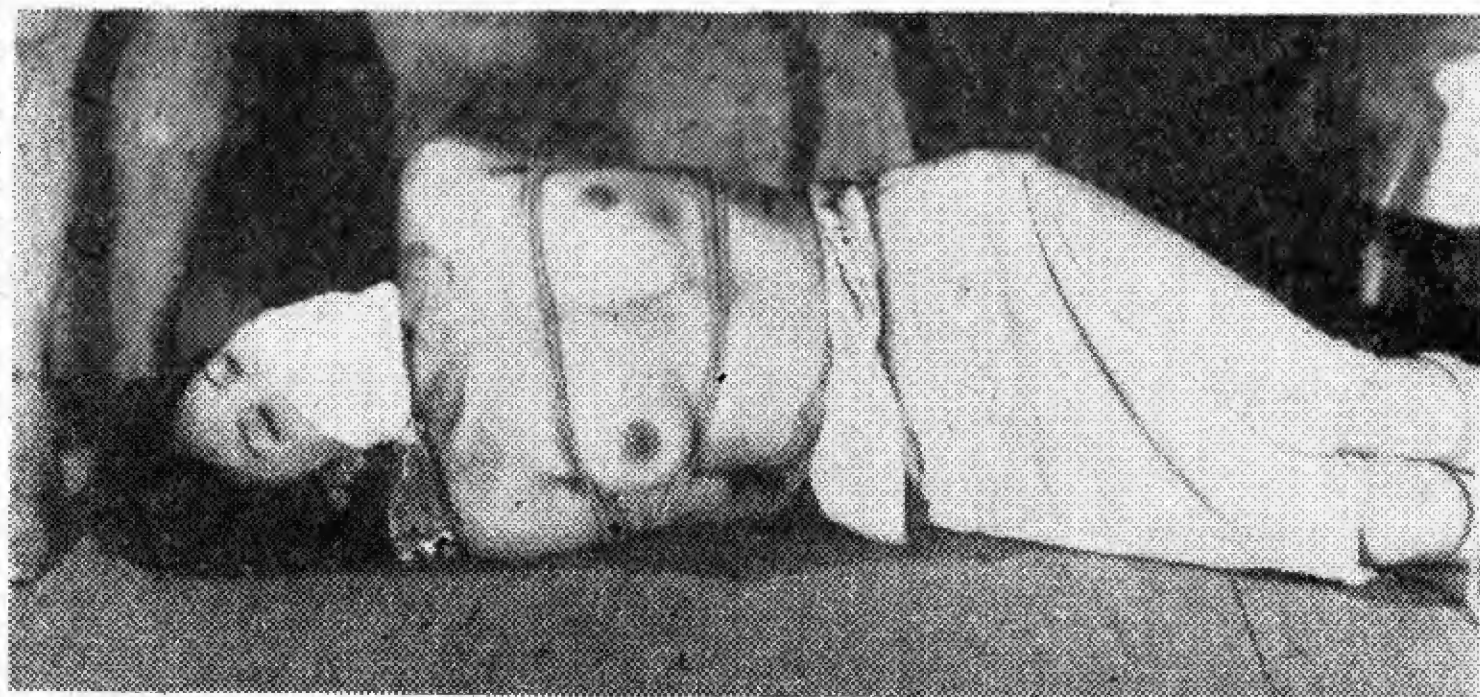
私は、そして初めて貴女様お二人の緊縛責フォトに接しました時、なんて素晴らしい、美しいプロポーションがとれたモデルさん？ だろうと心から嬉しく存じた次第でした。実に東浦様と云い竹野様と云い、近年のK・K誌が収獲した、責フォトの真随を現出し得る最大の美しいモデルさんだ

と想います。お二人とも、K・K誌の責フォトにとっては貴重な、そしてユニークな存在だと云えましょう。

職業的モデルさんとは違った純粹なものが真実そこに流れ出ずる訳です。迫真力ある、一貫とした芸術の香り高い責フォトが産れ出ずるのは、まさに当然な事と云えましょう。

私は、東浦様と、そして竹野様に、今後共K・K誌のみの世界に於いて、出来得る限りのご活躍を心から期待申して居ります。現在貴女様お二人は、K・K誌責フォトの最大のモデルさんだと云っても過言ではありませんすまい。均斉がとれた肢体から感ずる魅惑の責フォト。私は全く貴女様お二人の虜にさせられてしまいます。東浦様、竹野様、貴女様お二人の実際の責フォトモデルとしての体験談、告白、手記等をご発表頂きたいのです。呉々もお願い致す次第でご座居ます。

私は今迄に、読者通信を通じて、どの位、文通勧誘をMの方々に呼びかけました事か知れません。現在まで、胸ふくらませた期待はとう／＼叶えて頂けず、残念でならず日夜悶々と送って居ります。尤もK・K旧



号当時では、遠くは九州、鹿児島等からはるばるお便りを下さったお方ども座居ましたが、現在は皆無です。お互の秘密は厳守する事は勿論、私と致しましても聊かなりと名だたる堅い家庭に育まれた以上、どこまでも紳士的行動をもった、永続性のある文通をさせて頂きたいと思っております。お暇な折を見て、ぜひぜひお手紙を下さい。私の住所は、昨年十一月号の読者通信欄で掲載させて頂きました。ご覧に成られますればお分りと存じます。

私の嗜好と致しましては緊縛を主体とした責で、何処までも理性あるプレイとして、お二人の好みと同じ処にある逆(S)の立場を行くものです。その他に、浣腸、鞭打、等々……。空想の趣向もいろいろと座居ますが……。お灸に関した拙文を晒しましたが、やはりお灸を据える女性(灸痕)には、最大の魅力を感じるものです。告白随筆「魅惑の灸痕」、「お灸つれづれ」にも記しましたが、これはある環境のなせる結果だと想います。思春期に入る一時期に、たま／＼私の目に映った、半裸体でお灸を据える——据えられる——美女?の姿態、そこに動くのは、やはり性に目覚める、男

性としてのS性はやむにやまらぬ処へともって行ったと思うのです。

旧号の読者通信で文通を交しました—M女性、は、やむにやまれぬ気持から、わざわざ神戸から横浜まで出て来られました。ご自分からホテルへといった次第で、——私と致しまして、その頃はロマンティックなSだっただけに、人目につかぬ個処に、いくらでもお灸責をしてくれ、と云う單刀直入な現実的な誘惑には、聊か参ってしまいました。どうやらその場合は空想的な話題にうまく花を咲かせて逃げた心算でしたが、それ以後の交信はパツタリになって終りました。

紳士的態度をもってするプレイは在って悪い事はありません。お互に理性に富んだ、現代のモラルとエチケットをもってしてこそ、まさにこの悦びは地上最大のものと云えるかも知れません。

お便り頂けますれば、幸と存じて居ります。

東浦様、竹野様、お二人のご健康とご多幸を心より祈ってやみません。

ご機嫌よう——。

〔告白〕

オムツに関する考察

白 川 睦 夫

私が当誌を愛読する様になったのは、昨年の秋頃です。本屋でなんとなく雑誌のページをめくって居た所、オムツカバーの記事が出て居りましたのでビックリしました。

広い日本のどこかで、やっぱり私と同じ異常な感覚の持主が居る事を大変心強く思いました。私も私なりにオムツに関する事を書き皆様の御参考に供したいと思います。

大体オムツは以前は新生児より一、二才位の赤児の使用するものなので、大人がこれを使用するという事は、まずまず変人と思われるでも仕方がないので、私も自分自身いましていました。所が最近では大きな病院へ行く、一枚や二枚、必ず大人のオムツとオムツカバーが見られるようになりました。

私の場合、カバーよりオムツ布地が大変好きなのです。そこで私はここにオムツに関する

自分の思いを二、三書きます。その第一がオムツです。第二がオムツカバーです。第三が使用方法で、第四が使用感です。

一、オムツ

第一にオムツですが、今は各店で種々様々なオムツ布地が売っています。でも、私は白のサラシは好みません。大体常用するオムツは浴衣地の柄ものですが、私は絞りのものが特に好きです。赤ちゃんが普通使用する布地がよいのです。大体私の好きなオムツを大別すると次の様です。

イ、絞りの雪花模様の大柄のものです。普通一般にオムツとしてのみ染めたもので、白のサラシに紺に染めた雪花模様のものが、一番好きなオムツです。

ロ、白のサラシに丸く玉があり、赤、緑、紫、黄と染めたものです。これも大変美しい

模様で好きなものの一つです。

ハ、女物ゆかたの大柄の花模様のものも好きです。

私の場合、オムツは大体長さ二尺九寸から三尺位のものを使用します。三枚一組で股当オシメに腹にまくオシメ二枚です。使用方法は又あとで述べます。

マニヤの方には、やっぱり柄が大変感覚を刺激することと思います。私は大体十組ほど持って居り毎日とりかえて使用します。

二、オシメカバー

オシメカバーは大体三枚程ありますが、私はビニール製のものは好みません。皆赤ちゃん用と同じ薄い生ゴムのものばかりです。所持している三枚を大別してみますと、

イ、生ゴムのピンクのオシメカバーです。これを使用するとカバーの上から見ますと、下のオシメ布地が淡くカバーの上よりすけて見えるので大変感じがよく、会社へ行く時は必ずこれを当てます。型は前開きです。

ロ、腰巻型のもので、これはゴム店より黄のウスゴムを買入れて妻に、ミシンで縫わしたものです。オモテはネルでピンク系のネルに赤ちゃん用のカバーの様な可愛い柄が入っています。この腰巻型を使用するとカバー

のすそよりオシメ布地が目につき、夜は大体これを使用することになっています。

この型は私の好きなものの一つで、前開きはオムツカブレがありますが、これですとオムツはむれませんが、私のように布地が気になるマニヤには、やっぱり一番です。

ハ、薄い黄の生ゴムでオシメと同じくする型です。これは、いわばフンドシ型ともいえるもので、オシメがカバーの両側から十分はみ出しますので、フエチ党のマニヤにとっては大いに楽しめる型です。

以上の三点が特に私の愛好するオシメカバーです。私はオシメカバーより、むしろオシメのみの方が好きなのです。オシメの柄がカバーの上より見えるものでないと、あまり使用しません。私と同じような趣好の方も、多く居られることと思います。

三、使用方法

私は今迄も申しました様に、オシメ布地がカバーの上より見える方法をとりますので、先ずカバーの上にオシメ布地をT型に置きます。股当オシメと一番好きな大柄の雪花模様のオシメを一組にします。

大体股当オシメは玉模様です。腹に当たるオシメは雪花模様のもの二枚が組です。カバ

ーは三角型も腰巻型も同じです。使用方法は皆同じですので大別は省略します。

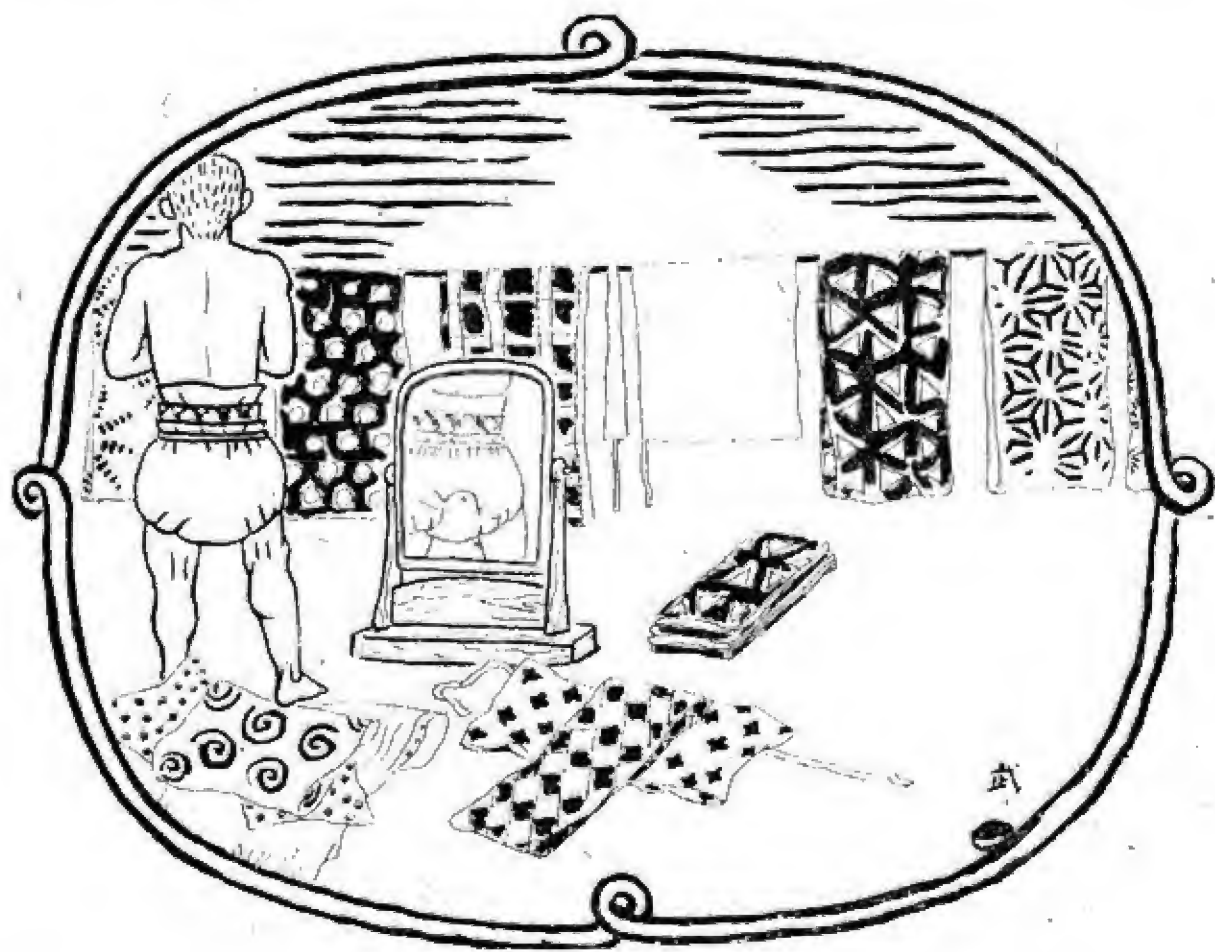
四、使用感

私達マニヤにとって使用感が一番です。

私は会社より帰ると、妻がピンクの三角型カバーをとって呉れ、代りに腰巻型かオムツ型(長方形)を当てて呉れます。妻がオムツとオムツカバーを当てて呉れた直後、唯赤ちゃんになったつもりで体はカッカツと熱くなって参ります。もう心は天にも昇る気持ちです。

時々自分の尻の方を眺めたり、妻の居ない時は一人でカガミに映して楽しみます。幾重にも当てられたオシメ布地がピンクのオシメカバーの外に出ている自分の腰部を見ると、もう宇頂天になってしまふ私です。

こうして朝が来ますと又妻にオシメをとりかえて貰い、いそいそと会社へ出かけます。今の私はひとときオシメがなくては生きられ



れません。

以上が現在の私のあからさまな告白です。どうか、全国の同好者の方々、どしどし我党のため、投稿しようではありませんか。

ガン作・マニヤのノート

〈私のバーでの会話〉

芳 野 眉 美

A、大変な男

「小説新潮の平林たい子の（大変な男）は面白いですよ」と私。

「奥さんに男をつくらせて、売れ

もしないのに、それを小説に書いてる男の話とか、下宿している学

生に、性教育だと称して奥さんを裸にして実演をしてみせる男の話とか」

「実話かい」とN。

「そうらしいですね。ノン・フィクション」

「奥さんが御主人の内緒で下宿している学生と関係した話なんか、よく聞くがね」

「そういう下宿知りませんか」

「俺のほうから聞きたいよ」

B、妻のヌードを売る男

「ある人から、奥さんのヌード写真を買ったことがありましたよ」と私。

「誰に？」

「先生も御存知かもしれません」

「ははあ」

「アルバムを見せて貰ったのですが、奥さんをモデルにして種々な写真をとっているんですよ」

「緊縛？」

「そうね、KKのグラビヤ・フोटを見ているみたい。股間縛りが多かったな」

「全裸？」

「セミヌードと半々」

「御主人が君にくれたの」

「そう」

「奥さん承知しているのかな」

「アルバムを見ながら説明してくれたもの」

「うむ」

「奥さんがいやに妖艶に見えた」

「そうでしょう」

「御夫婦で楽しんでいるんだから幸福ですよ」

「俺も買ったことあるよ」とN。

「珍品ですよ、これは。トイレの中で奥さんが……」

「いやあ」

「よくとれてたな、あれ」

「見たいな」

「夫人の顔も、白い一筋の線も……」

「奥さんと面識があるの？」

「紹介されたから」

「奥さんをモデルにしているわけね、やはり」

「SMクラブみたいなものを主催している男だから」

「奥さんを他の男に紹介してSMプレイをやらせているのかしら」

「そういうこともあるそうだ」

「商売だな、そうなる」と

「ヌード写真だけじゃもうからなからな」

「売春にならないの」

「そうね、関係さえしなければ、プレイだけならね、どうなのかな？」

「その点」

「プレイしたの？」

「――」

「笑ったな、あやしい」

「奥さんの足の間に、見知らぬ顔の男が口をあいていた写真を見せてもらったよ」

「トイレで？」

「浴室。あなたなら飲ませてもいいわ、だって、奥さん」

「ちえっ」

「あの人に内緒にね、だって」

C、妻のパンティを 売る男

「三行広告で問題になっている、あるMSグループの案内書にね」と私。「フェテ愛好者のために女性使用時の下着実費頒布、というのがありましたよ」

「奥さんの穿き古したパンティでも売りつけるつもりなんだろう」とN。

「そうかもしれませんね」

「洗濯しなくてもすむし、いつも新品を穿いていられるし、奥さん喜んでくれるよ、きっと」

「パパは頭がいいわ、なんてね」

「ブラジャー、スリッパ、いくらでもあるしな」

「百百のパンティなら三百円から五百円で売れるでしょうね」

「KKのモデルさんに手紙を出してみたら？」

「そうしますか」

「実費で売って下さいって」

「オール読物の最後のページ（オール横丁）にね、時々面白い記事が載っているんですよ」と私。

「古いパンティと新しいパンティをとりかえる男の話はどうです」

「いるんだね、やはり」

「いつも細君が新しいのを穿いているのに気がついた御主人が問いただしたところ、近所の老人が古いパンティと新品をとりかえてくれるんだって」

「御主人としては複雑な気持だろうな」

「そうでしょうね、自分の細君の穿いた汚れたパンティを老人が何に使うのか、ね」

「新品と交換じゃ、そう文句も云えないし」

「そんなところ」

「物々交換か、商売したら面白いだろうな」

「趣味と実盛とをかねてね、やりますか」

「そうね、老人になったらね」

「特に汚れたのは、最上級品とと

りかえます」

「とりかえて、どうするの？」

「特に汚れのひどい部分を切りぬいてマスクのガーゼにします」

「——」

「パンティをそのままマスクにしてもいいですよ、六月号の（幸福なる隷属）みたいに。でも、それじゃ外を歩けないでしょう。私の知っている男の話」

D、ある夫婦関係

「Y映画に出演した若夫婦の話が週刊紙にのっていましたね」

「実演、写真、案外多いね」

「妻がストリップで、夫がコントをしている夫婦」

「御主人の外に、数人のパトロンを持つているキャバレーの女の子

や、男を養っているトルコ風呂、飲屋、マッサージの女の子とか、

水商売は大同小異ってとこだな」

「とにかく、いろいろな夫婦関係がありますね」

「モデルになってくれれば、細君

と寝かせると云った春画の大家が

いたそうだから」

「モデルになりますか」

「そうしますか」

「オール読物の（性生活の知恵）にね、自分で撮影した令夫人のポートレート・ポートレートとって、普通のじゃないですよ、令夫人の、ね、わかりますか、やたらと人に見せる達人の話が載っていますよ」

「セルフ・タイマーでうつした夫婦の夜のシーンを秘蔵している人もいるそうだから」

「読者通信にも、よく見られますね。グラビアのポーズを参考にしてSMプレイを楽しみながら撮影したのをアルバムにしておくなんて」

「幸福であれば、何をしてもいいものだ」

「夫婦でお互に理解していれば、楽しい生活が送れるってわけ」

セミ・ドキュメンタリー

バスガールの運命 (四)

滝 畑 三 郎

登場人物

内田 規子^{ノリ} 信二郎の婚約者で懇望されてバスの見習車掌となる。

金沢 信二郎 T交通株式会社の専務。規子を理想的な女性に育てたいと思っている。

庄司 敏子 金沢専務から極秘の内命を受けて内田規子の特
別訓練している教導員。

規子の同期生達が一カ月の訓練を終りそれぞれ正車掌として勤務
についた翌日から彼女にとっては突然に新しい仕事を与えられたの
である。

昨晚からは広い宿舎に、規子と規子の専任教導員である敏子の二
人切りである。

信二郎のバス会社では申請中であつた新路線が許可されたので、
近く営業を始めるについて、大巾増車の予定で、今日から今年第二

次の車掌養成訓練が始まるところである。与えられた毎日を送るの
に精一杯であつた規子は、そんな事すら知る由もなかった。

「規子さんの着る制服ね、今日から之に変わったの。一寸見てごらん
素晴らしいでしょう」

手渡された制服は余りにも変りすぎたものであつた。

「まあ晴れがましくて恥しいわ。お師匠さん、皆んなが、こんな
着るんですの？」

「いいえ、当分は貴女だけの制服なの、規子さんは特別訓練生でし
ょう、だから、しばらく、この服を着用して、身を以って実験をす
るの。そして、もう一カ月私がみっちり仕込んであげることになっ
たの。貴女にはモデル生も勤めていただくの。大切なお仕事だつて
ことすぐ判ると思うわ。」

それから数刻後、雨天体操場には二十名の新入生と規子達が集合
させられた。演説を始めたのは勿論教導員の敏子である。新入生達
は練習用に先輩のお古の制服を身につけて、何となくぎこちなく、

規子に至っては自分一人が派手な人目を引く新制服を着せられてまるで見世場にでもさらされたような情けなさを味わわれて甚だ落ちつかぬ様子である。

敏子の紹介した二人の補助教職員には信二郎お気に入り井上夏が加っている。井上夏が体育大学出である事も何となく規子を余計不安な気持ちに駆り立てるのであった。

「皆さんに今お渡しした車掌勤務要領は私達が車掌生活をする為の憲法のようなものですから、大切に身につけて、規則にもとづいた毎日を暮らしましょう。この内容全文は誰にでも、判りやすいと思えますから、後程よく読んで下さいね。

今からこのうちの特に二―三項について補足説明致しましょう。

先ず第〇頁を開いて、第四章の一

車掌には制服制帽を貸与する。定められた制服は公私の時間を問わず常時着用すること。但し

① 自宅から片道五〇〇m以上離れない外出の場合

② 会社の休日

③ 私服で外出する許可を得たとき

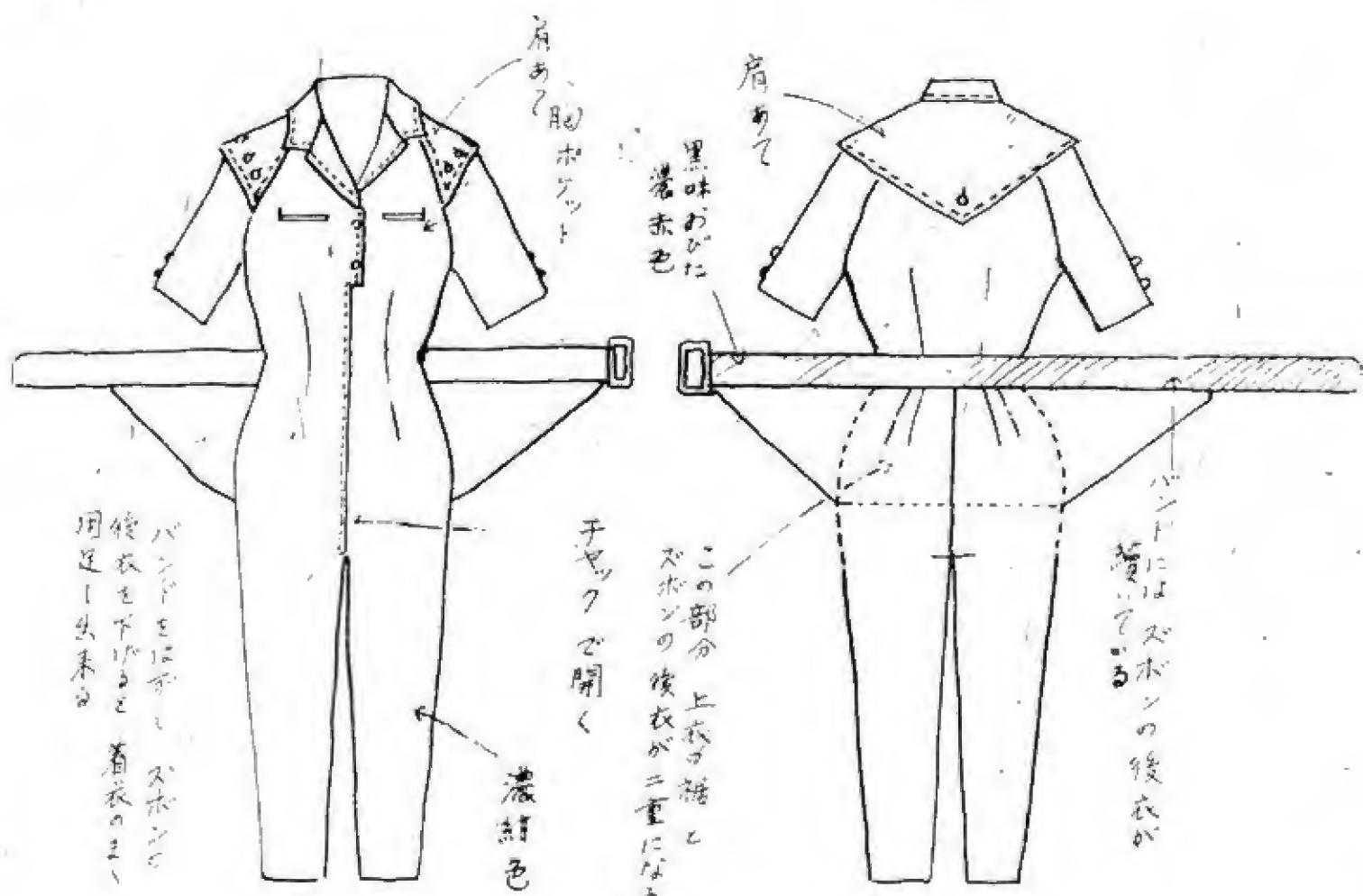
はこの限りでない。

なお制服を着用すべき時間はストッキングをはかないことと制帽以外の帽子を用いてはならない。

二、制服の下に着用する下着は別表の型に属するもので原則として白無地のものを選び、着用する前に検装係に呈示して検証を縫いつけたものに限る。

.....

これから皆さんの身体に合せた制服が貸与されます。制服を着た



車掌規子の制服

皆さんは一見してこの会社の車掌だと社会の方に判る筈ですね。私達車掌のお給料の中には、会社の宣伝をする手当も入っているわけですが、私達がこの会社の車掌を勤めていることは恥しい事でなくって、大変に名誉なことなんですから。」

(註、T交通株式会社はこの県では人事条件最高の会社であり主として高校出以上を採用し、年二カ月は寄宿舎へ泊り込ませ和洋裁、お茶、活花などのお稽古ごとを一流の先生を招いて行ったりする程である)

胸を張って街を歩くべきだと思います。

勿論親せきやお友達へ行く時でも必ず、お制服を忘れないように。なお平日にどうしても私服で外出する必要がある場合は届出たら大抵許可されます。

大変窮屈なことです。皆さんが自費でこしらえる下着についても会社の検証を縫いつけたものでないと反則になります。

第九章の (三)

乗務中、車掌は、客が皆無であつても、客席には腰掛けがないこと。

(四) 乗務中は客又は運転手と私語を交さないこと。知人との応対は「はい」「いいえ」「今勤務中でお話してはいけません」「あとで連絡(お便り)して下さいませ(致しますわ)」程度の四語に限ること。

(五) 乗務中は特に身だしなみを正しくし、身体に害なき限り乗務バンドを強く締めること。

(六) 乗務中には生理要求の起らないよう乗車前には充分注意すること、但し長距離路線などの場合、やむを得ず用を足すときは運転手と相談したのち、最寄停留所で降車することは差支えない。こ

の時お客さまに

「皆様お急ぎのところまことに申訳ありません。私、車掌の準備不心得のため、当停留所でトイレを使わせていただきます。三分間はかり御猶予下さいますようお願い致します」と声を掛けること。

(四) 当社は勿論、他の交通機関を利用する場合も有料、無料、国鉄、私鉄電車、バスを問わず、県内では着席を遠慮すること。但し、健康を害したる時及び空席のある時は差支えない。

(五) 社外で社員同志が相遇した時は立止って、えしゃく、目礼を交わすこと。(制帽を着用の時は挙手の礼をする)

.....

ええ、こう云う事は私達の会社がお客さまや社会の方に好感をもつて眺めていただく為に当然必要なことかと思ひます。些細なことで、おろそかになさらないよう注意して下さいね。

第十九章の (一)

車掌は会社の休日以外の日に映画、芝居見物、麻雀等、特に視神経の疲れる遊びをしてはならない、特別の場合は届出でること。

.....

私生活の束縛と思われる方もありますが、私達の健康の為に、この程度の節制は、自分自身のことになるんです。慣れてくると車掌を楽なお仕事と思つて軽い気持ちで勤務なさる方が出来ます。そんなためにも、此の項は今度新しく挿入されることになったと聞いています。

では車掌勤務要領の説明はこれ位にして、いよいよこれから皆さんの訓練に入りましょう。訓練に先立って、大変惨酷な評価になり

ますが、貴女が今回採用の方は、一カ月前に入社の方とくらべて、車掌としての素質において何程か劣ると判断されることは致し方無いと思われます。

(今春行われた採用試験に補欠合格したものが今回入社の大半を占めていた)

新路線は間もなくあと二週間ばかりで開業になるそうです。それまでに皆さんは一人前の車掌となることが要求されています。素質において及ばぬ皆さんが、しかも短時日しか与えられないんです。それを克服して立派な車掌となる為には一日の訓練量を強化して頑張っていたくより外にないと思います。

今日只今から徹底的に猛訓練を始めますから充分覚悟なさって頂戴。朝五時四〇分起床二十一時就寝、この間の時間割は先にお渡しした通りです。強行訓練が嫌な方は遠慮なくすぐ申出て頂戴。

皆さん、異存なかったら、すぐ実習にかかりましょう。今日一日は皆さんの一期先輩なるこの内田規子さんに車掌勤務を実演させますから、皆さん性根をすえて、充分見学なさって下さい。モデル生の内田さんには大変お気毒ですが平素の実演をしていただいて、その間若し不行届や失敗があったら、びしびし罰を加えますから、そのお積りで。

.....

こうして規子にとっては緊張の連続である一日一日が過ぎて行く。春がすぎ、夏がすぎ、炎天の毎日がつづく季節になった、車掌生活にはつらいシーズンである。

月始めの公休日に信二郎から「二人の為のスイートホームだよ」と、今新築中の二階建をヒロウされた。ああそうだった信二郎さん

と結婚するんだった、信二郎さんの為こそ苦勞しているんだわ、と新しい勇気が湧いて来るような気がした。

ノミや槌の音が如何にも快く響き、二人の心をくすぐる様に思えた。

「君はお嫁入りの時、どんなものを持って来る？」

規子が感情の変化を示す前に信二郎が早口で言葉をつぐ、
「僕は変った考えだと笑われるかも知れないけれど、結婚してから当分の間は君に、着物を着て貰い度くないんだ。うまく表現出来なけれど若い間は何も不自由な和服を着る必要はないと思うよ。着物は中年になってからで良い。その時は又思い切り上等でも買って楽しむことにしようよ。」

「だから勿体ないから、和服は訪問着と、普段着一枚位だけでいいよ、絶対に無駄になるから着物はもって来ない方が良く。それから寝巻も作る必要はないからね、寝巻は家の慣習でこちらで作るしきたりだから。」

規子の家は由緒ある家柄であるが、今は決して裕福とは云えない。そんな事を察して信二郎が気をきかせてくれるような、一寸嫌な感じにも受け取れる。

「私、働いて、いただいた分位は着物持って来ますわよ」

「ウン。世話のやける見習車掌だからな。君は」

規子だけはもう数カ月にもなるのに、未だに見習車掌の待遇である。もう一人前以上の働きが出来るし、「車掌に惜しいような娘だなあ」と云う運転手仲間の評判である。今でも時々敏子が指導者として同乗するしそんな時敏子は寸刻も気を抜かせる余裕を与えなかった。今では規子自身も、敏子が信二郎専務の特別命令によって、

規子にきびしくしているらしいと云うことに間違いないと思っている。

「庄司敏子も骨が折れるだろう。何しろ入社早々チャージして見付けられたりするんだからな、このお嬢さんは」

「信二郎さんの意地悪、私知らない」

「何、ダダをこねているんだ。来月から正車掌、そして九月からは事務の方に廻して上げようと思っているのに、まだ訓練が足りないのかな」

「ああごめんなさい、私何でも云うこと聞きますから。でも車掌だけは恥しいわ、学校友達によく会うんですもの、お師匠さん(敏子)たら、そんな時に限ってひどい注意されるの」

他愛もない中に二人の時間がすぎる、信二郎は妻たる女性の生活改造が、こんな形で順調に進んで行く事に限りない倖せを感じるのであった。次の公休日は、それは規子にとって生涯忘れることの出来ない日になった。

早朝から起された上、いろいろの用事を云いつけられ、いい加減ぐったりした頃に、

「規子さん、今日の公休は取消し。貴女近頃暑さのせいか、一寸た

るんでいるようね」

「お師匠さん、どうして、そんなに……」

「まあいいわ、貴女、この頃の勤務は暑いでしょう？」

「ええ、ハイ」

「じゃあ、一度涼しくしてあげるわね、こちらへいらっしやい」
寄宿舎の浴場へ連れて行かれた規子は、例の下着だけに脱がされて驚いたことに、その上からシャワーを浴せられた。時計が一分を

刻む間にシャワーは規子をすっかりヌレ鼠に仕立てあげて終った。

「規子さん、この上から今日は作業衣を着なさい」

作業衣はデニムのオーバーオールで、さすがに規子はチュウチョしたが、こんな時、命令に素直に従わなかったとしても、決して許される筈がない事を再三経験させられている。規子は観念の目をとじた。そしてまさかと思っていた乗車勤務を命じられた。行先は乙浜である。この路線は二時間四十分もかかる長路線で、敏子と同乗したもの、気持の悪いことは味わわされている本人以外に想像も出来ない悲しい条件である。

大体作業衣で乗車勤務をさせることはない。敏子はあわれな受難者を冷静に観察しつつづけていた。まだ作業衣の表面に変化はあらわれない。やがてはかわいたデニムも内からの湿りで汗をふき出したようにシミ紋様が出来てくることだろう。

今日の規子は平素以上にモゾモゾと苦しそうで、一時間もたった頃には外から明瞭に判る程度に汗ばんで見えて来た。規子は気が気でないらしく、何でもない停留所まで間違えてトチったりし始めた。もう規子は車がゆれるからと云って身体がよろよろするような新米ではない。然し今日ばかりは、身体がズブぬれのところへ汗をまじえて、又下着をぼとぼとしたしづくは靴下の中にまで伝わって来ているのだ。

教導員の敏子は此頃でも自分が一緒に乗務する時は、規子の乗務バンドを後から強くつかんで身体をささえる意地悪とも思えるような行為に出ることがよくある。

「規子さん、むし暑いからと云って、お客さまに笑顔を忘れちゃダメよ」

「さあ笑顔を作って、笑って、笑って」

敏子が身体にふれる度に、いくら辛棒しても悪感が走るのはさげようもなく、規子は歯をくいしばった、敏子と二人だけなのではなく、大勢のお客の視線にさらされているのだ。

下着がぬれて肌に密着しているので素肌をしげきするのと変らなほほど、きつい感触となってゴッゴッのデニムの作業衣が規子を苦しめた。こうして、始めて味わされる試練にたえているのが規子にはやっとなつた。

「判っているわ、下着は新しいのを持ってくるから心配しなならなくていいわ」

敏子の計画はとんだことから脱線して終つたが、別の意味で用意していた新品の下着が役に立つ事になった。敏子は自分の着ている制服を脱いで、こざっぱりと下着を着換えた規子に、その服を丁寧に差し出した。

「でも、お師匠さんは……」

「私は、規子さんのお借りしますわ」

「……」

規子には敏子の言葉の意味が了解しかねるが、すでに主客が転倒しているのだ。

規子に背を向けて裸になった敏子は、今が一番大事な時だと覚悟して、ズブぬれで、砂の上に脱ぎすてられている、たった今まで規子を苦しめつづけて来たその下着を取り上げた。

目をつむったつもりで、先ずショートパンツに足を入れた。ぬれているので、何とも云えない気持ちになる。次に同じく汗と水でべっとりした真紅のシャツを身につけて、その裾はショーツの中に入れ

た。

乙浜は海水浴場でT市からは峠を一つ越えなければならない。峠は急なところが上り下り五〇〇メートル位づつ、ここではバスもスビードが落ちる。規子は我慢したかった。何しろあと暫くで終点乙浜につくのだから、そしてもうその峠の麓まで来ているのだ。もう乗客も数名にすぎない、皆終点まで来る人達である。しかし今朝から規子はトイレを使っていないし、又シャワーの水責めに会わされて、腰から下が異常に冷え来っているのだ、恥しいけれども仕方ない敏子に哀願せざるを得なかった。

「お師匠さん。すみません。私……」

「規子さん判っているわ、降して欲しいんでしょ」

「ハイ」

敏子の合図で車はとまり、規子は降して貰うことができた。

「規子さん。済ませたら、駆足で乙浜までいらっしゃいね」

云うなりドアが閉って車は動き出した。

規子が「鍵」と云い出す間もなかった、規子自身鍵のことがやや念頭をはなれていたようである、規子は特別命令で、鍵のかかるバンドをさせられており、鍵は四・六時中敏子が保管していて、生理をはたすたびごとに規子は鍵を借りるのであった。

車は無常に遠ざかって行く「お師匠さん」と呼んだつもりであったが、声が喉につまって、実際には声にならなかったようだ。

坂道だから走れば車に追いつくことも……と考えもしたが、緊張の為、身体がふるえるばかりで、小銭の入った乗務靴さえもズシリとお腹にひびいて、とても馳けられる状態ではないのだ。規子には我慢できる限度が来ているのだ、とうとう無意識のうちに規子は道

端の草ムラにしゃがみ込まざるを得なかった。カギのかかる太い皮のバンドは鍵なしでは外すことは不可能だけれど、下着として着せられているショートパンツは「バンド通し」をさえ引きちぎれば脱ぐことも出来るのだ。情けなさで腹立ちでショーツを引きさき度い願望が規子の心をかすめる。だが、そんなことをしたら只ですまないことも覚悟しなければならない。あれこれよくよする間に、遂に、緊張と忍耐の限界が規子をおそって、規子は汚辱のどん底に陥れられた。内股の異常は熱い流れとなって規子の顔を混乱させた。泣くまいとしても涙が自然にあふれ、最早走る元気はない、砂勝ちの坂道をトボトボとしかも追い立てられるように規子は歩かねばならなかった。真夏の太陽が容赦なく照りつける中を凌辱にまみれて虚脱したように歩かされていると云った方が良かったろう。乙浜の停留所に辿りつくには、そんなに時間はかからなかったけれど待っている敏子には、それは永い時間を感じられた。

勿論バスが乙浜につくと同時に客を降ろして、敏子は峠道をかけるように引き返したのだ、いつもは意識してことさらに意地悪く当る敏子だけれど、今日ばかりは鍵のことはすっかりしていたのだ。しかし規子は、そうはとってくれないに違いない。いつの日か必ず規子の手で何倍かのお返しがなされるだろう。明らかに敏子はやりすぎたのだ。専務の委嘱を、今日はすでに逸脱しすぎて終っていることを覚らねばならなかった。

とっさに、敏子は覚悟をきめた、何時かは規子の足下にひれ伏すべきなのだ、それが早く来て終わったただけだ。

複雑な心境の二人でも顔面蒼白の規子と紅潮した敏子は第三者から見れば良い対照であつたらう。

「お師匠さん……」と云うなり、うずくまって泣き出した規子に、「みっとも無いから、さ早く……」と云い乍ら、敏子は人目につかないように近くの建設中の海水浴場の小屋がけに規子を誘導した。規子は意志のない人形も同然と云う姿である。

「規子さん、私の云うことは何でも聞くって約束したわね」
「……」

「つらかったでしょう今迄。さあ今着てらっしゃるもの、全部お脱ぎなさい。身体は洗えばいいから」

小屋がけの中には井戸の用意があった。

「だって……」

バンドは自分でも思い切りよく強く締めて、小形の南京錠をバンドの穴を通して自分の手で施錠した。敏子は規子と上背も余り違わず、こう云った姿もなか／＼に良くなる。

敏子はせき立てられるようにデニムの作業衣を着け、最後に規子の乗務カバンを我身につけてから敏子は砂の上に正坐した。

「規子さん、いいえ奥様と申上げますわ。敏子は悪い娘です。専務様の御命令もありましたけれど、奥様になられる方にこんなひどいお仕事をしていたら。随分今迄おこつていらつしやうでした。よう。お気がすむのでしたら思い切り敏子をぶって下さい。敏子、覚悟はしていますわ。今日から規子さんの着ていらつしやうた衣裳はみんな私に下^さげていただけません。敏子、今迄の罪ほろぼしにさせていただきます。鍵もこの通り奥様に差上げます。勿論奥様は明日から見習車掌などなさることはありませんわ、私だって、お教えすることは、みんなお伝えしました。車掌などは敏子のような者がすることですわ」云い乍ら敏子は更にひれ伏した。

美しい訓練の終末が遂にやって来たのだ、始め何のことか、さっぱり理解することの出来なかった規子にも、信二郎と敏子はグルであったのかと想像をめぐらせる余裕が生じた。

今迄のことも、少しづつ判ってくるような気がした、規子は敏子の云うことなど、殆んど聞えてもいない、一心に回想し、想像しつづけた。

「私、専務様に拾っていただかなかたら、今頃どんなになつていたか、私のような、みなしごの行先はきまつていると思いますの、それに大きな恩のある専務さんの奥様をひどい扱いにしていくら罰を受けても仕方ありません、奥さんお気のすむ迄罰を与えて……、でも敏子をどうかすてないで、この通りお願い……」

云い乍ら一層敏子はひれ伏した。

しかし、規子は全く声が出なかった、声になつた声は

「お師匠さん、いいわ、お立ちになつて、バスの時間が来ますわ」とだけであつた。

次の日から規子は事務の方に廻されることになつた、無論信二郎の計らいである。こうして二度と規子は車掌を勤めることは無いことになつた。

結婚した規子

更に幾十日かがすぎ去つて、初秋の柔かい日ざしが感じられるようになった頃、結婚して間もない新婚旅行中の規子と信二郎の或る一日のことである。

二人はすでに三―四日の旅行を楽しみ、或る程度お互いの気心も知れるようになった頃である。よそ目にも感じのいい程はほえまし

い新妻ぶりを規子は遺憾なく発揮して、自身でもすでに夢心地のように見受けられる。ここ大島でも二人は一泊したところである。

信二郎より朝寝して今日は一寸照れくさい思いをしていた規子は朝から盛んに甘えていたが、やがて、信二郎に企まれた芝居にうかつにも見事にひつかかつて終う結果になつたのである。ここ伊豆の大島では紺緋に前垂れ、椿の花をそめ抜いた手拭など「アンコ」の衣裳を茶店で貸して呉れるのである。

面白がつて即席大島娘になつた規子は写真などを撮つて貰つていたが、信二郎がぼつぼつ出かけようと云うので着換えをすべくスーツケースを探したが見当らない、信二郎にスーツケースを隠されて終つた規子は大いに怒つて見たものの最早遅かつた。規子が身につけていた衣服一切と共に家に送つて終つた、と云う信二郎の言葉は全くの冗談でもなさそうに思える。

始めは面白がつてふざけていたが、でもさすがにアンコ姿であちこちを引き廻されるのは恥しかった、昼すぎ、熱海行の船に乗る時は一寸刺戟であつた。

見習車掌時代のズボンとは又違った感触、しばらく忘れていた紺緋特有のにおいは旅の人々が物珍しげに眺める視線と共に規子を強烈な劣等感に陥れ、規子自身、一瞬船に積み込まれる女奴隸のことを考え主人に連れられて行く田舎出の女中の心を幻想した。まさかとは思ふが、こんな格好で何日も連れ廻られては叶わないし、一緒に夫の家の門をくぐる勇氣はない。船が港につく頃になつて到々規子は信二郎に哀願を始めなければならなくなつた。

「ねえ、信二郎さん、こんな格好でこれから旅行するなんて、冗談でしょう」

「いや、冗談じゃないんだよ」

(未完)



由梨子への便り

浣腸への

誘い

国府津恵子

由梨子――

貴女、もう、この御本お読みになって居るかしら、いいえ、貴方はこの様な本はきっと未だ一度もお読みになった事はないと思います。でも恵子は貴女が何にかの機会に、何処かで、もしかしたらお読みになって下さるか、と万一に希望を託して、恥かしいけど、やっぱり書きます。

それは浣腸です。浣腸？そう浣腸よ、由梨子、貴女も浣腸とは、どの様な事をする事くらいはお解かりでしょう。その浣腸なの、今

の恵子は浣腸と云う言葉を口にするだけで、けだるくなる様な興奮を覚えてしまい、思い出したら、それをしないと、どうにもならない恵子になってしまったの。これから恵子が告白する浣腸遊戯、由梨子、恥ずかしがらないで最後迄御覧になってね。

浣腸に興味を持たない人々は恵子の様な者をいやらしいとか、変態とか、云って居る様ですが、それは本当の浣腸の味覚を未だ知らないからなのよ。一度この味を知ってしまったら、生涯忘れる事の出来ない虜になってし

まうでしょう。浣腸の素晴らしさを知らないなんて、本当に不幸な方達――でも恵子は、もう他人になんて云われても浣腸をやめる事は出来ません。

由梨子、人間は、自分の責任に於て自由に趣味を持つ事は許されて居ります。由梨子、貴女も一日も早く機会を得て浣腸の本当の味を知り、法悦の世界にお入りになる様お誘いします。

由梨子、浣腸はね、男性より女性の方が多く行って居るんですって。何故って、女性の便秘は当り前の様に多いでしょう。学生の頃よく由梨子も便秘を訴えて居たでしょう。今はどうですか、恵子があ頃、今の恵子の様に浣腸をしたり、されたりする事が、こんなにも楽しいと云う事を知って居れば、恵子のお部屋で、楽しみ合えたのと思うと残念です。

浣腸を知る動機は便秘ばかりではないのよ。女性は赤ちゃんを産む時なんか早く陣痛を起こさせるためにも必ずと云う程浣腸をされるんですって。又、女性は美容のためにも時折浣腸をするのは良いそうです。最初この様な動機で浣腸をしたり、されたりして居るうち、浣腸の味を知り、やがて、恵子の様に

日夜人知れず浣腸をしなくてはならなくな
るのよ。でも恵子は便秘が原因で浣腸の味を
知ったのではないの、そして又、これが恵子
自身の手で行われたでもないの、恵子が浣
腸のおいしさを知らされたのは、ふとした事
から男性の手で開眼されたのです。そしてお
いしさを知る迄の苦痛――

由梨子ね、今だから、恵子が浣腸遊戯はす
てきななんて云って居るけど、最初浣腸責めを
受けた時は、本当にこのまま死んでしまうの
ではないかしらと思う程の苦痛でした。そし
てこの苦痛は以後数回の浣腸責めを受ける事
によって、だんだんと変って来たの。でも、
浣腸の苦痛を初めて知らされた時は、もう恐
いと云う方が先に立ち、今、想い出しても恐
ろしくて、忘れようとしても忘れる事の出来
ないあの時の光景――浣腸に責められ、痛さ
に苦しむ恵子の姿。

告白するわ――それは、二年前の四月、高
校を卒業して今、お勤めして居る丸の内の貿
易商社に入社して一週間位したある日の午後
でした。私の課の課長さん、〆と云っても未
だ三十才位の若い方ですが〆に呼ばれて、今
夜、会社の『大事な得意先のお客様に逢うの
で、私も接待を兼ねて同行してほしいと云う

の。入社したばかりで、あまり良く会社の中
の勝手も知らないし、又会社の大切なお客
様、と云われては仕方なく、余り気が進みま
せんでしたが、課長さんのおっしゃる事を素
直に聞いて可愛がられて居た方が何にかと有
利と云う事位、純情だった私にも解って居り
ましたので「はい」と答えてしまいました。

やがて退社時刻になり、私は課長さんの拾
ったタクシーに乗せられて、東京の代表的な
温泉マーク街千駄谷へ着いたのは、さして時
間も要しない様でした。車が停められた場所
は、大きいけれど陰うつな感じのホテルの前
でした。この時、課長さんは小さい声で私
に、〆何事も僕の云う事を素直に聞いて静か
にして居れば悪い様にはしないから〆と云う
のです。私はこの時、へんだとは思いました
が、たとえそこがホテルと云えど、会社の大
切なおお客様がお待ちになつて居るとなれば仕
方なく、これも会社のお仕事の延長なんだわ
と思ひ又、課長さんと私と二人だけではない
と云う気持も手伝って課長さんに従いまし
た。

玄関に出迎えの女中さんに案内されたお部
屋は大きな鏡の張つてあるりっぱな洋間でし
た。お部屋に入ると待つて居るはずのお客様

のお姿は見えますせん。今、考えれば商談をこ
の様なホテルで行う様な事はないでしょー。
でも私も、きつと自分自身の好奇心、そして
「あこがれ」が期待されて居たから、課長さ
んについて、ここへ来てしまったのかも知れ
ません――。

この様な恵子も、今では浣腸薬は恵子の身
から片時も離す事の出来ないお薬なの。外出
ですって、勿論外出にも、お勤めにも、恵子
のハンドバッグの中に、そつとしのばせて――
―だって恵子がいつ求め、欲するか知れませ
んもの。もし欲しがられた時に、「今お勤め
の最中だからだめよ」なんて断わったら、さ
あ大変、もうその日は一日中お仕事も手につ
きませんのよ。――ですから、この様な時は
オフィスや映画館のトイレの中で一人でこつ
そり、解かるでしょ――兎に角今の恵子は浣
腸して居る時が一番楽しいの――由梨子、貴
女も一日も早く恵子の様になります様、お祈
りして筆を置きます。

東京目黒の自宅にて

国府津 恵子

宗宮 由梨子様

◎ 幻想物語 ◎

涙を捨てた女たち

近 藤

一

別冊奇譚クラブ第一号の素晴らしさ。KK本来のムードを伝える装幀に加えて、リクエスト画廊と希望写真集が旧号の名作選に花を添えていて、いくたび見返しても新鮮な魅力が尽きることなく湧いて来るのです。

勝気なおんな

細川乱世氏希望

モデル 絹川 文代

家族の心配を鼻の先であしらって恋をした芙美子だった。男の言葉を真に受けて処女を捧げたのに、彼の心は別の女に傾いていたと

知らされた屈辱／捨てられた女にはなれない意地があつて、彼女は自分から恋を捨てた。

家へ戻ることもできず、芙美子は巷の女になった。同世代の娘達を集め、男勝りの度胸ときつぷの良さで姐御に推され、少女グループ「緋桜会」の会長を名乗った。

二つ年下の妹珠代は、たった一人の姉を案じて、機会ある毎に訪れては、芙美子の帰宅を促し、哀願した。

地元の大ボス榊原剛造は、若さに満ちた芙美子の肉体に目をつけ、同時に「緋桜会」の組織を手に入れて娘達を「白い奴隷」に仕立ててタンマリ儲けようと企んでいたのだ。芙

美子の周囲には頻りに甘言や強圧が加えられる、良心の影すら見えないボスのやり口に、芙美子は怒った。

珠代が襲われた。姉を諫し、哭いて訴えながら容れられず、しおしお帰る途すがら、緋桜会の会員と間違えられて、ボスの手下に拉致されたのだ。ボスの方では、獲物が芙美子の妹と識ると、それを因にして一挙に野心を遂げようとした。

今さら何云ったって無駄だよッノ

叱って追返したものの、珠代はたった一人の可愛い妹である。学校の成績も好く、素直で清純無垢な処女なのだ。それがボスの手に

捕えられて、どのような責苦に遭っていることやら。

もはや芙美子の心は決っていた。一刻の猶予もできない。命を賭けても珠代を救うのだ。仲間の娘達の危惧も笑って応えた。

「あたしの軀を抱いたら高いヨ。眼の玉がとび出る位、ふんだくってやるンだから。」ボスの邸へ単身乗込んで行った芙美子を見て、ボスは驚いたようだった。彼女の無鉄砲に呆れながらも、目を細めた。

「心配しないでヨ。あたしも緋桜の芙美子ヨ。ケチな真似なんかしないわヨ。」

取引は一応纏った。ボスにしてみたら、今珠代を家に返した処で、肝心の芙美子を抑えておけば緋桜会は勿論、警察にだって手出しをさせないと計算したのだから、何よりも待ち望んだ芙美子の姿態を眼の前にしては、狡猾な思考も停止してしまったのだろう。

ボスは芙美子と二人きりになると、扉に錠を施した。はっきりと云切った以上、芙美子は乳房も露わに、素膚を晒さなければならなかった。だが首に結んだ純白の絹のマフラーは解かなかった。

「さわらないでよッ！」

「うん、こりゃ、あった方がいいナ。」

可愛い妹が、姉

の身を案じて贈ってくれた形身とも云うべき品だ。

今日までボスに楯ついて来たお詫びに、芙美子はボスの罪人として、縄で縛られなければならなかった。

自分から両手を背に廻し、乳房の下を二の腕ごと、

厳しく締上げられ

た。ボスの力は身を千切る程に強かった。

「さ、詫びの言葉を云ってみろ！」

「詫び？」

「そうだ、俺に謝るンだ。」

「いやヨ。」

「どうしてもか？」

「死んだっていやヨ、謝るなんて。」

「よし！死んでも詫びるなよッ！」

頬がくびれた。下顎が固定され、顔の下半分に強い猿轡の圧迫が襲って、急に呼吸も苦しくなった。芙美子は声を立てなかった。喉



の辺りの呻きも、意地になって押殺した。

「ウフフフ」

ボスの頬に笑いが硬張り、額にギラギラと脂が光る。瞳が淫らな輝きを帯び、頬りに生唾が喉を通るらしい。

畜生！

だが芙美子は割に落着いていた。土壇場が出る女の度胸なのか、心に幾らか余裕があった。ふと想い出を追う。父の顔、母の顔、たった一人の可愛い妹の顔。まだ処女だった頃の淨らかな芙美子自身を囲む一家の団欒。そ

んなものがふと脳裏をかすめて行く。

フン、馬鹿野郎！あたしを抱きやがったらそれが最後なんだ。只で汚れてたまるかい。あたしも緋桜の美美子サ。間違ひなくブツ殺してやるんだ。さ、早く抱きなつてば、気が遠くなりそうなのを、必死に泳いで、美美子はボスの視線をはねつけるように見据えた。一滴も涙を出さない女になっていた。然し、一瞬、親や妹を斥けて走った過ちを悔いる気持が湧かなかつたろうか。

おかアさーん！

ボスの手が、自由を奪われた美美子の肩を抱き寄せた。美美子の心の中にだけ、涙がとめ度なく流れ、浄らかな娘の心が激しく哭き悶えていた。

私製拘束具

E・F氏希望

モデル 桜井 葉子



御主人様、

私の姿を御覧下さいませ。お気に召すでしょうかしら。

私が今、着せられております囚衣を御存知？破廉恥な罪を犯した時は、もっとドス黒い囚衣を着るのです。今の囚衣は、云うなれば「愛の罪」に着るものです。私の心の中に、御主人様への敬慕の念や奉仕の心が少しでも薄くなった時、私は直ちに罪に問われ、これを

を着るのです。

今日の夕方、御主人様のお帰りを心待ちにしながら、私はお好きなお料理を一心に作っております。そして一寸お味の加減を見ていた時、監視の方に見咎められたのです。御主人様のお食事を盗み喰ひした罰！私は黒い囚衣を着ようとなりました。すると監視の方がこちらを着るようにおっしゃったのです。

監視の方は本当に御主人様思いの立派な方で私をよく監視して下さいます。私の怠け心を叱って下さいますし、あの方の罰はとても厳しいのです。御近所ではあの方のことを、御主人様がお妾さんに産ませた娘で、ウスノロな女中だと噂しています。私が御主人様の立派な妻になれますよう一生懸命に訓練して下さいます。

「奥さん、盗み喰ひなんかして、野良犬とおんなじじゃない？」

「済みません。悪うございました。」

「犬と同じだから、犬みたいになんなさい

ヨ。いいわネ？」

「ハイ。どうぞ犬にして下さい。」

私は首に太くて頑丈な革の頸輪を嵌められました。それから左右の手首と足首にも、固い革の輪を嵌められました。監視の方は、私を縛り上げるための白い中細のロープを捌きながら私を指図して、私への懲罰の準備をさせるのです。私の髪の毛は長くて沢山あるので、お仕置を受けている間に乱れて邪魔にならないよう、スカーフでしっかりと包みました。私のオッパイは呆れる程大きくて、囚衣の前がすぐ開いてしまうので、特に巾広の腰紐を使い、それと頸輪とを縦に結んで留めて、罰を受ける雌犬の仕度にしました。私が自分でやれるのはここまで、あとは監視の方の手をお借りして、私の両手を縛り、柔らかな体を締上げ、両足を繋いで頂くのです。

「奥さんは色が白いし、よく肥えているから、こうやると立派な罪人に見えるワ。」

「そうォ？どうも有難うございます。」

一日の内に幾度となく、あの方の気の向く時に罪を受け、縛られ、お仕置をされ、侮辱されて、私はお礼を云うのです。そして、御主人様に喜んで頂ける女になれるよう、毎日毎日厳しい訓練を受けているのです。

私の手首は別々に肩へ吊上げられ、肘から二つ折になって、二の腕に括りつけられました。体の前の方は、大きな胸の膨らみが囚衣の下ではっきり盛上るようにロープをかけられ、胴もギュッと縛られました。

「奥さんも女なら、少しは恥ってものを知りなさいよ！」

胴を縛ったロープで、あの方は私の下半身を縦に締付けました。

これは痛いのです。恥ずかしいのです。囚衣の時は、下着な

ど赦されませんから、よく利くロー

プが肌にじかに当

るのです、女の下

半身はいやでも縛

しめが喰入るよう

に造られているの

です。お臍の辺り

から腰の縄目へ引

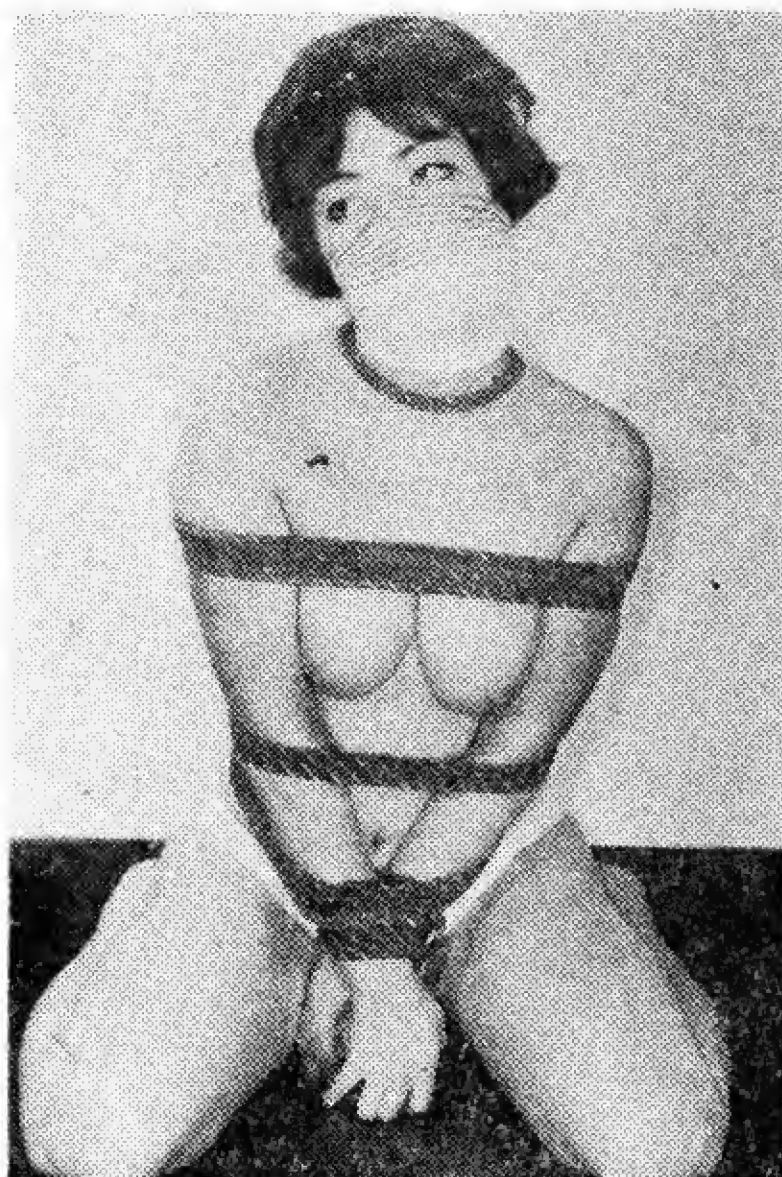
上げられているの

です、あの方の若

い力で精一杯グイ

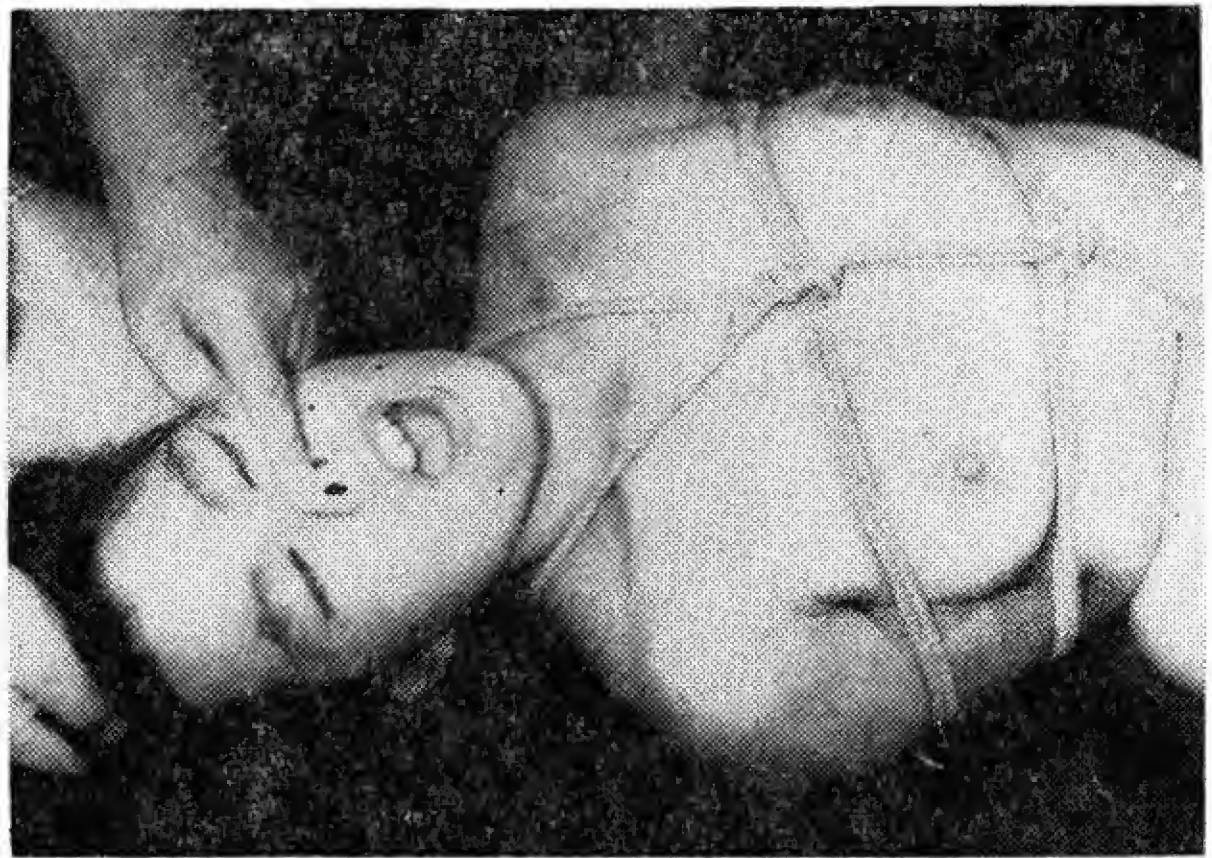
グイ絞られると、

もうじつとしてい



られません。立っていても坐っていても、屈んでみても反ってみても、烈しい衝撃に晒されるのです。もうかなりの時間が経ちます。私の、捻じ上げられた手首の痺れや折り曲げられた足指の痛みの烈しさが、それを教えてくれるのです、でも私は、一生懸命頑張ります。あの方がよし／＼と云って下さるまで。

「犬はお座敷に入っちゃいけないのヨ。ね、奥さん。奥さんは犬なんだから。コラ、雌犬め、お前は縁側までっ／＼さ、そこで、あたし



前手縛りを望む

清水谷氏希望

モデル 絹川 文代

今想えば、一体何故、あんな馬鹿な真似をしてしまったのか、我ながら不可解だが、それもきっと、彼女にしかけた恋の狂気のなせる業なのだろう。

行きつけの感じの良いバー「シャンゼリゼー」にニューフェイスが現われた。背の高い近代的な美貌の、いい体をした美人だった。いかにも男好きのするムードがある。

「蓉子です、どうぞよろしく。」

ニコリ微笑んで、むずかしい蓉の字を説明する口許の、歯並びの余りよくないのも一寸した愛嬌なのだ。我々の仲間は、その日から蓉子を張った。

彼女のおの肉の締ったヴォリュームを力一杯抱締める日を夢に描いて、我々は乏しい財布を顧ず、彼女の歓心を買おうと策を競った。

然し、その結果はすべて失敗だった。

我々は協調した。つまり彼女を他人に渡さ

ないために、我々の内の誰かが栄冠を獲得するために、一同揃って事に当ると誓約した。

蓉子には男嫌いの噂が立った。どうやら彼女の肘鉄を喰らったのは我々ばかりじゃないらしい。態ア見るのだが、同病相憐れむ気持も無いではない。唯の浮気じゃない。蓉子に對して男が真剣に惚れた真心を軽くイナして、ずっとフリ通すなんて生意気な奴だ。一寸ばかり美人だからって、のぼせているんじゃないだろうか。

「オイ、俺達であの女を取っつかまえて、二度とデカイ面をさせないように、ギューって云う目に遭わせてやろうじゃないか」

誰云うとなく、衆議一決して、我々はまるでギャングもどきに、半ば力ずくで拉致するように彼女を誘い出した。途中で幾度か逃帰ろうとした蓉子も、両脇から肘を取られ大の男に周囲を取巻かれては観念したのだろう。救いを求める事もなく、無言の儘、我々の溜り場へ連込まれて、ペタリと坐ったのだ。

犠牲が蓉子のせいか、リンチの構図が少しも陰惨でない。両の手首を背に廻して括り、彼女に刑の宣告をする。男の真心を弄んだ罰に、彼女は罵り者にされるのだ。だが我々は彼女の貞操を犯さないと誓った。項垂れて坐

がよしって云うまでチンチンしてなさい。いいわネ。」

私は両膝をついて、後手の手首をチンチンの形にしました。如何かしら？これで。

御主人様

っていた蓉子が顔を上げ、呟やくように云った。

「どうせ一度は、こういう目に遭わされるンでしょうヨ。覚悟位できてるワ。」

余り神妙すぎて小憎らしい程だった。我々は彼女を取囲んで討議した結果、この意地張りを馴って泣かせた者が、我々の内の勝利者として彼女の獲得に邁進することにした。

流石に自分では衣服が脱げず、蓉子の着衣は一枚々々剥がれて行く。骨の軋むような強烈極まる縛りに、蓉子は唇を噛み、美貌を歪めて呻いた。絵にある女罪人のような縄目には屈辱に身をよじって俯向いた項の素晴しさは忘れ難い。操り責には悲鳴を上げた。だがいずれもあと一步が及ばなかった。

番が来た。一切の縛しめをはずしてやると蓉子は何か心細げに白くふくよかな自らの腕を撫で、胸を抱いた。両手首を前に揃えさせて括り合わせる。フックラと盛上った乳房の上を、二の腕ごとギョッと締付けた。蓉子はハアッと深い息を吐く。次には肘を極めて背で結ぶ、そして括った手首を強く押しつけるようにして胴を縛り、その縄を走らせて喉を堰いて結んだ。羞恥と苦痛に悶えて指を屈伸することも、その屈辱に満ちた姿態で俯向く

ことも許されないのだ。喘ぎが次第に短かく速くなる蓉子に、顔半分の猿轡を掛けてやった。彼女の口許の醜い歪みを覆い、恥かしい動物の呻きを消すために。

「蓉子は女の中の女だ。美人で、気立が良くて、男をそらさない。その癖男嫌いだ。惜しいネ。男嫌いなんで。だが危く欺される処だったヨ、蓉子は男が嫌いなんじゃないのサ。男が要らないだけなんだ。どんな男だって蓉子を欺せやしないし、骨の髄までしゃぶられても悔いしないだろう。それなのに男を欺すのだ。」

蓉子はネ、男以上の愉しみを識ってるのサ。長くて、ふっくらしている指が、綺麗に見える。実はどんなに汚いものか蓉子がよく知ってるだろ。汚い奴、蓉子って、そんな女なんだ、何だい。美人面して、男を振るなんて、生意氣じゃないか。」

悪口と云うものはなかなかむずかしい。裸身を縛しめられて引据えられた女が、惚れ込んだ蓉子だけに、侮辱という仕事は予想外な愉しみだった。

きちんと正坐していた蓉子が膝を崩し、尻を浮かしてモジモジし始めた、脚を伸ばしてみたり、片膝をついたり、ゾクツとするよう

な妖しい瞳で睨んだりした。だが、喘いで手の指を結んだり開いたりすると、それが一々自らの羞恥心を痛めつけるのだ。

瞼を閉じた。そっと開いた蓉子の瞳には、遠くを見て、縋るような哀願の色があった、涙がフウツと湧いて、やがて一杯に溢れた。

蓉子は泣いた。だが我々は彼女を失った。我々の誰もが知らなかった彼女の婚約者との新しい人生に旅立ってしまったのであった。こんなことってあるもんか。我々は、然し、蓉子の忍耐も慟哭も、すべては力強い柱に支えられたものだと感じさせられたのだった。

汗溜め

K・I氏希望

モデル 絹川 文代

女の性^{サガ}の神秘ノ

女心の変化の微妙なことを、しみじみ自分の肉体で味わっています。

お仕置ノ

柔らかな五体を容赦なく締上げ、ピシピシ膚を撻つし、ばきの苛責の中に、全身を包み込んで、烈しい感情を興してしまうのです。

素肌にごム引レインコートの「囚衣」を着

せられ、後手錠の手首を高く吊上げて首縄を締めつけられ、編笠の代りにフードを目深にかぶり、口には汚れの染みついた布片を、一杯に詰め込んで呼吸も停りそうな堅い猿轡を嵌められ、頂垂れて、トボトボ曳かれて行く哀れなマゾヒズムの女囚。一生涯、脱し得ない変態性慾の囚獄に繋がれて、浅間しく蠢き、匍い寄る被虐の女囚。

古川裕子ノ

これ程魅力に富む女性は珍しいと夫は云うのです。あんなに迫真力に富んだ手記はなかったと私も思います。奇クの中で私達の心を激しくゆさぶったこの体験、告白を、私達が今夫として、妻として、「お仕置」のお手本にすることは自然のことと思うのです。

私達はゴムに対して特別なコムプレックスが無く、またゴム引のものを持合わせないの、レインコートはビニールです。透明であるだけに女の良い面も悪い面もすっかり露わになります、ゴムのものの醸し出す奇怪な雌獣の雰囲気は薄れると思います。

手錠が無いので後手首は勿論、胸の隆起もお腹も腰も、細いロープで厳しく縛られ、指先の屈伸しか許されない高手小手の縄目に包まれてしまうのです。猿轡では口の中の詰物

が必要ですが、古川さんの手記のように肌のものを押し込まれたりすると、口の特に大きくもない私などは、口の端が裂けてしまう筈です。それに私は未だ、夫の匂いや私自身の匂いを自分の舌で味わったりすることに馴れていないので、どんなにおだてられても尻込みしてしまいます。ですから口の中には精々ハンカチなどを押込み、その上を顎から鼻孔にかけて、私の肌につけていたもので覆うことにするのです。

十指に余る古川さんの手記の一つ一つに、私達の官能が激しくゆすぶられるのです。体の奥に妖しい火がチロチロと燃え、抑え難い衝動に駆り立てられるのです。そしてその時私はお仕置を受ける妻の立場から、果してこんな惨いことが女の身に耐えられるのだろうかかと怪しみました。私にはできそうにない残酷な刑罰を悦んで受けている古川さんは、もしかしたら特異な体質ではないのだろうか、等と思いました。

それがどうでしょう。私にも耐えられるのです。勿論私には夫の思いやりが注がれているでしょうし、道具立の不備もあって手加減があるでしょうが、前に見たことのある萩千恵子さんの同じようなポーズほど、当の私は

苛酷な目にあっていとは思えないのです。

他人に加えられるお仕置には、思わず眼をそむけてしまうのに、(その実ドキドキしながら盗み見てしまうのですが) いざ自分がお仕置を受ける時には案外に落着いていられるのは、どうやら私一人でもないらしく、女性一般の性質のようです。土壇場の糞度胸なのか、諦めに馴らされているのか、それとも本来の被虐性なのか、とにかく自分に加えられるお仕置は、他人の苦悶を見せられることより遙かに気易く受容れられるのです。

汗が出ます。噴出して来るのです。ビニールは水気を吸わないので、汗は流れて溜るのです。囚衣の下はたった一枚、ピッチリしたブリーフが残されただけの裸です。つー、つー、汗の玉が肌を滑ります。首筋から喉を伝って胸の谷間へ。お腹の辺りからは容赦なく下腹部へ。背筋を下り、脇腹を流れて腰の辺りへ。汗の出始めはペツタリと肌にへばりついた囚衣が、流れる汗でツルツル滑ります。こういう時、私が逃走を企てるとなかなか取押えにくらしく、抱締められて身悶えすると、囚衣がキュッキュッと鳴るのです。髪は額に貼りつき、眼から下は汗と吐き出す息の湿りでシットリ濡れて来ます。

豊かなヴォリュームのせいか、正坐を少し続けると両脚が完全に痺れてしまいます。次のお仕置を受けないように、夫の命令を守り通すために、一生懸命頑張って、耐えきれずに遂には膝を崩し、浅間しく悶えてしまう私を、夫は可愛いと云ってくれるのです。

可愛い妻ノ

この一言が、どれ程私を有頂天にすることか。そのために私は進んで囚衣を身につけ、自ら両手を背に廻し、丸められたハスカチに口を開け、汗を噴出して喘ぐのです。そしてそのために、お仕置を飲む女にまで育って来てしまったのですもの。

締め上げ

Y・E氏 希望

モデル 大塚 啓子

あんた、流石にいい度胸だね。どうせ夜が長いんだし、妾達も退屈してたんだから、まア今夜は一晚中かけて、ゆっくり可愛がらせて貰おうヨ。

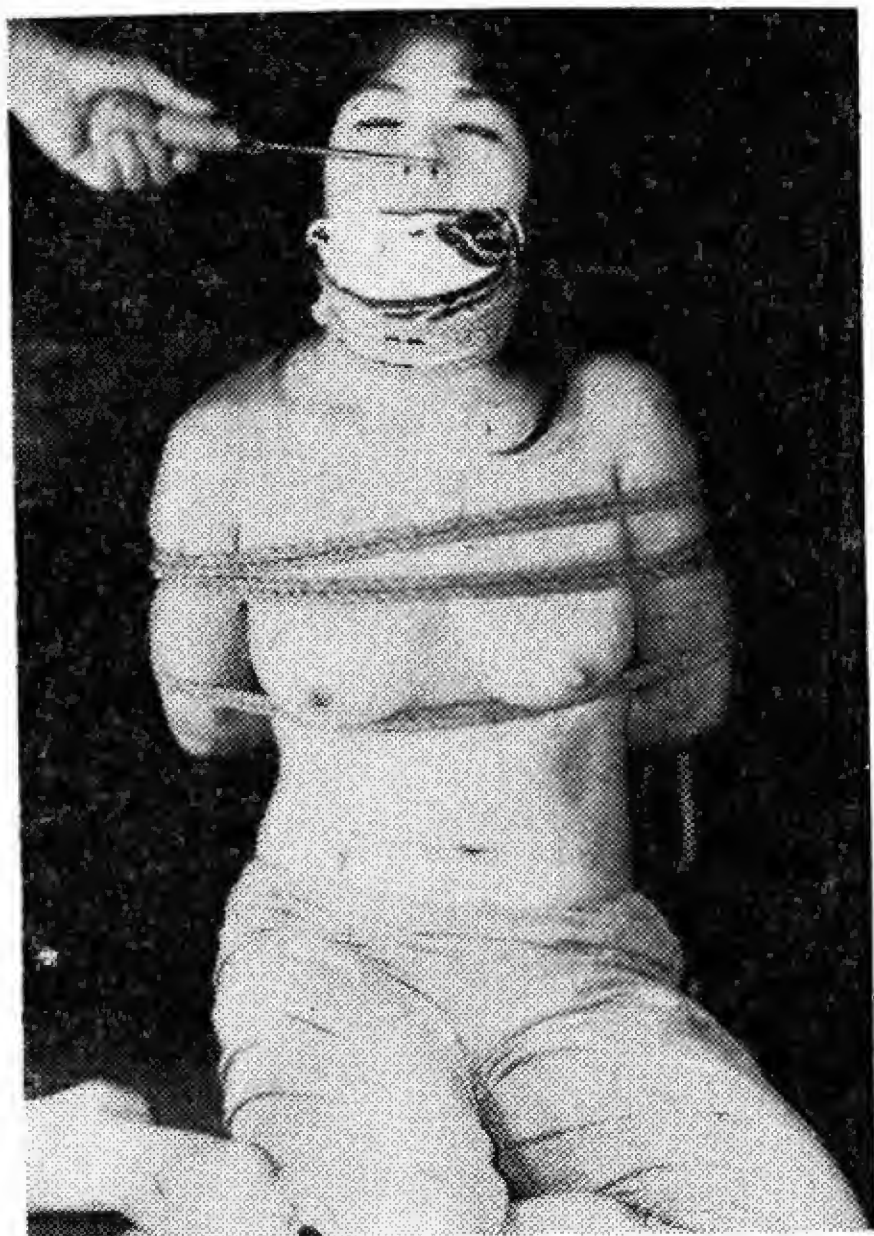
あんた、「太陽の無い町」って映画みたことあるかい、あの中で若い娘がポリ公に引っぱられる処があるんだけど、それが手錠じゃ

ないんだヨ。

縄サ、両手を縄でふん縛って、デカの奴がわざとグイグイ引っ張るんだ。弥次馬が一杯の中を、デカは得意そうな面で、娘は泣きそうな面でヨロヨロしながら、歩いて行くのサ。その

娘は別に何もしやしない。サッだってそんなことは知ってるんだ。只、娘の亭主になる男の行先を知ろうとして娘をパクって泣かせるのサ。娘は何も知りやしない。男の胤を宿している体で拷問されたから一コロサ。子供は流れちまった挙句、娘も一卷の終り。けど、そんなこと、どっちでもいい。妾の云いたいのは、若い女をパクするのに手錠じゃなく縄だってことサ。

ありゃア効くヨ。神妙になんかしたって駄



目サ、愚図々々云やア曳摺って行けるしサ、おとなしく縛られて歩いてたって、わざと縄を引っ張ったり、つきとばしたりして、よろけさせてブン殴るのサ。あんなことやられてみなヨ。妾なんか一遍で頭がカーッとなつて、気が狂っちゃうだろ、きつと人混みの中だったら、舌嚙んで死んちゃうサ。

あんた、凄くいい軀してるネ。裸で食べてただけのことはあるヨ。ホラ、ここんとかなにかムクムク肥えてるし、この辺なんかムッ

チリ脂肪がついて憎らしいネ。

フン、痛い痛い。こんないい軀でも抓りや痛いかな。

いいオッパイしてサ。あんた生娘みたいな面してて、子供がいるんじゃないのかい？。何サ。しけた面するんじゃないヨ。オッパイもでかいし、オケツもでかいし、云う処ないヨ。あんたみたいなグラマー、そうざらには居ないだろ。あんた、今日からこのナンバ―・ワンだヨ。女王様って訳サ―

さっきの話だけど、いい御時世だヨ、今は。若い女が縄でフン縛られて、人混ン中を曳っ立てられたのなんか、そんな昔じゃない。昭和になってからだってあったらしいからネ。今だって、サツの学校じゃ、捕縄術なんて云って、人間をフン縛る方法を習ってるんだから、あんただって、いつまた今日みたいにフン縛られるか知れやしないヨ。

ずっと昔ならネ、まだ丁髷の時代なら、女が縄で縛られるなんて珍らしくもないのサ。ホラ、こうやって手拭で口を縛っちゃえば、悪い奴にさらわれた女みたいだろ。フウン、あんた、なかなかイカスじゃない。そうやって下向いた処なんか、絵みたいがいいヨ。昔はネ、身体を売って商売にしてる女なん

か、人間扱いしないのサ。元々女は男の家来みたいなのに、それより悪いんだから獣と同じサ。誰でも気が向いた時に勝手なイチャモンつけてフン捕まえることができるんだ。どんな人混みン中でも真っ裸にされて、見せしめにわざとあっちこっち曳廻さされて、挙句の果に吉原なんかよりもっと酷い所にブチ込まれちゃうんだってサ。

あんたなんか御時世の有難さだネ。洋服着たまま、フン縛られもしないで、妾達の仲間入りできたんだからネ。それじゃ昔の女や、あんたの先輩達に濟まないだろ。昔通りって訳にやとつても行かないけどサ、その万分の一でも味わって、昔の女の人を偲んで、生意気の虫を抑えなきゃ申し訳ないだろ。

妾達の所へ来られたたからこそ、真っ裸にして貰って、あんたの凄いやつを褒めて貰って、若い女らしくフン縛って貰って、みんなに色々可愛がって貰えるんじゃないか。嬉しいだろ。感謝しなヨ。

チュッ、ベソなんかかいて、痛くなんかないヨ。痺れただけじゃないか、馬鹿ノ

葉子いじめ

失恋生氏希望

モデル 桜井 葉子

俺が今、どんなに苦しんでいるか、お前には分るまい。男子の、人間の一生を賭けて、右にしようか左にしようか、進むべき途に迷い、悩んでいるのだが。

お前を呼んだ俺の声に、ふだんと違う権幕があったのか、お前はおびえていた。いつものように側へ来ないで、一定の隔りを置いて坐った。俺が声を荒くして、もっと近寄るように云うと、却って益々尻込みして俺を焦立たせた。

馬鹿な奴ノ

俺が手を伸ばし、お前は逃げた。襟を掴むと、繻絆姿の前がはだけ、お前がのけ反った。お前の肉づきの良い背中が覗けて、気がさしたから俺は襟首を放して紐を掴んだ、軽く結んだだけの腰紐は、お前の腹をキュウツと絞り、くびれた肉の弾力の反動で結び目が解けてしまった。

肌が露出してひるんだ隙に、俺はお前を抱きとめ、用意の細引で上体を巻き締めて、そのまま俯伏せに押倒し、背中を膝で抑える。俺の膝の下で何とか逃れようと藻掻くお前の柔らかな感触を味わいながら、俺は上体に絡んだ細引を締め上げて行く。手首を捉えて、捻りながら肘から曲げ、背中で重ねて膝で圧

迫し、ゆっくりと嚴重に縛り上げるのだ。

抵抗を諦めない罰に、お前の乳房もお臍も丸出しになってしまった。それでも上体を厳しい縛しめが締め付け、後手の高手小手に括っているから、一定の限度以上に着物が脱げ落ちる心配はない。

お前には、俺の突然の乱暴が何を理由に行われたものか、分っているのだろうか。一体お前は何を怖れ、逃げようとするのだろうか。俺はまだお前を叱りはしない。詰問しやしない。俺の心の、どうにもならない苦しみをお前が分ったりするのだろうか。

愛するものに裏切られた寂しさ、信じ得なかった心の傷痕の深さを、お前に想像ができるか。お前のような憎い程可愛い女は、人の心を踏躪することはあっても、人から裏切られることはないだろう。よし、あつたにしても、お前の性格ではすぐに新しい恋愛を得て、痛手を感じる暇もない筈だ。

お前は俺を恐ろしそうに見上げる。お前は俺を恐ろしそうに見上げる。お前は俺を恨めしそうに睨む。お前を膝の下に抑えつけ、キリキリと縛り上げる乱暴狼藉が、お前の心を揺するのだろうか。

お前に婚約者があったことを、俺は今日初

めて知ったのだ。その瞬間の俺の心を、何と説明したらいいか。屈辱なんかじゃない。憤怒なんかじゃない。云うならば、人間としての寂しさ、男の悲しさと云えるだろう。

何故逃げるんだ。馬鹿！

後手の縛しめに別のロープを繋いで、お前を爪先立ちに吊ってやろうと思った。その意図を悟ったのか、お前は無性に抵抗する。腿がむき出しになるのも構わず、足を踏ん張って引かれまいとする。流石に立派な体格だけのことはあって縄を握る俺の掌が痛い程だ。癪に障って、俺はパツと縄を放した。後手に縛られた軀で力一杯踏ん張っていたお前は、一瞬に力の均衡を失って転った。両腕の自由を奪われた女の体で、無理な姿勢の力業だったから、自分自身の力に負けて転倒した。不様な恰好だった。

態ア見ろ！

小気味良かった。心から笑える姿だ。図抜けて大きな乳房も、ポツテリしたお腹も、ムチムチ脂肪の乗った太腿も丸出しで、叩きつけられた蟄蛙のように、畳にぶち当たってひしゃげたのだ。

俺はお前のこんなぶざまな姿を、更に心ゆくまで踏躪ってやりたい、お前の呆れる程に

肉づきのよいヒップの盛り上りを、腕の痛くなるまでブン殴ってやりたい心持だ。

お前が捨てた婚約者が、お前のこんな姿を見たら何と思うだろう。お前はと思う？

恐らくその婚約者は、お前の浅ましい姿を見て、快哉を叫んだりはしないだろう。復讐の快感に酔ったりはしないだろう。自分を捨てた女、自分の一生を滅茶々にした女、八ッ裂きにしてもあき足りない憎い憎い女のお前のために、きっと熱い涙を流すだろう。

俺だってそうだ。俺を欺いたお前という女が、今でも決して憎めないのだ。唯、お前のそんな汚らしい企みに欺かれた俺自身が可哀想でたまらないだけだ。

お前は可愛い。今でも抱締めずにはいられない想いだ。それだけに、お前を抑えつけ、フン縛り、突き転がして、その不様な恰好を嘲笑うのも、そんな哀れな俺自身への自嘲かも知れないのだ。

馬鹿な奴だ、お前って女は。

蒼ざめて必死の形相で逃げ惑うお前の、恐れている男心は、こんなものなのに。

(おわり)



創作

花と蛇

花巻京太郎

(1)

秋晴の蒼い空が洋館の並んだ静かなきれいな町に展がっている。アスファルトの人道には柳の枯葉がパラパラと日を受けて散っていた。

遠山隆義という標札のかかった豪荘な邸宅から今出て来た女性、静子夫人である。遠山隆義の最愛の妻、静子夫人である。遠山隆義は、五十三にして糟糠の妻に死別され、去年この静子夫人と結婚したのであるが、彼女は

二十六才。娘ほどにも年が違う。しかし、絶世の美女だと遠山氏の朋輩たちは、彼女をしきりにほめ、うらやましがっている。

たしかに、静子夫人は、稀に見る美女なのだ。彫りの深い端正な面立で、二重瞼の大きな眼、高貴な感じの鼻すじ、頬から頸にかけての皮膚の艶々しさは妖しいばかりの美しさである。

和服がことに彼女には似合うようだ。その日も、着物は黒と茶が濃淡を殊にした落ちついたしゅいもの、その地味で清楚な和服が彼

女の華奢な首すじをくっきり色っぽく浮き立たせて、滴るばかりの艶めかしさが全身にたれこめている。

だが、その日の静子夫人の表情には暗いものがあつた。何か不安にかられている。

そわそわとした歩き方で、表通りへ出るとタクシーを止め、

「六本木の山崎探偵事務所へ、急いで頂戴」
車に乗ってからも、静子夫人は青ざめた顔で、しきりに時間を気にしているのだった。

——山崎探偵事務所——ここの所長は静子

夫人の義兄の親友である。

女事務員に案内されて応接間に通された彼女は、やはり、時間を気にして幾度となく腕時計に眼をやっていた。

所長の山崎が、やあ、お待たせ致しましたと笑顔で入って来た。静子夫人は、挨拶もそこそこで、

「山崎さん、実は大変なことが起ったのです」と美しい眉をしかめていうのである。

「何ですか、やぶから棒に——まあ、落着いて話して下さい」

山崎は、相変らずくだけた調子でゆっくりソファに腰を下ろし、煙草を口にする。

「それが落着いてはいられないのです。桂子が、実は——」

「ああ、桂子さんのことですか」

山崎は、またかといわれればかりに酸っぱい顔をした。

桂子というのは、遠山隆義の先妻の娘なのである。大金持の一人娘であるのに、どういうわけか、これは完全な不良少女、葉桜団などというズベ公のグループを組織して、自分がその首領格になり、色々な問題を起して、父親の隆義を苦しませ、その都度、山崎が桂子を警察へもらい受けにいたりして問題を

処理して来ていたのだ。隆義が美しい後妻を

もらうと、桂子は一層ひねくれ出し、ほとんど家に帰って来ず、ますます不良性に拍車をかけ出したよう次々と面倒な事件を起すのだった。貧困のあまりぐれ出す者は多いが、何不自由なくぜいたくに暮し過ぎる故、ぐれ出す者もいる。桂子はそれであった。

「何かまた面倒でも——」

山崎は毎度のこと故、そんなに驚かずいったが、静子夫人は、心配でならぬといった表情で、

「五時までに百万円を持って、日本橋三越前に来てくれ、という電話が桂子からあったんです。仲間を裏切ったということで私刑にかけられることになったけど、それだけのお金を積めば許してもらえるのですって——」

「そんな馬鹿な」

山崎は吐き出すようにいった。

「桂子さんは、葉桜団の首領ってことになってるんですよ。首領が仲間を裏切って仲間を私刑にかけられるなんてそんな妙な話はないですよ。しかも、百万円の金を積めば助かるだなんて、保証金でもあるまいし、それは貴女から百万円せしめようとする策略ですよ。うっちゃっておきなさい」

山崎は、こともなげにいったが、静子夫人

は、でも、もしも、ということがあります、今、主人は政界の方々と関西へ旅行中ですし、主人の留守中に変なことがあったりしては、申訳が立ちませんから、と、おろおろした声を出すのである。彼女は、百万円の金も用意して来ているらしく、一人では恐しいから、山崎につきそってくれるよう頼むのだった。

「そうまでおっしゃるなら、つきそって参りましょう。お金は新聞紙につつんで小脇にかえるようにして下さい。」

(2)

ほんの一寸した隙だった。五時を二十分も過ぎても桂子の代理らしい者は現れず、山崎は、三越前で立ちつづける静子夫人から離れて通行人から煙草の火をかりた。そのわずかの間に静子夫人の姿はかき消されたように無くなってしまったのである。

誰かと待合わせしているらしいその辺の人

に尋ねると、つい今、二三人の少女が来て、彼女の手を引張るようにして前に止った車に乗せ、走って行ったという。

「しまった」

山崎は煙草をたたき捨てた。警察へ電話するのも探偵という職業柄恥しいことだし、また相手は遠山家の大事な一人娘、大きく騒ぎ立てるわけにもいらない。山崎は、おろおろするばかりで、その辺をせわしく動き回るだけだった。

——郊外のひなびた田舎町。今、一台の大型車が古い士族屋敷の残った袋町を通りぬけて、田圃側にそった藁ぶき屋根に土壁といった百姓屋の前で止った。

「さ、ここだよ。降りな」

ジーパンをはき、頭髪を赤に染めた小柄な女がチューインガムを口から吐いて車から飛び出すように出て来ると、周囲に気を配りながら、車の中へいった。

静子夫人が、けばけばしいスタイルをした三人のズベ公に突き出されるようにして車から出て来る。

「金は持って来たんだろうね」

と一人が静子夫人のかかえている紙包をひったくるようにして取りあげた。

「桂子は、桂子は何処にいるのです」

静子夫人が顔を青白く硬化させて聞くと、どきつい口紅をつけた三白眼の少女が、

「この百姓屋の中さ。ここは、あたいた達の隠れ屋なんだよ。他人にバラしたりしたら承知しないからね」

といい、さ、桂子に逢わしてやるから、とっととお入り！と静子夫人の腰をけた。

家の中は薄暗く、妙に陰気で、土間の隅には、ほこりにまみれた農機具が散らばっている。さ、上りな、とズベ公達に押されるようにして、静子夫人は敷居の上に上がる。煤けた障子が開けられると、そこは八帖ぐらいの陰気な座敷になっていた。

「今、桂子に逢わしてやるからね。その前に身代金をまず勘定してからさ。」

髪の毛を赤く染めた毒々しい身なりのズベ公がいい、次に仲間の者達に、

「みんな、この若奥さんが暴れたりしないよう、その柱に縛りつけておきな」といった。

静子夫人は、ハッとした顔つきで、

「な、なにも私を縛らなくてもいいじゃありませんか」

と、体を固くしていったが、

「フン、今じゃ桂子にかわって、銀子が、この葉桜団の首領なんだ。銀子の命令なんだから、仕方がないよ。さ、おとなしく手を後へ回しな」

と、ズベ公達は何時の間にか麻縄を用意して、静子夫人の周囲を囲んだ。

「痛い目に逢いたくなきゃ素直にするのよ」

静子夫人は、仕方がなく、口惜しげに唇を噛んで両手を後へまわす。ズベ公達は、よってたかって、静子夫人の両腕を更にねじ曲げ手首を合わせて縛ると、縄を前に回して、ふっくらとした胸のあたりを二巻き三巻、嚴重に後手に縛りあげると、床の間の柱にゆわえた。静子夫人は歯を喰いしばったような表情で、銀子を睨む。柳眉をあげて、この屈辱を必死に耐えているのだった。ズベ公達に乱暴に柱に縛りつけられたため、裾前が少しはだけ、うずら縮緬の湯文字の紅がのぞき、えり元もはだけて、紅梅ちらしの桃良の長襦袢が大きくはみ出てしまった。

銀子は、そんな哀れな恰好の静子夫人を冷ややかな眼で見、それから、静子夫人の持ってきた百万円の札束を仲間の者達と一緒に数え始める。

「さすが、遠山財閥だね。百万ぐらいの金な

んか針でさされたほどにも感じないんだよ。こんなことなら、三百万ぐらいふっかけりゃよかった」

ズベ公達は、そんなことをいいながら、百万の金を分配し合うのだった。

「け、桂子は何処にいるのです。早く桂子に逢わして下さい」

静子夫人は、たまらなくなつたように自由のきかぬ体を揺すって叫んだ。

「うるさいね。今、桂子に逢わせてやるよ」

銀子が眼くばせすると二三人のズベ公が、隅の畳を二枚ばかりひっぺがえし、古びたハメ板を外すと、ハシゴを降ろして下へ降りていった。畳の下は地下室になっているらしい。った。

やがて、彼女達は、地下に監禁されていた桂子をひきずり上げて来たのだが、その桂子の姿を見た途端、静子夫人は、あつと声をあげた。桂子は、素っ裸にされ、しかも、どす黒い麻縄で、後手にきびしく縛りあげられているのだ。ズベ公二人にその縄尻をとられて、静子夫人の前まで引立てられた。

「あ、ママ、助けて！」

桂子は、柱に縛りつけられているのが、静子夫人であることに気づくと、必死になつて

走り寄ろうとする。

「ちい、勝手なことはさせないよ」

ズベ公達は、桂子の縄尻をひっぱり、手もとへたぐり寄せる。

桂子の肌は、あちらこちらみみずばれや青あざが出来ていて、残忍な私刑のあとを残していた。

桂子にかわって、この葉桜団の首領になつたという銀子は、そんなみじめな姿の桂子の横面を激しくひっぱたき、

「今、この美しい若奥さんに、葉桜団の規則を破つたものは、どんな罰を受けるか見せてあげるんだ。覚悟しな」

銀子の指令を受けた女愚連隊は、その場にくすぐまる桂子を引きずり起し、きびしく、その陶器のように白い桂子の肌をしめあげている縄を一旦解いた。自由にしたのでない。天井の梁から垂れ下っている二本の鎖に茎のように細い桂子の両手が一つ一つ縛りつけられたのである。

「つりあげな」

銀子がいうと、隅に待機していた一人が、壁にそって垂れ下がっている鎖を思い切り両手で引っ張った。ギリギリと天井の梁に鎖のきしむ音がし、次第に桂子の体は上へのびて

行く。

「痛い、腕が抜けちゃうよ、痛い、助けて」

桂子は、つま先で立ち、恐怖と苦痛に顔を歪めて叫ぶのだった。

「なんてことをするのです！一体、桂子が何をしたというの、お金を受取っておきながらまだ桂子をいじめるなんて、あんまりじゃありませんか」

柱に縛りつけられている静子夫人が激しく体をゆすりながら叫ぶのだった。

「桂子はね。仲間の掟を破って、素人の男と関係しやがったのさ。それを恋愛したのが何で悪いとほざきやがる。この葉桜団じゃ素人との関係は御法度なんだ」

と銀子はいいいながら、仲間の一人が手渡した青竹で、思いきり桂子の尻をピシッと打ちすえた。

「ヒイーツ」桂子は、顔をのけぞらせて悲鳴をあげる。

「約束が、約束が違ふじゃありませんか！」

静子夫人は、もうこれ以上見ていられなくなり、更に声をあげるのだった。

「約束は破らないよ。葉桜団の御仕置がすんだら、桂子はあんたに渡してやるよ。鞭の折かんがすんだら、体中の毛を全部そり落し、

丸坊主にするんだ。まあ、すむまで、ゆっくりそこで見物していな」

銀子はそんな事をいって、更に桂子の尻へ青竹を打ち落す。

「お金なら、主人にだって、いくらでも出します。だから、桂子をもう許してやって」

静子夫人は哀願するように銀子にいった。

銀子は、桂子の体に青竹を走らす事をふと止めて、

「そんなにいうなら、桂子の仕置はこの辺で止めてやってもいいけど、条件があるよ。聞くな」

と、急に挑みかかるような眼つきをして静子夫人の顔を見るのだった。

「何でも聞きます。桂子だけは、どうか許して下さい」

「よし、じゃ、奥さん。そのきれいなおべべを全部脱いで、生まれたまんまの姿になってもらおうじゃないか」

「えっ」

静子夫人は自分の耳を疑ったほどだ。

「そんな事をして、貴女達何の得もないじゃありませんか。お金なら主人に頼んで――」

「わからない人だね。あんたをここから帰したりしちゃわざわざ私達の居所をあんたに警

察へ知らせに行かすようなもんじゃないか、

それ程、私達は馬鹿じゃないからね。私達が安全な場所へ高飛びするまで奥さんにもここに居て頂かなくちゃね。逃げられたりしちゃまずいんだ。丸裸にしときや安心してわけさ」というと、銀子は手下のズベ公達に

「さあ、皆んな、この奥さんを裸に剥いておしまい。この奥さんを入質にして、遠山のじいから、あと二百円ほどひっぱり出すのさ」

「成程、姐さんはやっぱり頭がいいや」

と、ズベ公達は、静子夫人の傍にかけ寄った。

「あ、あなた達は何という――何という悪友達なの！」

静子夫人は、柱にがっちり縛りあげられている不自由な身をもんで絶叫するのだったが「つべこべいうのは、丸裸になってからにし。毎日、ぜいたくなもんばかり喰ってるから、さぞかしいい体をしてるだろうね。ゆっくり観賞してやるよ」

ズベ公達は、必死に身悶えする静子夫人の帯をほどき始めた。

(3)

日本橋で、ほんの一寸したすきに静子夫人

を葉桜団に羅致されてしまった山崎は、全く探偵の面目丸つぶれである。

途方に暮れた恰好で、夕方になってから遠山家に出向いて行ったが、やはり、奥様はお出かけになってから一度も電話はごさいません、という女中の言葉である。

山崎は、遠山家にいて静子夫人の連絡を待つことにし、一方、探偵事務所の若い者達を走らせ、葉桜団の隠れ家を探索させた。

遠山氏は関西へ旅行中であるし、もし、その間に静子夫人や桂子の身にもしものことがあったりすれば、などと考えると山崎は居ても立ってもいられぬ心境だった。

午後十一時を過ぎても静子夫人は帰宅しない。遂に十二時も過ぎた。

その時、突然、電話がかかって来た。受話器を取ろうとする女中を制して山崎は自分の耳にあてる。相手は、女だったが、口調はズベ公である。

「遠山さんのお宅かい。あたいはね、葉桜団の幹部のもんさ。桂子の身代金百万は受けとったけど、今度は、奥さんの身代金として二百万至急都合してほしいのさ」

山崎は唾をのみこんで、

「金は作るが、一体、静子夫人は何処にいる

んだ。貴様達、静子夫人に変なまねをしたりすると承知しないぞ」

山崎は興奮していった。

「別に変なまねはしていないさ。あたい達は女ばかりだからね。フッフ」

女の声は更につづき、

「ただ、可愛そうだけど、逃げられちや困るから素っ裸にして縛りあげてあるよ。別嬪さんに似合ぬすごい力を出すので、丸裸にするのにずいぶん手間どっちゃった。いい体をしてるねえ。男達に抱かして金をとろうかとも考えたが、あんた達に一応相談してみなくちゃあね。どう二百万すぐ出来る？」

電話の声はそんな事をいうのだ。

「待て。今、遠山さんは旅行中なんだ。金は必ず作るから、奥さんと桂子さんに危害を与えぬ事を約束してくれ」

山崎は血走った思いで必死になっていったが、女の声は冷酷に笑い、

「じゃ金が出来た頃、こっちからまた連絡するよ。だけど、二人ともただ遊ばせておくのは惜しいからね。ちっとばかり稼がしてもらうから、そのつもりでいな」

「稼ぐ？ 一体、何をしようというんだ」

「何しろ、奥さんは、あれだけの美人だし、

体も素ばらしいだろ。だから、今、流行のヌード写真なんか作って、売り出そうと思うのさ。うんとすごいのをね。きつと飛ぶように売れると思うよ。金が出来るのがおくれればおくれる程、奥さんの写真がふえるという寸法さ」

それで電話は切れた。

山崎は体中から血がひく思いだった。遠山氏が帰京するまでに何とか夫人と桂子を救出しなくては、と思っても、ズベ公達は、夫人と桂子のヌード写真を作り、それを愚連隊等と組んで盛り場などで売りさばこうという魂胆であるらしい。そんな事にでもなったら、夫人だけではなく遠山氏自身も、その社会的な地位に大きなシミがついてしまう。大変なことだ。

そこへ、遠山家の運転手、川田一夫があらわて、かけこんで来た。手に大きな風呂敷包を持っている。

「今、玄関のところへこんなものを投げこんで逃げて行った者がいました。追いかけてましたが、待たせてあった車に乗って逃げてしまったのです」

山崎は、急いで風呂敷包を開けると、中には女物の衣類が入っていた。

「あっ、これは奥様の着てらっしゃったものです」

川田がびっくりして声をあげた。山崎も見覚えがあった。濃淡を緩にした落ちついた柄の和服、それは、今朝方、静子夫人が着て外出したものだ。それだけではない。夫人の下着類一切も入っていた。紅梅ちらしの桃色の長襦袢、白地に散り紅葉の腹合せ、肌着、うすら縮緬の湯文字、それから色とりどりの腰紐、唐織お召の丸帯まで――つまり、静子夫人は、裸に剥がれ、葉桜団に監禁されたことを示すものだ。甘ずっぱい女体の香りが一瞬感じられる花のような衣類を手にして、山崎は、苦しそうな顔をした。

あの水もしたたる美女だと評判される静子夫人が、野卑で、卑劣なズベ公達に、丸裸にされ、一体、今ごろはどんな目に合わされているのかと思うと、山崎は、気も狂いそうである。

「当てはありませんが、私も心当りを一つ一つ当たってみます」

運転手の川田も、静子夫人の衣類を見て、事態のただならぬ事を覚ったのか、そういい急いで表へ出て行った。

(4)

「どうしたい。奥さん。何とかいいよ」

銀子はくわえ煙草をしたまま、静子夫人のあごに手をかけて、ぐっと夫人の顔を正面に向ける。

静子夫人は、柱の下にあぐら縛りにされていた。

きらめくように白い光沢のある素肌に、どす黒い麻縄がきびしく巻きついている。はちきれるばかりに豊富な乳房の上下に、非情な麻縄が数本かけられ、後手に縛られたその上に、足をあぐらに交錯させられ、あぐら縛りにされているのだ。

夫人は、こんな姿にされるまで、必死に抵抗し、暴れたに違いないが、今は、もう観念したよう血の出る程固く唇を噛み、目を閉じて、この屈辱を必死に耐えているのだった。

ズベ公達は、先程から、ウイスキーやビールを飲みながら、静子夫人を取り囲んで乱痴気騒ぎをしているのだ。

「ぜいたくして充分栄養をとってるからだろうね。全く、いい体をしているよ。この奥さん」

義子というズベ公が、ピシヤリと静子夫人

の尻をたたいていった。

そこへ、銀子の命令で使いに出ていたエリというズベ公が帰って来た。遠山家に電話をかけ、静子夫人から剥ぎ取った衣類を投げこんで来た女である。

「御苦労だったね。エリ子。こっちへ来て、一杯やりなよ」

銀子はエリ子を呼んで、自分の隣に坐らせた。

「姐さん。おみやげがあるのよ」

とエリ子が風呂敷包から出したものを見てズベ公達は歓声をあげた。それは、ガラス製の浣腸器と便器なのだ。

「案外、気のきいたものを買って来たじゃないの」

銀子が浣腸器を取りあげて眺めながらいうと、

「この美しい奥さんに浣腸してあげりゃ素ばらしいだろうと思ってるね。ちょっと薬局へ寄り道して買ってきたのよ」

とエリ子は楽しそうにいう。

ズベ公の一人はニヤニヤしながら、銀子の持つ浣腸器を取って、静子夫人の顔の前へ突き出す。ちらとそれを見た静子夫人は、ハッとして顔を染め、うつ向いてしまった。

こんな不良少女達に寄ってたかつて浣腸される、想像するだけでも気が狂うばかりの恥かしさだ。

ズベ公は、静子夫人の美しい頬を浣腸器の先でつつきながら、

「奥さん。酒盛の余興に皆さんでこれから浣腸したげるわ。ふふふ」

静子夫人は、たまらなくなったように首をあげ、

「やめて！ そんな事、絶体に嫌です」

そういったまま、あとは言葉にならず、嗚咽するのだった。

「なにいつてるんだい。浣腸は美容にもいいのよ。皆さんで奥さんをうんとくつろいだ気分にしてあげるんだ。感謝してもらいたいくらいだよ」

銀子は、笑いながら、さ、皆んな、浣腸の支度にかかりな、と命じた。

ズベ公達は、キャツキャツと騒ぎながら、支度にとりかかるのだ。

エリ子は、静子夫人の足を縛った縄をとくと、「さ、奥さん、起きるのよ」と夫人の肩に手をかけて抱き起す。

静子夫人は中腰にされて、柱に縛りつけられた。すると、二人のズベ公が椅子を持って

来て、夫人の右左に配置する

「ああ、な、なんて事をするんです。やめて、誰か、誰か助けて！」

静子夫人は、泣きじやくる。

「助けてなんていったって、ここは野中の一軒屋、誰も来てくれるものかね。みっともない悪あがきはよして、大家の令夫人らしく、おしとやかにするんだよ」

銀子は、静子夫人の横面を一発平手打ちしていうのだった。

静子夫人は、観念したのか、眼を閉じたが切長の長い睫毛は涙に濡れ、一滴、二滴の涙が美しい頬を伝わって流れている。

そんな彼女を見ながら、銀子は、浣腸器にグリセリンと微温湯を調合した溶液を吸入した。

エリ子が、静子夫人の足の下へ便器を置く。

「ね。この奥さんの浣腸を桂子にさせない。

その方が面白いじゃないの」

一人がいうと、賛成、賛成、と一同は手をたたいた。

桂子は、片隅の壁を背にして、つるしあげられている。ズベ公達のいう毛ぞりの私刑を先程から待っていたわけだ。

ズベ公達は、桂子を下へ降ろすと、

「いいかい。丸坊主にされるのがいやだったら、お前がママに浣腸するのさ。見事にママを排泄させりゃ毛ぞりの私刑はかんべんしてやるよ」

銀子にいわれたが、桂子は激しく首を振り「出来ません。私、そんなこと、どうしたって出来ない」

と泣きじやくっていう。

「そうかい、じゃ、丸坊主にしてやるう」

銀子は、ポケットからかみそりの刃を取り出して、桂子の髪の毛をワシづかみにする。

「やめて、お願い！」

桂子は、後手に縛られたまま、縄尻も銀子に取られて、必死に暴れる。

「さあ、どっちにするのか返答しな」

ズベ公達は桂子を取り押さえ、髪の毛をきつくひっぱって責め立てた。

遂に、桂子は泣き泣き、静子夫人の浣腸を承諾する。

ズベ公達に縄を解かれた桂子は、自由になった手に六〇ccの溶液を吸入したガラス製の浣腸器を手渡された。

銀子とエリ子は、桂子を静子夫人のところへ押しやり、

「さ、始めな」

といて、桂子の背をつく。

「ママ、かん忍して——」

桂子は、静子夫人の両足に取りすがるようにして泣くのだった。

静子夫人は、もう一言も発せず、固く唇を噛み、美しい眉を寄せて、必死にこの屈辱と戦っている。

銀子やエリ子達は、日頃、多くの男達にチヤホヤされ、ぜいたくの限りをつくして暮している、この美しい令夫人が、どのような顔で、苦しむか興味はそれであった。美しいものに対する反抗でもある。

「さ、早くしないか」

浣腸器を持ったまま、その場にうずくまっていた桂子は銀子にけられて、ハツとしたように上体を起す。そして、もう一度、

「ママ、許して——」

とすり上げながらいい、遂に——

ズベ公達は、眼をギラギラさせ、桂子に浣腸される静子夫人を見つめる。

「そんなお上品なやり方じゃ駄目だよ」

エリ子は、桂子のおろおろした行為に業を煮やして、桂子を突き飛ばすと、自分が代って浣腸器を取った。

「ああ、やめて、か、かんにんして——」

若奥様風に結いあげた水々しい黒髪も今はおどろに乱れ静子夫人の真珠のように光沢をもつ肌、ズベ公達の環視の中でのたうちつづけるのだ。いくら悶いたところで太い麻縄でがっちり全身は固定されている。

「ざまあ、見やがれ」

静子夫人は、じっとまぶたを閉じ、唇を半開きにし、白い歯を喰いしばっている。浣腸の苦しみの次に起る当然の苦しみ、それを静子夫人は必死になって耐えているのだった。ズベ公達は位置を計るようにして便器を配置し直し、静子夫人の周囲にうじ虫のように寄りたかるのだ。

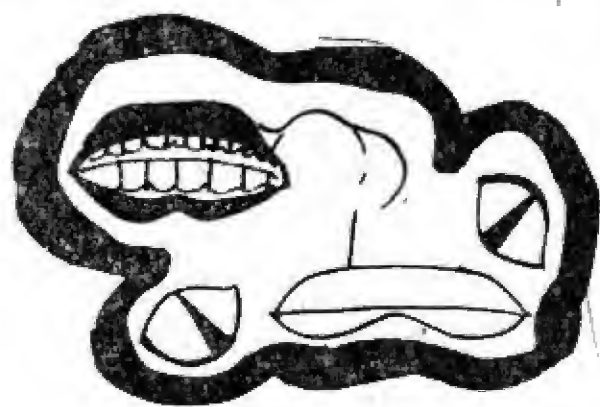
静子夫人の上品な白い額には油汗がにじみ出、彼女は、仰ぐように美しい顔をのけぞらせ、「いいい——」と歯ぎしりをして耐え切ろうと努力するのだ。

銀子は、煙草の煙を、そんな静子夫人の苦悶する顔に吐きかけ、

「ふふふ、可愛い顔して、がまんしているよ。この奥さん」

といい、静子夫人のあごに手をかけて正面に向けさせる。

「ずいぶん我慢がつづくじやないか。お前さんの次には桂子にも浣腸しなきゃならないん



下着と女性化と

古井真哉

たとえ外形だけでも、男の肉体をもって
いるからには、女性化の願望をみたすため
には多くの困難に出会わねばなりません。

たとえば、女性の下着類を手にいれる場
面や、お化粧用具を買っているところを想
像してごらん下さい。今はやりのシスター
ボーイだって、ズロースやパンティをはい
ているかどうかは疑問です。

ブラは恐らくしていないでしょう。今仮
りにそれらをつけているとしても、彼らが
洋服の下着専門店で、パンティを選んだり
ブラパットのサイズを合わせたりしている
ところなど、一寸ありえない図でしょう。

男の身であってみれば、女性しか用のな
い店へ入ることはおろか、肌につけるもの
を、あれでもない、これでもないという好
みすることや、仮縫室へ入って肌に合わせ
ることなど思いもよらないことなのです。

あるいは、こういわれるかもしれません。
美しい女店員や女客のみている前で、ズロ
ースを前に当て、「これ、あたしに合うか
しら」と、相手の当惑する表情をたのしむ
のこそ、マゾの最たるものであるという意
見が出ると思いますが、(本誌の旧号にも
そんな記事がありました)果して、たとえ
マゾヒストであっても、そのようなことを
実行できる人が何人あるでしょうか。

私もいつか、玉造の下着店でズロースと
ブラを買ったことがあります。声はかす
れ目はくらんで、一刻も早く品物を渡して
くれればよいと釣銭もうけとらずに逃げる
ようにして店を出てしまいました。

あとで期待に胸をわくわくさせて、ズロ
ースを身につけてみたら、特大型でダラッ
とした黒い大きい袋を腰につけた、あの滑
稽な姿は、今でもありありと目に浮かびま
す。おまけにブラジャーも大きすぎて、乳

だ。あとがつかえているんだよ。早くおすまし！」

銀子はかみつくようにいった。

静子夫人は、涙を流しながら、あえぐように、

「お願いです。手、手だけ解いて下さい」

というのだったが、銀子はびしやりとしめ出すような調子で、

「駄目だよ。令までは、大家の令夫人だったか知らないけれど今日から当分の間、お前さんはアタイ達の奴レイなんだからね。勝手なことはいわせないよ」

大富豪、遠山義隆の最愛の妻、天下の美女だと評される静子夫人は、こうして、くすのようなズベ公達の軍門に下ったわけだ。

耳たぶまで朱に染めて、消えているようにすすり泣く静子夫人の髪をわしづかみにしたエリ子は、ぐっと夫人の顔を正面に向けさせて「さ、みんな、奥様の顔をよく見ておやり。どうだい、この恥しそうな顔——」

と、笑うと、ズベ公達も哄笑しながら、それぞれ便器の中をのぞいたり、静子夫人にみだらな言葉を投げかけてからかったりするのだった。

(未完)

カバーといったしろものでした。三度目はこの失敗にこりて、野田阪神のにぎやかな通りで人通りを気にしながら、そのとだえたときに、下着棚に近づき、三、四種、手にとってみましたが、足がガクガクふるえてきて、どうしようもなくなり、いりもしない男物のパンツを買ってしまった始末でした。

ですから、このような買物をするのは、当然場末のメリヤス屋になるわけですから、それでは品物の種類もそう多くありませんし、またいいものもありません。百貨店の下着売場などには、全くふるいつたくなる位の、すばらしくかわいい下着類が——、お金があれば全部買ってしまいたい位に豊富にあります、これは全く男の身にとっては、高嶺の花です。

外国では奥様にたのまれて、御主人が特売場のパンティやシュミーズを買ったりするそうですけれど、そんな風習が日本に少しでも入りこんでいけば、あたしにとってどんなに嬉しいことでしょう。人気のない場末の店で、あたしに曲りなりにも、一通りのものをそろえましたが、メンスバンド

だけは中々難物です。薬局へゆけば売っていることはわかっていますが、一体どうやって買えばいいのでしょうか。

「メンスバンドを下さい」このあとで応待に出た店の人が（多分女の人でしょうが）一体どのような態度を示すでしょうか。あたしには全く予想もつかないのが不安なのです。もし四種類も五種類も並べられて、どれにしようかと問われたら、まだしも心の余裕は出て来そうですが、いぶかしげな顔付でみられたら、あたしは一体どうすれば、いいのでしょうか。

上着やスカートから作っていけばいいじゃないかといわれる人があるかもしれませんが。一応外形をととのえてからなら、ズロースやシュミーズをいじくっていても、メンスバンドの替えゴムを買うのだって、そうおかしく見えずごまかしてゆけるかもしれません、そんなのは、あたしはいやなのです。出来れば身体をすっかり女にして匂うばかりの下着を、あれこれと自分の手で選んで、びったりと身体に合ったのを、かわいくつけてみたいのです。

(この項おわり)

八手

記

桃の園

人間馬の体験

津 村 鷹 子



レスボスよ、暖くものうい午後の一とき。

けだるく淀んだ時の移りに身も心も任せ、退
廃の美と、甘い悔恨に酔いながら、あこがれ
と秘密の聖者の園を彷徨する、わが友よ。

私は晩春の午後の醸し出す、うっとりそ
れでいて、どこかうずくような独得の雰囲気
が、大層好きなのでございます。

○

Kさんはいつものもの静かな口調で、話を
続けながら、盃を重ねていました。ホテルの
一室、調度もま新しい畳の間で先程から、お
相手していたのです。私はお店を持って、三
年にもなるのにお酒を好んで飲んだことがご

ざいません。お店でお客さんにすすめられて
も、一寸口を濡めらすだけにしていました。

お酒に恨みがあるわけではないのですが、
私には酔ってしまえる自信がないので、初め
から飲まないことにしていました。でも私は
お酒がすべての人に、同じように味われるも
のではないことを知っています。一杯の盃
も、持つ人の気持によっては、精神の決意を
証すものであったり、豊かさや純粹さを求め
る心の糧となっていて、豊かさも知れませんもの。
そう、私は今一つの意志をもって、盃をとり、
一息に飲みほして、新しい当為の世界をひそ
かに願ったのでございます。

実を申しますと、私はKさんとこうして卓
を囲んでいて、お酒を頂かなくても、初めか
ら、いやここへくる前から充分酔っていたの
でございます。私はすつと立上って、Kさん
の側に回り、食卓の上に腰を下し、Kさんの
肩に右手を置きました。

「ねえ、又馬になって下さらない。」

「よしきた。割と重たいからなあ。」

Kさんはすぐ両手について馬の姿勢になり
ました。

二週間程前のことでございます。私はお客
さんに誘われて、お店の女の子を三人程連れ
てお花見に参りました。女の子は二十から二

十二、三の若い子ばかり、お客さん四人程と城山で、にぎやかなお花見でございました。

私どもが腰を上げた頃は、まだ日が高かったのですが、山を下りて、お寺や旧家の多い道を歩いてまいりますと、あたりは一面淡いもやに包まれたように霞み、どこか記憶の中の遠い所にいるような気分になってまいります。ひきも切らず行きかう人々に、はらはらと散りかかる花、やわらかくむせるようなあたりの空気。ええ、私の好きなのは、そう都大路を花を挿して歩く大宮人、平安朝のけんらん華麗爛熟の雰囲気でございます。

私達はお客様と別れ、二人の女の子は街の映画に行き、私と芳子さんは買物などして歩きました。その帰りにKさんにお会いして、食事をご一じよすることになり、おすし屋の二階に上りました。Kさんはお店の常連のお客さんですが、私には、他の方とは変っていらっしゃる、何だか別の世界の人という感じがしておりました。おすしを食べて、とりとめのない話から、観光地のことや、いろいろ遊びのお話をしていましたのに、

「私、一度でいいから馬に乗ってみたいわ。高原なんかを思いきり走らせてみたら、とっても素晴らしいと思うわ。」

と、うっかり、まるで女学生みたいな口をきいてしまいました。

「馬って、下手な人が乗っても、なかなかいうこと聞かないそうね。」と芳子さん。

「そんなの難かしくないよ。障害や曲乗りで

懸賞原稿募集

〔告白と手記と体験事記〕

☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

☆規 定☆

一、真実味溢れる告白、自らの手記、或は自ら経験された体験記を求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたものであるという真実の裏付けのあるものが、私達としては最も好ましいのです。従って、必ず自作であるのは勿論、未発表のものに限ります。

二、枚数には制限はありません。他の読者原稿と区別するため「懸賞告白」と原稿の第一頁にお書き下さい。締切は別に定めませんから、入選作は漸次最近号から掲載いたします。

なければ簡単さ。教えてあげるから一寸乗ってごらん。さあ。」といってKさんは四つ這になって、そのままじっと待っているのです。男の方の背中に跨るなんて、初めてですが、何だか面白そうな氣もいたします。何気ない

座談会と撮影会

本誌上に掲載するため左記の要領にて座談会を開催いたします故、出席御希望の方はお申込願います。尚、ニューフェイス・モデルによる撮影も同時に行いたいと思いますので、出席者はカメラを御持参下さっても結構です。

記

一、日時、八月下旬（日時未定ですが、出席者には速達にてお知らせします）

一、場所、大阪郊外愛読者某氏別邸

一、会費、一切不要（交通費、夕食代、モデルの費用等は編集部にて負担します）

一、お申込、会場の予定地が市内より車にて約一時間の行程にあり且つ交通が不便ですので、三台の中型車に分乗してゆきますから、ゲストの人数を一応六名に限定します。略歴記載の上お申込下さい。

笑顔の芳子さんと顔を見合せて、私は引かれるようにKさんの傍に立っていました。タイト・スカートの裾を出来るだけ上へずらせて、「失礼します。」と声をかけ、思いきって背中に跨りました。

馬はゆっくり歩き出します。両腿とお尻の方から、じーんと何かこみ上げてくるような感じで、私はいくらか上気してしまいました。Kさんは、

「足を後に上げて両膝をきつく締めて。」と注意を与えます。膝を強く締めつけると、Kさんの体温が内股に伝わって、馬の動きにつれゆっくり身体を前後に動かすのが、まるで夢の中にいるような心地にさせます。

「手綱がいるわ。タオルを取って。」

芳子さんからタオルを受取ると、馬の口にあてます。その中、私も大たんになってきて、タオルをぐっと引きしぼり「もっと早く走れ。もっと。もっと。」と身体を馬の上で上下に弾ませます。とうとう馬は「参った。もうだめだよ。」と手を伸ばして、畳の上につぶれてしまいました。

「あら随分弱い馬なこと。」

私はKさんの背中に乗ったまま、芳子さんと大笑いしました。男の方を馬にして乗り回

すのが、こんなにも素晴らしいものだと、今まで知りませんでした。汗のふき出ているKさんの顔を、タオルで拭いてあげながら、「ごめんなさいね。私十五貫あるのよ。割と重かったでしょ。」と云っても心の中ではもっとぎゅうぎゅういじめてやれたらと思っているのです。

そして今日旅館の一室で、Kさんと二人きりで会うことが出来たのでございます。Kさんからお電話をいただいた時、正直の話、ポーツとして身体中が熱くなるのを覚えてました。あれからは夜、床について、寝る前などに、Kさんをせめるいろいろな姿体を想像して、それは楽しんでいたのであります。

「Kさん、何だかお気の毒、すぐへばっちゃうのじゃないかしら。」

「なあに。大丈夫。さあこい。」

Kさんも力んでいるようです。今日は着物を着ているので、思いきりまくり上げ、太腿をすっかり出して跨りました。せまい部屋の中をぐるぐる回り始めるのですが、前程ではなくても、やはり次第に興奮を覚えてきます。今度はタオルでなく、Kさんの髪の毛を両手でつかんで、腰を前後に揺ってやります。右手を後の馬のお尻に当て、強くたたきなが

ら、背中の上で私のお尻をどしどし弾ませてもやります。それから両手で髪の毛をつかんだまま両足を前に出して膝で首を挟みつけます。そんなことを繰り返して「走れ、走れ。」と叫び続けております。

男性を抑えつけて、馬乗りになり、ぎゅうぎゅうとひどい目に合わせてやりたいという欲望を、私はまだ子供の時分から、抱いていたようですが、まさかこのようにして叶えられるとは思ってもありませんでした。大の男を自分の思いのままに、まるでどれいのように扱えるということは私にとっては、こたえられない魅力でございます。そして馬の背中に当っている腿の内側の感触といったら申しようもございません。何かくすぐったい、せつないような気持が腰のあたりからふくれ上がり、全身にめぐってくるのです。

その中、馬はのびてしまいました。「もうへばっちゃったの。もっと頑張らなくちゃ駄目じゃないの。」

Kさんが動けなくなる筈です。私だって熱苦しく、息が切れて、はあはあと大息をついているのですもの。私は跨ったまま腰を浮かせて、Kさんを仰向けにし、ハンカチで顔を拭いてやりました。

「Kさん私の馬になるの、お好き? どう、もうこりこりした?」

Kさんは、

「これぐらい、何でもないよ。でも今日は参ったよ。」

それを聞いて私は尚勇氣が出たようです。

Kさんを離して立ち上ると、鏡台の前で髪形

映画短評

「成春香」の拷問

東山映史

朝鮮の「忠臣蔵」ともいわれる「春香伝」は一種のメロドラマだが、やはり、美女春香が悪役人の強権をかさにきたゴウモンにも屈せず、恋人への操を立て通し、結ばれるという内容が日本人の共感を得るのだろう。

さきごろ、韓国の初の総天然色映画「成春香」が公開された。「春香伝」の本物というところ。やはり美女春香のゴウモン場面が見ものだった。

を直し、静かに手を伸ばして窓を開けました。薄曇ながら明るい午後の日差しに、庭の桃の花が、今満開を過ぎようとして、花びらを一面に散らしていました。匂うような花の色が眼にしみこんでまいます。どこからか、落着いた琴の調べが流れてくるのを、心の片隅で開いているようです。その音が次第

この美女春香に扮したのは、四回連続主演女優賞をかくとくしているナンバーワンの崔銀姫、製作監督の申相玉夫人、ヒロイン春香はいなか芸者の娘、代官の子息、夢竜と恋におちるが身分が違うため結婚を許されない。

代官一家は都に赴任してしまう。彼女は後任の代官の目にとまる。そして側女になれと強要される。だが、恋しい人に操をたてると首をたてにふれない。そして受難がはじまるのだ。

「百のムチ折ちをくらわせ」という代官の命令で庭前に引き出される。そして、木のイスに緊縛される。両手を後に回わし、イスの腕にしっかりと括られる。中々リアルである。

そして棒でなぐられる。弓のツルをビンとならす。これは数を数えるのだろう。悲鳴

に高くなっても、私の耳には聞えないでしょう。

ああ、やるせない爛熟の化体、陶醉のひととき。忘我の境をさまよう私には、もはや生きた心地はないのでございます。

(終)

が効果的だ。かつて新劇の舞台で見たが、同じような木のイスに両手両足をひろげて縛りつけられたが、エロっばいシーンだ。

氣を失う。そして投獄される。その獄中がまた残酷だ。長い重い木でできた「首枷」(くびかせ)を首にはさまれている。コッソリ訪ねていった母が「首がいたそうだ」という。本当に細い春香の首が折れそうだ。

薄暗い牢獄の中で、首かせをかけられた美女、ゾクツとする美しさだ。そしてついに、首を斬られることになり、引き出される。

長い獄中生活で歩くこともできない。倒れたところを両手を後にとられ、首を斬られようとする所を監察使になった夢竜に助けられメデタシ、メデタシ。

三月特大号(定価二五円)

目次裏「風流いろは歌留多」・「どうも合うでしょう」第一グラビヤ「暗黒の麗人」第一口絵女相撲「激突」・滝れい子画集。四馬孝選。少女検診。こんなにしてやろうか。高原の散華。第二グラビヤ「嵌口」に憑かれて」第二口絵「緊縛フオート撮影の実際」第三グラビヤ「Mフオート・人間馬の調教」第四グラビヤ「女性の切腹」

編集手帖控から
創作「黒衣の苦妻」……編 集 子
女性切腹II切腹を暗した恋……数寄
連載 宇宙のどこかで……佐治 暎
レポ 浣腸相談……栗瀬 長
女斗美絵巻「柔肌の激突」……雪崎 京人
小説 泣き濡れし肌……鏡 獄 聖 一 郎
体験小説「ある娼婦」……西田 仁
ビニール雑考……阿留品 又 恕
創作「暮夜の戯れ」……井田 南 枝
僕の昨日記……東 輝 一
姫君自刃「残照」……石井 章 造
ルポ 未決監に意めく……蓮池 和 邦
告白 メンス考現学……古井 真 哉
奇クサロンIIテレビに於るサジション。

新年号に思う。僕の願ひ。マニヤ放屁譚。破れ易き紙。座食職人の空想。マゾ女性と結婚したい男性の便り。最近号の読後感。尻に敷かれる。小麦色の肌。モデル嬢の飼育ぶり。アブストラクト。切腹小咄集。夜散る梅。他。

告白小説 輝ける星を見て……武中 郁
フィクション K子の手記……羽村 京子
ある生活「オムツ抄」……関根 彰
奇譚三十九夜物語……辻村 隆
読者モデル誕生に想う……近藤 一
足についての文献と記録……木村 清
私はこの醜悪さを愛する……と や ま

読者通信

七月号(定價二百円)

目次表「演劇あべこべの国」「風流いろは歌留多」巻頭口絵「首振り人形」「異奥の中の芳香」「回転する苦痛」M画「御挨拶」切腹「祖国破れたり」「いぶし實め」「さあどうしてやろう」「手中の珠玉」「グラビヤ」「美と幻想のパントマイム」「喘ぐ白肌」「粘著タツチとゴムカパー着」「女体切腹の幻想」Mフオト「幸福なる隷屬」「基盤の重圧」

奴隷学園優等生……………影本 晃
奇譚三十九夜物語……………辻村 隆
児童橋委の勧告に対する私見毛利三雄
告白 女人紅記(マダムのお)須藤律夫
告白 私趣味……………梅川幸三郎
長篇小説「宇宙のどこかで」……………佐治麻造
お灸マニヤ「いつかあのころ」……………水木清一
任み馴れた地獄を立去る為に……………福田久文
切腹体験者藤村陵子への手紙明石満寿男
ガン作「マニヤのノート」……………芳野 眉美
妻の体験「被虐の春」……………西田 隆子
告白「曲馬団の娘」……………上田 隆子
手記「揮」……………白山 繁
女相撲の思い出……………津谷 正春
短信往来「女相撲実録」……………伊万里 進
当代女武勇列伝……………諸岡 堅男
まぞ川柳自註「海辺にて」……………西田 仁
女形役者の告白「わたしの青春」……………阪東秀美
下着マニヤ「洗濯夫の幻想」……………秋元悦男
告白「バックナンバー」……………川端多奈子
短信「撲り賣めへの誘い」……………中田 明
SM対話「社長と女秘書」……………中野 三郎
切腹研究「法谷四郎論」……………中康 弘通
手記「私の闘病記」……………島崎 収
新聞記事のイメージによる小品桐野次郎
地下第三特高調室の女……………高宮 良一
緊縛フオト撮影の実際……………塚本 鉄三
今月の代理部分讓品案内……………代理 部
本誌最近号総目次……………読者通信

本誌最近号在庫一覧

本誌の最近号は左記に示す通り在庫しております。各月号とも豊富なグラビヤ写真と艶麗な口絵並に本誌ならではの重量感のある読物を収載しています。

哀憫美形特集号

(35年6月号)

口絵——美しき女奴隷たち面集
グラビヤ——哀憫美形特選写真
麦秋特別増大号 (35年7月号)

特価百五十円

口絵——白線地帯の「飼育室」
組写真——異国船の密航者
盛夏特別増大号 (35年8月号)

特価百五十円

面集——「白と黒とのコンビ」
絵物語——仮借なき凌辱
早秋特大号 (35年9月号)

特価百五十円

絵物語——網にかかった女
グラビヤ——不安と羞恥と嘆願
新装10月特大号 (35年10月号)

定価百四十円

グラビヤ——緊縛艶姿五十態
口絵物語——暗黒集団(四馬孝)
新装11月特大号 (35年11月号)

定価百四十円

面集——被虐の白い花びら
グラビヤ——夢の緊縛アルバム
新装12月特大号 (35年12月号)

定価百四十円

写真——恍惚女体ハイライト
面集——吊責遊び方教室
新年増大号 (36年1月号)

定価百五十円

面集——新妻教育(こんな愛し方)
アルバム——表情とアツプセル
クシヨン。蛇倉の恐怖

新装二月増大号 (36年2月号)

定価百五十円

絵物語——瀬降り男。グラビヤ
——美しきいましめ、珠玉の餌物
新装三月増大号 (36年3月号)

定価百五十円

口絵写真、緊縛女体ポートレート
ト特集。読者の声と通信。口絵
——美と幻想の構図
新装四月増大号 (36年4月号)

定価百五十円

グラビヤ、華やかなモンタージ
ユ。口絵——異常光線の綾
新装五月増大号 (36年5月号)

定価百五十円

口絵——吊責めの種々相
写真——甘美と清潔の構成
新装六月増大号 (36年6月号)

定価百五十円

グラビヤ——清美と艶容の造形
色刷口絵——美女力士の激突
新装七月増大号 (36年7月号)

定価百五十円

グラビヤ——麗化と婉曲美の探究
(写真による散文詩) 口絵——

——傑作責画特選、倒錯絵巻選
新装八月増大号 (36年8月号)

定価百五十円

グラビヤ——余韻の陰微と断面
緊縛フォト撮影の実際(亀甲縛りの一例)

新装九月増大号 (36年9月号)

定価百五十円

グラビヤ——アブ・シーン・アラカルト。緊縛フォト撮影の実際(高手小手縛りの一例)

新装一周年記念号(36年10月号)

定価二百円

告白特集——偏執記録の断片。
グラビヤ——SMMの組写真集。緊縛フォト撮影の実際(ゴムの感触とフェチ好み)

新装十一月特大号(36年11月号)

定価二百円

特集——私を責めて下さい(雑誌の中の孤独)グラビヤ——緊縛美の祭典、アブ双曲線

新装十二月特大号(36年12月号)

定価二百円

特集——読者通信の女性を縛る(ひろ子緊縛記)緊縛フォト撮影の実際(前手縛りと縄抜けの一例)

新年特大号 (37年1月号)

定価二百円

特集——カバール・ガールを縛る
グラビヤ——美しき緊縛。
緊縛フォト撮影の実際(逆エビ

縛りの一例)

二月特大号 (37年2月号)

定価二百円

グラビヤ——責められる女。組写真II女性の血紅切腹。
懸賞百枚読切小説「契約書」

三月特大号 (37年3月号)

定価二百円

グラビヤ——「暗黒の麗人」
「嵌口に憑かれて」「人間馬の調教」「女性の切腹」
緊縛フォト撮影の実際(水責めと煙草責めのテーマ)

四月特大号 (37年4月号)

定価二百円

グラビヤ——「縄と紐の怨懣」
緊縛フォト撮影の実際——(首縄と後手縛り)

懸賞応募作品——「マミと私」

五月号 (37年5月号)

定価二百円

グラビヤ——「悦虐の表情と縄のアップ」Mフォト「屈伏への序曲」「完全なる屈伏」

六月号 (37年6月号)

定価二百円

グラビヤ——「濡れた塑像」
読切小説——「裸形の路」M的小説「鉄の指」

七月号 (37年7月号)

定価二百円

グラビヤ「美と幻想の無言劇」
「粘著タッチとゴムカバール着」

最近代理部分讓品案内

女体緊縛フォトの部

一、//大の字//逆さ吊り

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(つり) モデル 梨花悠紀子

責めの中で吊りが一番好きだという梨花悠紀子を逆さ吊りの大の字に両足をいっぱいに拡げさせた強烈な吊り責めフォト。

二、立木 //宙縛り//

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(くた) モデル 梨花悠紀子

荒縄が全身にくるぐると喰い込み、立木に高々と宙じばりになった悠紀子の足場のない足先だけが徒らに苦痛にうごめいている。

三、凄惨 //乳房責//

大手札印画紙 三枚一組 二五〇円

略号(とい) モデル 梨花悠紀子

ヒョウタンのように根元を縄でくびられてもうこれ以上大きくならないという極限まで虐たげられた乳房の大写し写真。

四、//妊婦の緊縛//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(にむ) モデル 某女

読者の紹介で得た妊娠中の若い女性をモデルとして、その胸や腹を緊縛した写真。誌上に掲載しないという約束の稀少作品。

五、//全裸の仕置//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(すお) モデル 東浦ひかる

マゾの遍歴から。より強烈な試練の庭に立ちたいと願う東浦ひかるの最も新しい生感をここに、あからさまに紹介したいと思う。

女体切腹フォトの部

一、血紅女体自害

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひち) モデル 大塚啓子

白鞘の短刀を豊満な下腹へぐさりと突き立てて、きりと臍下を切り裂き、溢れる血汐がしたたり落ちる凄まじくも美しい光景。

二、女体切腹マンダラ

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(あま) モデル 甘木春子外

あるマニヤが同好者の女性をモデルとして

野外にて自らその女性の腹部を切り裂いてゆく有様を撮影した血紅利用の切腹写真。

三、悲愴女体自決

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひい) モデル 大塚啓子

真白い肌に突き立てられる氷のような九寸五分の脇差。臍下に、乳房に、咽喉元に最期のとどめは容赦なく加えられてゆく。

四、哀艶女体割腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

正面向いて両膝を立て、或は右膝を一步踏み出して全身の力を両手にこめ、ううう、とばかり無垢の柔肌に突っ立てる刃先。

五、凄惨血紅女体立腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひさ) モデル 大塚啓子

柱を背にして立ち壮絶な立腹を演じるさまを豊富な血紅を用いて刻々と変りゆく経過と苦悶と哀切の表情を捉えた血汐のフォト。

六、苦悶切腹表情

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号(せく) モデル 梨花悠紀子

切腹によって起る激痛による苦悶の表情を真迫的に描写しようとして、顔面は勿論、手足の指先に至るまで刻明に写した作品。

フェチ・フォトの部

一、バンド着用フォト

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(めい) モデル 梨花悠紀子

メンスバンド・マニヤ待望のバンド着用のありさまを刻明且つ鮮明に美しいモデル嬢によって、あらゆる場面をごろんにいれます。

二、バンド着用の縛り(後手)

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号(めろ) モデル 梨花悠紀子

後手高小手にメンスバンドを着けられた女性の口も鼻も、猿ぐつわとしての替ゴムがムンムンするゴム特有の臭気を放っている。

三、バンド着用の縛り(前手)

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号(めは) モデル 梨花悠紀子

バンドや替ゴム着用の部分を殊更鮮明に大寫しするための前手しぼりによる脚拳ポーズ等、のびやかな下肢の動きは美しい。

四、女性の六尺褌

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ろく) モデル 大塚啓子

晒の六尺褌をきりと締めた裸女が、正面背面、横臥、側面とブンドシ着用の女体をあらゆる角度からキャッチしたマニヤ向作品。

五、ゴム・マニヤ

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(こむ) モデル 梨花悠紀子

ヌメヌメとした生ゴムのタッチとあの特有の臭気にむせびながら、頭の先から手足の先までゴムづくめのゴムフェチの女体。

六、メンス・バンド

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(めす) モデル 梨花悠紀子

両の自由を奪われてしまつては、もう強制的に装着させられたメンスバンドをはすすことも出来ない。鮮鋭なレンズはシワの一つも見逃すまいとフィルムに印してゆく。

Mフォトの部

一、足で戴く珍味

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号(くさ) モデル 絹川文代外

足の指に挟んだお菓子をもそのまま直接口で

受けて戴くのは、マゾヒストの夢にまで描いた幸福の構図ではなからうか。

二、靴の下にうごめく

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号(くつ) モデル 絹川文代外

鋭く尖ったハイヒールの靴先が、或は踵が口の中へぐつと押し込まれる汚辱の瞬間。床に転った顔を踏みにじる非情な靴の裏。

特殊趣向フォトの部

一、絞首処刑

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(こう) モデル 絹川文代

後手に縛られたフンドシ一本の裸女の首には絞首刑の縄が垂れ下り、脇腹には白刃が突きたてられて血汐が溢れる苦悶の形相。

二、鼻料理

大手札印画紙 六枚一組 六〇〇円

略号(はか) モデル 大塚啓子

若い女の鼻に対して、これでもか、これでもかと、いろいろの苛虐が手をかえ品をかえて加えられてゆく鼻マニヤの作品。

◎お申込みは「略号」にてお願いします。



七月号拝見しました。梨花さんの体を重量物で圧しつぶすというアイデアには大賛成ですし、私も以前から同じアイデアを抱いていました。――碁盤などより、もっと圧迫感のあるものを――。舞台は山道がよいでしょう。服装は下着だけ、しかもスリーインワンか、ウエストニッパ―か、特に前者がよいでしょう。洋画「危険なデイト」の看板になっているものです。大きな石を運び上げられるよう命じられた女奴隷の梨花さんが、首尾よく頂上まで運び上げ、そこで絞首刑を受けるといったストーリーです。一、スリーインワンで後ろ手、はだしの梨花さんに男でも持てないような石を背負出せて歩かせる。山道。二、同じく後ろ姿。三、途中で

がおむけに倒れ、歯をくいしばって苦しむ梨花さん。これは何枚もうつして、色々の表情から一枚だけをえらぶ。四、しっかりしろと二、三人の鞭がとぶ。このストーリーの梨花さんの周囲を常に男たちがとり囲んでいる暗示として、全篇を通じて二、三人の男の手足などを画面に入る。五、休憩、前景では数人の男がはんごう炊事をし、美味そうな御馳走が並べられる。無論梨花さんは絶食。煙の向うの細い立木に立ったまま、ぐるぐる巻きに縛られ、ポロポロ涙をこぼしている。(目薬使用)六、頂上に到着。石をはずされ、時間がかかりすぎたとドロ靴でふみにじられる梨花さん。七、湖から流れ出す溪流で処刑前にドロを洗い流す。ヌード。流れの中であおむけになり、手で上半身をささえて苦しむ梨花さん。八、花束の中で右手だけ解かれて遺書を書く。九、いよいよ

絞首刑。十、草むらに投げ出された屍体。梨花さんに一言。梨花さんの真価は、静的な緊縛鑑賞ではなく、大きな力に圧しつぶされ、引きさかれ、又はその前にくだけて散るところにあるのですから、緊縛モデルだという考えを捨て、本当に編集部から拷問を受けるという決意を持って頂きたいと思います。それが個人的な幸せを切りひらかれる道と信じます。最後に四馬画伯の健筆を祈ります。(花田一郎)

このところ毎号素晴らしい切腹の写真を見せて下さいまして切腹ファンの私、心から感謝しております。とくに七月号の立腹のポーズは素敵でした。ただパンティではなく、お腰か、ふんどし一本のスタイルでしたら、なおさら素敵だったと思います。私共女性の切腹ファンにとって最大の悩みは、実際に自分の肌を傷つけるのには男の人以上に決断力があることです。結婚、それを考えると、私達女性は自由にプレイをたのしむことができないのです。女のくせに切腹をしたがるなんて、一口に変態などといって片づけられてしまいうですが、プレイをしないまでも、切腹に興味を持っている人はかな

りいるのではないのでしょうか。ずっと前に、私、へんとう腺炎で入院したことがありましたが、その時、私のお隣に盲腸で入院した娘さんに附添ってきたお母さんが「お前ずいぶん弱虫ね、手術の時泣いたりして、昔の女の人は切腹の時なんか腸の出る程自分で自分のお腹を切ったのよ」と云っているのを聞きました。私自身、切腹のプレイをしたい気持は人一倍強かったのですが、結婚のことを考えると、その勇気が出ず、結婚してから初めてプレイを行う機会を自分で作りました。私は夫にこういって切腹プレイを行う機会を作ったのです。「昔の女の人は夫に貞節を誓う意味で夫の前で切腹の真似をしたんですってね、勇ましいのね、私もそうして、あなたに貞節を誓おうかしら」私はこうして、結婚後二カ月目に夫の目の前でプレイとしては行き過ぎと思われる位の切腹を行うことができました。その時私は喪服を着、洋服用の下着は全くつけず、赤のお腰リギリに下げて締めただけにしておきました。おへその下五センチ程のところを長さ十五センチ、深さ二センチぐらい切りましたが、

く予想したほどの出血もなく、初めは妙な顔付をしていた夫も終る頃には大変興味を持ったようでした。傷が完全に治ったのは半月も経ってからでしたが、両側から肉の盛り上った傷あとが残ってしまい、お風呂屋さんなどで裸になったとき、ジロジロ見られると恥しかったのですが、最近では全く平気になり、わざと傷あとが見える様にお腰をしめていばっております。私の今の望み、それは、もっともっと深く切腹して血みどろの自分の腸をつかみ出し、腸を両手でキリキリもみながら、のたうちまわってみたいと云うことです。でも、これは死を伴わずには実現されないはかない望みにすぎません。それから編集部の方々に御願いたしたいのは、ふんどしあるいはお腰姿の立腹、花嫁姿の切腹、ゴムか何かの模造品を使って、切腹中に腸のたれ下った写真など載せて下さればと思っています(切腹願望の新妻八荒井弥生Vより)

○ 僕はとうとう決心しました。悶々として、どうしようもないより、投書して行動に出よう、と。七月号には浣腸の記事が一つも出ていないので、残念この上なかつ

た。それに最近、股間しばらくかアヌスをもとにした話題がだんだん影をひそめたのは、一体どうしたのでしょうか? 七月号の読者通信三十一名の中、八人が浣腸希望者なのを一考して下さい。それに縛りやサドの要素を入れれば、おそらく三分の二以上には何らかの形で浣腸又はそれに関連した同好の方々だと断定してさしつかえないと思うのです。僕は都内の或るキャバレーでボーイをしている青年です。トイレ附きのデラックス・アパートに独り住んでいますから、浣腸せめにはもって来いの場所です。僕の決心とは長年の悶々とした生活に終止符を打つべく、特に浣腸に興味を持つ女性を求める事です。四十才ぐらい迄の女性でしたら顔の美醜は問いませんから、どなたでも御連絡下さい。はがきは駄目です。それに秘密を厳守して下さい。(東京八上谷生V)

○ 大阪の東浦ひかるさん、K誌上にて貴女のお便り度々拝見しております。私も是非お友達の仲間入りさせて下さい。勿論私もK誌の愛読者の一人です。K誌を知ったのが昭和二十七年ですから、も

う十年も引き続いて読んでいることになります。私の本箱には七十数冊ものK誌がずらりと並んでいます。一度でもいいから、この手で女の人を縛ってみたいと、いつも考えているのですが、良いパートナーの得られないまま、唯空想のみにて残念に思っています。『私を縛って』という貴女を身動きも出来ない位、強烈な後手縛りにして『もう許して』と哀願する位まで責め抜いて見たらどうだろうと想像するだけでも、身震いする様な快感を覚えます。自分が縛られるということにも少しは興味があつたようです。縛られたいという貴女の御気持もわかるような気がします。でも、私としては矢張りMよりSの方が強いようです。これは夢かもしれないませんが、もし貴女とお会い出来るような機会が得られるとしたら、どうでしょう、きつと素晴らしい事でしょう。そんな事ができるとしたら、すぐにでも飛んでゆくかもしれません。でも矢張り夢でしょう。お差支えなければお便り下さい。せめて文通でも出来たら、色々体験したこと話を話したりいたしましう。私は現在三十才、五尺四寸位体重十四貫強という小さい方です

が、体は至って健康です。数年前まで無線通信士として働いていましたが、家庭の都合で退職して今は相当に広い果樹園を経営して居ります。収穫期以外は実に呑気な毎日で暇をもてあましていますので、機会があればお会いすること可能です。而しあくまでプレイでありたい。残酷なことは余り好みません。K誌上に貴女の縛られた姿がたくさん載る日を待っています。そして同好の諸氏と同様K誌が益々発展する事を祈ってやみません。(徳島八佐原益一V)

○ 神奈川県児童福祉審議会が指摘された「人間の純潔を汚し、犯罪にもつながる」ものの筆頭に挙げられるべきは、軍国主義、戦争讃美の宣伝である。世界の大半を灰燼に帰し、幾百万の貴重な人命を奪い去った、あの戦争の悪夢を忘れたかのように、今日、全国の児童よみもの、漫画、映画、ラジオ、テレビ、学校教育にまで、あの戦前の軍閥支配當時を思わせる戦争讃美が華やかに登場している。毎日新聞によれば、現在、青年の間に最も人気のある歌は軍歌だそう。戦争こそは最大の犯罪ではないだろうか、これを美化し謳歌し

て再び祖国を、人類を、あの家は焼かれ、山河は崩され、老若男女の差別なく虐殺される戦争に追込もうとすることこそ、最も「人間の純潔を汚す」憎むべき行為であることを福祉委員会の人達は敢て否定するのか？ 第二に問題となるのは、アメリカ映画を中心とするスリラー、ギャング物の横行である。アメリカ映画の登場人物は、その殆んどが、強盗、スパイ、無頼漢、裏切者、探偵、売春婦、等々で、さながら米国には一人の紳士もいないかの如く、それについて日本の時代劇までが、アメリカの西部劇の筋書きを採用する有様で、その結果、わが日本は米国に次ぐ世界第二の犯罪国になったのではないか。白昼、銀座の真中で強盗行為が静かに平然と行われると新聞はしばしば報じているが、その原因の大部分が右の如き映画や出版物にないと断定する勇氣があるのか？ それらの抗議は先ず彼らにこそ向けられるべき筈であるのに、甚だ不思議なことには、このような恐るべき伝播力と影響力をもつ巨大なるシステムには一言半句の抗議をしないのは何故だろうか。一体奇譚クラブのどこが有害なのだろうか。そこに

は侵略戦争によって幾百万の人命をそこねたということも書いていないし、バクチ打ちになって俠客顔をして弱い者をいじめよとも書いていない。若し例えば切腹記事が有害だというのなら、諸君が切腹する程の勇氣と純情を持たず、その精神を全く理解しえないがためである。或は赤い腰巻が気に入らないというのなら、和服女性の美しさを全く理解しえない偏見者でなからうか。私がこんな激しい言葉で非難するのは、ファッショ的な甚だ危険なものを感じとるに外ならない。戦前、渡辺はま子の流行歌「月が鏡であつたなら」を治安維持法第十六条により「風紀を乱す」と禁止して、ただ一筋に侵略戦争の合理化、戦争の惨虐の讚美に一切のマスコミを動員した、あの軍閥のやり口によく似ていると思えるからである。他国への侵略と国民に対する弾圧と欺瞞以外に何も知らない軍閥。こんな怪物が再びのさばり出してはたまらない。神奈川県といえ、かつて勤評騒動の当時、日教組を寸断し無力化して、岸内閣にその功績を高く買われた由緒の土地であり、広島県も原水爆禁止世界大会に補助金を打ち切り、会場を拒絶

し、右翼を使ってなぐり込ませ、無礼にも外国代表に退去を強要した土地柄である。最近、各新聞社には財界並に某大国外使館から。中央公論社には右翼から、そして風俗誌に対しては某団体から、強大な圧力をかけられているという噂が単なる噂だけでなく、本当だとしたら、戦前の悲しい過去が示す通り、如何に弁解しようとも、これは「健全な育成」に名をかりた言論統制の陰謀であり、やがて戦争を始めるための準備工作に相違ない。奇ク編集部同人並に全国の読者諸君は、勇氣と確信をもって、この陰謀を未然に看破して、言論の自由のため平和を守るために努力しなければならぬと思う。(下関市八森田敬三)

○ 奇ク 愛読者の皆様、初めて仲間入りする私は、都内居住のサドマニアです。最近中村さん、松本さんと女性の告白体験記等が目につき、多くのマゾ女性が実在することを確信致し嬉しく思っております。次第です。せひ、世のマゾ女性の方、御交際下さい。良きSMプレイヤーとしてまた女奴隷及び家畜の調教師として相手をさせていただきたいと願っております。薄

給です。ので経済的には御役に立ちませんが、交際に於ての誠意は、必ず役立つと思います。秘密等は厳守致しますから、良きマゾ女性の方御一報下さい。私は強いて言え、鼻責めと浣腸責め等に興味がありません。美しい女性を縛り上げていろいろ責めることは、きつと夢の様に美しく素晴らしいものと信じます。誰方でもかまいません、まじめに交際していただきたく思います。(和歌山県海南市八長岡数年)

○ はじめめてお便りします。私は大分以前からの読者ですが、浣腸記事の少いことをものたりなく思っております。この種の記事は他誌には全然といってよいほど見当りませんので、やむなく御誌を購入入しているのです。編集部としてはそれぞれの分野のマニアのしめるパーセンテージに従って記事量をおきめになっているのでしようが、我田引水かもしれないと思腸マニアの読者はかなり多いと思います。たとえば、S・Mマニアとされている人たちの相当数以上がわれわれの仲間でもあるのではないのでしょうか。最近の本欄に浣腸フアンの声がふえてきたことは

うれしいかぎりです。私は読者通信がたのしみで本誌を買っているとも申せましょう。フアンの皆様、だまっていなくてどしどし名乗りをあげようではありませんか。われわれの声によってわれわれの記事をふやしてもらおうではありませんか。中山梨津子様、エネマ・フアンに入会させていただきます。と思いますので入会手続などお知らせ下さいませんか。(東京八松本敬之介V)

○ 本誌七月号掲載の当代女武勇伝のヒロイン女医登志子は「戦後女子の高級者も随分ふえたが感心するのは竹刀さばきだけ。下半身はまるで無防備だわ」と語っています。すが女子に限らず男子の有段者もやはり同じで、そうだったのもいまや剣道が武道でなくなり完全にスポーツ化したからなのです。妾は子供の時から薙刀を習い二年前目録を頂戴しましたが、今のスポーツ剣道なら手もなく打ちすぎる自信はあり、現に従兄(初段)とは何度手合せしても何時も妾が勝ちます。相手の脛を狙い石突きを股間に入れて跳ね上げると面白いようにひっくり返ります。妾の体験談を綴ればそれだけで天晴れ女

勇伝が出来上りますが、文章が下手でその上字が書けない(この投書だってそばに字引を置いていて位)ので断念しますが、妾もヒロイン女医登志子のように戦場の組打技は習いました。組打技も攻防の武具の進歩に連れて色々変遷があり、特に甲冑を付けた儘の組打になると武具に蔽われていない關節の空き所を責めたり草摺を揚げて下から突きを入れたりするので。昔は随分乱暴な剣士がいて女と見ると体当りで組打を挑んでくるのも居たものです。組打は組敷れると口惜しいが組敷いた時の快感は一入です。満座の中で取って抑えると男性は顔を真赤にして妾の桎梏から逃れようとしますがやっぱりきまりが悪いのでしょうね。併し古式に則った組打は危険な技が多いので一般にはお奨めしませんが、女医登志子はこの手を使って居るようですね。それにしても七月号の諸岡堅雄氏の読物は一寸面白かった。世の男性方よ。女と侮っているとひどい目に遭うわよ。御用心。馬乗の姿勢を固めながらむんずと跨っている妾達女性には最高の御機嫌だけど男としたら口惜しいでしょうね。妾はその口惜しがる男の顔を上からじっと

見下しているのが大好きなの。征服欲が強すぎるのね。しかしサドではなさそうよ。マゾ見たいな男性がこれまで随分妾に接近してきたけど、みんな口程忠実ではないので踏んづけて追い返してやりました。やっぱり妾は随自慢の男性と覇を争うことに生甲斐を感じます。妄言失言多謝(東京下谷八柊原睦子V29歳)

○ 奇クが昨年後半から毎号グラビヤに女性切腹の頁を続けていられる事を、フアン一同歓びとして居ります。特に三月号の某愛読者女性切腹、六月号の切腹プレイ、七月号の啓子さんの正座切腹に小生強く感銘しました。読者通信欄に寄せられるフアン諸氏の希望は真に迫ったシレンが多いようですが、小生は血紅を使った悲惨な姿はあまり好みません。むしろ切腹プレイにひたって自らを慰めている女性のポーズが最高にシビれます。麗子さんも時にはプレイにふける女性を描いて下さい! さて四月号の陵子さんの御体験を興味深く拝読しました。学生達の前で切腹のポーズをされた時に、その夜決行する決心をしたとのこと、全く自然だと思えます。読み終っ

て、昔本誌によせられた不破和子さんの告白をすぐ思い起こしました。かえって女性の方が思い切ったことを実行されますね、腹部の傷は表皮を切った程度でも何年経っても不思議に残るもの。陵子さんの傷も一生残る筈ですが、それを御存知で決行されたのは正に立派です。本誌旧号の泰子さんの力作「切腹婚姻儀」は小生深く感動しました。新妻が夫から切腹の作法を教えられ、同時に切腹プレイの味を知るといふ、これこそ小生にとって現代のバイブルでした。これを読む以前に、小生にもこれに似た経験があります。ある時、仲のよいBGが「切腹ってどうやるの」ときかれるままに、小生の夢であった女性切腹の作法を話したところ、彼女は深いため息と共に「女の人もやっぱり切腹したのねえ、私に出来るかしら」と自分のお腹をなでるのです。その事があってから彼女とは何だか急に親しみが増して、じょう談半分に「申し訳に腹を切る」というような言葉が度々交されたのでした。然し当時小生は奇クも知らず、女性に愛好者のいる事も知らなかった。なので、彼女とプレイをするまでに至らず、今考えると全く残念で

私たち月刊誌発行の十四社は現在の世状に即応し、一般大衆の健全な娯楽誌とするために各社代表（社長及び編集長）協議のうえ編集上左のとりの留意事項を申し合わせた。

（備考）この自粛申し合わせの懇談会は三十七年五月四日に発案し以来数回の会合をもち発足した。

申し合わせ自粛事項

月刊誌編集上の注意事項は、中央児童福祉審議会の答申はもちろん、全国都道府県条例等に抵触しないことを目標として、すみやかに頭書の目的を達成するよう、大巾な誌面刷新に努力すること。具體的にとりあげれば左記の諸点をとくに注意して編集する。

A 表紙の構成について

一、写真または絵の表現方法

(1) オール・ヌードは絶対に掲載しない。(2) 乳房、裸出したヒップは出さない。またこれをデフォルメし強調した構図はさける。(3) 着衣のモデル（グラマー）について、きわめて挑発的なもの及び卑わいなポーズはとらない。(4) 薄物等、着衣その他で蔽い、できるだけ露出部分をすくなくす。

二、表示するタイトルその他について

(1) セックス行為及び性器関係に関する極端に卑わいな文字はさける。

（例）アクメ、オルガスムス、自慰、濡れる、性の四十八手、

強姦、ハリガタ、処女膜、性感帯、性慾、破瓜、ペッティング等とこれと類似する卑俗なる言葉。

(2) 表示するタイトル 書体は格調ある文字を用い、性風俗又は性器に関する文字はなるべく小さくし、尚表示するタイトルの本数は三本以内とする（裏表紙をも含む）。(3) 一見低俗出版物とみなされる表紙構成（配色・ポーズ等）極力さける。(4) その他有識者がみて眼にあまる煽情的な写真及びポーズ並びに字句はさける。

す。女性切腹に興味を持たれる女性と、心ゆくまで語り合い、研究し合う、これが小生のこの世の夢なのです。そこで、貴重な誌面をかりて、東京の女性ファンにサインをお知らせします。公園で、駅で、車内で、若しも貴女が、右手のにぎりこぶしを左わき腹にあてている男性に気付かれたら、どうかさりげなく同じポーズをして下さい。小生そのときおもむろに右手を右に引きまわします。切腹のポーズです。若しも貴女も同じく引きまわして下さればOKです。念のため「お読みになりますか」と話しかけますから「時々」とお答え下さい。貴女が切腹ファンでなくてもマゾファンの方なら理解し合えると思います。小生は主として東京駅付近に出没しています。貴女と逢う日を楽しみに！勝手な事ばかり書きました。奇クと読者諸氏の発展を祈ります。

（東京八近松歌磨呂V）

二月号の清水様のおたより拝見致しました。みな様とふんどし一本で集るなんて実にたのしいことだと思えますけど、私残念ながら今年の夏は駄目なのです。何故って私赤ちゃんができるからなので

す。でも私は一生ふんどしを下着にして行くつもりですから、いつかは御一緒できると思います。先日婦人科のお医者さんのところへ行った時も、やはりいつもの真赤な六尺ふんどしを締めて行きました。たがお医者さんは「奥さんはふんどしなんか締めていらっしゃるんですか、勇しいですね。」と云っていました。私は「ええ、下腹が引きしまって、気持がいいですわ。」と答えておきましたが、看護婦さんも興味深そうな顔をしていました。でも赤ちゃんがお腹にいる中はあまりきつくふんどしを締めては良くないそうです。それに腰を冷やすと身体に悪いので必ず長めのズロースかお腰をつけるように云われましたが、パンティ類は一切身につけまいと云う初志を貫いて、赤ふんの上にお腰を巻いています。（井上真澄）

昭和十二年生れ（四月）たった二十五才の女なのに、サド的・マゾ的と云うことを身をもって知った今、胸中が滾って来ます。若いからといって徹頭徹尾可愛がってやれないという事は決してない。自分では気付かぬ性格を恩人によって開拓されたが、相手は妻子あ

B グラビヤ口絵等の構成について

(1)卑わいなヌードはぜったい掲載しない。(2)セミヌードでもことさらに淫らなポーズやカメラアングルをとらない。(3)男女の性態を表現、またはこれを想像させるものをさけること。(4)グラビヤのタイトル及び説明文は卑わいな表現をさける。(5)その他表紙と同じくいたずらに挑発的エログロ感の強いものをのぞく。

C 目次、本文のタイトル、サブタイトル、キヤ

ッチフリーズ(引文句)の表現方法について

(1)表紙グラビヤの構成表現と同じ方針でとくに煽情かつ淫らな表現はさける。

D 本文編集上の留意点について

世論のヒンシュクを買うようなものをさけ、充分内容を検討する。

(1)性交描写を表現す文章は絶対掲載しない。(2)本文中のさし絵マンガ等についても前記の方針に準じ、卑わいに堕ちぬよう注意する。(3)本文中の写真については、盗み撮りをふくめて男女の刺激的な性態はさける。(4)青少年に極度の兇暴性を助長せしめる様な文章、さし絵、写真をさける。(5)以上のほか本文主題は、特にセックス中心の内容のみに偏向せずバラエティある編集をうちだし、各誌の特色ある個性を創成していく。

以上の議協事項により今後各社月刊誌は、発行直後これを持ちより批判検討会をひらいて、自肅目的の達成につとめるものとする。

昭和三十七年五月十八日

(補足)

本申し合わせ事項は六月二十一日以降発売のもの(八月号)より実施する。

雑誌倫理協議会

る事業家、これ以上のプレーは共に人道をはなれることとなる。(女はサドといっても元来マゾ的要素があるが)自信をもって私につかえ、私の奴隷となってくれる男性と一度会いたいと思います。マゾ的な男性をおおいに満足させてあげる丈教育もつけたし、完全プレーにて(縄、さるぐつわ勿論)女王(私のパンティ)よろこばしてやりたい。名古屋近辺の方で、私こそ久子様の奴隷になろうと、志ざす方、連絡下さい。(名古屋八北緋紗子)

○ 小生二十三才の江戸っ子です。

生来の揮マニヤで、いささか露出症傾向があり、人時で六尺褌一本を誇示するのがメシより好きという変り者です。そのうえマゾ傾向があるので、今までに数回プレイの経験がありますが、いつも責められる方の側に立つことを好みます。とくに褌一本でがんじがらめに縛りあげられ、吊られたり、海老責の苦痛に男らしくたえ忍ぶ時は最高です。小生の夢は仁侠に生きるやくざ(グレン隊とちがう)の一家に入り、三下奴からつとめあげて一人前の男一匹にきたえられることです。盃を親方に渡し、

身体をあずけてからは、どんなつらいことや苦しいことも服従すること誓って身内に入れてもらい、晒の六尺褌と腹巻をきりっと締め、組のしるしの半被を着るのが「きまり」とされ、さらには、男一匹のしるしに刺青を彫られ、全身、肩から尻まで、あざやかな竜の刺青を彫って、まずやくざの仲間入りをさせてもらいたいです。仕事は三下です。家の掃除や洗濯、兄貴分の身のまわりの雑用などです。とくに掃除や洗濯は褌一本でさせられ、冬でも汗だくになるほど懸命にやりますが、兄貴分にドナられ、尻や背中をどやしつけられたり、青竹のムチでひっぱたかれたりしたいのです。洗濯は毎日締めかえる褌が殆どで、一家中の褌を洗わせられるので大変ですが、文句がいえません。また、男らしさを誇るやくざの家だけに、いつも切りたての晒の褌を締めなければならぬので、汚れた六尺褌を締めたり、シミがついていたりすると、ヤキを入れられますが、罰には褌をとりあげられ、素っ裸にされます。ヤキの方法は残虐きわまりない責め方で、普通は仲間への見せしめのために、共同生活を破った責任

をとわれて、親分、兄貴連など家中のいる前でかわるがわるやられます。時には「おきて」を破ったりした兄イも揮一本で責められ遅ましい身体がフラフラになるまでいためつけられますが、その後は、たいていやつあたりに俺が兄イから責められ、血がふき出すまで責められ男泣きに泣きます。また心身鍛錬のため、毎日親分の前で角力やレスリング、ボディビルをやりますが、そのきたえ方も一通りではなく、揮がちぎれるばかりの激しい斗いで、くたくたになるまでやらされ、気絶することもあります。また夏は勿論冬も風呂のかわりに水のシャワーを浴びさせられるので肌はきたえられますが、責め方もきびしいので一年中身体中生傷がたえません。男ばかりの殺風景な毎日なので、一人の男をめぐって、毎日のように対立したり喧嘩がはじまりますが、そんな時にどちらかが気絶するまで斗い、勝った方の自由にされます。一切女気がないので、親分から三下奴に至るまで、みんな公然と男同志の遊びをやりますが、その方法もいろいろあります。特に僕は一番年下なので兄貴分からいろいろ、この道のことを教えられたり、

無理矢理、自由にされたりします。月に一回開かれる集会では、仁侠に生きるやくざ、男の道についていろいろ教えられ、昔からの慣習に従って、正統やくざのむつかしい掟や習慣の実演などをやります。大広間に六尺揮一本の男たちがずらりと揃った姿は見事なものです。その夜は本式の「バクチ」をしたり、その後は集団プレイをしたり夜を徹して揮男のすべてを披露します。こんな苦勞を小生は喜んで受けたのです。こんな空想にふける小生ですが、実際は平凡なサラリーマンなので、徒らに夢だけに過ぎないのです。しかし、せめて夢の中なりとも、やくざになつてみたいという、小生はやくざ志願なのです。同好の方からのお便りを待っています。(東京八やくざ志願の男森利三)

数年前から貴誌を愛読していますが、もうこれ以上、自分の感情を押えることが出来ませんので思い切って筆をとります。僕は二十五才になる青年ですが、まだ一度もそんな経験がありません。しかし、一度でもいいから女の人にいきりいじめてもらいたいと何時も思っております。余り苦痛を伴

うのは好みませんが、完全に男の方が女の方より劣った存在であるという事を女の方自らの手によって示してほしいのです。女の人のお尻に敷かれて馬になり、足をなめさせて頂けたら、どんなに幸福か、いつもそのことを夢想しています。いや、夜なんか僕の頭の中を支配しているのは、そのことばかりであるといっても過言ではありません。何故僕だけが、このような妄想によって悩まねばならぬのでしょうか。汚れた女性の下着にも強い執著を持っていて、一度でもいいから芳香漂うパンティを抱きしめて心ゆくまで、その香りにむせびたいと思っています。しかし、この僕の切実なる願いも、只徒らに空想の中であらだたしく空転するだけで実際には何一つ果されていません。そして、今では苦しいばかりに攻めさいなまされていきます。全国の美しい女王様方、この孤独な青年の願いをかなえて頂けないでしょうか。僕は一生その女王様の下僕として供えようと思います。(京都市八小川芳雄)

「編集手帖」について一言語らせてもらいます。結論を申し上げます

と、グラビヤが少くなることには大反対です。若し奇クにグラビヤがなくなるようなことになれば、その生命の大半が失われたことになりません。奇クの読者の殆どの方はグラビヤで買い求めるといっても言い過ぎではないでしょう。奇クのグラビヤは他の雑誌のグラビヤと違ってなにか心を引きつけられる魅力のあるグラビヤです。編集部は諸氏、四月号から六月号まで、なんとグラビヤの少いことです。もう少しグラビヤ・ファンのことも考えて強気でいって下さい。もしグラビヤが姿を消すと、本文によって想像するということになります。想像というものは勝手なものです。それを統一してこそ奇クのおもしろさがあるので、はないのかなと思います。さて、読者のM女性、S女性、私は町を歩いていても女性の乳房に目についております。それ故に又女性の下着にはみりよく感じておる一人です。ブラジャー、パンティ、コルセット、ストッキング、シュミーズなど数多く下着があると思うのです。女性の読者の人よ、「私の下着の種類」という題名で下着のあらゆることを書いて発表して

下さい。お願い致します。奇クの発展を祈っております。(長野市△新川登▽)

○

小生は二年前から奇クを愛読している者ですが、貴誌に対してお願いがあります。それは緊縛及びSMについては、御誌の既刊号からピックアップした特集号が発行されていますが、それ以外の特集については今までのところ発行されていなかったので、是非企画して下さいようお願い致します。例えば

(一)、鼻に関する特集、(二)、浣腸に関する特集、(三)、女装に関する特集、(四)、切腹に関する特集、(五)、禪に関する特集、(六)、ソドミーに関する特集、などが挙げられます。特に小生は女性の鼻の孔の美しさに強い関心を持つ者で、第一集としてさしあたり「鼻及び鼻責めに関する特集」を是非発行される様希望します。即ち貴誌の既刊号の中から、鼻及び鼻責めに関する小説、体験、告白、読者通信等め、又、御社モデルを総動員して鼻の孔を下からクローズアップした写真掲載されるよう希望します。尚この場合、指等で不自然に歪めない自然な鼻孔美である事が必要です。又貴社の分譲写真も鼻

責の他に自然なままの女性の鼻の孔を実物大にクローズアップした写真を発売されれば意外に同好者が多いのではないのでしょうか。小生はたとえ万金を投じてでも買いたいと思います。(むろん形のよい美しい鼻の孔である事が必要ですが)大変虫のよいお願いですが、変ったマニヤの希望としておききとだけ下さるようたのみます。(大阪△アキラ・M▽)

○

「浣腸の実験」の竹淵芳寿様、又エネマファン会を御紹介下さいました中山梨津子様、本誌上で此の種の記事通信を拝見した事を、マニヤの一員として心からの喜びを覚えます。そして一度でもよいから、マニヤの皆様とお会いして色々とお話しあったり又交歓の機会を得たいものだとかから望まずにはおられません。竹淵様の御示唆で私には更に色々な浣腸方法を今迄に得られなかった浣腸の境地に辿りつけることが出来、楽しみが増しましたが、私自身、試みるよりは一度貴男のような知識豊富な方から、お互いに心ゆくばかり浣腸されてみたいものだなどと欲ばったことを考えたりしています。又、中山梨津子様には只々羨望以

外の何物もありません。本当に素晴らしい機会を得られたものと感心している次第です。又、五月号での東京の津利様、貴男の通信を拝見し、同じMSの仲間で全く私と何等変らない心境で悶えておられるのを知り、余りの奇遇さで飛び上らんばかりの喜びでした。私もKKのグラビヤや写真などで身に喰い込むような緊縛ポーズがあったりすると、身内の血が逆流するほどの喜びを感じます。そして一度でもよいから複数であつたプレイが出来たらと夢にまで見る始末です。四月号にあつた大塚啓子様の夢見る様な表情で仰向けに緊縛されたところなど、全くグツとききます。あの様なポーズにされて足首へ更に縄を回し上方へ引き上げてもされたら――。又、五月号の梨花様のように海老縛りにして、あの姿態を逆にした上でクリステールをしたら、など思うにつけて、肌深く喰い込む縄目を見るだけで頭がじいんとしてきます。自縛自演ですと、あの様に緊縛出来ず又手を動かして結べるものしか実現されないもので、どうしても手加減を加えるため、満足感を得られないことは貴男と同感です。優しい方とありましたが、私自身

自負しているわけではありませんが、貴男の御氣に召し御満足と共鳴を請合えると確信します。貴男と同様に私も急激な苦痛は望みません。自然な状態で徐々に進行する悦虐の過程といった体に期待を寄せていますので、貴男とは完全なプレイが出来ると思っています。尚当方二十八才です。(静岡△T・K生▽)

○

奇クの読者諸君、御元気ですか、久し振りに投稿させて頂き戴きます。小生切腹マニヤです。禪締美の青年が雄々しく切腹する姿に豪快味や友情を感じるものです。最近の奇クには女性の切腹に終始して旧号の如き、男性割腹の記事が少くなつて残念に思っています。なんといつても、切腹の悲壮美は男性腹切にあるのではないでしょう。か。小生時折一人で切腹プレーに興じておりますが、自らへそ下を真一文字にかき切るとき又格別な快感がわいてきます。やはり一人淋しく腹を切るより、互いに友情を交した同性と共に切腹するのが望ましいです。そして色々の妄想にとりつかれ悦に入っています。終戦時、敵に降るのを潔しとせず、愛機に火を放って自ら腹を切

る若き特攻隊員、そして彼に随い行動を共にする少年兵の切腹。同じく戦争中、敵艦の攻撃に合い沈みゆく船室で割腹する船長と商船学校出の航海士、互いにっこり笑いをのこし、あわただしく腹をくつろげ、一文字にかき切る。それを手本に航海士もその逞ましい下腹を切り裂いてゆく。あるいは趣を変えて同性への思慕から遂に悪への道にふみ込んだ美ぼうの青年が、警官隊に追われ、遂に重傷を負い、今はこれまでと兄貴分の男に介添え腹を依頼する。彼も自分が誘い込んだ因果で、青年の一生を台なしにした事を詫び、彼の願いをきき、背後に回ってズボンの前をひらき右手の自由のきかない彼のために、その美しい腹を切ってやる。青年は激痛の中にも襲いくる快感にすべてを彼にまかす。短刀は深々と青年のへその下を切りひらき、灰色の大腸が流れでる。彼も又青年の血を吸った短刀で自ら割腹する。現代につながる切腹の悲壮美を大いに描写した読物が掲載されることを希望します。又お互いに腹を切り合うほどの友情を合わせると同性の方との文通を希みます。何事も腹を切る気でやればなんでも出来ます。し

かし本当に腹を切る事は至難中の至難ですが、プレーに於ていうにいわれぬ友情が湧いてきます。私は月一度、本格的なプレーを試みます。それは揮美一本になり白木の三宝の九寸五分(刃はついていない)の前に坐し、前袋を思いきり押し下げ、腹を両手でもみます。そして用意のモグサを線状にしたものを下腹にまきつけます。そして左脇腹に点火します。火はジリジリと下腹をこがし、一文字に「あつッ、つう、ムッ、うーうマ」と私はあたかも切腹している様に、灼熱の苦痛におそわれますが、ぐっと臍下丹田に力を入れて下腹の腹皮がやけてゆくのを堪えてゆきます。臍下まで進むころ、私の上半身は油汗でべっとりとなり、ようやく切腹プレーは終わります。最初のうちは僅かでガマンできまじんでしたが、最近では立派に切腹?出来るようになりました。勿論プレーの前に洗腸をよく腹の中を洗い見苦しくない様にしてから切腹にかかります。洗腸しあったり、切腹プレーしあう男の友情を誓える方がありました。私はやや肥満型の中年の男性です。男性切腹願望者はこの世間に

大勢居られる筈です。日本人のみが味わえる切腹に興味をお持ちの男性は、どしどし名のりを上げて下さい。(京都市八倉間博)

編集長様、御親書有難うございました。バンド愛好者のお近付きを得て大変嬉しく存じます。月経帯に興味を持ったのは十五年も前の事です。最初に肌に当てましたのは、近所の女子寮にて、少し頭の智能程度の低い女の子に新しいのを上げるからといって使い古しのバンドと取換えてもらった分でした。前開きのごく平凡なものでしたが、夢中で持って帰り、口と鼻を掩い一杯にその楽しい香りを味ったものでした。今でもそのときの感激は忘れられません。それ以来、色々な女性に交換してもらい四十数枚をいただいております。少々種類の様ではありません。クインバンド、パリスバンド、ロイズバンド、カヨーノホコリ、スキー、スポーツ、アラモード、ワカサ、大正、ホープ、エメラル、レインボウ、エスエス、ローズクイン、ミューズ、シラユキ、バンロンバンド、等々。コルセット型、ズロース型、前開型、ショート型、丁字型等色々あります。い

つか古物商に行つて、女の人ばかりなのをたしかめ、お宅で買ったボロの中に月経帯の古いのはないでしょうか、と云つて、おく面もなくボロの中に頭をつっこみ探させてもらい、厚く札をいって持つて帰つたこともあり。三、四人の女の人に囲まれ軽べつの眼で見られ乍ら探しまわったときには手がふるえました。私はどうしたわけか、前開きのバンドが好きです。というのは、ショート型より、いかにも月経帯であります、という感じがするからです。古い型なので中々手に入らず隣の町の薬局に行つて、よく探したり注文したりしたものです。勿論女の薬剤師の店です。「まあ」といったまま、しげしげと自分の顔を見つめられた時には、思わず顔を真赤にして下を向いてしまいました。口がカラカラに乾いて返事も出来ない有様でした。メンス・バンド、月経帯、なんと魅力的な言葉でしょう。先日バンドマニヤのため写真、素暗しかったです。出来れば若い男が無理矢理にはかされていとう場面だったらと思います。女性にバンドを強制的にはかされるといふプレーを終始夢見ている若いバンドマニヤです。皆

さん、御批判や御経験をどしどし御発表下さいませ。(山口県徳山市八保田隆夫▽)

諸岡堅雄先生。『当代女武勇伝』の女主人公相原登志子の本名は斐山節子というのではないでしょう

か。年は、三十二、河内三桃子そっくりの美人。しかも賊を縛り上げるほどの男まさり。何から何までズバリです。きょう早速先生に「剣道の達人なんですってね」ときいたところ「そう学生時代にね。試合の時には赤胴つけたわ」

斯道愛好家に贈る

悦虐写真集決定版

定価一〇〇〇円
(略号「フロ」)

◆本誌モデル嬢の中、最近活躍しました左記の諸嬢の中の緊縛姿態の最も優秀なものばかり百態を集録いたしました。全く素晴らしい緊縛姿態集の圧巻であります。

出演モデル嬢

絹川文代、桜井葉子、愛川悦子、梨花悠紀子、平野笑子、大塚啓子、須川令子、東浦ひかる、加茂良子、花本京子、四方清美、若原明子、竹野ひろ子、熱海容子、花坂道子、田中芳代、田原美佐子、岩井知子、前本妙子、大井小夜子の諸嬢。

◆本写真集は一切書店売りはいたしません故、何卒直接天星社

宛お申込み下さい。

◆これは、永年女体緊縛ポーズを手掛けてきました本誌が、自信を以て作成し、自信を以て提供できる写真ばかりです。コレクション・マニヤの方はきっとお気に召もと存じます。最初、印刷物にするつもりでしたが、途中で急に予定を変更して、一々コピーをとる方式に変えましたため、量産できないウラミはありますが、直接感光紙に焼付けたものですから、稀少価値は凄く増す筈です。貴重な資料として是非お求めの上、末永くお手元で御愛玩下さるようお願いいたします。

と仰有いました。「組打ちもやったんですってね」とききますと、これまたズバリ「女だてらに随分暴れたもんよ。巴御前そのけの勇婦だったのよ」と云われまし。しかし強盗退治のことを申し上げたら「デマとばすんじゃないわよ」と叱られてしまいました。先生は注射のときなど小生の腕を見て「まあ細い腕、あたしの半分しかないわね」とよく云います。また小生のペチャンコな胸を見て「薄い胸してるのね。乗ったらつぶれちゃう見たい」と云われたことがあります。「私が乗ったら」とは云われませんでした。吃度先生は小生を馬乗りに組敷いた時のことを想像していられたに違いありません。それが証拠に笑って冗談みたいでしたが、「あたしのお尻大きいから重石きくわよ」と云ったのです。斐山先生は小生のマゾの性癖を見抜かれているのか、よくこんな冗談を云うのです。こんな美しいしかも教養の高い女性に馬乗りに組敷かれたらもう何も云う事はありません。「当代女武勇伝」で強盗少年は美しい先生のトイレへお供したり、馬乗りに組敷かれて拷問されたり、しかも先生の体内から世にも得難き薫風を頂

戴して夢うつつの中で氣を失っていく。彼は今悪事を働いた償いを施設で行っているでしょうが、気高くも美しい女医さんのおならで止めを刺されたのですから世界一の幸福者と云えるでしょう。何時の間にか相原登志子先生と斐山先生とを混同してしまつて申訳ありませんでした。諸岡先生。今後的美女とおならの傑作でわが「奇ク」誌上を飾って下さい。挿画で強盗少年が十二、三才の坊やみたいなのはガッカリ。(東京八山辺幸彦▽)

○向暑の候、愛読者の皆様、お元氣の事と存じます。扱て小生M男性ですが、五年程前からの愛読者ですが、今度初めて本読者通信に投書致しました。小生は女性によって馬にされたり、顔面を股で挟まれたりする事に無上の悦びを感じる者であります。ムチ打ちとかいった身体に直接苦痛を与えるといったことは嫌いです。幾分勝手なようですが、やわらかい汚辱のムードの中で女性にいじめられたのです。サジスチンの方の中でも、男性を縛ったりムチ打ったり、蹴ったり直接苦痛を身体に与えてやりたいという性質の方と、又そ

れと対照的に、男性を馬にするとか、足の裏で顔面を押えつけるとか、股で首をしめつけるとか、いった凌辱本位のプレイに興味をお持ちの方も、おありかと存じます。小生身長一六〇センチ、体重四六キロの小男ですので、遅ましの女性のおいしいつけでしたら、どんなきたならしいことでも、心から奉仕させていただきますから、右の様な小生の願いをきいて下さる女性の方からの通信をお待ちしております。末筆ながら愛読者の皆さまの御健康をお祈りいたします。(徳島市八松尾生)

初めてお便り差し上げます。このようなお手紙を差し上げてよいのか、どうか、毎日そうとう迷いましたが、とうとう決心してお出しすることにしました。私は田舎娘です。今年の五月に大阪へ出てきて、住込みで喫茶店に勤めておりますが、まだ、何日も経っておりませんので、市内の地理も余りわかりません。外出は三度ばかり百貨店へ行っただけのものです。この間、書店で御誌を手にとり、非常に自分の気持ちにぴたりするものがありましたので、早速買ってまいりました。私の住んで

おりました田舎では、小さな書店といえども雑誌屋さんの兼用なので、ありふれた本や雑誌が少しあるばかりで、ついぞ御誌のようないない本は見かけませんでしたので、私にとっては大変な驚きでした。もうそれから、毎日毎日、繰りかえし繰りかえし、本がすりきれるくらい読みました。前に発行された御本が沢山ありのようなので、それなんかを見たいという強い気持ちと、このような御本を編集されていただけるお方や、又読者の方々とおあいして、お話を伺ってみたいという気持ちとが、とうとう、私にこのようなお手紙、エンピツ書きで大変失礼でございますが、筆やペンは余り持ったことがございませんでお許し下さい。どのような手だてをすれば、私の願いがかなえられるのかも存じませんで、とにかく、はしたないお便りを書いた次第でございます。只今、私の勤めておりますところは、一週間交替の二部制です。午前中休みのときと、夕方から休みのときとございます。又、私の拙い田舎での思ひ話なんかも書かせていただきたいと思います。今日、今日はこれにて失礼いたします。さようなら。(大阪八真

崎咲子)

最近貴誌にて発売されていますオムツフォトは大変うれしく拝見して居りますが、今までのものは、オムツカバー・フォトとでもいってべきでしょう。もっとユカタ地のオムツを沢山使って下さい。小生のガール・フレンドが一寸オムツ好きなので使用させていますが、股立て用のオムツには五―六枚挟まないと大人には無理です。赤ちゃん用としては別でしょうが。ワザとする時はとにかく、オネショの時は量も多く、五―六枚当てていても、だめで外部へ洩らすときがある位です。今後のフォトとしてお願いしたいことは、(一)、オムツカバーの両股脇から、オムツがのぞいているもの。(二)、カバーを使わずにオムツのみ使用する。(三)女学生、又は若いBGが立ったまま、ソソウをし両足の間にその兆候のあらわれているもの。或はスラックスを着用して同様の状態のもの。(四)、女学生又は少女がオムツを当てられてもらっている所のもの。そばには濡れたオムツが置いてある。(五)、花嫁さんの着物の前を少しはだけて、オムツ使用の所を写す、などのアイデアには、

オムツ・フォトを作成下されれば幸いです。(東京八村山一三)

過日、貴社に女性切腹についてのお便り申し上げましたところ、早速六月号の読者通信欄に御掲載頂きまして恐縮しておる次第でございます。同号の淹れい子様の挿絵は相変らずの出来ばえであり、又大塚嬢の切腹擬態写真は全体的に調和がとれ、実感が溢れていて感心させられました。陰惨な感じが少しもなく、明るい雰囲気の中に、女体切腹というテーマが出されているのがよかったと思います。今後一層の御精進をお願いいたしますと共に大いに期待して居る次第です。次に私の体験した女性切腹の追想を拙文ではありますが書いてみました。御採用頂ければ幸いです。見たまま感じたままを、その通り書きましたので、若し発表してはまずい個所がありましたら、適当に加除訂正して頂いて結構でございます。何卒よろしくお願いいたします。終りに貴社の御繁栄と読者の方々の御健康を心からお祈り申し上げます。尚、さきにお願ひしておきました淹れい子様の執筆になる「女性切腹構成案図譜」の在庫の有無と女性切腹に関

する分譲品目録を併せてお送り下さるようお願いいたします。(長野市△M・T生▽)

○ 奇クの読者に対してセンセイショナルなショックを与えた東浦ひかる嬢さん。その後どうなっておられるのですか。グラビヤで目にかかるとが出来ませんね。貴女が奇クに対して「私を責めて下さい」と名のりをあげられたとき、大変勇気のある女性もいるものだと思います。それ以来、奇クの読者通信には貴女の真似をして大層沢山の人が、私を責めてと名のり出しましたね。貴女はその先鞭をきったのだから、たいしたものだと思います。そしてグラビヤに出てある貴女を見て楽しくなりまして。だから、もっと早く貴女に呼びかけておればよかったのですが、東京へ行って離れていました。為、なんとなく呼びかけがおくれてしまいました。そして、3月号の読者通信欄を見ると、貴女の通信が載っており、その中で、責められるというよりは、縛で縛られたいという気持の方が強いといっておられるのを見て、ついに決心してペンを取った次第です。そうして、もう一つの理由は、貴女の

住んでいる所と小生のいるところとは、そう遠くないということですから、電車区間でいうと一駅というところに、貴女のような方がおられると思うと、もうどうすることでもできずにペンをとった次第です。もし小生が貴女に呼びかけたら来て下さるでしょうか。貴女と逢うことができたなら、小生は今の体験をもとにして、貴女に責めのヒントをさし上げましょう。そして若し貴女が許して下さるのなら、貴女を縛で思いきり縛りあげたいと思います。貴女は浣腸にあまり興味がないようですが、小生は貴女にその醍醐味をお教えした。いあまりにも一方的なことを書いて貴女の怒りをこうむるかも知れませんが、もしお気にさわる文章がありましたら、ここに深くお詫びいたします。(大阪△阪神螢学▽)

○ 兵庫の里乃糸枝様、大阪の股田様、西宮のN様、世の中に自分一人かと思ひ、人知れず今日まで誰にもお話しすることなく過してきた私ですが、本誌により同好の志が如何に多くいるかということを知り、大変心強く喜んでおります。今度皆様と一緒に私も仲間入り

分譲悦虐フオト

大手札 (9×13 糲) 印画紙焼付 各三枚一組 三〇〇円

も	さ	よ	さ	み	よ	た	あ	き	ひ	ゆ	ま	く	な	せ	ふ	せ	ふ	り
と	く	う	う	よ	山	前	柳	若	東	梨	室	愛	花	花	大	大	大	村
京	葉	容	夜	ヨ	小	妙	初	明	清	悠	悦	花	花	花	大	大	大	花
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
こ	あ	き	き	き	き	き	き	き	き	き	き	き	き	き	き	き	き	き
か	ん	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
股	間	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
態	態	態	態	態	態	態	態	態	態	態	態	態	態	態	態	態	態	態
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
け	け	け	け	け	け	け	け	け	け	け	け	け	け	け	け	け	け	け
へ	と	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち
の	開	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
ぞ	股	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原
き	悦	美	美	美	美	美	美	美	美	美	美	美	美	美	美	美	美	美
見	境	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐
文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文
代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代

させて頂きたいと存じます。私は皆様に負けず腰巻の愛用者です。赤、桃色、いろいろな美しい色とあ、の柔かい肌ざわり、私は平常でも、真夏の暑い時以外は赤又は桃色にメリンスの裾除けを着けています。ネルの腰巻とメリンスの裾除けの調和がなんとも言えません。とにかく、お仲間入りさせて頂く

代理部分譲品総目録 第五号 出来

永らくお待ちたせいたしました総目録第五号が出来上りましたので、御希望の方は十円切手御封入の上、お申込み下されば急送申し上げます。

だけで結構です。誌上を通じて皆様の温かいお便りをお待ちしています。
(千葉△利根要月△)

東浦ひかるお姉さまへ。又々お便り差し上げ恐縮でございます。本格的な梅雨の様でうっとうしくございますが、お姉さまお元気でございますか。先日突然お便り致しました神戸の須磨区に住む巴修三です。前回にも申しましたが一度お姉さまにお会いしたくてしかたが無いのですが、何か落着きませず、延び延びになっております。今度、「悦虚写真決定版」なるものが出版される様で、お姉さまの作品にも接したいと望んでおります。前回にも申したかと存じますが、お姉さまの作品は、今まで余り強い緊縛を拝見したことがなく、梨花悠紀子さんの様な吊りとか大塚啓子さんの様な強いものもやり、自己の芸域と申しますか

あらゆる方向の緊縛を、おやりになられて見れば、如何かでしょうか。又、前記の様な緊縛を、お姉さまが好まれないのかもしれませんが。しかし、自己と言うものを大切にし、常に前進しようと言う気力と言いますか、考え方と言いますか、その様なものを常に心がけて居られたらと……。又、この種のモデルと言う事にも、自信と誇りを持ち、自分しかこの様な事がやれないのだと言う事を、お考え願えたらと、僕は僕なりに、ひかるお姉さまの作品を拝見して、近ごろこの様に感じて居ります。先日も昨年の第十五巻第六号の六月号を古本屋で何げなく手にしましたが、ここで絹川文代さんの作品「光と影」梨花悠紀子さんの「猪吊り」(お姉さまはバックナンバ―お持ちでないと思いますけれど)等又々感銘しました。絹川文化さん両腕から胸にかけて又ブラ

分譲切腹フオート

- (はろ) 悦楽切腹
モデル 梨花悠紀子
大手札 三枚一組 三〇〇円
- (おせ) 血紅切腹図絵
モデル 大塚 啓子
大手札 三枚一組 三〇〇円
- (こし) 腰元自刃
モデル 村井知可子
大中判 六枚一組 八〇〇円
- (せふ) 切腹風景十二態
モデル 大塚 啓子
大手札 12枚一組 九〇〇円
- (じじん) 女性自刃三態
モデル 愛川 悦子
大手札 三枚一組 三〇〇円

- (こせ) 輝美切腹
モデル 愛川 悦子
大手札 二枚一組 二五〇円
- (れい) 切腹のプレイ
モデル 愛川 悦子
大手札 三枚一組 三〇〇円
- (ほう) 豊麗切腹三態
モデル 愛川 悦子
大手札 三枚一組 三〇〇円
- (によい) 血紅使用・第一集
モデル 絹川 文代
大手札 五枚一組 八〇〇円
- (によ2) 血紅使用・第二集
モデル 絹川 文代
大手札 五枚一組 八〇〇円
- (まに) 切腹
モデル 切腹マニヤ某女
大手札 三枚一組 三〇〇円

ジャー型に乳房の突出といい股間縛りのしまり方、顔の「もうアカン」と言った様な表情など、すばらしいものがあります。又、お姉さまは、どの様な緊縛がお好きなのでしょう。お姉さまの趣味等一度おたずねしたいと思ひます。又、お姉さまのだいたいの身長、体重、バスト、ウエスト、ヒップ等のサイズをお聞きいたしたい。何か解っているのか、解って

いないのか、変な事ばかり記しましたが、まず第一に健康で縄でギス等されない様に気を付けて、お姉さまの進むべき路へ、大いに努力して進んで頂きたいと考えます。今後の御精進をお祈り致します。(神戸市須磨区△巴修三△)

編集部の皆さん、初めまして。私は貴男様達の発行されている奇譚クラブの読者です。この本を読

む様になりましたから、もう一年
半になります。私は現在同好者の
お友達を持ちたいと思ひまして、
この通信を書きました。ぜひ私の
呼びかけの文章をのせて下さいま
せ。全国から多数の方が応募され

ていらっしやることと思ひます
が、私の分もぜひのせて下さいま
せ。大阪の北区に住んでおられる
曾根美世子お姉様、初めまして。
私、橋本政代と言います。現在、
都島区のアパートに住んでいま

す。お姉さまとは近くになつてい
ますので、ぜひ私の話し相手、プ
レイ友達になつて貰いたく、この
場を通じてお呼びかけします。せ
ひ私とお友達になつて下さい。私
は現在地下鉄で通勤していますの

で、この文をお読みになりました
ら、市電阪急東口のOSミュージ
ック附近で赤いバッグ等の入れ物
を左手に、白いハンカチを右手首
に巻いて五時半頃前後待っていま
す。貴女様も私が解ります様に同

〔新版〕女体緊縛フオート オンパレード

R組 百花撰

大手札判 (印画紙 9×13 纏)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

鎖しはり晒賣	(萩千恵子)
股間しはり正面	(伊吹真佐子)
女学生制服しはり	(須川令子)
尻立後手しはり	(萩千恵子)
開股しはり	(川辺砂登子)
猿ぐつわの魅力	(伊吹真佐子)
トイレでの縛り	(須川令子)
立木野郎しはり	(村田那美子)
緊縛横臥	(厚狭春江)
足湯梯子セメ	(伊吹真佐子)
いたぶり (春日ルミと伊吹)	
帆立しはり	(萩千恵子)
強烈な梯子セメ	(伊吹真佐子)
梯子責め	(佐賀美智子)
逆さ本吊りセメ	(伊吹真佐子)
後手吊りセメ	(中塚文子)
股間しはり後手	(伊吹真佐子)
逆エビ責め	(加賀利江子)
高小手しはり	(萩千恵子)
変型足手しはり	(村田那美子)
松樹後手しはり	(伊吹真佐子)
くさりセメ	(加賀利江子)
薄羅の後手緊縛	(加賀利江子)

股間タテしはり	(中富綾子)
首逆股間しはり	(坂口利子)
手足逆吊り	(伊吹真佐子)
和服の後手しはり	(藤田節子)
仰向全裸悦盛	(川端多奈子)
後手首縛シメ	(加賀利江子)
乳房下しはり	(村田那美子)
肉美への折檻	(伊吹真佐子)
お灸セメ (春日、伊吹二嬢)	
後手猿ぐつわ	(萩千恵子)
松樹縛り晒賣	(村田那美子)
コルセツト縛り	(中塚文子)
股間しはり	(萩千恵子)
手と足と緊縛	(加賀利江子)
後手しはり	(伊吹真佐子)
御開帳	(萩千恵子)
くさりセメ	(川端多奈子)
折檻の魅力	(須川令子)
全裸の股間しはり	(愛川悦子)
逆立の折檻	(大塚啓子)
開股椅子セメ正面	
振袖の緊縛	(花坂道子)
腰元の吊り責	(村井知可子)
ヌードしはり	(愛川悦子)
本縛しはり	(田中芳代)
股間しはり	(川辺砂登子)
落花狼藉の緊縛	(益田房子)
樹間のハリツケ	
帆立舟のセメ	

逆エビ責め	(愛川悦子)
変型全裸股間縛	
ヌード縛り	(花坂道子)
金襴横臥緊縛	
ビクニツク	(村田那美子)
ハイヒール	
湖畔の宿にて	(萩千恵子)
尻立逆しはり	(須川令子)
下着の色模様	
目隠し開股縛り	(大塚啓子)
後手高小手	
乳房縛り	(田中芳代)
開股ベンド縛り	(愛川悦子)
全裸床柱縛り	(花坂道子)
亀ノ甲縛り	(萩千恵子)
ヌード股間縛り	(愛川悦子)
全裸乱れ髪	(大塚啓子)
ガンジガラム	
腎臓責め	(愛川悦子)
後手股間しはり	(中塚文子)
腹部丸出し猿轡	(伊吹真佐子)
破れたシユミーズ	(坂口利子)
女学生のしはり	(須川令子)
仰向開股しはり	(萩千恵子)
乳房くさりセメ	(川辺砂登子)
野郎バンド責め	(村田那美子)
トイレ正面排泄縛	(伊吹真佐子)
開股正面いじめ	(中塚文子)
乳房縛りセメ	(佐賀美智子)

本誌十月号は八月二十五日発売の予定です。

様にしておいて下さい。尚、先ほどの待合せに曾根様以外の女性の方であれば、誰方でもけっこうです。お待ち合せ下さい。(大阪市都島区八橋本政代)

愛読者の皆さん、ごきげん如何ですか。編集部は皆さん、どうぞ私たち読者のために、がんばって下さい。私はもうここ数年来、貴誌を愛読したのしみにしている者です。シンギ会がどうの、こうのと私たち読者にとっても、うるさい限りです。雑誌が公開の機関であるため、色々と話題をつくるのでしようが、ただおとなしく貴誌をたのしんでいる私たち読者にと

おしめカパー着用と浣腸連続フオート

大手札印画紙焼付 十二枚一組 九〇〇円

略号(ちし)

パンティを脱した若い女性が30CCガラス製浣腸器によって浣腸を施し、やがてオシメを当て絵ゴムのカバーを着用して排

泄するに至るまでの連続場面を撮影したオシメマニヤ、浣腸マニヤの投じたアイデアによって特写した秘蔵版フオート。

編集後記

○先ず最初に、六月下旬発売の八月号が休刊となって、愛読者の皆さまに、いろいろと御心配をおかけしましたことを謹んでお詫びいたします。

○休刊の理由としては、児童福祉審議会の勧告によって、編集内容の自粛をはかるために月刊誌発行の十四社によって結成しました「雑誌倫理協議会」の申し合わせ自粛事項が六月二十一日以降発売のもの(即ち八月号)から実施することとなりましたため、今迄準備しておりましたものを、そのまま充当出来なかったからであります。

○今月号は、とにかく、八・九合併号として、発行する運びとなりました。今後は、この「雑誌倫理協議会」の申し合わせ自粛事項に準拠して毎月確実に発行を続けてゆきたいと存じますので、御寄稿下さる方も何卒その線に沿って御執筆下さるようお願い致します。尚、自粛事項は御参考までに、別項に掲げておきましたので御覧下さい。

一応、応急的な編集になりましたので、上出来とは申されませんが、今後は一歩一歩充実を計って、より充実したものにしてゆきたいと考えておりますので何卒長い目で、その生長ぶりをごらん頂きたくお願いいたします。

○今月号の口絵としましては、滝れい子画伯描くところの「女体切腹図絵」を特集しました。殊に読者通信などで度々要望されておりました、「裸女血斗の果て」をテーマとした若き女性の生首幻想を絵画化して頂きました。この切腹シリーズは引き続き来月号でも、掲載してゆきたいと考えております。

○同じく口絵で、黒川不二夫氏の「枷と鎖のシリーズ」も、或る長篇小説の一場面を思わすようなストーリー性を持った力作でして、この絵の背後には豊富な空想や幻想をはたらかせる余地があります。

○口絵やグラビア写真などは、直接視覚に訴えるものであるだけに、私達としても最も自粛に注意しなければいけない点であります。又、それだけに読者の皆さまにおかれて、大きな期待

刊を待つて自分ひとりだけで楽しむといった有様でした。同好の友と話しあいたいという気持はあっても積極的呼びかけるといった勇氣もなく、働きかけることもありませんでした。皆さんもそうなのでしょいか。そういった御感想についても、是非お聞かせ願いたいものだと思います。終りに読者の方々の御健康を祝します。(京都市八高向生)

○ 毎月御誌をたのしく拝見いたしております。いろいろと変わった傾向の方が沢山いらっしゃって、自分のことは棚にあげて、本当のところ自分ながら、びっくりするようないしつです。と、申しますと大変矢札に当り、叱られるかも知れませんが、そのような告白を書かれた方々も、それはそれなりに生活を楽しんでいらっしゃるのだから結構だと思います。私は自分のことだから、特にそう思うのですが、自分自身としては、そう変った性癖の持主でもなさそうなのです。男性と生れて、美しい女性の姿にひかれるというのは、これは当然のことですが、女の足をなめたり、馬のりになってもらったり、というようなことには、私と

しては一寸ついてゆけません。と言っても、そういった気持はよくわかるのですが。たとえば、ある特定の女の人が好きになったとしたら、その人の足の裏までなめたいという気持が起るかもしれませんね。きたないとか恰好が悪いとか考えないのは、その女の人に対する愛といえますか、崇拜といえますか、それが足りないということとも言えますね。でも、私の場合は違ふのです。女の肉体の美しさを讚美するといった点は同じですが、例えば、女の人の足にしても、下駄ばきの素足といったものには一向に関心がないのです。黒いストッキングをびっちりはいたハイヒールの脚なんかは、ひかれるのです。上半身でいえば、身体にびつたりセーターを着て胸のふくらみなんか、ぶっくりと誇張されたのなんかは、たまらなく魅力的です。好きなのは、タイトスカートの紺のスカートに黒のストッキング姿。とにかく、このような一種変った女性の服装に、ひかれるというの、何んという傾向なのか自分でもよくは分りませんが私の生活を豊富にし、楽しみを増していることには、間違いありません。(東京都八浅野浩一郎)

を持つて下さっていることと思えます。風俗誌としての効果を十分に發揮しながら、自肅事項に沿ったもの、を作成するという産みの苦心を今後とも続けてゆくつもりです。

○そのためにも、只今新しいモデル嬢の応援も得ておりますので、新機軸のフォトもどしどし製作して皆さまの御期待にそうと共に、世の指弾を受けることのないようにしたいと思っております。その成果は、いづれ誌上にてごらん頂けるでしょう。

○長らく本誌上でも顔を見せられなかった沼正三氏から、久方ぶりに、本当に久方ぶりにお便りがありました。御住所は或る外国(明記はしてありません)が、お許しがありませんので特に秘匿しておきます。相当地前から滞在しておられたらしく書かれてあります。編集部からの返信に対して、いづれお便りがあると思いますし、又、今回の通信によりますと、本誌のために何か書いてみたいという御意向があるとのことですので、原稿が頂けるかもしれせん。もっとも、「家畜人ヤプー」

のような長いものは無理でしょうが……。

○発行部数の多くない本誌としましては、頁数をどんどん増すということは考えられませんので、限られた誌面を最大限に發揮するため、「奇クサロン」や塚本鉄三氏の「緊縛フォト撮影の実際」をよりスマートな形にして提供したいと思ひます。辻村隆氏も本職の余暇を見て、何か啓発的な記事を書いてみたいと意欲を燃やしておられますので、小粒でもピリリと辛い式の重量感のあるものが、きつと出来上ると思ひますので、どうぞ御期待下さい。

○重量感といえば、本文の方でも、研究物とか資料的なもので永続的に発行される風俗雑誌としての真価が發揮できるといったものにも重点を置いてゆきましよう。とにかく、資料としても充分に価値のあるもの、読みすてにしないもの、古本となっても値うちのあるものに狙いをつけ、よし発行部数は僅かであっても、永く保存され愛読されるものにしてゆきたいと考えております。(編集部)

△體驗、告白、手記▽

△創作、小説、物語▽

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下

予
約
料

一月分	(1冊)	二百円	△送共◇
三月分	(3冊)	六百円	△送共◇
半年分	(6冊)	千二百円	△送共◇

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

レポ^{rt}・マニヤ通信

新聞記事、週刊誌記事等で関心をお持ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フオトを贈呈いたします。

△讀者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に對する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互間の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。誌面の許す限り、つとめて掲載いたします。

○本誌代理部の分譲品は、最近分譲品案内並
売者通言欄の記事にて広告してありませ

○本誌代理部の分譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してありますが他に「代理部分譲品総目録」を準備しております。ますから、それに依ってお申込願います。目録は十円切手同封にてお申込下されば急送申し上げます。

○雜誌は嚴重包裝の上第三種便にて、写真類は密封の第一種便にて、その他は第五種便にてお送りいたします。

○代理部に對する御送金は、なるべく現金書留、振替、定額小為替、小為替、切手代用の節は、八円又は十円切手等の小額のものに願います。

本誌に發表した口絵、写真の複写或は無断転載等は固くお断りいたします。

新しい風俗雑誌として新発足する本誌のために、新鮮にして読者の大歓迎するよう、な素晴しい原稿をどしどしとお寄せ下さるよう、左記の要項にて募集いたします。どうか奮って御応募下さい。

募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいもの。例えば、オールソドックスなSMに關連した小説、創作、研究、資料、體験、告白、紹介、論說といったものを始めとして、浣腸、女装、切腹、フェチ、女相撲、女斗美、輝美、身体各部に対する狂崇等に關連したものを含めます。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども努めて掲載したいと考えますから御遠慮なくお寄せ下さい。

一、原稿の枚数は別に定めませんが、原稿の短さは御自由です。尚、御都合によつては、便箋や鉛筆がき等にも構いませんが、必ず自作品で未発表のものに限りません。

一、締切は特別に定めません。掲載可能な作品は最近号から漸次発表いたします。優秀作品の投稿者には編集部から題材を提供して寄稿を御依頼することがあります。

一、採用原稿に対しては相当の原稿料をお支払い致します。

一、誌上での匿名は御自由です。又投稿者や寄稿家の住所本名は絶対に他へ洩すようなことは致しません故御安心下さい。

奇譚クラブ編集部

奇譚クラブ 定価二百円

八・九合併号(第十六卷第八号)
(通刊第六十八号)

昭和三十七年八月二十日印刷
昭和三十七年九月一日發行

編集印刷兼発行人 箕田京二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

發行所 天 星 社

〔振替口座大阪五〇〇四二番〕

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二号)